
日陰貴族

黒轍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日陰貴族

【NZコード】

N7452W

【作者名】

黒轍

【あらすじ】

私オルカは、王城にて行儀見習いとして働く貴族の娘。事の始まりは盲目の男との遭遇。それを皮切りに引き出されたのは、絶望的な眼差しの上司に友人の無茶なお願い、そして父親の暴走。先行きなど全く見えて来ないが、今日も今日とて地味に暗中模索。これは阿保な彼女と盲目な彼が、じわじわ距離を詰めてくおはなし。

0・終章（前書き）

以前ゲーム用に考えていたものを小説にしてみました。
よろしくお願ひいたします。

「ルカ……！……オルカつたら……！」

強く肩を揺さぶられて、私は意識を無理矢理引き戻された。驚いて見上げたそこには、自分と顔・背格好が瓜二つの娘が私の顔を覗き込んでいる。

すぐに双子の妹であるカノンだと判断し、同時に少し苛立つてゐるなあと、他人事のように思った。

「もう…さつきから呼んでるのにずっとほーっとして……！」

隙なく化粧が施された彼女の顔は、続く言葉を発する前にしかめられた。

「また傷口のことを感じてること？」

カノンの目線の先、また先程までの私の目線の先は、私自身の掌である。

そこには塞がっているのか塞がないのか、ぎりぎりのラインで、切り傷が刻まれていた。

大きさは5cm程で、その傷口は、例えば包丁を滑らせたような綺麗なものではない。まるで裂け目や亀裂のような形である。

私は今日何度目かはわからないが、改めてその傷口をしげしげと見つめた。

「思い出せないの。どうしてこんな傷がついたのかしら」

「……あなたお城から帰つて来てから、口にするのはそればかりね

カノンの聲音から苛立ちは消えなかつたが、同情が新たに混じつた。

「何か大切なことだつた氣がする」

「怪我の思い出だなんて、きっと碌なものじゃないわ。……ねえ、やつぱりあなた、お城で虚めに遭つていたんじゃなくつて？」

「…………。わからない。でも、この傷を見ていると、とても大切でかけがえのないものを忘れたような気になるの。苦しくて悲しいんだけど、愛しくて切ない、冷たくて熱い……そんな気分だわ」

するとカノンは黙り込んでしまつた。

掌から目を離して、彼女の顔を窺うと、何やら複雑な表情を浮かべている。言いたいことを言つべきか言わぬべきか、逡巡しているようだ。

私はカノンの考察に興味がなかつたので、更に言つと予想がついたので、再び傷口に目を移す。

そして敢えて自分の感情を言葉にする作業を続けた。

「何で忘れてしまつたんだろう。私の馬鹿」

「忘れてしまつたものは仕方がないわよ」

カノンは複雑な表情の説明をすることはやめたようだ。

私は内心安堵する。

彼女が今私の部屋で何の用事で來たか、私はわかっている。

私の心の傷口には触れさせず、しかしその痛みを知つてもいいつことが私の言動の動機である。

そして、お互い素知らぬ振りで、全ての時間をやり過ごせねば良いと私は思った。

何も具体的なことは思い出せないにも関わらず、私にそんな行動を取らせる、この傷口はそれ程までに私に訴える力を持っていた。

「忘れるくらいなんだから、きっと大したことじや ないわ

カノンのその言葉はとても正しいことだと素直に思った。私以外のことに関しては。

だから同意する気も訂正する気も起きず、沈黙を保つた。

「ねえとこりで、悪化してない？その傷

「さあ……

即答してからしまった、と思つ。この質問を最初から見越していたかのようではないか。

しかしカノンはそんなことは気付かなかつた。

「怪我もそうだし、記憶喪失もそうだし、なかなか治らないものなのね

単純明快な彼女の性格に、今程感謝したことはなかつたかもしない。

二人の間に居たたまれない空気が流れる前に、カノンは姿勢を正した。

「さあ、そろそろ時間よ。お父様が下で待つてゐるから、準備ができたら行くのよ。初めての縁談だから緊張するかもしねりだけど、粗相のないよう」「

そう言い残すと、カノンはドレスを翻して部屋を出て行った。

1・ミルキア

『お姫様』。

一般女子であれば、この単語に憧れを抱いたことのある者は、少なくないのではなかろうか。いやむしろ9割以上憧れたことがあるのではなかろうか。

かくいう私も例外ではない。昔も今も、憧れを抱いている。何故かといふと、いち・お金に困らない、に・ちやほやされる、さん・何かきらきらしている、というものである。

本物のお姫様が聞いたら怒るだろうか。「まあ世間の認識はそんなものでしょう」と気にもしないだろうか。或いは「ええその通りですのよ、おほほほほほ」と嘘つのだろうか。

この国にお姫様は今現在存在しておらず、私は他国のお姫様と言葉を交わす機会もなかつたので、本物のお姫様の心境は全くわからぬ。

しかし王城で侍女として働いてる昨今、実情がどうあれ、「ああここにいる理由が侍女でなくお姫様だから、だつたらいいのに」と益々羨望を募らせるばかりだ。

何故かといふと、それは最近付加された四番目の中の理由による。

よん・鬼上司に何度も呼び出されない。

「オルカ！オルカは何処ですか！」「何でしうか？ミルキアさん」

太陽の位置が随分と低くなつた頃、私は本日一度目の呼び出しを食らつた。

私はショーヴラーグ城に行儀見習いとして勤めており、ミルキアさんは私の上司である。

彼女は黙つていれば相当端正な顔立ちを、そこまでしなくてもと いう程に歪めていた。

「あなた確か、先程まで会議室の清掃を行つておりましたわね？」

ミルキアさんの全身からは、凄まじい怒氣、というか、殺氣が放出されているが、近付いて来る物腰は大変優雅である。それがとても怖い。

「ええ。しておりました」

内心はがたぶるであるが、捻くれ者な私はそれを素直に表に出しができない。」ういうつ修羅場に限つて飄々と答えてしまう癖がついていた。

「それは終わりましたの？」

「はい、終わりました。ので、今はこちらの廊下を手伝つてあります」

「そう、それは大変良い心がけだわ」

不覚ながら一瞬、『あら、珍しく勘違いかしら。あなたが大事な会議の時間が迫つてゐるから、早く終わらせるようにつて催促したんじゃないですかー。無駄に怖がらせないでくださいよぶつぶー』

などと思つてしまつた私は、勿論馬鹿である。

「ところあなた、雑巾を一枚手に持つてゐるよつですけれども、他の掃除用具は如何なさいました？」

密かに囁つた内心の私が石化するのがわかつた。
やういえばどうしたかしら、と考えれば、段々血の氣も退いてくる。

「大変申し訳ございません。会議室に置き忘れました」
「そのようですね。早く取つて来なさい」
「よろしいのですか？会議はもつ始まつてゐるかと……」
「わかつてゐるようで何より。用具はわたくしが片付けておきました」

金糸で縁取られた碧眼を僅かに細めて、ミルキアさんは淡々平然と微笑み。

本気で私を行かせて恥をかかせようとしたのか、それとも私が失敗を正確に理解してゐるか試すつもりだったのか。ミルキアさんは厳しいが、意地悪なわけではないので、後者だとは思う。というか、思いたい。今現在もミルキアさんは、私の「できるなら関わりたくない人」ランキングの三位くらいにはいるわけだが、彼女の邪悪な性質まで認識してしまつたなら、私は間違いなく行儀見習いを中退させていただく。

ミルキアさんは私からどう思われてゐるかなど承知の上だらうが、表向には、やはり消極的な感情を出すわけにはいかない。
私は出来る限り安堵が伝わるように微笑んだ。

「ありがとうございます。本当に良かつたです

しかしこの美人上司は、そんな私の努力を汲む気はさうもないらしく、「何が良かったというのです」とこちらを睨んだ。

「言つておきますけれど、わたくしがあなたの失態に気付いたのは会議が既に始まつた後です」

あ、やつぱりそつだつたんだ、と私は不真面目に思つた。でないと、流石のミルキアさんもここまで殺氣を露わにしないだろ。

「そして勿論あなたも存じているでしょうが、本日行われたのは三国首脳会談です。あなたは他国にまで恥を晒したのですよ」「申し訳ございません……」

駄目押しがずんずん重なると、何故だか妙な余裕が出てくる。私は各国のお偉方の白い目線を浴びつつ、掃除用具を片付けるミルキアさんの図を、つい思い浮かべた。

これが私であれば、脳内には「な・ん・で・わ・た・し・が」という言葉が延々と流れ続け、怒りという単純な感情のみが支配したのだろう。

しかし眞面目なミルキアさんの心情を察するに、きっと「部下の失態はわたくしの責任……」と考え、より一層複雑な気分になつていそうだ。

頭の良い人間になるものじゃあないわね、と現実逃避に結論付けをした。

ミルキアさんは恼ましげにこめかみを揉む。

「一体今までに何度あなたを呼び出したことか……」

今日はまだ二度目ですよ、などとは、口が裂けても言つてはいけない。

「良いですか。あなたがお仕えしているのは、イーティル陛下その人なのですよ。そのことを常に自覚し、緊張感を持つて仕事に当たつてください」

「はい……」

私は神妙に頷いた。

「確かにあなたは貴族の令嬢です。しかしここで働く以上は、求められることは平民出の侍女達と同じです。甘い気持ちでできるとは思わぬように」

「はい」

会話が途切れると、ミルキアさんは姿勢を正し、聰明そうな眼差しを改めて私に向けた。

彼女はけじめや切り替えがきちんとしており、気持の良い人間だと、他の侍女達から好かれている。

私のような他称問題児ちゃんにとつてはとても「好き」とは言い難い人種なのであるが、私もその点は尊敬している。

「では次の仕事です。東庭園に行つて、庭師に花材を貰つて来て頂戴。それをアリシアのところに届けてほしいの。庭師にはアリシアの名前を出せばわかるはずだから」

「はい。行つて参ります」

わたしがへこつとお辞儀をすると、ミルキアさんは小さく頷き背を向けた。

そしてまた音なく遠ざかっていく。
私は持っていた雑巾を同僚に預けると、そそくさと東庭園に向か
つた。

私は一階まで階段を降り切ると、渡り廊下を伝つよつとして東庭園に向かつた。

傾いた陽光が宮殿内を柔らかく染め上げている。

私はまたしても、自分がお姫様だつたらなあ、と心の中で独りごちた。

お姫様だつたら、この景色をのんびり眺めていられるのに。

東館を裏口から外に出ると、小さな広場の向こうに庭園の柵と門が見えた。

門の傍には一人の騎士が突っ立つていて。

人待ちか休憩かな、と思いつつ、私は小さく会釈して通り過ぎようとした。

すると唐突に肩を掴まれた。

同時に野太い、少し掠れた声が響く。

「おーいおいおい。お嬢ちゃん、どこに行くつもりだ？」

まさか声をかけられるとは全く想定していなかつたので、私は返事をするよりも先に、まじまじと相手の顔を見てしまつた。

男は大抵の騎士の例に漏れず精悍な体つきをしているが、姿勢が悪く、どうにも頼りない雰囲気を醸し出している。緑を基調としたツェーヴラーグの騎士の制服は本来かなり格好良い。はずなのだが、この男が着ているものは、目立つた皺がないにも関わらず、何だかくたびれて見える。寝ぐせの立つた髪は焦げ茶と薄茶が混ざつてお

り、目は桃色。眠たげな瞼がやや下がり気味。

今見たかんじでも十分背が高いので、きちんと背筋を伸ばせばかなりの巨漢ではなかろうか。

低い声やら鍛え上げられた体やら大きいやら、よくよく見れば強そうなステータスを持つている。持つてはいるが、その印象を凌駕する程に、「だるそう、めんどくさそう」といつ空気を遺憾なく発揮している男であった。

ついたつぱり時間をかけて観察してしまい、恥ずかしくなつたが、男のほうは特に気にしている様子がない。ずっとこちらをぼんやり見つめている。この人目の焦点合つているのだろうか。

何だか素直に答えるにはとても今更なタイミングだが、私は男に向き直つた。

「…」の奥に行くつもりです
「何をしに？」

少し不審に思つた私は、咄嗟に黙りこむ。

今まで城内の騎士達に話しかけられることなど滅多になかつたこともあるからかもしれないが、それはさておきこの人自身がどうも胡散臭い。

もしかして新手の軟派なのだろうか。

「……あんた今物凄く失礼なこと考えてないか？」

私の疑わしげな視線がばれていたらしい。まあいいや。

「あのな、ここから先は関係者以外立ち入り禁止区域だぞ」

予想だにしていなかつたことを告げられ、私は目を瞬かせた。東庭園が立ち入り禁止などとは、聞いたことがない。

「俺は」」」の門番。……本氣で知らなかつたつて顔だな」

「知りませんでした。」」」に来るのは初めてだし、そんな話を聞いたこともなかつたし……」

「何かの間違いじゃないか？あんたこの先に何があるか知つているのか？」

「庭、ですよね」

私が答えると男は口を閉じた。

彼のだるそうな雰囲気がその心中を隠しているようで、何を思つて沈黙したのかがわからない。トランプに強そうな人間だ。

「本当に何をしに来た？」

眠たげな目が、心成しか鋭くなつたようだ。

何やら危うい状況になつた気がして、私は正直に答えることにした。

「庭師から花材を受け取りに來たのです。それを、生けるのが得意なアリシアという侍女に届けると、そう言わされました」

「庭師？ハイネに用があるのか？」

「ハイネさんというのですか？名前などはお聞きしておりませんでしたが」

「一体誰に頼まれたんだ？」

「ミルキア、といつ名の侍女です」

ミルキアさんの名前を出すと、彼は今までの問答が嘘のように得心したようだつた。

「ミルキアか。一応聞いておくが、家名は？」

「……ミルドボーズ、だつたでしょうか」

「……ミルドローズな」

「ああ、そんな気もします」

ミルキアさんのことを探し出すと、何だか落ち着かなくなつてき
た。

アリシアさんが今どんな状況で花材を欲しているのかは知らない
が、もしかしたらかなり急ぎのことだったかも知れない。
そうだとしたら、本田二度田の大田玉となる。

「あの、もうよろしいでしようか？こんなところに油売つてると、
ミルキアさんに怒られる可能性があるのですけれど。そうなつた場
合あなた様に責任転嫁してもよろしいでしようか」
「う。それは勘弁してくれ。通つていいで。あんた嘘が吐けなさそ
うだしな」

最後の言葉は褒め言葉として受け取つておひつ。

私はだるやうな騎士に再度会釈すると、門をへぐつた。

門をくぐると、人が一人通れるくらいの狭い道が奥へと続いていた。

道の左右には色とりどりの草花がほぼ対称に植わっている。ハブも混じっているらしく、私は早足で道を行きつつ、庭園を視覚と嗅覚で楽しんだ。

しかし歩を進めるにつれ、段々その余裕がなくなってきた。歩く速度は徐々に遅くなり、ついには立ち止まる。

これって本当に、「庭園」？

私の歩くその場所は、王宮内の庭としては実に広いわりに、実に平易なデザインだった。

私が歩く真っ直ぐな小道、そこから時々分岐する同じ狭さの道、左右対称の草花、道から少し離れた場所には左右対称ではなくも、やはり同じような背丈の同じような草花が植えられ、庭園の両脇から薄暗い森が続く。

「東庭園」などという名前で呼ぶよりは、普通に「道」、或いは「畑」と呼ぶほうがしっくりくる気がする。

加えて、庭師どころか入っ子一人見当たらない。

関係者以外立ち入り禁止区域だそうなので当然なのかもしけないが、いい加減誰か現れてくれないと不安になつてくる。

ミルキアさんは何故、敢えてこの庭園を指定したのだろう。ツェーヴラーグ城には他にも幾つか主要な庭園が存在する。

全てを見たことがあるわけではないが、例えばこの間目にした南庭園などは、広さはここより大分劣るもの、花の種類などは倍以上の種類があつたように感じる。

それとも、この立ち入り禁止区域だからこそ手に入る貴重な植物などがあるのだろうか。

もしくは、この先に本当の東庭園がある、とか？
脇の森を別にすれば、背の高い植物などは植わっていないので、他の小道に誰かがいても見つけられるはず。
そうすると、いるとしたらやはり奥だらう。

進むべきか戻るべきか決めあぐねていると、前方から砂利を踏む音が聞こえてきた。

私は心底ほつとした。

やつて来る人物を見るに、少なくとも庭師ではなさそうだ。
痩身の男で、仕立ての良さそうなスーツを着ている。
遠くからぱつと見たかんじでは、学者や研究者関係かな、と田星をつけた。

どんな人種であれ、これで情報収集できそうだ。

私は進むか退こうか迷い立ち止まつているところだったので、彼がこちらに来るのをそのまま待つことにした。
男は急いではないようで、むしろ歩みの速度はかなり遅い。
まあ忙しくしていないといつのは、いはうことっては好都合である。

ずっと見つめているのも失礼だと思った私は、そっぽを向きつつ、聴覚を男のほうに集中させた。

静かに砂利を踏む音は、ゆっくりではあるものの、確實にこちら

に近付いてくる。

そろそろ止まるだらうか、いや、まだだ。
まだ？

あれ、足音の他にも、何かを小刻みに叩くような音が聞こえる。
え、まだ寄つてくるの？

この道幅では明らかに、私が体勢を変えない限り、一人がすれ違
うことなどできない。

流石にこれ以上迫られるとぶつかる、といふところで、私は我慢
できず振り向いた。

同時に私の靴に、二つ、と軽い衝撃が加わる。男の歩みも漸く止
まった。

眼前の男は、私と比べれば頭ひとつ分高かったが、男性の中では
少し小柄なほうだ。そして遠目でもわかつたが、近くで改めて見て
も、細い。「がりがり」の一歩手前くらいではなかろうか。

肌は白い。こちらは「青白い」の一歩手前といったところか。

きめ細かな銀の髪や、量や長さをとっても申し分ない銀の睫毛は、
女性として大変羨ましいと思つた。顔の造りも中性的とまではいか
ないまでも、「格好良い」というよりは「綺麗」という言葉が似合
う。

軽く押せば倒れそうな、そよ風が吹けば飛んで行つてしまいそう
な、霧がかかれば塵と化して消えそうな、そんな儂い印象を持たせ
る男である。

そしてそれらを差し置いても田立つのは、その田と、私の靴に触
れた杖だった。

彼の瞳は水色だが少し濁っていて、そして虚ろである。先程の騎士とは比べ物にならないくらいにはっきりと、その目は焦点が合っていないことがわかる。これは精神的なものではなさそうだ。

手に持つ杖は、例えば老人の持つそれより一分の一程細いようだ。持ち手は金銀宝石類で装飾されており、それを包む指は、少し退いてしまう程細長かった。

生氣のない目で、支えることだけを目的としているのではなぞうな杖。

この一点が示すところは明らかだ。

彼は、光のない生活を送っているのだ。

「知らぬ者のようにだが、誰だ？」

ふいに男の薄い唇から静かな声が発されたので、私は肩を上げた。彼が言葉を発する生き物だと認識できていなかつたようだ。

「オルカ・コーディスと申しまして、侍女として働いている者です

「私が見えていないにも関わらず、初対面だということに彼は気付いている。

ある感覚を失った人間は、他の感覚がすば抜けて発達することがある、と聞いたことがあるが、この男もそうなのかもしれない。

それでも流石に、エプロンやメイドキャップは嗅覚や気配ではわからないだろうと思い、私は自分の職業も告げた。

男は小さく頷いた。

「何の用だ？」

来るだらうなと思っていた質問はやはり来たが、彼の声音に不審がつているような響きはない。

別に後ろめたいことは全くしていないのだが、普段責められることが多いだけに、私は少し拍子抜けした。

「ミルキア・ミルドボーズ、という侍女に頼まれまして、庭師から花材を受け取りに参りました」

「……ミルドローズではなく？」

「あ、そうでした」

またやつてしまつたと、心中で舌を出す。

普段から「ハゲろ」とか念じていると、いつこうときには表れてくれるのかも知れない。

男は表情を変えることなく続けた。

「庭師なら自室に帰つたと思つ。この時間帯、外に出ていることはまずない」

「え。 そうなのですか」

「ミルキアならそれくらい把握していそうなものだが。珍しいな」

「……そうですね」

しかし困つたものだ。できれば、ここで引き下がつて万が一でもまた怒られるのは、「こ」免こ」うむつたい。

「もしよしあければ、庭師の方の部屋を教えていただけませんか？」

「…………」

すると男は口を閉ざした。
駄目なのだろうか。

「では、恐れ入りますが、庭師の方を呼び出していただく……とか、
できませんでしょうか」

どうにかこうにか、恐らく本田最後であろう仕事くらいは、後腐
れなくこなしたいものだ。

「それは、ミルキアの権限では無理だろ。……だが、私の権限で
は可能ではある」

ミルキアよりも自分のほうが立場が上である、と言いたいのだろうか。

できるかできないか、シンプルな答えを予想していた私は、何故
今更そんな情報を持ち出してきたのか察することができない。

何にせよできるのであれば呼び出してもらい、仕事を成功させたい。

私は単純に自分の希望を言つことにした。

「失礼なことを申し上げては存じておりますが、どうか、あなた様の権限で呼んでいただけないでしょうか。お願いたします」「訴えるような表情は苦手なのだが、誠実そうな声なら得意である。相手がこの人で良かつた、と思つてしまつてから、私は自分の不謹慎さに内心かなり反省した。

男は頷いたので、私はよつしゃ、と手を握る。

「しかしその前に、私もあなたに頼みたいことがある」

握った手から力が抜けた。

まさか条件を持ちかけられるとは思っていなかつた。

「ええと、自分からお願ひ申し上げて恐縮なのですが、私今あまり時間がなくて……一先ず今頼まれた仕事を終えてから、とかなら……」

「ミルキアのことなら、心配せずとも良い。何か言われたら私の責任にしてくれて構わない」

「そ、そりですか？」

先程の権限云々の話は、そういう含みだったのか、と理解した。

「来い」

一方的に言い置くと、彼は踵を返した。

華奢な杖を細かく操つて立ち位置を確認しつつ、来たときよりも早い足取りで進んで行く。

私は彼について行くのを、少しの間躊躇つていた。
ミルキアさんから言い付けられた仕事を遅らせるこについての躊躇い、だけではない。

門番付きの庭。
立ち入り禁止区域。
盲目の男。

そういうたものに、私は得体の知れない恐怖を感じていたのだ。

「この男の前ではとても言えないが、気味が悪いと、そう思つてしまつた。

しかし男は、私が付いて来ていることを察知していた。

「何をしている。早く来い」

彼の背からそんな有無を言わさぬ言葉が發されれば、私の竦んだ足も前進せざるを得なかつた。

4・変わり者

しばらく歩くと、前方に再び、黒い柵と小さな門が現れた。

門の横には、やはりその番人であるつ軽装の女が待機している。

そしてその奥には、今度こそ白信を持ってわざわざ呼べるであり、『庭園』が広がっていた。

「ここってやっぱり、ただの通過点みたいなものだったのですね」「会話がないことにあまり耐久力のない私は、当たり障りのないことをぼやいた。

「『通過点』？」

「私はてっきり、今歩いているここが東庭園だと思ってたのです。でも、それにしてはあまりにもシンプルすぎると感じまして。やはりここが東庭園というわけではなかつたのですね。奥が……ぐふつ」

すぐ前を行く彼がいきなり歩みを止めたため、私はその背中に遠慮なく衝突してしまつた。

ふいのことだつたので、悲鳴を乙女モードに変換する余裕もなかつた。

意外だつたのは、加減なくぶつかつたにも関わらず、男がびくともしなかつたこと。

とても丈夫そうな外見ではなかつたので、恨みと共に焦りも感じていたのだが、その点は心配いらないようだ。

彼は鷹揚にこちらを振り返つた。

しかしさの表情は驚いたような、訝しんでいるような、形容しがたいものである。

「……あなたは『東庭園』に来たのか
「？そうです」

庭師を探しに来たくらいなのだから、当たり前ではないか、と私は思った。

男は複雑な表情を崩すことなく、しばしの間固まっていたが、やがて興味を失ったかのように再び歩き出した。

私は首を捻つてから、彼の後を追いかける。

学者や研究者は変人が多いと言つから、やはり彼もそうなのだろうなど、一人で納得した。

やがて門の近くまで来ると、番人であるう女が不思議そうに声を上げた。

「あやや？ 可愛い子連れてますねえ、シゼル様。誰ですか？ 彼女ですか？」

しかし男は、女のほうなど見向きもせずに通り過ぎる。

私は少し居心地悪く感じつつも、女に軽く会釈をして通り過ぎた。目が合つと、女はにっこり微笑んだ。

「行つてらつしゃーい。『テート、楽しんで来てねー』

私も徹底的に無視するんだつた、と後悔した。

「薔薇の咲いてるところに、案内してほしい」

彼にそう言われて、私は心の底からほっとした。

先程から、一体何を言い付けられるのだろうと、ずっと落ち着かなかつたのだ。

何せ立ち入り禁止区域にいる不可解な人間が相手なので、法に抵触することとか、身を危険にする」ととか、取つて喰われることとかを想像していた。

やけにロマンチックな依頼で、目前の男の変人度は増したが、先に考えていたことよりは大分ましである。

「……今何か失礼なことを考えていいのか？」

「何故だらうよく言われる」

「考えていたのか」

「イエイエメッシュウモゴザイマセン」

私の表情がわからないにも関わらずそんなことを読み取るだなんて、「すごーい」を通り越して、何だか化け物じみたところがある気がする。

「この庭園内で、薔薇があるといふことお連れすればよろしいわけですね？」

「そうだ。流石に花園となると、においの種類が多過ぎて、特定の花を探しだすのが困難だからな」

「了解いたしました。が、ざっと見たかんじ、薔薇だけでも色や種類がかなり豊富なようです。どのようなものをこ所望でしょーうか」

「そうだな……。一先ず、一番手近なところ
かしこまりま……」

そういうえば、田の見えない人を案内するのだった。
そうすると、手を取つて導いたほうが良いのだろうか。
しかし初対面の男とお手々繋いで歩く、といつには些か抵抗がある。

「どうした」

「ええと、どのようなご案内したら良いものかと思いまして
「普通に前を歩いてくれればそれで良い。後から付いて行く
「あ、ありがとうございます」

私の心配は杞憂だつたようである。
においてか、気配とか、足音とか、そういうものでわかるのかも
しない。

「では、行きます」

洒落た言葉が何も思いつかなかつたので、率直にそれだけ言つと、
私は歩き出した。

歩き出すとすぐ、北のほうに建物が見えてきた。
外壁や屋根の様子が宮殿と同じなので、これもその一部なのだろう。

今までに随分歩いてきたから、敷地内でも端のほうに位置すると思われる。

こんなひっそりとした場所にこんな立派な館が建つのだから、やはり王族と貴族は随分違うなあと思った。

私の実家は丁度今見えた館くらいの大きさである。
王宮内の一棟くらい私にくれてもいいんじゃないかなうか。

門からおよそ二十歩程だろうか。

早速今が見頃の綺麗な薔薇があつたので、私は立ち止った。

後ろを見やると、一步後れの位置で男も立ち止まる。

本当にしつかり、問題なく付いて来ていたので、私は少なからず驚いていた。

動きも、杖のことを抜きにすれば、あまり健常者と変わりがない。

「ここです」

他に言い方が見つかないので、ついぶっきらぼうになってしまふが仕方がない。

とりあえずは案内しようとしか言われていないし。

「どんな薔薇だ？」

考えている矢先から説明を求められた。

「ピンク？の薔薇です」

「……もつと他に言こよつはないのか。疑問符の意味するとこもわからん」

男は呆れたように目を閉じた。

「えー、だつてプレゼンテーションの仕方とかは研修でも教えられませんでしたし。それにこの薔薇の色名がよくわからないです」

「あなたのボキヤブライナー内で説明してくれればそれで良い。あなたの目に映つた薔薇の画像を、私にわかるように翻訳してほしいんだ」

成る程、と納得した私は、腰を屈めて、まじまじと薔薇を観察した。

「花弁は……今更ですし失礼ですが、色の感覚は理解できますか？」

「ああ、わかる。私の全盲は後天的なものだ」

「了解です。……花弁は紅色とピンクの中間で、少し濁つた色と申しましようか、渋めで落ち着いた色彩です。それが幾重にも重なつてます。外側の数枚を残して、内側の沢山の花弁は中心に丸まつてぎつしり詰まつていて、という様子です。額と莖と葉は灰色がかった濃い緑です。葉っぱは輪郭の部分がぎざぎざしていて、外側が中央に比べて青みがかつています。花弁や葉っぱに露玉が乗つっていたりするので、少し離れて見るときりきりしてます。……私の観察力では「じんなとこりでしょ」か」

姿勢を正して男のほうを窺うと、男は小さく頷いた。

是とも非とも言つてこないので、私の翻訳が上手くいったのかどうかはわからない。

「その薔薇が咲いているのは、私から見て左、だな?」

「はい、そうです」

すると男は、私との間に合つた一步分の距離を詰めて來た。

私はその分後ろに下がり、男はそれが当然と思っているようだ。侍女なのだから確かに城での立場は底辺だが、それにしても見かけに反して紳士じやない。

少し憮然としつつ男を見守つていると、彼は先程の私の立ち位置で正確に止まる。

そして薔薇のほうに向き直り、少し屈むと、おもむろに右手を差し伸べた。

「あ

ひとつ説明し忘れたことがあった、とやつと思ひ出しが、勿論もう遅い。

茂みをがさがさとまさぐつていた彼は、眉を潜めながらも、抜き取つた手にしつかり立派な薔薇を一輪持つていたのは流石と言えよう。

「申し訳ございません!」

男が口を開こうとしたのがわかつたので、先手を取つて謝罪した。お辞儀もあわよくば風が起きるようにと力いっぱい腰を折る。見えぬなら感じてみせよ私の謝意。

「……わかつていて言わなかつたのか?」

「いえ、滅相もございません。本当に。たつた今氣付いたといひで

す。本当の本当に

何だか言葉を重ねれば重ねる程嘘臭くなつてこゝのは氣のせいであらうか。

私が説明し忘れた」と。

すなわち、棘の存在。

無造作に薔薇の茂みに手を突っ込み、それでやめておけばいいものを、その中から本当にものを恐らく触角だけで選び取り、そして手を引っ込めたのである。

彼の骸骨のような右手には、無数の引っかき傷に加え、小さな棘も幾つか刺さつてゐるよつた。

「まあ、私もすっかり失念していたが。そうだな、薔薇とはそういうものだつた」

血が滲む無数の傷口は、見てゐるこちらの鳥肌も立ちそつなものなのに、彼自身は異様なくらいに落ち着いていた。

その口元には感慨深げな笑みさえある。

そういうれば会つてから今に至るまで、彼の笑顔を見たのはこれが初めてだ。

勿論こんな凄みのある笑顔は何度も見たい代物ではない。

「すみません……」

「いい。別にあなたは悪くない」

「あの、せめてものお詫びに、刺さつた棘、私がお取りします」

それは本当に『せめてものお詫び』だつた。

本気かどうかはわからないが、先程この男は私に他意があつたことを疑う素振りを見せていたので、出来得る限りの誠意は見せておかないと。

得体の知れない人間との関係は、クリーンに終わらせたい。

しかし彼は緩やかに首を横に振った。

「痛み、なんて感覚は久しぶりだし、嫌いではない。しばらくはこのままでもいい」

そう言って、右手を閉じたり開いたりする。

そんなことをしたら、余計棘が奥に刺さってしまうだろうが、この男の妙な言動からすると、それすらわかつてやってくるのだと思つ。

『病んでいる』、のだろうか。

こういつたうすら寒いものを感じさせる男にお節介を焼く程、私は優しい人間ではない。

「そうですか。では『自由に』これが原因で悪化したとしても、私は責任取れませんので」と承ください

すると男の体が固まつた。

元よりただ突つ立つて いるだけだつたが、ゆつくりと開閉して いた彼の右手が、急に緊張した ように動かなくなつたところを見ると、『固まつた』とい う言葉がふさわしい ように思える。

「責任を、取るつもりでいたのか」

私はう、と言葉を詰まらせた。

先程のは責任を取りたくない故の発言であったが、確かに裏を返せば当初は責任を取るつもりだった、ということになる。

無論私としては、そんな大事を意識していたわけではないが、言つてしまつた以上仕方がない。

私は他称問題児ちゃんではあるものの、父が貴族らしからぬ方向で厳しい人だつたので、失敗や悪巧みの清算はさせられてきた。例えば、双子の妹の寝顔が可愛くて可愛くて、つい髪を描いてしまつたのが彼女の初デートの日だつたときには、三回土下座して謝罪させられた。

目の前の男の立場がどういったものなのかはつきりしないので気乗りはしないが、前言撤回は美しくないやり方だ。

「……私にできる範囲内ならば……」

私が言つと、彼の表情が悲しげに和らいだ気がした。

「なら、取つてもらおうか」

彼の傷だらけの右手が、私の前に差し出される。

「……はい」

私はその手をおずおずと受け取る。

異性の手であり、怪我をしている手であるから、緊張しないわけがない。

しかし彼の右手は温かくも冷たくもないで、生きた人間の生身に触れている実感がいまいち湧かなかつた。

そしてそれは慎重さや丹念さが求められる棘抜きの動作をするに当たつて、好都合ではあった。

「責任を取るつもりであるとのあなたのあなたの言葉、しかと覚えておく」といひする

作業の最中に、彼がそんなことをぼやいた。

「えー。私の言つたのは、その、つまり、私のできるせめてもの責任の取り方が、今棘をお取りする、ということだったのですが。正直そこまで私に非があるとも思つておつませんし

「わかつていゐ。これとは別のことだ」

他に何か失態を犯しただろうか。

眉を潜めて男を見ると、彼は心持、楽しげで、悲しげな顔をしていた。

「終わりました」

そう言いつつも、この手をどこに返せば良いかわからず、私は彼が動くのを待つしかなかった。

彼はそつと右手を宙に浮かすと、少し硬い動きでそれをズボンのポケットに入れる。

「ありがとう」

「いえ。後でちやんと医務室で診てもいいってくださいね」

「ああ」

彼が素直に頷いたのは意外だった。
機嫌が良さそうな今の内に、と付け加えておく。

「責任問題はお手柔らかにお願いします」

「……それは難しいかもな」

私は肩を落とす。

するとおもむろに、彼は門の方向を見やつた。

「……時間切れか」

「どうかなさいましたか？」

「ミルキアの声がする。あなたを探してくるよつだ

「え」

探してくる、といつゝとは、やはり花材を届けるのが遅いといつ

「…どうゆつ。

すなわちそれはお説教を意味する。

「この男のせいにして良いといつことだつたが、果たしてそれもどこのまで通用するものか。

私は彼に倣つて注意深く耳を澄ませたが、ミルキアさんの声など全く聞きとることができなかつた。

「責任を取りたくないといつのであれば……」

唐突に話が元に戻つた。

「…ちは氣が氣でないといつのに、暢氣なものだと思つたが、続く言葉はそうではないことを裏付ける。

「私に会つたことは何としてでも伏せろ。ミルキアは勿論、他の誰にも。絶対に語りせてはいけない」

彼の表情は少し寂しげで、でも断固とした何かが窺い知れた。

「……どうしてですか？」

「それは知るべきでないことだ。何も知らない振りをしろ。何も聞かず、何も言うな。どこまで白を切つても切り過ぎるといつことはない。そうすれば、或いは、責任を逃れられるかもしれない」

「それは、何に關しての、責任でしょうか……」

「この色々危ういな男の発言を全て本氣にするのもどうかと思つ。しかし、神妙に語る彼の姿からは、今まで常に付き纏ついていた僕さが感じられなかつた。」

彼は問ひに答えず、代わりに私の肩をそつと押した。

「行け。『あなたは東庭園に花材を受け取りに来たが、庭師はいかつた。盲田の男には会つていない』。それで通せ」

来たときと同じく有無を言わざぬ聲音で命じられれば、頷かないわけにはいかない。

私は何が何だかわからぬまま、男に会釈した。

「では、失礼します」

そうして、わざと音を立てるようにな顛てて翻け出した。

ひとつめの門を出たところで、ミルキアさんの呼び声がよつやく自分にも聞こえた。

「……ルカつ……なら出て来なさい……オルカ……」

その声には怒りといつよりも焦りが含まれてゐるようで、まるで母親が迷子を探しているときのようだ。

私は再び駆け出し、草花に囲まれた一本道をひた走る。

ミルキアさんの姿はすぐに見えてきた。

「……オルカ……」

その表情を見極められる位置まで近付いたとき、私は少なからず戸惑つた。

彼女の顔に表れていたのは、怒りでも焦りでも見つかることくの安堵でもなく、落胆、だつた。

「遅くなつてすみません。……」

言い訳を口にしようとしたとき、頭の中に彼の声が蘇る。

『私に会つたことは何としてでも伏せろ』

……言い訳、できないじゃん。

自分のせいにしていいと言つたのは彼のまゝなのに、その道を口から閉ざすとは何てえげつない奴。

ミルキアさんの存在などすっかり忘れて、私は憤つた。

「……何ですか、その百面相は」

「あ、いえ、何でも。……庭師が全然見つからないのです。ずっと探しているのですが……」

ミルキアさんが探るよつた目つきをしたのがわかつた。

「この道を、何処まで進んだのですか？」

「東庭園まで行きましたけれど……。あ、でも庭園をちょっと歩いたところでミルキアさんの声が聞こえたので、すぐ戻つて来ました」

私は考え考え、慎重に言葉を発する。

『言つて良いこと悪いことを正確に識別せねばならない。

「それにしてもミルキアさん、酷いです。私東庭園が立ち入り禁止区域だつたなんて全然聞いてませんでしたよ。お陰で門番の人によ

つても疑われました」

「東庭園は立ち入り禁止区域などではありますん！」

ミルキアさんはエメラルドグリーンの綺麗な目で私を射抜く。私がびくりと肩を上げると、彼女ははつと顔を強張らせた。己が取り乱していることに、今気付いたようである。

よくよく思い出してみれば、こんなに余裕を失くしたミルキアさんの姿は初めて見るかもしけない。

怒り姿なら見慣れた程にお世話になつている。

しかし、冷静に窘めるときは勿論、激怒を露わにするときだって、彼女は自分を制御しているふうであった。

この場合はどのように叱れば良いか、この場合はどうかとこうふうに、恐らしく計算していたのだらうと思つ。

それが、今回ばかりはどうやら違うみたいだ。

少し観察してみれば、普段健康的だった肌はすっかり青ざめ、顔には汗が浮かんでいることがすぐわかる。

ミルキアさんは「『めんなさい』と呟くと、自分を落ち着かせるようになり、からからと首を振つた。

顎辺りの長さで切り揃えた金髪が、それに合わせて揺れる。

「……え？」

聞き返した声が上擦つた。

それと共に、頭の奥で妙に納得している自分がいる。

今まで全く気付かなかつた自分がどうしようもなく阿保らし

い。

門番の騎士、盲田の男、ミルキア。

三者の発言が頭の中で一斉に再生され、そしてそれは、『「」は東庭園ではない』との新解釈と全く矛盾していないどころか、素晴らしく一致している。

つまり、彼女の言葉は事実なのだ。

「そうだったのですか……」

「確認ですけれど、あなたは本当に、『』が東庭園だと思ってやって来たのですね？」

「はい……」

呆然と答えた私に、ミルキアさんは頷いた。

そして、頭を下げる。

「『』めんなさい。あなたには……悪いことをしたわ」

私は眼前で起きていることが信じられず、しばらく物を言ひつゝもできなかつた。

説教は想定していれど、まさか謝罪されるだなんて予想できるはずがない。

何て不吉な！

「ななな何でミルキアさんが謝るんですか、悪いのは私のほうなのに！」

「いいえ。どうか謝らせたいのです。あなたの馬鹿さ加減をわたくしは見誤つていました。東庭園の位置も、きちんと確認してお

くべきでしたね……」

若干いつもの調子が戻ってきたようなので、私はほんの少し胸を撫で下ろす。

「ここで安心しているところが末期だなと思わなくもないが、しょらしいミルキアさんというのは大変心臓に悪い物質である。

「ところで、あなたはこの立ち入り禁止区域に足を踏み入れてから、どなたかにお会いしましたか？」

「えっとー、この奥にいる門番とこの奥にいる門番とこの奥にいる門番だけですかしらねー。あ、あとこの奥にいる門番」

俄かに美人上司の視線は冷氣を帯びる。
脳裏をよぎるは騎士の残した最後の台詞。

『あんた嘘が吐けなれやつだしな』

悲しいかな、この言葉の真実性は私が最も自覚しているのである。

「杖を持つただん……」

「あーないない、全然会つてないです！これっぽっちも！本当に…
そんな存在はミクロンも田にしてないです！」

「まあ、考えなしのあなたにしては聰いこと。教えてくださいますか？わたくしが何を言おうとしたのか」

「え、えっと。杖を持つただんせ……杖を持ったダンディでござりますよね」

あー死ぬ、間違いなく次の瞬間私死ぬ。

そう思つて私は俯いて目を閉じた。

しかし次に響いた声は、存外に優しげだった。

「オルカ」

名前を呼ばれたきり、後に続く言葉がなかつたので、私は不思議に思つて顔を上げた。

ミルキアさんは困つたように笑つていた。

「嘘は上手に吐かなくては駄目よ」

私は何か言おうとあれこれ考えたのだが、結局返す言葉はビードを探しても見つからなかつた。

7・ユーディス家

私の名前はオルカ・ユーディスという。

オルカが名前で、ユーディスが姓である。

実はこの名前、貴族か、あるいは社交界に通じている人であれば、かなり多くの者が知っているらしい。

曰く、『あの』ユーディス家の『あの』オルカ』である。

私のことを既に知っている人間に自己紹介した場合には、反応は大きく二つに分かれる。

「えつ！？」という好奇。

もしくは、「げつ！？」という後退。

私としては非常に不本意である。

有名になるなんて恥ずかしい！などといつこ女らしい考えではない。

重要なのは有名になつた理由である。

例えば。

『あの』エリート一族ユーディス家の、『あの』百年に一人の逸材と言われる賢者オルカ。

『あの』美男美女揃いのユーディス家の、その中でも格別に麗しい美貌を持つて生まれた『あの』オルカ。

『あの』勇猛果敢にして人徳が厚いと謳われるユーディス家の、領地を千匹の狼から守つた『あの』英雄オルカ。

こんな曰く付きであれば、文句の出よつはずもない。結構。大いに結構。

しかし勿論現実はそうではない。

私は父に『お前にマンツーマンの家庭教師を付けるのは金の無駄だ』と言われ、高位貴族にしては珍しい学校通りの人間だったので、賢者なわけがない。

美貌云々は自分で言つて赤面するくらいだからあり得ないし、狼が一匹でもいれば私は間違なく逃走を図る。

では何なのか。

要約すると、『あの』小賢しいコーディス一家の『あの』異端種オルカ、ということのようだ。

コーディス一族は現在侯爵家であるが、父の三代前、つまり私の曾祖父の父の時代までは、衣服を仕立てるただの商家だつたそうだ。しかし曾祖父は非常に有能な人間で、貴婦人用のドレスを扱い始めたところ、これが大成功したらしい。城下町の隅で小さな店を運営していたコーディス家は、たちまち流行のブランドとなつた。その評判は瞬く間に王家の年頃のお姫様の耳にも入り、直接お呼びがかかつたそうである。第二王女の夜会用のドレスを仕立てほしい、と。

さて、ここから「あの小賢しいコーディス家」の歴史が始まる。曾祖父は、この一大ビジネスチャンスの筆頭にと、自分の家の長男を立てた。私の祖父である。

彼は当時大学を出たばかりで、商人としては駆け出しの駆け出しであつた。しかし、年頃であつた。加えて、独身でもあつた。

王女様はコーディス家の仕事（と、恐らく祖父）が大変気に入り、頻繁にコーディス家にドレスの仕立てを頼むようになった。そして祖父は、当然の如く頻繁に王女に面会に行つた。

かくして二人は恋に落ちたのである。

しかし、王家と商家での恋は許されなかつた。

貴族であれば、平民との結婚も許されているが、王族だけは別だつた。ショーヴラーグでは、王族は王族同士、或いは国内の貴族としか結ばれることはできない。

可愛い娘のためとはい、王家自ら法律を破るわけにはいかない。国王陛下は涙ながらに娘を説得しようとしたが、我が家の祖父に心底惚れていた王女様は、最後まで折れることはなかつたそうだ。

そこで再登場するのが、やり手の曾祖父である。
彼は国王陛下にこう申し出たそつだ。

「恐れ入りますが陛下、我が息子レナードと第一王女ジウニア様のこと進言させていただきたく存じます。

陛下もご存じかと思いますが、レナードはおじがましくも、ジウニア様に恋しております。全く身分知らずにも程があるというもので。しかし、わたくし自身まだ本当かと疑つてもいるのですが、ジウニア様のほうもこの愚かな息子に好意を寄せているとのことを、複数の者から聞いたのです。

大変僭越なことを申し上げてることは承知しておりますが、もしあたくしの聞いたことが本当ならば、陛下も心苦しく感じているのではないかと思つた次第であります。

何せジウニア様はショーヴラーグの第一王女であり、その血は全く穢れなきものでござります。対するレナードはしがない商家の息子に過ぎません。我が息子は王女殿下に到底釣り合わぬ器です。

しかし民にもご家族にも慈悲深く愛情深い陛下のこと。きっとこの自分の娘には幸せになつてほしいと願つていらつしゃるのではございませんか？そして、陛下の広い大海のような御心には全く見劣り

しますが、わたくしも一人の父親として、息子には幸せになつてほしいと願つてゐるのでござります。

さて、国王陛下、どうか今少しのしがない商人の戯言をお聞きくださいませ。

我がコーディス家は、ツェーヴラーグ王家への忠誠を改めて固く誓い、王家に益と繁栄をもたらすために力を尽くすことを約束いたします。

それでどうか、もし我が息子と第一王女殿下が眞に愛し合つており、陛下がこれを良いとされるのであれば、どうか次のお願ひを一度考慮していただきたいのです。

どうか、我がコーディス家を、血筋の貴い一族として迎え入れていただけませんか？

この非常に長い進言はこのままの状態でコーディス一族史に残つているのだが、要するにこういうことである。

俺達を貴族にしちゃえば全部丸く收まるぜ。

そして王様はそれを呑んだのだった。

そういうわけで私の祖母は元ツェーヴラーグ第一王女だ。

その後もコーディス家は巧みに『小賢しさ』を駆使し、貴族世界を這い上がつて来た。

「貴族といえばどろどろ愛憎劇」と学生時代の友人が私に何の遠慮もなく言つてきただったが、近年その「どろどろ」の渦の中心にいたのは、主にコーディス家だったかもしれない。

お陰で当初子爵家だった我が家は、今では侯爵家になり上がつてゐる。

そんな一族の異端種がこの私、あのオルカ、である。

「Jの異端種」という語をさらにわかりやすくすると、
「あの小賢しいコーディス家にこんな馬鹿が生まれた！」
ということになる。

これを不本意と言わずして何と言おう。

勿論この呼称が使われるようになつたのにはきっかけがある。
というかそのきっかけとなる出来事さえなければ、私は何の問題
もなく、優雅に華麗に貴族社会を渡つていけただろう。
そう言つと決まって家族は首を横に振るが、そんなことはひとつで
もよひしー。

事の発端は二年前である。

ツヨーヴラーグの王家は一年に一度、盛大な夜会を催す。この宴は貴族か王族であれば誰でも出席できるもので、当然ユーディス家、そして私も出席した。

何せ美味しいものが食べ放題である。それだけでも行かぬわけがないが、加えてもうひとつ、私には出席する理由があつた。

当時私は、とある伯爵家の長男に惚れていたのである。

今思うとそれは恋というよりも憧れに近いものだったようだ。

彼は兄の友人であり、私よりも大分歳が離れていた。幼いときから兄と共に私の面倒を見てくれた、誠実そうで優しい人である。が、よくよく考えてみれば、彼の性格についてそれ以外には特に思いつかない。

基本的に私の周囲にはそういうたまたま男がいなかつたため（双子の妹曰く「まともな男はあなたには近付かない」、だそうであるが）、ある意味消去法で行き着いたとも言える。

何にせよ彼の顔は拝めるときに拝んでおかねばと思つていたこともあり、私は夜会に出席したわけである。

しかし私は恋愛に積極的なタイプではないので、特に彼に対して何をするでもなかつた。

ダンスに誘うことを考えなかつたわけではないが、そもそも話しかけることさえ躊躇われるため、それどころではない。

ただただ美味しいものを頬張りながら、彼の姿を目で追うだけである。私としては、まあそれでもいいかと諦めている節があつた。

一通り挨拶回りを終えたので、私は家族から離れて豪勢な食事に舌鼓を打つていた。

やがて音楽が始まり、大勢の紳士淑女がホールの中央に進み出て、優雅に踊り出す。

勿論私はその中に入つて行くことなどせず、食事を続ける。

ぼんやり眺めていると、私のよく知つた顔もダンスの輪の中に紛れていた。父は母と、妹は婚約者と、兄はどぞやの令嬢と。そして絶賛片想い中のあの人も、どぞやの令嬢と踊つていた。

ぎくりと全身が強張つたが、社交辞令で共に踊るなどよくあることだ。

そう言い聞かせつゝも、楽しげな二人を見つめることは止められなかつた。

ふいに、私の肩に何かが触れた。

吃驚して振り返ると、水色の瞳と視線がかち合つ。

小柄な私より頭ひとつ分程度背の高い男が、ぎこちない笑みを浮かべてこちらを見つめていた。

短く刈り込んだ銀髪に、小麦色に焼けた肌、程良く鍛え上げられた体系は、どこかで見たような気もする。

しかし少なくとも今日の挨拶回りの内には入つていなかつたし、知り合いではないと思つ。

では何故今この男は、私の肩に手を載せ、緊張氣味に微笑んでいるのか。

うーん全く身に覚えがない。

次の瞬間、

「食べ過ぎですよ」

とか言われるのだろうか。

「ユーデイス家のオルカ嬢、ですよね」

幼さの残る、或いは幼げに見える爽やかな顔は、なかなか好印象だ。

こんな爽やか野郎は私の周りにいた記憶がないのに、どうして彼は私の名を知っているのだろう、と思つた。

無論このときは私の不本意な評判が知れ渡る前である。

「ええ」

男が何者かわからない以上、余計なことは口走らないほうが良いだろうと、私は必要最低限の答えを口にした。

彼は私の無愛想な反応に少し戸惑いを見せたが、その顔を引き締め、こう言つた。

「私と踊つてくださいませんか?」

手から力が抜けて、持つていた皿が落ちた。

丁度私は自分の取り皿に新たな食糧を調達していたところだったので、皿は床ではなくテーブルの上に落ちた。

しかし載つっていた食べ物は勿論散乱。テーブルの上の大皿のほうにも異物を混ぜてしまったので、明らかにこれらの食べ物は廃棄となるであろう。

「わ、わ、申し訳ござりませ……」

素早く侍女達が片付けに入る。

失態を犯してしまったものの、今は誰に謝れば良いのかわからぬ。とりあえず彼女らに頭を下げようとしたところでの、腕を掴まれ

た。

銀髪の彼は、やや困ったように笑う。

「ここは大丈夫です。侍女達にお任せください。突然驚かせてしま
い、失礼をいたしました」

私は右の困った状態と、左の困った君を見比べた。
しかし真摯な眼でストレートに見詰められれば、困った君から視
線を逸らすわけにもいかない。

彼は覚悟を決めたようにすう、と息を吸うと、再度この言葉を口
にした。

「オルカ嬢。どうか、私と踊つていただけませんか？」

その時私の脳裏に浮かんだのはただ一言。
面倒臭い。

正直に言つと、私はこういった公の場で殿方にダンスを申し込まれたことはほとんどない。

あると言えば、兄か、父である。

それというのも、挨拶回りを程々に終えた後はそそくさと食事の並ぶテーブルに赴き、後はひたすら食事を貪る、ということを繰り返していたからである。

お腹空いた。ダンスなんて興味ないし。

この一つの感情はがっしりと協定を結び、連携して私を食事のテーブルに駆り立てた。

そうすれば、美味しいものが食べられて私は幸せであるし、好き
でもない人間とのらりくらりと踊らなくて済むのである。

そしてその感情を隠しもしない、あのコーディス家の令嬢に、敢えてダンスを申し込む野暮は今まで存在しなかつた。
そう。今までは。

私は水色の瞳をじいっと見つめ返した。

彼の目は期待と不安で揺れているようにも見える。

幾分良心は痛むが、私はこの申し出を受けるわけにはいかなかつた。

ここで受け入れてしまつたら、今までやつてきた「頼むからダンスになんか誘つてくれるなよ。私は食べるのに忙しいんだから」という意思表示が嘘になつてしまつ。

現に田の前に物好きが現れた今、これから先は現れないなんて確証はどこにもない。

そして私は、やはり田の前の男を知らない。

先程私の名前をわざわざ確認してきたといつ」とは、大した接点もないと考えて良いだろう。

それなのに自己紹介もせずに私をダンスに誘つてきたのだ。
これは些か非常識と言える。

よし。断つても問題はなさそうだ。

私は努めて眉尻を下げて微笑んだ。

「「めんなさいまし。今は踊る気分になれないのです」

大きな声を上げたつもりはなかつたが、私の言葉はホールに響いた。

こんな断り文句、大勢の人に聞かれて気持ちの良いものではないだろう。私はともかくとして、彼にとつては。

そう思つて慌てて周囲を見回した私は、啞然とした。

少なくともここから見える位置にいる皆の顔が全て、私と男のほうに向き、私と同じく啞然としていたのだ。

先程までダンスに興じていた者も、動きを止めてこちらに見入っている。

静寂の中、音楽だけはやや氣まぎそうに流れていた。

「お姉様！」

沈黙を破つたのは、私でも、銀髪の男でもなかつた。

声のしたほうを見やると、双子の妹カノンがダンスの輪を外れて、こちらに歩み寄つて來た。共に踊つていった婚約者は止めることもせず、呆けたように成り行きを見守つている。

カノンがつかつかと靴を鳴らして歩けば、自然と彼女の前から人垣は割れた。

彼女は私の目と鼻の先まで詰め寄り、腰を曲げて私の顔を覗き見た。

青紫の瞳に映るは、呆れと使命感のような何か。

「皇太子様の誘いを断るだなんて、あなた、本気？」

瞬時に私は固まつた。

……ああ。道理で見覚えがあると思った。

恐れと恥ずかしさの余り、皇太子様を見ることができない。

仕方なく硬直したままカノンの顔を眺めていると、彼女の表情に呆れの色が濃く表れた。

「あなたやつぱり気付いてなかつたのね」という声が聞こえてきそうである。

カノンは姿勢を正した。

そしてそれに乘じて、私の耳元で囁く。

「私に話を合わせなさい」

そう言つて、数歩私から距離を置いた。

「ねえお姉様。よつぽど理由があつてのじでじゅうへんうなん
でしょ」「？」

私はおずおずと頷く。

勿論ここで「面倒だつたから」とか「ご飯食べたかつたし」などの発言がアウトであることは私如きにもわかる。

しかしこれから先、カノンがどのように話を収めるのか、全く見当がつかない。

無難にしおりしくしておぐが吉と見た。

「どうしてなの？体調が悪いの？ねえ、ちゃんとした理由も告げずに誘いを断るだなんて、皇太子様に失禮でなくつて？」

私は俯いた。

カノンちゃん、私どうすればいいのか全然わかんないよ。演技でなく泣きそうだ。

すると予想外にも、助け舟の助け船が現れた。
例の皇太子様が、私とカノンの間に割つて入つたのだ。

「私なら気にしていないので大丈夫ですよ。突然のことだったのでオルカ嬢が驚くのも無理のないことと存じます。それよりも、私の気遣いが足りなかつたせいで楽しい宴を台無しにしてしまつたようで、誠に申し訳ございません」

そう言って、少し弱々しいながらも、周囲に微笑みを振り撒く。
今の時代、こんな好青年がまだ生き残つていたとは、と私は他人事のように感嘆していた。

しかもその好青年は王子様である。

何て優良物件。

その優良物件は、ちらりと私を振り返ると、またもや困つたような微笑みを浮かべた。まるで私を安心させるかのように。

何故こんな優良物件が空気も読めずに私をダンスに誘つたのか。考えれば考える程に謎があるので、考えることはやめた。面倒。

しかし、我が双子の妹にしてみれば、皇太子の登場など計画に入つておらず、全く邪魔な存在であつたようだ。

「皇太子様はお優し過ぎます！ここでお姉様を許すのは、ある意味でユーディス家にとつて恥を意味します。お姉様ったら、自分の取つた行動の説明もできませんの？」

カノンは割つて入つた皇太子様の横をさつと通り過ぎると、再び私に至近距離で詰め寄る。

彼女はどうしても自分のシナリオで事を進めたいらしい。
私としてはどういう成り行きであれ丸く収まればそれで良かつた
んだけど。

ついでに言つと、カノン自身も十分皇太子様に失礼なことをして
いる気がする。

私の心配など露知らず。カノンは手厳しい妹を演じて叫んだ。

「何とか言ってくださいまし！」

「いい加減次の手を打ちなさいよ、馬鹿。話が進まないじゃない
と言わんばかりに睨んでくるカノンに、不安げにこちらを見つめて
くる皇太子様、そしてそんな私達を見世物のように取り囲むその他
大勢。

こんな緊張する場面で上手い考えが思い浮かぶわけがない。私は
プレッシャーに弱いのである。

そんな私が打てる手といつたら、確実に限られていた。

私は「あの……」とおどおどしながら言つと、そつとカノンの耳
に自分の口を寄せた。その口を手で囲い、囁く。

「思いつかないので後は任せました」

睨まれるかと思つたら、カノンはむしろ一イッチと一瞬口角を上げ
てみせた。

これは大変悪い兆候だな、と思うが、あのコーディス家のカノン
に全投げしたのは他でもない自分である。
私は開き直つた。

私がカノンから顔を離すと、彼女は驚愕の表情を浮かべた。

「ええ！？お、お姉様、想い人がいらっしゃったの！？」

周囲の人間がざわめいた。

彼等には段々、この見世物を楽しむ余裕が出てきたようだ。

……勘弁してくれ。

皇太子様を見やると、あからさまにショックを受けた顔をしている。

今私の気持ちは、仔猫を道端に捨てたときの気持ちと似てるんじゃないつか、と想像した。

「誰ですの！？お姉様！はつきり仰いなさい！皇太子様に誠実さを見せる気があるのであれば、そのくらいすべきだわ！さあ！」

意気込むカノンの目は、若干楽しげで、そして、炎がちろちろと揺れている気がした。

そこで私はピンと来た。

生まれたときからずっと一緒に育ってきた双子の妹である。彼女の考えうことなど、大体わかる。

これは、復讐の炎である。

何の復讐かという疑問は、身に覚えがあり過ぎるので一先ず置いておく。

カノンが使い物にならなくなつた今、誰か他の助つ人を探し出さねば。

最初に私が目付けたのは、心優しき皇太子様である。

ずばつと振った上に好意も湧かない彼に頼るのは、利用するよう
で気が引けなくもないが、この時くらい空気を読んでみせよ！と視
線を送つてみた。

しかし彼は遠い目をしていて、私の視線になど全く気付きもしな
い。
優良物件の癖して肝心なところで使えないなあ、と私は独りごち
た。

次に、素早く周囲に目を走らせ、家族の姿を捜した。
先に発見したのは両親である。

彼等は姉に迫る妹と、妹に迫られ周囲に助けを求める姉の図を、
微笑ましそうに眺めていた。

何故こういうときに限つて暢気な顔をしていられるのか、後で問
い詰めてやる。

残るは兄だ。

と、思つたのだが、結局最後まで兄は見つからなかつた。
後で聞いたことだが、兄と某ご令嬢は、この見世物に早々に飽き、
寧ろ混乱に乗じて、と庭に出て逢引していらっしゃい。
我が兄ながら薄情なものである。

家族も頼りにならないことを再確認した私は、改めてカノンと目
を合わせた。

彼女の瞳から炎が消えることはなく、寧ろ時間が経つにつれ強さ
を増している気がする。

その炎を見つめていると、じじ数日間の可愛い妹の記憶が走馬灯
のようにならぶように脳裏を駆け巡つた。

姉に婚約者からのラブレターを勝手に読まれ、爆笑された可愛い

妹。

姉にズイーガル亭の高級菓子をいつの間にか全部食べられていた
可愛い妹。

光り物が好きな姉に婚約指輪を見せてほしいとねだられ、うっか
り破壊され激怒する可愛い妹。

そういうたゞ々の可愛い妹を思い出した私は、いつ結論を出した。
こりやあ観念して復讐を受け入れたほうが良い、と。
でなければ、そろそろカノンの瞳に殺意が宿りそつである。
命あつての物种。私は評判よりも命を選ぶ。

決意した私は、もう一度改めて、今度はゆっくりと周囲を見回す。
さあさあ言つぞー今言つぞー、という雰囲気を多分に含ませて。
そうしている内に、私の想い人である某伯爵家長男が目に入った。
彼の隣りには、先程まで共に踊つていたどぞやのご令嬢。

勝ち目はないだろうなあ、ということは何となくわかつていた。
しかしあまり深く考へてはいけない。でないと勢いが失われ、結
局言えなくなつてしまつ。

私は彼を見据えると、掠れた声で彼の名前を宣言した。そして叫

ぶ。

「ずっと好きでした！」

叫んだ後は、もう彼の顔を見るどころではなかつた。

再度言うが、私は恋愛に積極的なタイプではない。告白だつて、
今まで一度だつてしたことがない。

そんな私が公衆の面前で、およそ勝ち目のない告白を叫んだので
ある。

そこまでして妹の殺人罪を止める私つて、素晴らしい姉だわ。

観客は一瞬どよめいたが、すぐに大人しくなった。

次なる見世物は私に想いをぶつけられた彼である。とてもこの状態で顔を見せることは躊躇われたので、私はずっと俯いていた。

しばらく沈黙が続いていたので、彼も呆然としていたのだろう。やがて少し締まりのない、しかし落ち着いた声がホールに響いた。

「う、ごめんなさい……。僕にも好きな人がいて……」

その後歓声が上がったのは、彼が見つめた先が隣のご令嬢で、ご令嬢はぽつと顔を赤らめ、二人の間にうつとりとした雰囲気が流れたかららしい。

ある程度予想はしていつつもショックに打ちのめされた私にとっては、全く関知していなかつた出来事である。

かくして私の評判は社交界全体に広まることとなる。

王子を振つて、伯爵家長男に振られたオルカ。

小賢しいユーディス家の、馬鹿な異端種オルカ。

あのユーディス家の、あのオルカ。

そんな評判があつたからか、もしくはなくとも同じだつたかもしれないが、私に近寄りうとする男はあの一件以後絶えた。

驚くことなれ、こんな私にも昔は寄つて来た男がいたのである。しかし、こなごな話題のときに思い出されるのは双子の妹の言葉である。

「まともな男はあなたには近付かない」

ではどんな男が近付くのか。答えは明白である。
まともでない男が近付くのである。

資産目当てだつたり、侯爵家と繋がりを持ちたい人間だつたり、まあそんな碌でもない男が寄つて来る」ことは少なくなつた。

それが絶えたのだから、積極的に考えればあの夜会での告白も無駄ではなかつた。

しかし消極的に考えれば、あの一件は、まともな男をさらに寄せ付けなくする、いわば駄目押しのようなものであつた。

男の気配を全く感じさせなくなつた娘を最も心配していたのは、父であつた。

新たな恋を探す気力すら見受けられない私に、父は繰り返し皇太子様を薦めてきた。

しかし私は断固として拒否した。

あのようなやたらと爽やかできりきらとした殿方には、純粹無垢でうふふあははは淑女が似合うものである。

私のような脳内に枯れた花畠を持つ人間は、近付いてはいけない人種な気がする。

彼と一緒にいたとして、噛み合つた会話を想像できない。

皇太子様のほうも、あの一件以来私に干渉してくることはなくなつた。

夜会などで会つたとしても、彼は私に困つたような笑みを向けるだけである。

きつと人が良過ぎるのだろう。無視ができないようだ。

好意なのか、遊びなのか、挨拶なのか、策略なのか、気まぐれなのか。はたまた発狂か。

あの日彼が何故私をダンスに誘つたのかは、未だにわからない。

私的には、それは永遠にわからないこととして、もう水に流したかった。

それが皇太子様の誘いを断つたことへの、せめてもの謝意だと思つたのである。

だからもう皇太子云々の話は持ち出さないでほしい、と私は父に断言した。

すると父は群青色の目を細めて、そつか、と承諾してくれた。

そしてそんな会話がなされた二日後のことである。

「オルカ。おまえは王宮に行儀見習いに行くべきだよ」

まず私のしたことといえば、指の関節を丹念に鳴らすことであつた。

「はいはい怒らない。それやると手が男らしくなっちゃうやつで、皇太子様の話は持ち出さないでほしいと、この前あれ程言つたではないですか」

「俺は皇太子様の『』の字も出してないじゃないか

「同じことです」

「人聞きが悪いな。一体おまえは何を想像しているんだ？」

「お父様が想像していることです。つまり、あわよくば皇太子様と私が懇ろになつてほしい、と思つているのでは？」

「違つ違つ

父は大仰な身振りで否定してみせたが、私の疑いの眼差しは全く衰えない。

「では何故急にそんなことを言つのですか」

問い合わせると、父はここにこと表面的な笑みを貼り付けた。

「アリシアって、覚えてるか？」

「ベアティード男爵家の？」

「そうそう」

アリシア・ベアティード。

その名前を聞いて思い出すのは、桜色の長い髪を持つ、砂糖菓子のような少女だ。

ベアティード家とコーディス家は古くから交流があるらしく、私も父や母に連れられて何度か赴いたことがある。

アリシアはそこ第三子である。

年が私と同じだったので、私はベアティード家に行くたびに彼女と遊んだりお喋りしたりしていた。

花が大好きな正に女の子らしい女の子であり、色々な花の名前を教えてくれたつ。そういうつものに清々しく興味のない私は、右から左だつたけれども。

「アリシアが何か？」

「彼女はツェーヴラーグ城の侍女になつたそつだ」

「へえ！？」

「このときばかりは、私は素直に驚かずにはいられなかつた。

生粧のお嬢様であり生粧の淑女であり、ゆくゆくは生粧の貴婦人になるであろうと確信できるアリシアである。

その彼女と、「侍女」という職業はあまりにもかけ離れている。

「彼女は、行儀見習いでも何でもなく、侍女として正式に働いているそつだよ」

「ベアティード家つてそんなに困窮していたのですか？」

確かに男爵家は貴族の中で一番低い爵位だけれども、彼等の屋敷や生活を見るに、娘を働きに出すことなど想像し難い。

或いは、「ぐぐぐ最近、運営が難しくなってきたのだろうか。

しかし父はかぶりを振つた。

「そうじゃない。アリシア嬢は自發的に侍女になつたんだよ。勿論

家族は大反対だつたそうだけどな

「自發的に？何でまた？」

父は待つてました、と言わんばかりに嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「お城の文官さんと恋仲になつたんだとよ。ずっと傍にいたいがために、城勤めを希望したそつだ。泣かせるねえ」

父の言動に、俄かに暗雲が垂れ込めてきた。

「その話を昨日ベアティード男爵に聞いて、俺は閃いた」「お父様はもっと生産的なことを考へるべきだと思います」「まだ何も言つてないだろ。それにこれは大分生産的な話だ。いいか？某一件があつてから、おまえの社交界での評判は地に落ちた。これで貴族同士の結婚はほぼ絶望的になつたわけだ。このことについて異論はないな？ん？」

私は不承不承頷いた。

某一件から二年近く経とうとしているのに、男が誰も寄つて来ない、という事実がこれを裏付けているし、私にも積極的に動く気力はないのだ。

「しかし父親としてはおまえをきちんと幸せにしてくれる人間が現れてほしい。しかし貴族は受け入れてくれない。じゃあどうすれば良いのかというと、つまり選り好みしなければいいわけだ。幸いこの国では貴族と平民の結婚が許されている。おまえは平民との結婚は嫌か？」

「そんなことはありません。しかし誰でもいいといつわけでもありません」

「それはそつだろつ。おまえ程理想が高い娘も珍しいしな

私は自分の耳を疑つた。

「『理想が高い』？私が？」

父は鷹揚に頷く。

「おまえが今まで好きになつた奴なんて、精々ポルテツフェル伯爵家の長男坊くらいだる。拳旬の果てに『一』のつく優良物件を断つたんだぞ？これを理想が高いと言わずして何と言つ？

「だつてポルさんくらいしか私の周りにまともな男がいなかつたんですもの」

「そうしてやつと現れたまともな男が皇太子様だつたんじゃないか」

「あのときはポルさんが好きでしたし」

「じゃあ今はどうなんだ。流石にまだ長男坊に未練たらたらつてわけでもないだろ」

「それはそうですが。でも皇太子様と私つて明らか合わないと思うのです」

「ほら。それが理想が高いってことだろ」

父は満足そうに言い放ち、私はむうと唸つた。

そう言わると反論もできない。

「オルカの理想は、立場とか収入とか人望が関係してないんだと思うよ。であれば平民からお相手探しても全然オッケーなはず。そうしておまえが家庭持つて幸せになれば、俺も安心で幸せ。丸く収まる」

どうして結婚しただけで娘の幸せが確信できるのかがわからないが、それよりも話の前後関係がよくわからない。

「お父様は結局何が言いたいのです？」

私が疲れた目を父に向けると、父はうん、と頷いた。

「だから、手始めに王宮で出会い探しをすればいいんじゃないかなって思つて。あそこで働いてる平民なら、まだ貴族に近い人種だろ。公務員なわけだから収入も安定してるし」

「出会い探しのために行儀見習いに行けと」

「ううう。目指せアリシアーーー号」

「お父様は行儀見習いと王家を舐めてますよね」

「ははははは」

否定しなかつたところを見ると、事実舐めてるよつだ。

それはともかくとして、田舎者とく出会いを探しつつ王宮で働く、なんていう器用な技は私にはできそうもない。

加えて私には、無理に探し出した恋愛や早まつた恋愛というものは得てして上手くいかない、という先入観を抱いている。

そつちの方向で頑張っていた友人を観察するに、その考えはあながち間違つてもいないと思う。

出会いは探すものではなく、出会いのほうからやつて来るものであるーと、乙女思考な私は信じたい。

よつて却下であるそんなもの。即却下。

「お父様の意見は却下します」

「といつおまえの意見は却下します」

しばし睨み合つ父と娘。

流石私の父親である。一筋縄ではいかない。

なんて思つていたら、父はにまつと口角を上げた。

カノンのときと同じく、これは大変悪い兆候である。

「まあまあ女心してくれ。面倒くさがり屋なおまえのために、全ての手続きは」の俺が本日やつておきましたから

「なあつー?」

「一応イーテイル陛下にも直接頼んでおいた。『娘をお願いします』つて

私は唇を噛み締めた。

本当に娘の幸せを願つのであれば、娘の意見に耳を貸してほしい。

「いいですっほかしたりしたりどうなるか、それくらいはおまえでもわかるよなあ?」

ぐうの音も出ない。

所詮父は生粋のコードィス家の人間であり、私は異端者だったといつところか。

いつもして私は王領にて巡回へとなつたのである。

私が立ち入り禁止区域侵入という失態を犯してから一日が過ぎた。

三日目の二十時半頃、本日の仕事を終え、食事をとりシャワーも浴びた私は、小さな自室で骨を休めていた。

じゃじゃ馬ではあるものの、私も貴族のお嬢様として育っている。侍女の仕事は予想以上に体に応えるものだ。

ひと月程前、私が行儀見習いに来た一日目などは、自室に着いた途端シャワーも浴びず、気絶するようて眠りに落ちたことを覚えてい。

侍女って大変だなあと思いつつ、存外にもこの生活は私になんかか合っているようであった。

退屈している余裕がないし、消極的なことを考える余裕がないのだ。

本質的に急け者な私は、考える暇もないくらいに何かに打ち込む、ということを今までしてこなかった。

一日を終えた達成感と共にくる疲労というものがとても爽やかなものであることを、この城に来て初めて知ったのである。

真面目に出会い探しをしているわけではないが、平民として暮らすというのは想像以上に良さそうだ。

私は一度寝返りを打つたら転げ落ちるであらう大きさ（身をもつて検証済み）のベッドに寝転がり、ぼんやりと天井の模様を眺めていた。

季節は秋の初めである。少し暑さが残っているので、寝間着用の

薄いワンピース一枚で丁度良い。

外で鳴く虫達の声が室内に響く分、心の中はしんと静かであった。

あの失態に關しては、結局何のお叱りも受けないままでいる。確かに今まで私が城内でやらかしてきたことと比べれば、大したことではなかつたとも思える。

しかしあのときのミルキアさんの狼狽ぶりは尋常ではなかつた。加えて、あのときのミルキアさんのしおらしい態度も尋常ではなかつた。

コーディス家の一族に囲まれて育つた私は、危機的状況を予測する能力値がかなり高いと自負している。だからといってそれを避けられるのかというと、それはまた別の話になつてくるが。

その危機的状況予測レーダーが、最近「これはやばいこれはやばいこれはやばい」と、やたらと警報を発令している気がする。

追い討ちとなるのは、あの一件があつた後、ミルキアさんの出没率が格段に減つたことである。

彼女は私の教育係のよつなものなので、今まで一日の内に顔を全く合わせないということは皆無だつた。むしろこちらは会いたくないのにやたらと会わざるを得ない状況であつた。

それがあの一件のあつた翌日、彼女の顔を一度も見なかつたのである。

その日、午後になつても姿を見せぬミルキアさんに不安を覚えた私は、閃いた。

そういえば今日は一度も田立つた失敗をしていなかつた、と。

教育係がミルキアさんな以上、説教係もミルキアさんである。

私が何かやらかしたときには、彼女は必ずといって良い程現れた。

そこで私は敢えて問題を起こすことにした。

最早そのときの私にとっては、ミルキアさんの出現よりもミルキアさんの消失のほうが恐ろしいことだったのだ。

手っ取り早く失敗を犯す方法は何かしらと考えた結果、昨日と同じ掃除用具を置き忘れることにした。

これなら偶然を装うための特殊な技術をあまり必要としないし、同じ失敗を翌日に繰り返すのである。あのミルキアさんなら、「何て学習能力のない！」と憤ること必至である。

早速実行に移すため、まずはそれとなく同僚に本日の会議の有無を聞いてみた。

すると今日は十五時から、王様と高位貴族で話し合ひための会議があるらしい。

時間帯も会議の重要度も申し分ないものである。これぞ渡りに舟。

そうして私は計画を実行に移した。

実は私が会議室を掃除しようとしたとき、同僚に「そこは午前中に終わった」と言われたのであるが、「大切な会議だし念には念を入れないと！」と何とかごり押し、無事任務を遂行させた。

しかしその日、ついに彼女が現れるることはなかつた。

せめてもの救いだつたのは、夕食のとき、別館の侍女長が、ミルキアさんからの伝言を預かってくれたことである。

彼女が言つにせば、ミルキアさんは本日他の仕事で忙しく、本館侍女長の仕事も彼女が兼任していたとのことだった。

渡されたメモには、走り書きながら美しい字で、
『首を洗つて待つていなさい』
と書いてあった。

私は心底安心した。

最悪、私の責任を取つてミルキアさん処刑もしくは投獄という事態になつていたのでは、とまで考えていたのである。我ながら考え過ぎであるが、無事が確認できて何よりだ。

一日には一度だけ城内を歩いているときにミルキアさんとすれ違つたし、今日は仕事終わりのほほミルキアさんが顔を出し、一昨日のことについてひつひつと絞られた。

しかし私の知らないことじりで変事が起きてこるのは確かなようだ。

一日続けて見たミルキアさんの顔色は、どちらも浮いたものではない。

説教中の顔なんてそりや浮いたものではなかるひつと思つかかもしれないが、いつものミルキアさんであれば、説教中程生き生きしているものである。本当に。

私は彼女の生きがいに貢献しているのだなあと、常々思つていたわけだ。

しかし今日の説教は、言葉だけすらすらして、心はここにあらずという様子であった。

何事かに巻き込まれる前に、行儀見習いを中退すべきだろうか。

そんなことを悶々と考へている最中、ノックの音が響いた。
その後に続いたのは、鈴のように華やかで澄み切った声。

「オルカ、いる？私。アリシアよ」

扉の向こうで呼びかけるは、私をこの城に導いたとも言える女だつた。

疲れたしこれ以上面倒事は嫌だなあと思つたが、友達を無碍に扱うわけにもいかない。

反動を勢いにして起き上つた私は、のろのろと扉に向かう。鍵を開けただけで、アリシアは勝手に入つて来た。

こんなに気の強い娘ではなかつたと思うのだが。

彼女は未だ侍女の制服のままである。

後ろ手に扉を閉めると、切羽詰まつたような顔をして私に言つた。

「こんな時間にごめんなさい。あなたにどうしても頼みたいことがあるの」

「はあ。頼み事の内容にもよるけれど」

アリシアは本来おつとりのんびりとした性格である故に、この雰囲気的に、何か只ならぬことが起きているであらうことは窺える。

勿論可能ならば回避したい。

「あのね……オルカは友達だつて信じてるから、言えるお願ひなの……。今から話すことには、誰にも言つてはいけないことも含まれているのだけれど、お願ひ、できる？」

「えーと。だから引き受けるかどうかは頼み事の内容によるわ。でも言つてはいけないとややは内緒にするわ

アリシアは私はつきりしない受け答えに不安げになつたが、どうしても慎重になつてしまふのは仕方がない。

私の危機的状況予測レーダーがつるさいのだから。

「東館の近くに、立ち入り禁止区域があるのは知つていらして?」「『めんなさいアリシア私明日早番なのだから今すぐにでも寝ないと』

「ちよ、押さないでよ、話を聞いてよ、つていつかあなた早番じやないでしょ!…わたくし、流石に早番の方に頼むのは酷だと思つて、当番表きちんと確かめてきたのだから!」

ぐ、あのアリシアが逃げ道を塞ぐだなどと「つ頭の良い戦法でくるとは。

「とつあえず、話だけでも聞いてくださいな」

私は渋々頷いた。

「それでね。王家の方々は、毎月一晩だけ、そこの奥にある離れの館で食事会をするの」

「へー」

「わたくしはそのときの付き人兼給仕人としてお供する役目を申し付けられているのだけれど、それが今日なのね」

「ほー」

「実はわたくしそのことすっかり忘れて……今夜絶対外せない予定を入れてしまったのよ」

「はー」

「オルカ、お願ひ!今夜の仕事変わってくれない!?」

「ふーん

「ほんと!?ありがとつオルカ!あなたは眞実の友達だわ!」「え!?」

しまつた。兎に角感情移入とか同情とかしないよう、適当に聞き流していたら、引き受けたような誤解を与えてしまった。

「いやいやいや、えーと、そうじゃないの。今ちょっとぼーっとしてて。あの、ごめんなさいね。やっぱり私じゃなくて他の人に頼んだほうが良いと思うわ」

「だつて……他の友達は明日早番なのよ」

「早番じゃない人なんて腐る程いるでしょうに……」

私がそんなことをぼやくと、何故かアリシアは茶色の瞳に涙を一杯溜めた。

え？ 私何か地雷踏んだ？

「いないわ……そんな人」

「いやいやいるでしょ。何なら使用人の館を端から回つて……」「こんなこと頼める人はあなたを入れて三人しかいないのよ……。その内一人は明日の早番。もう一人は私と同じく付き人と給仕の仕事を頼まれているし……。残るはあなただけ。……私、友達がいないの」

私は絶句する。

どうやら非常に纖細な領域に足を踏み入れてしまつたらしい。
早く抜け出したい。

いやしかし優しくて気だての良いアリシアに友達がいないなんて、考え難いことだが。

「わたくしの恋人のこと、お父様から聞いたんでしょ？」
「ええ、まあ。お城の文官だつてことしか知らないけれど」「彼、とっても魅力的な方でね？ 女の人から、凄く、人気があるの。それが、男爵家のわたくしと付き合うことになつたから、わたくし

今、お城の女性の方々からとても疎まれているのよ。金と立場で彼を唆したって」

「そ、そなんだ……。でも、何も全員から嫉妬されてる、ってわけじゃないでしょ？」「

「それはそうだけれど……。でも、やっぱり駄目だと思つ。私のことを良く思つていらない人達の中には、あからさまに嫌がらせをしてくる方もいる。そういうことがあってから、以前親しかつた友達も随分離れていつたもの。多分、自分達も同じように扱われるのではないかと恐れているんじゃないかしら」

これは典型的な虐めである。

学生時代は頻繁に目にしていたものだし、私も経験したことはあつたが、王宮でも同レベルとは呆れたものだ。

「お願いオルカ。今夜の仕事、変わつてくださいな」

ここで折れない程の鬼の心が欲しい、と心の中で涙ぐみながら、私は結局引き受けてしまったのだった。

因みに彼女の外せない予定が何なのか受けた後で聞くと、彼との逢引だと言われた。
くたばれと思った。

集合時間が二十一時と言われ、私は大変慌ただしく立ち入り禁止区域のほうに向かった。

シャワーも浴びて化粧も落として制服も着替えた後だったのである。

しかもアリシアとの主な会話が終わつたのが二十一時ぴったりだった。

先にタイムリミットを言つてほしかつたと訴えたら、「あらあらごめんなさいまし」と、いつこうときだけおつとりをかまされた。素でそういう性格なのか、もしくはコーディス家のような才能を秘めているのか、つい疑つてしまつ。

再び髪を整え、気休めながらも適当に化粧をし、制服に着替えた後だったので、多分十五分くらい遅刻しているだらう。

そうして息せき切つて東館を裏口から出かけたぎりぎりのところで、私はコーラーンした。
集合場所である立ち入り禁止区域の門のところに、とても不吉な物体を発見した気がする。

今度は恐る恐る裏口から顔だけ覗かせ、暗がりの中に目を凝らしてみた。

門に灯りがぶら下がつてるので、それははつきりと見えた。いる。確かにいる。

乱れや癖の全くないショートカットの金髪に、同じく乱れのない姿勢。その場には彼女その他にあのだるそうな騎士しかいないようだ

あるが、それでも背筋を伸ばし、両手を前に組み、突っ立っているだけなのに気品が溢れ出でてくるような姿。私なんかより彼女のほうが貴族という言葉が似合いそうである。

身につけているのは白のメイドキヤツプに、黒地に白の膝丈エプロンドレス、そして黒のタイツに茶色の革靴。

つまりまあ、標準装備のミルキアさんである。何てこいつだ。

例の騎士と並んで佇んでいるものの、二人の間に会話はなさそうだ。

状況からいって、アリシアの言っていたもう一人の付き人兼給仕係が彼女なのだろうか。

そうであつてほしくないと思つが、そうでなかつたとしても叱られそうである。

これ以上ぐずぐずしていても時間超過を長くするばかりなので、私は観念して外に出た。

やはり秋の夜ということで、中にいるより幾分涼しい。

ミルキアさんと隣の騎士は、一人して不審そうな目で私を見ると、お互に視線を合わせた。

私は内心びくびくしながら、とりあえず一人に挨拶する。

「御機嫌よう騎士様、御機嫌ようミルキアさん

「どーも」

「こんばんは、オルカ。わたくしに何か御用があつて?」

「いえいえ。先程友人に頼まれまして、この奥に用があるのです」

騎士は刀を鋭く細め、ミルキアさんは眉を顰めた。

「ついでにこの仕事は極秘らしいが、多分この一人は知っているだろう。

そう思い、私は正直にぶつちやけた。

「本日の立ち入り禁止区域の中の館にて、食事会がなされるのでしょうか？その付き人兼給仕を仰せつかつて居るアリシアが、急用で来れないといふことで、私が代理をさせていただくことになりますた」

ミルキアさんは無表情に私を見つめているが、恐らくこれは驚いているのだと思つ。

隣の騎士が、固まつたミルキアさんとビーにでもなれな態度の私を見比べて、「あーあ」と呻いた。

彼は額を手で押さえると悩ましげに仰つた。

「おまえ、空氣読め」

「なあつ……」

異端種とか馬鹿とか阿保とか色々言われ続けてきた私なので、悪口にはある程度耐性があつたが、この言葉はかなり心外だった。

私ほど空氣が食糧じやないかと思つて、空氣を読みまくつてる人間は少ない思つ。

空氣を読んだ上でやむなくそれをぶつ壊すとか、空氣を読んだ上で敢えてそれをぶつ壊すとかは間々あるが。

「私のどこが空氣を読んでないというのです。大切な親友の逢引のため、危機的状況予測レーダーを無視して駆けつけてきたというの

「」

「……アリシアはそんな理由のために代理を頼んだのですか」

私は、今回ばかりは「あ、しまったやつちまた」とは思わない。つまりばらしたのはわざとである。道連れにしてやる。

本来役目を果たすべきがアリシアであることを知っているとなると、やはり今回の仕事仲間はミルキアさんで間違いなさそうだ。まあ。

「つーか危機的状況予測レーダーって何だそれ……」

「言つたでしょ、シユルツ。オルカは少し螺子が足りない娘なのです」

どうやら私のいないとこりで不愉快な会話が展開されていた模様である。

とそのとき、東館の脇から角灯を持った騎士が現れた。それに続いて数人がこちらに歩いて来る。

「王家の方がいらしたようですね。給仕については後で教えます。説教も後にしましょう」

嫌な台詞まで残されたが、私はそれどころではなかつた。咄嗟にミルキアさんの陰に身を潜める。

「……何ですか急に。あなたは曲りなりにも侯爵家の娘なのだから、今更王族の方々に恐れを成した、なんてことではないでしょ?」「いや、まあ、お恥ずかしながらその通りです」

よくよく考えてみれば王家、である。

つまり、皇太子がいる。

今まで出没フラグが立つようなところには努めて行かなかつたことにより、何とか接触を回避してきたといふのに、これで全てが水の泡になつた。このときに限つてすつかり失念していたのである。しかし今から短時間でミルキアさんに私の黒歴史をぶちまけるわけにもいかない。

「今更何を言つてゐるのですか、みつともない。ほら、正々堂々としなさい。あなたは貴族の令嬢でしょ?」

「こんなときだけ身分を持ち出してきて、理不尽である。しかしされるのが時間の問題であることはわかつたので、仕方なく私は彼女の隣りに並んだ。

王家の方々が近付いて来たところで、私達は頭を垂れる。顔を上げたところで目が合つたのが、お約束にも皇太子様であつた。

彼は水色の目を丸くして言つた。

「お久しぶりですね、オルカ嬢。お元気そう何より

その場にいた全員の視線が一気に私に集中する。これがあるから、皇太子様に絡まるのはあまり気持ちの良いものではない。

「ええ、お陰様で」

「あなたが行儀見習いでこちらへ来ているところは伺つておりましたが、まさかこんなところでお会いするとは思つてもみませんでした」

「ええ、全くです」

ついでに言つと全くお会いしたことないかもしれませんでした。

私達の会話を聞いて、周りから「ほつ」、「あら」と呟きが漏れ
た。

王様と王妃様である。

王妃様はにっこりと微笑んだようだ。
しかし暗闇の中なので、その笑みがどういった意味のものなのか
量りかねる。

「あなたがオルカ嬢なのですね。お噂はかねがね聞いていましてよ
「それは大変恐縮です」

なるべく平然と受け答えしようと努力はしているが、本心では土
下座して平謝りである。

息子さんを振つてすいませんでした。歴史に泥を塗つてすいませ
んでした。

王様に至つては、
「これは楽しい宴になりそうだ」
などとのたまつてゐる。

何だか私の謝罪大会となりそつた予感がするぞ、と私は身震いし
た。

我々は列を作つて立ち入り禁止区域に足を踏み入れた。

先頭をるのは角灯を持つ騎士で、その後に王様、王妃様、皇太子様、私、ミルキアさんと続く。最後尾はやはり角灯を手に持つたもう一人の騎士である。

私の並び順は、ミルキアさんが気を利かせて自分より前にしてくれたのであるが、こちらとしては全く余計なお世話である。お陰で道中、皇太子様の当たり障りのない会話に付き合わなくてはいけなくなつた。

その会話で手に入れた情報であるが、この次の門まで続く細い小道の領域は「ハイネの畑」と呼ばれているらしい。

ハイネというのは確か庭師の名前だったから、この畑もハイネさんとやらが管理しているのだろう。

畑には一切灯りがないので、前後の角灯持参騎士が頼りとなる。勿論列後部の私は前方の灯りの恩恵をいただけないので、皇太子様の背中を見つめて歩くこととなつた。

しかし皇太子様は全体的に藍色の衣服を身に付けていらっしゃるため、夜間見えにくい。白とか黄色とかの服にすれば良いと思つ。私のために。

一番目の黒いアーチのところに立つていたのは、今夜はあの妙な口調の女ではなく、普通の男騎士であった。

彼は門の脇に立ち、ただ無言で真つ直ぐ前を見つめている。

本来門番とはこういうものである。

そなたにスタンダードオブナイトの称号を与えよつた、などと考えながら、私は門をくぐつた。

油断していると危機感やら不安感やらが押し寄せてくるため、くだらないことでも考えていないと落ち着かないのだ。

流石に庭園内にはぼつぼつと外灯が置いてあり、それが花々を照らし出している。

本来は幻想的とも言える光景なのだろう。しかし時たま吹き抜けの涼しい秋風のせいか、はたまた状況が状況だからか私には不気味に見えた。

一向はそのまま現在の道を真っ直ぐ行くのではなく、北に折れた。どうやらアリシアの言っていた離れの館とは、三日前私がここに来たときにも目にした、あの建物であるらしい。館の外郭は暗くてここからではわかりづらいたが、半分程の窓に灯りが点いているのははつきりと見えた。

静かで涼しい夜の外で、館内の橙色の光を見るといつのは、何だかとてもほつとさせるものがある。

「あそこが今夜の我々のメインホールです」

木々の向こうの建物を指さして、皇太子様が言つた。

私は頷く。

「とても立派ですね。私の実家くらいありますもの」
「北東の館と呼ばれています。あちらで夕食をとる、といつのは聞いておられますね」

「ええ。王家の食事会で給仕ができるだなんて、光栄です」「よろしければあなたも食事を一緒にされませんか？」

私は慌てて首を横に振つた。

そんなことになつたら、私に会話の先の向く確率が高くなつてしまつ。

「お誘いは大変嬉しいのですが、わたくし先程夕食をとつたばかりですの」

「それは残念です。ですが、そうですね。私達の食事会は時間的にかなり遅いので、無理もありません」

「王族の方々は、いつもこのような時間にお召し上がりになるのですか？」

「いえ、そんなことはありません。この月一の食事会はなるべく日立たずに行いたいので、この時間帯にしてあります。気休めのようなものですが」

「そうですか、と相槌を打つて、私はそれ以上は何も聞かなかつた。知ると自分の立場が不利になる予感がしたので、このことに関しては無関心を貫くつもりでいた。

「ここから緩やかな階段になりますので、足元にお気をつけください」

「お気遣い感謝いたします」

石段を数段上り、黒い木々の間を抜けると薔薇の薔を這わせたアーチが見えてきて、そこにも一人騎士がいる。

アーチをくぐつて、ようやく北東の館に着いたようだつた。

玄関前には小さな広場があり、中心には今は動いていないが噴水もある。城と同じ、クリーム色の壁にオレンジ色の屋根を持つ横長の建築物であつた。

一階建てのその館は、奥行きまでは見えないので定かではないが、少なくとも15～20程は部屋数がありそうだ。

大きな建物で灯りもかなり点いているといつに、驚く程にひつそりしている。

並んだ格子窓から確認できた人影は、今のところ侍女と思わしき女性一人のみである。

私がぼーっと北東の館を見上げていると、後ろからミルキアさんに軽く小突かれた。

「前を見なさい」

言われた通りにすると、王家一行は既に館の中に入つて行っている。

私は歩調を早めてその後を追いかけた。

エントランスホールは四角く吹き抜けになつており、天井には大きなシャンデリアがつり下がつていた。左右には通路、正面には階段がある。その階段も途中で左右に別れ、二階のそれぞれの通路に繋がつていくようであった。磨きこまれた大理石の床の上に、臘脂色の絨毯が広がっている。

盲目の男の出で立ちや立ち入り禁止区域内の建物ということで、私は北東の館は研究施設か何かでは、と踏んでいたのだが、見たかんじではただの邸宅である。

私達は仕事で来ているので館内では王家の方々と別行動かと思つ

たら、そういうわけでもないらしい。

特に何も言われないので私は相変わらず皇太子様の背中を追いかけ、ミルキアさんも無言で私の後ろを付いて来ている。

ここまで来ても誰にも会わない。

ただ、どこから仄かに食べ物の良い香りが漂ってきた。ついで、何かを切つたり炒めたりする、料理をしているであろう音も小さく聞こえる。

「お待ちしておりました」

ふいに静かな男声がホール内に響いた。

左脇の廊下の入り口に、いつの間にか瘦身の男が佇んでいた。彼は左手で杖を握り、右手を王族の手前にも関わらずズボンのポケットに入れている。

それは私が三日前にした、盲田の男であった。

彼は恭しく頭を垂れたが、前にも後にも無表情である。

反して王様は顔を綻ばせた。

「久しぶりだな、シゼル。元気であつたか？」

「お陰様で何不自由なく生かされております。食事の準備が整つております故、どうぞ奥へ」

男の表情は読めないため何を思つているのかわからないが、その口調は皮肉げで無愛想だ。

王様相手にこんな態度を取るだなんて一体何者だろう。どんなに地位が高かったとしてもこれはない。よっぽど親しい間柄なのかもしないが、少なくとも男のほうからは好意を感じられない。

しかし当の国王陛下は特に気にした様子もなく、言われた通りに奥へ進んだ。

王妃様も男に挨拶してから、王様の後に続く。

皇太子様の番になると、彼は何を思ったのか私の手を引いて隣に立たせた。

「シゼル、彼女は侯爵家のオルカ・ユーディス嬢。最近行儀見習いで侍女として働いてくれている。オルカ嬢、彼はシゼル。この館の主人だ」

「は、初めまして」

「これはこれは。よくいらっしゃいました。この王宮の掃き溜めであなたのような『令嬢を働かせるのは心苦しい』ことですが、大変光栄な機会でもあります。どうぞ今宵はよろしくお願ひいたします」

すらすらと世辞を並べる口とは相反して、シゼル様とやらの表情は無関心で冷たい。

私のことを覚えていないのか覚えていないふりかはわからないが、酷く奇妙であった。

「ええ。じつうじよろしくお願ひいたします」

そう答えると皇太子様は満足したようで、先に進んだ。

私も「では」と挨拶し、追いかけよつと思つたところで、後ろから服を引っ張られた。

「わたくし達は一先ず待機です」

「あ、はい……」

私はす「」す」と引き下がる。

同時に、時間がないため仕方がなかつたとはいえ、これから業務をそつなく果たしていけるのか心配になつた。

改めて考えてみれば、まだまだ見習いの私は、王族の方の身の回りのお世話なんぞしたことがないのである。

その初仕事がこんな飛び入り代理人で、上手くいくはずがない。もしここで失敗したら確実に父に情報がいくな、と思い、私は顔を青くした。

ふと気付くと、いつの間にかシゼル様が私の前に立つていた。もうとっくにいなくなつたものと想えていたので、少なからず驚く。

彼はポケットから右手を抜き取ると、私に差し出してきた。その掌と、細長い指には、絆創膏が幾つも貼られている。一瞬エスコートしようとしているのかと思ったら、彼はその手をすぐに取り上げた。

「約束は果たした」

静かに呴いた彼の顔が、薄く笑つた気がした。

それだけの動作を残して、彼も廊下に入つて食堂と思われる部屋に姿を消す。

どうやら私のことは完全にばれていたらしかつた。

シゼル様が消えてから少しも経たない内に、上階から小刻みに足音が聞こえてきた。

つられるように見上げれば、一人の侍女が階段を降りてくるところであった。

彼女は一度立ち止まつてこちらを見ると、「うひゃあっ」と奇天烈な声を上げた。

「シゼル様の彼女じゃーん！」

ミルキアさんの顔がぎつと私に向いたのがわかる。
私は冷や汗をかきつつ、首を傾げた。

身に覚えのないことをほざいたその侍女は、メイドキャップを付けておらず、薄茶の髪を頂点でお団子に結っている。
グラマーな程度にふくよかで、灰色の瞳を中心に据えた大きな三白眼が特徴的だった。

片耳に三連にして付けられた銀の輪型ピアスはともかくとして、格子柄のタイツは明らかにご法度だろう。

学生時代、不良ぶつた人種やそのお仲間が、規定の学生服と私服を混ぜて着ていたのを思い出した。

彼女は階段を小走りで駆け降りると、私の目と鼻の先で止まった。

「こんばんは！あたしが誰だかわかるかなっ？」

城内でこんなくだけた話し方をする人物は、三日前見た彼女が初めてである。

であるからには。

「……門番さんですか？」

「せいいかーい！覚えてくれて、嬉しいなあつ。シゼル様の彼女だから、たゞくさん気に入られとかないとね！」

ミルキアさんが聞き捨てならない言葉と判断したのだろう、隣でひとつ咳払いをした。

「失礼ですが、その『彼女』というのは恋人という意味にとつてもよろしいのでしょうか？」

「ちつ、違いますよ！きっと妙な誤解です！」

私は慌てて訂正を入れる。

「えー、恋人でしょー？シゼル様が知らない女の子連れて歩くなんて初めてだしー。あつ、あとあたし、一人が手を握り合つてるの見ちゃつたんだつ！きやつ！」

「握り合つただなんて人聞きの悪い！あれば手に刺さつた棘を取つて差し上げただけで……！」

「一先ず静かにして頂戴」

ややドスの混じつた声で言われ、私は口を噤んだが、目の前の侍女は全く気にしていないようだった。

「ねえねえ、そんなことより、あたしニイツテゆーの一君は？」

「あ、私は……」

「彼女はオルカ・コーディス。本日共に給仕を行うことになつています。ですが急に代理で入ることになつたので、わたくしはこれら彼女に仕事を教えなければなりません。王家の方達はもうとつく

に席に着いています。あなたは先に行つて給仕をなさい。わたくし達も後で手伝いに行きます」

「はーい、了解でーす」

諫めて黙らせるのは無理だと判断したのだろう。ミルキアさんは口を挟む余裕もなく言葉を並べ、さつと二イを追い払ってしまった。

二イという女は小さことにほんとに氣にしない性質たちで、ミルキアさんはそれをよく見抜いて上手くやり込めている模様である。

どんな問題児もミルキアさんの手の上で踊らされる運命なのね、と私は心中で涙を流した。

ミルキアさんは疲れたように溜め息を吐き、私に向き直った。

「それでつまり、あなたは三田前シゼル様にお会いしたのですね」「えっと……」

先程のシゼル様とのやり取りは勿論見られていただろうし、二イの誤解につられて、つい決定的な証言を自ら話してしまった。

今回こそは逃げられなさそうだ。今まで逃げているとは言い難い状況であったが、

「はい……お会いしてました……」

私は呟くように告白した。

ミルキアさんの眉間の皺が濃くなる。

「わたくしは今意地悪なことを聞きました」「え?」

怒っているのかと思つたら、そういうわけでもなさそうだった。
それよりも彼女のやや俯いた顔は、真剣に思いつめているふうである。

「ごめんなさい、オルカ」

「え、え？ それはどういう……」

どういう意味の謝罪ですか？

そう聞こうとしたが、ミルキアさんはきつと顔を上げ、真っ直ぐに私を見つめた。

「給仕の作法は覚えていまして？」

「え、と、多分……はい」

急に話が変わったので一瞬頭がこんがらがったが、恐らく待機の仕方や食事の出し方のことだろう。

教わったのはかなり前だったかもしれないが、私の実家もいわば給仕係の職場であったので、大体はわかる。

「では、簡単に仕事の流れと、この屋敷での注意点を今から教えますね」

そう前置いて、ミルキアさんは話し始めた。

私は相槌を打ちながら聞いていたが、先程の謝罪が気になつて、実質半分も頭に入つてこなかつた。

シードラッグの上流階級の食事は、他国と比べると品数が少ないらしい。

夕食で言つと、まず酒と同時に前菜が出される。その後スープが出され、次いでメインディッシュとパンが出る。最後にデザートだ。この伝統は、建国後何世紀もずっと経済状況の良くない時代が続いたかららしい。勿論種類が少ないだけで、その分ひとつのおメニューの量はしっかりといる。

私が参戦したのは皆が前菜を食べ終えようとしているところだったので、お次はスープである。

見た目通り、この館は人がいない。

給仕はニイと私とミルキアさんの三人である。

盛り付けから始まり、厨房から料理を運ぶのもその内の誰かがやらねばならなかつたらしい。私達が駆け付けたとき、ニイは文字通り汗水垂らして働いていた。勿論食事の前でそんな見苦しい姿を見せるわけにはいかないので、彼女は一生懸命汗をハンカチで拭つていた。

見た目や態度に反して、一応仕事は真面目にやっているらしい。

私達の姿を見ると、ニイは天からの助けとばかりに顔を煌めかせた。

本来初めから一緒に働いているべきところなので、私はやや居心地が悪い。

「良かったー！何かね、今日フェイが時間配分間違えたっぽくて、厨房のほうもかなり忙しいんだよね。あたし主に料理の手伝いしてくるから、後ろろしくねえ」

言い残すと、彼女は汗を撒き散らさんばかりに走り去つて行つた。

ミルキアさんは料理を運び、盛り付けを手伝い、私は給仕そのものに専念する、という役割分担になつた。

早速空になつた前菜の皿を回収すべく、私は食堂に足を踏み入れる。

先程の角灯持参騎士は、食堂扉の表側と内側にそれぞれ一人ずつ待機していた。

食堂は横に長い空間で、真ん中に木製のつやつやしたテーブルと、猫足の椅子が並んでいる。席は合わせて十六あるようだ。

入口から見て右奥の席に王様が腰を下ろし、その左に王妃様と皇子様、右側にシゼル様が座つている。

天井からは小さめのシャンデリアが一つ吊り下がる。燭台も四方の壁にひとつづつついているので明るい。

ざつと見渡したかんじで、絵や陶器の装飾品は一切なかつたが、代わりに王様の席の後ろに、小さなピアノがちょこんと置かれていた。

正面の壁には縦長の格子窓が一つついている。外が暗くて中が明るいので、窓には食卓の情景が鮮明に映されていた。

私は「失礼します」と言い置き、食器を片づけ始めた。その際飲み物と水差しの残量チェックも忘れない。今夜、グラスに入っているのは、皆一様に赤ワインのようだつた。

王様は早々にワインを飲み干し、グラスの中には代わりに水を入れている。もう酒はいらないという合図である。

シゼル様と皇子様はほとんど赤ワインには手をつけていないようだ。

意外にも王妃様のグラスが空のままだつた。これは注ぎ足さねば。水差しのほうは大丈夫そうね、と確認し、私は盆に皿を重ね終えた。

そして運び去ろうとしたところで、王妃様が急に私の名前を口に

した。

「ねえ、シゼル。彼女がオルカ・コーディス嬢よ
「ええ、先程皇太子様が紹介してくださいました」
「覚えてない？わたくし話したでしょ？夜会でティーダを振った
のは彼女なのよ」

私とシゼル様の動きが同時に止まった。
シゼル様の硬直は一瞬のことであつたが、私の硬直はしばらく続
いた。

動こじにも、今の会話を無視して動いて良いのかがわからない。

「それはそれは。奇異な方ですね」

シゼル様の口調に若干笑みが混ざった。

「ここは謝るべきところなのか？

しかし今更謝つたところで嫌味にしかならない氣もある。

私は聞こえないふりをして立ち去るつとしたのだが、王妃様が私
を呼び止めた。

「ねえオルカ嬢。どうしてティーダじゃ駄目だつたのかしら。わた
くしづつと気になつっていたんですよ」

「え、ええと」

何と言おうか逡巡していると、皇太子様が少し始めるような口調
で言った。

「母上、そのようなことを尋ねては彼女も困ってしまいます

「あら、『めん遊ばせ。困らせるつもりはなかつたのよ。そのことについてはわたくしもティーダ自身も怒つてなどおりませんから。ただ純粋に気になつただけ』

王妃様は切れ長の皿を更に細めて、狐のよつに笑つた。

「ねえオルカ嬢。折角なのですから、そこにお座りなさいな。ちょうどぐらい給仕が遅れても良いでしょ? あなた」

「ああ、構わない。ゆっくり食事がとれるのは、それはそれで良いことだ」

私は、

「タ、タイヘンコウエイテス」と引き攣つた声を絞り出すのが精一杯であった。

ミルキアさんに給仕の全てを任せ、私はシゼル様の隣に腰を下ろすこととなつた。

緊張で、相槌を打つだけでも体がぎしきし言つ氣がする。

「あの、その、聞き及んでいることは思いますが、当時私には気になる殿方がおりまして……」

事情を説明し出すと、早速王妃様が口を挟んだ。

「ええ、存じておりますよ。わたくしがお聞きしたいのは、あのときダンスを断つた理由ではなく、あなたがディーダを選ばなかつた理由です。あなたが想い人に振られた後だつて、ずっとディーダを避けていたでしょ?」

それを当の皇太子様本人を目の前にして母親が聞くのか。正面に座る皇太子様も、私と同じことを思ったようである。

「母上、あなたが私のいる前でそれを問うのは、彼女にとつては酷ではないでしょうか」

「そう? だつてあなただつて、オルカ嬢のことがまだ好きだというわけではないでしょ?」

「それは……」

王妃様はちつとも悪いとは思つていなこようで、小首を傾げてみせた。

私的に驚きだつたのは、『まだ好きだというわけではない』とい

う言葉。『まだ』ということは、当時は好きだつたのか。

勿論本人の論証があるわけではないから、確定ではないけれど。全く接点がなかつたし、よつほど私の容姿が好みだつたのかもしない。物好きなものだ。

次に穏やかに口を開いたのは、王様だつた。

「ヒルダ、聞き方を変えれば良いのでは？ 例えば、オルカ嬢の好きな異性のタイプはどのようなものだ？」

「ああつ。そうですわね。それがいいわ。どうなのです？ オルカ嬢」

三人の視線が私に集中する。一人はのんびり答えを待つように、一人は興味津津に、もう一人は苦笑を浮かべつつ控えめに。シゼル様だけはそんなことをしても意味がないのだろう、視線は相変わらず前を向いていた。しかしこの沈黙の中だ、どうせ意識せずとも聴覚は私の返答に集中しているに違いない。

何故王族の方々にお泊り会のガールズトーク並の暴露話をせねばならないのだろう。

何にせよ私はこんな性格だから、面白い返答は出したくても出せない。

「それは私にもよくわかりませんの。私にいわゆる想い人がいましたのは、今までの人生で一度だけなのですから」

「あらまあ。まだポルテツフェル伯爵家の『長男を想つてらつしやるの？』

「と、とんでもございません」

彼はあの一件の一年後に結婚しており、最近子どもも生まれている。

そこまで執着があつたわけでもないし、振られた瞬間に未練ともおさらばしていた。

「私は異性に特別な感情を抱いたことがあまりありませんの。伯爵家の『長男のこと』に關しても、今本当に好きだったのかと聞かれれば疑問を覚えます。年も離れていましたし、きっとただの憧れだったんだと思いますわ」

「Jのような公式の場で『私の周りにまともな男がおりませんでした』などとは言つてはいけない。

そんなことをしたら、私が誰をまともではないと思つているのか、すぐにはばれてしまつからだ。

「昨日会議でコーディス侯爵とお会いしてきたのだが、……彼の話は本当のようだな」

王様が感慨深げに言つた。
嫌な予感しかしない。

「失礼ですが、父が何か……？」

「そなたのことを、『理想の高い娘』だと言つておつたよ」

あのコーディス家の狸頭領の癖にぶつちやけ過ぎである。
それくらい私の風評などどうでもいいのか。確かに今更妙な噂が一つや二つ増えたといひで変わらないだろ？

私は何とか心を落ち着かせて、ゆつくりとがぶりを振つた。

「それは誤解ですわ」

「何にせよ、あなた今は恋人などいらっしゃいませんのね？」

「ええ。おりません」

「想い人も」

「おりません」

王妃様は少し考えるような素振りを見せてから、再び私を見つめた。

今度は少し真剣な表情である。

「ねえオルカ嬢。あなたもしかして、王族や貴族の家庭には嫁ぎたくないと思っていらっしゃる?」

「いいえ?そんなことはありませんが……。もしかしてそのことに關しても父が変なことを言われましたか?」

私を行儀見習いに送り出した本当の理由まで正直に言つてしまつたのだろうか。

「平民出の城勤め男性で、娘に良さそうな人間がいたら紹介してくれ、でしたつけ?あなた」

「ああ。そんなことも言つておつたな」

私は心中で頭を抱えた。

父よ、もう少し自重してくれ。

「その申し出についてはどうかお気になさらず。父の失礼な態度、代わつて謝罪いたします」

「気にするでない。そなたの父上はなかなか気持ちの良い人間で、私も仲良くなせてもらつている」

気持ちの良い人間だなんて、父には全く似つかわしくない称号である。王様、騙されているんじやなかろうか。

私はここの国に行く末が心配になつた。

「オルカ嬢のことについては、よくわかりましたわ。あなたも、これで良いかしら?」

「うむ。仕事で来ているのに話に付き合わせて悪かつたな。下がつて良いぞ」

結局王家の方々の真意がわからないまま、私は再び仕事に戻つた。ツェーヴラーグの王族は他人の色恋沙汰が好きなのだろうか。だとしたら私の話など何の面白みもなかつたと思う。

再び仕事に戻ると、ミルキアさんが何だか複雑そうな顔をしていた。彼女は私が会話をしている間時々給仕で姿を現していたので、所々聞いていたのかもしれない。

その後は話の矛先が私に向くことはなかつたので、私は一先ず安心した。

また、飛び入り参加の仕事であつたが、多くの時間を会話に費やしたので、目立つた失敗をせずに済んだことも良かったといえば良かった。

やがて帰る時間となつた。あと三十分程経てば、そろそろ日付も変わる時刻だ。

シゼル様はハイネの畑に入る門のところまで見送りに來た。

「それじゃあ、また。一ヶ月後に会える」とを楽しみにしてる
「ええ、お元気で」

王様は名残惜しさを隠しもしないようだったが、シゼル様は相変わらず無愛想で機械的な応対をしている。

王妃様と皇太子様も別れの挨拶を口にし、いざ帰らんといつ雰囲気のところ、シゼル様の声が響いた。

「最後にひとつだけ、お願ひ申し上げてもよろしいでしょうか」

そのとき、空気の質が変わるのがわかつた。

今まで別れを惜しみながらも和やかだったその場が、俄かに緊張を帯びてくる。

「聞いひ」

王様が硬い声で言つた。

「オルカ嬢を、少しの間お借りしてもよろしいでしょうか」

シゼル様以外の皆が、騎士達さえも、息を詰めたようであった。硬質な空気は一気に失せたが、代わりに戸惑いがその場を支配する。

私、彼に何か不快なことをしただろつか。

王妃様だけは何故か暢気そつで、「あらまあ」と少し楽しげに呟いた。

「一体どんなご用件で彼女を借りる予定ですか？」

「少し、夜の庭園を案内していただこうと思いまして」

もしかして、また私に花の通訳を頼むつもりなのだろうか。だとしたら、あのときの拙い説明は彼なりには成功だったのかも知れない。

「オルカ嬢が良ければ、別によろしくってよね？あなた」

「あ、ああ」

王様は頷いたが、そのまま驚愕に見開かれている。彼の視線の先を辿れば勿論シゼル様なのであるが、一体何がそんなに……と、思つてシゼル様を見ると、彼はうつすらと笑みを浮かべていた。

月明かりを背にして、暗闇の中虚ろな田で笑みを浮かべるシゼル様。

これつて私の死亡フラグなんじゃなかろうか。

「よろしいですか？ オルカ嬢」

そう言う彼の声音は、言葉遣いは丁寧あれど、やはり有無を言わぬ何かを含んでいる。

「はい……」

結局私の選択肢なんてひとつしかないのだ。

ハイネの畠の小道は舗装されていなかつたが、庭園の道は石畳になつてゐる。

革靴を挟んで伝わつてくる“じじ”とした感触を楽しみながら、私はシゼル様の後ろをのんびりと歩いた。

私に案内を頼む的なことを言つてはいたが、今のところ案内しているのはシゼル様である。

というか、彼が勝手気ままに散歩をしているというのが正しい。私が歩みを止めれば、さつとまたシゼル様は急かすのだろうけれど。

相変わらず外灯が咲き乱れる花々を煌々と照らしていたが、もうそれは不気味には見えなかつた。

王家の人々やミルキアさんがいないというのは、視界を変えてしまつ程に解放感を与えてくれるものなのかもしれない。

加えてもうひとつ理由があることを、私は自覚している。

目の前を行くシゼル様は得体の知れなさで言つたら誰よりもずば抜けている。しかし自分でも意外なことであるが、私はどうやらこの男に気を許し始めているらしい。

絆創膏の貼られた手を見せたのは、間違いなくちゃんと医務室に行つたことを示したかったのだろう。

彼が悪い人間ではないことを知つた今、彼という存在の不可思議さは、逆に私に安心感を与えていたようであった。

お城では常に侍女らしく、時には淑女らしく振る舞わねばならぬい。

しかしシゼル様は依然正体不明である。侍女として接すれば良いのか、淑女として接すれば良いのかわからぬ。

じゃあ今のところはどうでもいいではないか。彼が正体を明かさないのが悪いのだから。

どうやら私には、そんな開き直りがあるらしかった。

加えて、彼と出会ってしまった事実はもう到底塗り変えられそうにないので、これが開き直らずにいられるかつての。

虫の声と杖が石畳を叩く音、それから一人の密やかな足音だけが庭園にこだまする。

今のところ会話はない。

でも、今の私にとってはそれは居心地の悪いものではなかつた。むしろ行儀見習いで勤め出してから、初めて息抜きができる心持ちだ。

「あなたは人が苦手か？」

唐突に、しかし歩みを止めることはなく、シゼル様の声が響いた。

「苦手、に思えましたかね。今日の食事会で」

「ああ」

呟くよつて、彼は肯定する。

私はうーん、と少し考えた。

普段なら、はいでもいいえでもわからないでも、このよつてな問には適当に答えていた。

しかし、理由がどうあれ折角少々心を許せる人間に出会えたのだ

からと、私は少し真面目になつて考察してあげた。

「苦手といえば苦手ですけれども、もし私が色々な街を旅して回るサークル団の家庭に生まれたなら、苦手にはなつていなかつたでしょう。無職の父親がいる家庭、とかでもそつかしさ」

シゼル様はそこで立ち止まって空を見上げた。
私もつられて見上げる。

半分の月が冷たい夜空に静かに浮かんでいた。
青い雲とその切れ間から覗く星が世界を包んでいる。

少しの沈黙の後、再びシゼル様の声が響く。

「駄目だ。わからない。その言葉の意味は？」

どうやら真剣に私の台詞を吟味していたらしい。
謎かけのつもりで言つたわけではなかつたが、自分の発言をまともに受け取つてくれたことが妙に嬉しかつた。

「私は家族曰く『じやじや馬』です。でも、そんな私を育ってくれたコーディス家に泥を塗りたいだなんて思つたことは一度もありません。じゃじゃ馬はじゃじゃ馬なりに周りに気を遣つてしているのです。無駄な努力かもしれませんが」

「成る程。確かに旅人か、既に汚名を被つている家庭なら、さして評判を気にすることもないな」

シゼル様は一瞬こぢらに顔を向けた。

「あなたは窮屈だったのか」

そう言つて再び前を向く。

「貴族に、それもユーティス家に生まれたことが」

私はぽかんとシゼル様の背中を見つめていた。

先程の彼の言葉を、何度も何度も反芻する。

そつか。私、窮屈だつたんだ。

彼の言葉で初めてその事実を自覚したわけではない。この感情はずつと昔から持つていたはずだ。

しかしそれを表に出すことは元より、心に上つてしまつことすら親不幸に思えて、ずっと考えないようになつていていたのだ。

だから赤の他人であるシゼル様が私の気持ちを代弁してくれて、酷くすつきりした気分になつていた。

そう納得して初めて、己が恋愛沙汰に興味のない理由もわかつた気がした。

ふいに無口になつた私を不審がつてか、彼がこちらを振り返つた。光のない目で私を捉える。

「間違つていたか？」

「いえ。違うのです。余りに正しかつたので、吃驚しました」

私はそこで口を閉ざしたが、彼は尚も姿勢を変えようとしない。

珍しく私は、自分の話を積極的にしようといつも気持ちになつてい

た。

本人は気付いていないだろうが、彼は私の代わりに悪役になつてくれた。

今彼に返せるものを、私は言葉以外に思いつかない。

「でも私、同時に家族には随分甘えていたんだなあつて、気付きました」

「『あのコーディス家』に、か」

「ええ。シゼル様は知つているのですね。『あのコーディス家』のこと

「ああ。以前食事会で、皇太子とあなたの一件が会話に上つたときには聞いた」

「じゃあ私の妹カノンのことも知つてます?」

「それも聞いた。双子……なんだとな」

「そうです。彼女にも随分甘えてました。お菓子を独り占めしたり、顔に落書きしたり、婚約指輪を壊したり」

「それがあなたの甘えなのか」

シゼル様の表情に少なからず呆れが混じつた。

私は大きく頷く。

「そうです。結局本当の意味で私が甘えられる存在なんて、家族だけなのかもしだせん」

シゼル様はそうか、と相槌を打つて、再びゆっくりと歩き出した。

どうやら庭園内を一周する、というコースらしい。

遥か彼方ではあるが、ハイネの烟へ続く門が見えてきて、私は少し残念に思った。

久々の息抜きの時間も、そろそろ終わりそうである。

「面白い話をしてもいい？」

ふいにシゼル様がそう言った。

私の心中には少しの不安が過ぎる。
自分のことを喋るのは良いとしても、彼の情報を知るのは未だ躊躇がある。

「それ、私に不利なことになりますか？」

ふつと息を吐く音がした。どうやら鼻で笑つたらしい。

「再度私の前に姿を現して言つことか。何もかも手遅れだ」「えー……」

「忠告を無視するのが悪い」

忠告を無視したわけではない。変に嘘を吐けない性質だとか、変にお人好しになってしまふ性質がここまで私を流してきたのだ。
そう思つて不平を言おつとしたが、シゼル様が口を開くのが早かつた。

「だが、不利か有利かといつたら、有利な情報を与えるつもりだ」「そうですか。なら聞きます」

私は即答した。

シゼル様は頷くと、言葉を噛み締めるよつて、丁寧に声を響かせた。

「皇太子はあなたのことが好きだつた。今もその気持ちが変わつて

いないかどうかはわからないが、少なくとも気にはかけている

私は暫く絶句していた。

まさかここで皇太子様の話が出るだなんて、思いもしなかった。

「……何でそんなことがわかるのですか」

「態度でわかる。あと、以前の食事会のとき、本人が『振られた』という表現を使っていたからな。あなたをダンスに誘ったのは、奴にしては告白のようなものだつたのだろう」

といふことは、やはり私の容姿がよっぽど彼の好みだつたのか。そう思つたが、シゼル様の次の台詞はそうではないことを示していた。

「『夜会などという華やかな場面でも、自分を売り込もうなどという浅ましさが全く感じられない。いつもホールの隅にて一人で食事を取つている慎ましげな女性』だそうだ。奴曰く。それがまさかあなただつたとは、夢にも思わなかつた」

最後の一言が余計だが、今はそれ以前の言葉が衝撃的過ぎた。つい本音をぽろりと転がしてしまつた。

「皇太子様は阿保ですか」

しかしそれを聞いたシゼル様も、「ああ」と言つて微かに笑つたので、私は安堵する。

「さしづめ人付き合いが面倒で、食に集中していたのだろう?」

大体図星である。

「まあ、そんなところです」

私は少しむくれた。

「それが、私にとつてどう有利なのですか」

「最後の切り札を『えてやつた、といつ』ことだ。いつかわかるときが来るかもしねい」

彼はそれ以上何も言つ氣はないらしいので、そのときはまだ先のようだ。

そんなやり取りをしていると、いつの間にか門の前まで来ていた。シゼル様が私のほうに体に向いた。

「付き合わせて悪かったな」

「いえ、そんな。シゼル様の言つところの『有利な情報』を『えるためだつたのでしょうか?』」

「ああ」

「では、お礼を言つのは私のまつです。ありがとうございました」

私はへこりと頭を下げた。

見えていなくとも、やはり敬意は体でも表したい。

「私はてつきり、また花の通訳をさせられるのかと思いましたよ

「そうか。それはまた今度頼もう」

「え、と私は声を詰まらせた。

今度があるとは思つていなかつた。

「どうした?」

「あ、いえ。何でもありません」

そうして、私達は酷くあっさりと別れた。

帰り道、私は考えた。

今度って、いつだろう。

普段人との接触を回避したがる自分にしてみれば、この期待感は
画期的な変化である。

涼しい秋の夜風が吹いて、私はお腹の底の温かさを身に沁みて味
わつた。

上級学校に通つていたとき、進路希望を記入する紙が配られることがあつた。

周りの友達のほとんどは、提出するのがとても早かつた。

親の事業を継ぐ、とか。
大学に進学する、とか。
どこかに嫁ぐ、とか。

大体そんなものである。

私も迷るであつた進路は見当がついていた。恐らく上記で言えば三番目だ。

しかしそれは私の進路予想であつて、希望ではなかつた。

結婚なんてしたくなかった。

憧れていたポルさんとでさえ、結婚したいだなんて微塵も思つたことはなかつた。

今考へると、それでも彼に告白した私は随分と軽薄な奴である。

どうして結婚したくなかったのかが、最近ようやくわかつた。

私はコーディス家を出たくなかったのである。

コーディス家の評判を気にすることなく、自由に行動できる場所だなんて、当のコーディス家以外どこにもないのだ。

どこの貴族の家に嫁いだが最後、私の安らげる場所なんてどこにもなくなつてしまつ。

父は平民の家に嫁いでも良いと言つてはいたが、それはそれでコ

一デイス家の評判に悪い影響が及ぶ可能性がある。

家族にしか甘えられないから、離れるのは嫌だった。

でも、そんな家族だからこそ恩がある。迷惑はかけたくない。

そういうた中途半端な思いが私を苦しめていたことが、今ならわかる。

「まだ悩んでるの？ オルカ」

結局提出日の放課後まで頭を悩ませていた私に、補講を終えた友人が見かねて声をかけた。

それは上級学校二年目の冬で、空は真っ白に曇っていた。

本来私の席は廊下側だったのだけれど、皆が帰った後だったので窓際の席を勝手に借りて、一人で唸っていた。その席は隣にストーブが置かれていたからで、ストーブも私と一緒に唸っていた。

声をかけて来たのは財閥のお嬢様で、彼女は卒業後すぐに結婚することが決まっていた。

彼女は長くウェーブのかかったチョコレート色の髪を揺らして、私の席に近付いてきた。そして私の座る前の席の椅子を引き、スカートを押さえて腰を下ろす。

「行けばいいじゃない、大学」

さもそれが当然のように彼女は言った。

でも私は机に置かれた進路希望の紙に類を押しつけた。

「駄目よ。それは逃げだわ」

「逃げればいいじゃない。嫌なんでしょう？さつさと結婚させられるのが」

「嫌だけど、親はそれを望んでるし」

真面目ねえ、と彼女は言つて、その言葉は変に私の胸をざわつかせた。

「メルは嫌ではないの？親の決めた結婚でしょ？」

「あなた程じゃないわ。つまんないなって思うこともあるけれど、私はよつぼどの人間じゃない限り順応できると思つてるし。後から愛情が付いて来る結婚だなんて腐る程あるわ」

ふうん、と私は彼女を羨望の眼差しで見つめた。そこまで割り切れる大人な彼女が、心の底から不思議だつた。

「でもあなたは一筋縄じゃない性格なわけだから、それでは納得できなさそうね」

「できてないから未だにこの用紙提出してないのよ」

「そういうところも変に真面目だわ。適当に書いて誤魔化せばいいじゃない。後から変えたって、誰も責めやしないわよ」

「でも、これを基に来年の学級分けがあるのでしき？」

「だから大学つて書けばいいのよ、とりあえず」

「そうしたら確実に三者面談が待つていいじゃない」

「あーもう、るりさいわねえ。何ぐじぐじ言つてんのよ、気持ち悪い。それはその時考えればいい。親が駄目つて言つたら、大学は諦

めて、良いつて言つたら行けばいい。それだけ。ほら単純

「そんなことしたら、絶対行かせてくれるに決まってる」

「なり良かつたじやない」

「そうしたらまた迷惑かけるわ」

彼女は片手で額を押さえた。

「何が迷惑で、何が迷惑じやないかの判断くらう、親に任せあげなさい」

諭すように言つ彼女の横顔が、窓に向ひうの薄明かりに照らされ綺麗だったことを覚えていた。

結局私は、自分に都合の良いつて葉に甘えて、用紙に「進学」と書いて提出してしまった。

彼女のせいにするわけではないけれど、私は今でもそれを後悔している。

17・独りぼっち

食事会の翌日、私はしつかり寝坊し、しつかりミルキアさんに怒られた。

昨夜の事情を知っているにも関わらず、何の手加減もない。とはいって、徐々にではあるがミルキアさんが通常営業になつてきただのは喜ぶべきことである。

説教を耐え抜いた後、私は使用人食堂へ向かう。

今朝は健気に朝食をとらずに出勤して來たので、その分昼食で栄養補給せねば。

ミルキアさんのせいで昼休みは既に十分程削られている。加えて今日はアリシアと話がしたかったので、自然と足取りは速くなつていつた。

使用人食堂は、「使用人の館」とも呼ばれる西館の一階にある。中は侍女、騎士、近衛兵、文官などの制服オンパレードであつた。400名程いる城勤めの人間の大半がここで一斉に食事を取るため、何の見当もつかないままアリシアを探すのは困難だつただろう。しかし幸いにもアリシアはいつもほぼ同じところで食事をとつている。

私の予想通り、アリシアは奥まつた窓際の長テーブルの端にぽつんと腰かけていた。

さらに幸いなことに、いつも一緒にいる友人の侍女も、今日は見当たらない。

私は早速彼女に声をかけた。

「アリシア」

そう呼びかけると、彼女は一瞬、びくりと肩を震わせたが、手を振る私を見ると安心したように眉尻を下げた。

そういえば、虚めの話、ミルキアさんに報告したほうが良いだろ？ か。本館侍女長なのだから知つていそうなものではあるが。

「そこ、座つていいかしら？」

私がアリシアの向かいの席を指さすと、彼女は微笑んで頷いた。

「ええ、よろしくってよ」

「じゃあ私ご飯取つてくれるから、その席空けといつてください？」

「わかったわ」

アリシアが向かいの席に自分のカップを置くのを見届けてから、私は背を向けた。

使用者食堂はバイキング形式なので、食べたいものを食べ放題である。食事の時間はこの城での数少ない私の娯楽だった。

さて今日は何があるのかしら、と考えていると、右奥から良からぬ視線を感じた。

見やると数人の侍女が固まつて食事をとっているのだが、皆がこちらを面白くなさそうに眺めている。

私と目が合つと顔を見合わせてくすくす笑い出す始末だ。

非常に面倒そうな雰囲気であるが、害をなされたわけではないので、一先ず放つておくことにする。

恐らくあれがアリシアを虚めている輩だろう、との予測はついた。

私の貴重な昼飯を不味くすることは何としても避けたいので、私は努めて彼等の存在を視界から追い出した。

* * * * *

本日私が自分用に取り分けたのは、ビーフシチューに枝豆のパン、海藻のサラダ、ヨルダと呼ばれる渦巻き状のケーキ、そして牛乳である。

朝食をとつていなことによる栄養不足を補充するため、いつもより分量は多めにする。ヨルダも一個食べちゃえ。

食欲減退は今後の仕事に支障が出る。可能な限り目的地のみを意識して席に戻った。

良からぬ視線を送つてくる彼女らは、このときに限り汚物と同じ扱いであるが同情はしない。

私が席に着くと、向かいのアリシアは早速頭を下げてきた。

「オルカ、昨夜は本当にありがとうございました。この礼はいつか必ずするわ」「はいはい、どういたしまして。お礼は食べられるものがいいわ

口をもぐもぐせながら適当に答えると、アリシアはうふふと笑つた。

「オルカつたら昔から食べるもにしか興味がなかつたものねえ」「心外な

「わたくしがどんなにワーディロッジの梅という花が素晴らしいか話しても、全然聞いていなかつたじゃない」

「花に興味がなかつただけよ」

「あら、じゃあ何か他に趣味でもあるの? 食べ物関係以外で」

「まあ、ね」

何だか明らかに言葉を濁すよつた言い方になつてしまつたので、私はさつさと話題を変えることにした。

「そんなことよつアリシア、聞きたいことがあるのだけれど」「何かしら」

私は音量を少し下げるで言つた。

「立ち入り禁止区域つて、何で立ち入り禁止なの?」

アリシアはきょとんとした。

「え? 何故今更それを尋ねるの? まさかあそこまで足を踏み入れておきながら何も聞いてないの?」

「特に説明されなかつたし……。私も敢えて聞かなかつたのよ。知つてはいけないような気がして。私に害が及ぶのは嫌だわ」

「でも今は知る気なのね」

「あー、ええ、まあ。何か手遅れらしいし」

ふつん?と呴いてアリシアは一度紅茶を口に含んだ。

「あそこは研究施設らしいわよ

「へ?」

私は拍子抜けした。

あまりに当初の予想通りではないか。

「それはつまり、國家機密の研究とかしきやつてる怪しいことじつてこと?」

「みたいね。わたくしも何を研究しているのかまでは知らないけれど」

「じゃあシゼル様も研究者のかしら」

「ええ。侍女長がそう言つていたわ」

私は腕を組んで考える。

予想通りなのは結構だが、本当に研究施設だとすると、かなり不穏な将来を想像してしまつ。

私は本気で謝るミルキアさんと、責任取れとか言つてたシゼル様の発言を想像に繋げて考察してみた。

例えば、見てしまつたからには生かしておけぬ、あなたに実験台になつてもらおう。とか。

やばい。あのシゼル様の不気味さから言えば、このシチュエーションかなりしつくりくる。

「オルカ? 大丈夫? あなた顔色悪いわよ」

アリシアが心配げにこちらを窺つてきた。

知らぬ間に脂汗まで浮いてきていたようで、私はハンカチを取り出して額を拭つた。

実はシゼル様は、「ちょっと危うい雰囲気な人」どころか「超絶危険人物」だつたのかもしれない。

「それで、他には何がわかつてゐるの? あの場所について」

「わたくしが知つてゐるのはそれだけよ」

「それだけ?」

私は我が耳を疑つた。

「ええ、それだけ」

「これでは私の持つている情報と大差ないではないか。つまり大して私と状況が変わらない。なのに何故私と彼女とではこんなに危機感が違うのだろう。」

「気にならないの？」

「だつて国家機密よ。これ以上知つても良いことないでしょ」「に」「それはそうだけれど。何かこう、不穏な雰囲気を感じない？あと、ミルキアさんとかから意味ありげなこと言われたりしてない？」

「侍女長から？……ああそういえば、今朝物凄く叱られたわ。『たかが個人的な逢引のために重要な仕事を他人に引き渡すとは何事ですか！』って。どうして彼との『デート』のことまで言つてしまつのよ。体調不良とか他に言い方はあるでしょ？」「ああそう」

「口を尖らせるアリシアに、私は気の抜けた返事を返した。
どうやらアリシアと私の立場は、何か決定的に違つりし！」

「あなたが侍女として働き出したのは、かなり最近よね？」

「ええ、そうよ。一ヶ月とちょっと前くらい」

「あの食事会の仕事を割り当てられたのはいつ？」

「仕事を始めてから一週間程経つた頃かしら。だからわたくしも食事会の仕事をまだ一度しかやってないのよね」

それって変じゃないかしら。

と、言おうとして、私は口を噤んだ。もし彼女がその異常性に気が付いていないのなら、或いは気付いていない振りをしているのなら、

「これは言わないほうが良いのでは？」との考えが過ぎたからだ。
しかし、これは明らかに妙である。

普通は間接的にはあれ、国家機密に関わる仕事に雇つたばかりの侍女を使うことなどしない。

私がむづと唸つていると、アリシアが「あら大変」と席を立つた。

「もうこんな時間だわ。仕事に戻らないと」

振り返つて壁の時計を見ると、確かにあと少しで昼休みの時間が残りようとしている。

気がつけばいつの間にか人の数もまばらになっていた。

「本当。」めんなさいね、つまらない話に時間を割かせてしまつて「つうん、いいの。わたくしも一度一人だつたし」

心なしか、そう言って微笑んだ彼女の顔が泣いているように見えた。

仕事に戻る廊下の途中で、私はふと思つた。

アリシアがいつも一緒にいる友人は、どこに行つたのだろうか。

アリシアと昼食をとった日から数えて四日目の午後。私は結構本格的に悩んでいた。

アリシアの虚めの件であるが、どうやらかなり悪質であるらしいことがわかったのだ。

私がアリシアと昼食をとったときからずっと気にかけていたのだが、やはり彼女の近辺にあのいつも仲の良かつた友人がいない。放つておくのも後味が悪いので、それからは私がいつもアリシアとじご飯を食べていた。

すると複数の同僚から忠告を『えられた』。「彼女と一緒にいると虚めの標的にされる」、と。聞くところによると、あの仲の良かつた友人もついには嫌がらせに耐えきれず、アリシアと距離を置くようになってしまったのだと。

忠告には感謝しつつも、やはりアリシアを放置して食べる『ご飯は不味いだろう。折角数少ない娯楽なのであるから、栄養補給くらい気持ち良く行いたいものである。

そんなわけで相も変わらずアリシアの向かいに席を取つていたら、同僚達はついには私にまで距離を置くようになった。

うーん学生時代を思い出す。それでもつてやつぱり少しは傷ついたりもある。

私があまり口を出す問題ではないが、アリシア自身はビックリしているのだろう。そう考えて、躊躇いを振り切つて昨日の夕食のとき聞いてみた。

「アリシア、前あなたに嫉妬している人から嫌がらせをされてるって言つてたじやない？具体的に何をされてるわけ？」

彼女の体はたちまち強張り、顔がどんどん白くなる。

「「」「ごめんなさい。もしかしてあなたも何かされたの？」

渴いた声でそう言わると、こんな私でも同情せざるにはいられなくなつた。

「いえ、そういうわけではないの。謝る必要もないわ。ただ、周りの様子を見ていると結構深刻なのがなつて思つて」

努めて何でもないように聞いてみた。

アリシアは「そう」と言つて俯く。

やがて声を潜めて話し出した。

「実はね、本当に結構深刻なの。最初は何かと理由をつけて仕事を押し付けられたのね。でもあんまりにも頻繁なものだから、おかしいと思つて断るようになつたの。そうしたら今度は、わたくしが掃除したばかりのところでわざとバケツをひっくり返すようになつたわ。あと、気が付くとわたくしが使つていた掃除用具が消えていたり。探しても見つからなくて怒られて。後からとんでもないところから出てきたりするのよね。最近一番酷かつたのは、わたくしの部屋が勝手に荒らされていたこと。お金を取られたとかではなかつたのだけれど、彼にもらつたネックレスが壊されていたわ。鍵は壊れてなかつたから、多分西館のハウスキーパーが協力しているのだと思つ

意外にもアリシアは、口を開けばすらすらと虚めの実態を吐き出した。

そしてその瞳は決して弱々しいものではなかつた。アリシアはまだ自尊心を捨ててはいない。

それがわかつただけでも一安心だ。

しかしこれはかなり大胆な嫌がらせだ。

ここまでしたら犯人なんて容易にわかりそうなものである。

何故未だに問題が解決していないのか、私は不思議に思った。

「ミルキアさんに言つた？」

「ええ……。でも、『そういうのは本人達の間で話し合つべき問題であつて、自分が関与することではない』って言われてしまつたの」「へえ？」

ミルキアさんにしてはらしくない発言だと思つた。

本人にも、また仕事にも実害が及んでいるのだ。合理的に考える彼女であれば、一刻も早く解決のために動きそうなものだが。

「あなたの恋人は知つてゐるの？このこと」

アリシアは首を横に振つた。

「少なくともわたくしは知られてないわ。噂になつていないのでおかしいから、もしかしたら知つてゐるかも知れないけれど。でも言つつもりはないの。彼、本当に忙しい生活を送つてゐるから、煩わせたくないのよ」

「好きな人のことだつたら、どんなに面倒なことだったとしても守つてあげたいと思つんぢやないの？」

そもそも恋をするといつて行為自体面倒なことなのだから。

「いいの。わたくしは彼を支えてあげたいって思っているのよ。だから、自分のことくらい自分で何とかできるようにならなくちゃ。こんな嫌がらせしても何の意味もないってわかれば、彼女達も諦めると思うの。だから、わたくしはそれまで耐えるのみよ」

そう言った彼女の顔は決意に満ちていた。

彼女の意見に納得したわけではなかつたけれど、私もそれ以上は何も言わなかつた。

結局のところアリシアが決めるべきことなのだから、それはそれでいいとして。さて私はどうしようかことになつてくる。

物事が解決しない以上、アリシアと一緒にいても良いことはない。事実、現在私にとつての友達もアリシア一人になつてしまつたのだから。そして過去起きたことを考えれば当然、虐めの手はいはずれ私にも伸びてくるであろう。しかし美味しい食事と平安な良心のため、アリシアから離れるという選択肢は選べない。

まあ今のところ私自身に実害があるわけではないから、このまま様子を見るしかないか。

考へても仕方のないこととはこれ以上考へるべきではない。どんな深みにはまつてしまつ。代わりに楽しいことを考へよう。

私は、今朝アリシアに食事会のお礼としてもうつた菓子の味を想像しつつ、本館の裏口を箒で掃いた。

すぐ傍に植えられた銀杏の葉は、段々明るい色へと変わり始めている。

外は虫の音、中は箒が擦れる乾いた音がそれぞれの静寂を埋めて

いた。

いやもひひとつ。足音が近付いて来た。

振り返ると、回廊をミルキアさんがこひらに向かって歩いてくる。

「オルカ。シゼル様から伝言なのですけれど」「は？」

「ここ最近すっかり忘れていた名前が挙がつたので、一瞬シゼルとやらが誰なのかがわからなかつた。

「シゼル様から伝言です。『は』とは何ですか、『は』とは」「あ、いや、申し訳ございません。この頃普段の日常が続いていたもので、ちよつと誰のことだか思い出せませんでした」

ミルキアさんが呆れたよつてに臉を下げた。

「あなたつて結構薄情ですよね」「ええまあそれは自覚します」「……それで伝言なのですが。『十七時頃北東庭園に来い』とのことです」

何だか推理小説で取引現場に誘つときのよつない台詞だ。

「北東庭園つていうと、あの立ち入り禁止区域内の、ですか」「そうです」「一体何の用なのでしょう」「それは聞いておりません。兎に角伝言は伝えましたからね」「行つてよろしいのですか？『立ち入り禁止』なのでしょう？」

ミルキアさんは溜め息を吐いた。

「あなたは立派な関係者になつてしまつましたから。わたくしももう面倒見きれませんわ」

「どうやら私はついにミルキアさんにも見放されてしまつたらしい。その意味はわからないが、不思議と心細い。

「かしこまりました」と言って再び掃除を再開したが、ミルキアさんはその場を去りうとしなかつた。

「……どうかなさいました？」

「いえ。浮かない顔をしていろと思つて。道理で今日は失敗がなかつたわけですね」

おかしいだら、そのバロメーター。と、突っ込むのは心中だけにしておく。

しかし折角ミルキアさんがこつして「氣を遣つてくれたわけだし、私は心に引っかかっていたものを聞いてみる」とした。

「ミルキアさんはじつして、アリシアを助けてあげないのですか？」

そんな話が出る「ことを予想していなかつたのか、ミルキアさんの表情が固まつた。」これは驚いていふときの彼女の反応である。

「あなたも他人のことを心配したりするのですね」

「……私、多分ミルキアさんが思つてる程考えなしではありませんよ」

「それは意外な発見でした」

ミルキアさんはそう言ってほんの少し肩を竦めた。

「アリシアのことでしたね。わたくしは、ああいつた虚め関連のことについては、本人達より前に部外者が手を出すべきではないと考えております」

「まあそれも正論といえば正論ですけれど。でも、あの様子だと彼女、意地でも自分から動く気なさそうですよ」

「それは彼女が選んだことですから、彼女が責任を取るべきことです」

私はんー、と天井からぶら下がる灯りを見つめつつ、どう言ったものか考えた。

「あの、失礼を承知で申し上げますけれども。その態度つて上司としてどうなのでしょうか。現にこの嫌がらせはアリシアだけではなく彼女の仕事にも実害を『えております。』のままで、ミルキアさんも侍女長として、監督不行き届きの責任を取らされるのではないでしょうか」

するとミルキアさんは一瞬閉口した。

そうして目を伏せるものだから、私が逆にたじろいでしまう。

「……それがわかっているのなら、もうわたくしからは何も言ひ言葉がありません」

私はすぐさま饒舌な反論が返ってくることを予測していたので、大層驚いてしまった。

こんなことを言つたのも、ミルキアさんを責めるためではなく、彼女の真意が知りたかっただけなのに。それが理解できたのなら、

「これから私の対応の仕方のヒントになるかと思つていたのだ。

「わたくし多分あなたが思つておられる程でできた人間ではありません。女の確執は醜いものですね。関わりたくない、というのが本音です」

そのときのミルキアさんの目を見つめて、私は初めて、ああこの人も女性だったんだな、と思つた。

にも関わらず、私は次のミルキアさんの話に度肝を抜かれた。

「わたくしも昔同じような経験をしたことがありますの」「同じような経験？」

「ある異性、まあ今の夫ですけれど、彼との関係を妬まれて嫌がらせを受けたことがあるのですわ」

え？

「え？」

頭の中で浮かんだ疑問符が、意識せずとも口からそのまま出ていた。

「ミルキアさん、結婚してたのですか？」
「あらオルカ。わたくしが既婚者だというのがそんなに妙ですか？」
「い、いえ、別に妙というわけではないのですが」
「いえいえ、妙だったんでしきうね。あらあらまあまあそんなに馬鹿みたいに呆けた顔をしていらして」
「いえいえいえ！」

私は関節が軋む程に首を激しく横に振つた。

しかし確かに、ミルキアさんは西館に自室を持つていないのでから、家庭を持っていたという事実はそれ程おかしいことではない。

一体どんな男と結婚したのか、ひつじょおに気になるが、今はそういうこう話の流れではないので自粛しておく。

「そ、それで、ミルキアさんもアリシアと同じような経験をしたとの話でしたが？」

「ええ、そうです。まあわたくしの夫はアリシアの恋人みたいなモテ男ではありませんでしたから、私に嫉妬してきた相手もたつたの一人でしたけれどもね。だから規模は狭かつたけれど、執念が凄まじいものでしたよ。五階から水をかけられたり四階から卵を落とされたり三階からバナナを投げつけられたり」

何階から何が落ちてきたのか正確に記憶しているあたり、ミルキアさんの執念も相当のものだと思つ。

「誰がやつたかなんてすぐに見当がつきました。それでわたくしは当時の上司に相談したのです。侍女長は事態を正すためにすぐに動いてくれましたわ。彼女を注意し矯正するために。でも、一見とも稚拙な嫌がらせだけれども、その実証拠を残さないことにに関しては、彼女は本当に徹底的だつたのです。どんなに結果が正しかつたとしても、証拠がなければわたくしの主張なんて机上の空論です」

「それで、どうしたのですか？」

「彼に訴えて話し合つてもらいました。結局何故わたくしが憎まれるのかと言いますと、彼女はわたくしが彼を奪つたと思っているからなのです。であれば、わたくしが彼を奪つたのではなく、彼がわたくしを選んだのであると相手に納得させれば良いわけです。そうすれば諦めがつくと思つたわけですわ。そのためには、彼女自身が当たつて碎ける必要があります。それで、彼女から想いを告白させるためのシチュエーション作り、相手を必要以上に傷つけず尚且つ

わたくし自身の株を上げるような断り方を含む、黒幕の存在を微塵も感じさせない徹底的なシナリオを彼の頭に叩き込み、実行させました

した

私は呆気に取られて何も言えなかつた。

ミルキアさん……何て恐ろしい人。

そしてミルキアさんの田那さん……頑張つたな。

「計画は上手くいきましたわ。あとあと考えてみれば彼女がそんな展開で、わたくしと彼との間柄を認められるまともな人間だという保証はどこにもなかつたわけですが、幸いにも彼女はますますまともな人間だったといふことです」

「成る程」

「別にアリシアにわたくしの方法を押し付けたいわけではありませんがね。一番良いのは相手の憎しみを根本からなくすことだと思います。そうなるとやはり、部外者は口を慎むべきだと思いますのね。勿論これはわたくしの主觀ですけれども」

私は素直に感心した。

「やっぱりミルキアさんって合理的ですね」

「いえ、そんなことはありませんわ。色々と言い訳がましく喋りましたけれども、わたくしが口を挟まない一番の理由は、やっぱり女の確執が怖いからですもの」

しかしそうなると、結局今の私ができる最善策は黙つて事態の成り行きを見ることのようだ。

あのアリシアの決意では、彼に打ち明けることを説得するのは無理そだし。

ふいに、回廊の奥からミルキアさんの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「行きますわね。十七時に北東庭園。くれぐれもお忘れにならないよ」

私の返事を待つて、ミルキアさんは身を翻した。

十七時十五分前、私はミルキアさんの了承のもと仕事を抜け、北東庭園に向かつた。

立ち入り禁止区域を守る騎士は、今日はあのだるそうな男ではなかつた。しかし私のことを聞いていたのか、侵入を咎められるようなこともなかつた。

一番田の門を通過すると、色とりどりの秋桜の向こうにシゼル様が見えた。

彼のほうは既に私に気付いていたらしく、顔をこちらに向けて佇んでいた。

私はそちらに向かいながら声をかけた。

「オルカ・コーディスです。参上いたしました」

「ああ」

シゼル様は小さく頷いた。

しばらくして私は彼の隣に立つたが、彼はそれ以上何も言おうとしない。

ただ、息を潜めるようにして私に注意を集中していふようだつた。

「どのよつな」用件ですか？」

沈黙に耐えきれず、私から先に切り出すこととなつた。

この雰囲気は、じつと見つめられるのと同じくらい何だか照れ臭いものがある。

「浮かない声をしている」

その言葉を聞いて、やはりこの人、化け物じみたところがあるな
あと思つた。

「まあ、ちょっと浮かない出来事が私の周りで起きてこるのは事実
ですね」

「どういったことだ？」

「呼び出しだおいて世間話ですか」

「ああ」

その話題を回避するために言つた言葉だったが、あっせつ肯定されてしまった。

「……暇人ですね、シゼル様」

「ああ」

「でなくて、本当に何の御用だったのですか？」

「翻訳を頼もうと思つてな。だが愉快そうな話を持つてきただのであ
ればそちらに興味がある」

「」の男、私の落ち込んだ出来事を『愉快』と片付けやがつた。

「全然愉快な話じゃないので」

「そうか？あなたが隠そつとする辺り、聞くだけの価値がありそつ
に思える」

「悪趣味です」

「それで？どんな話だ？」

どうにも「」にも逃がしてくれる気はないらしい。

私は仕方なく話しかけ始めた。

「アリシア・ベアティードット」存知でしょ？

「いや」

「ご存知のはずです。恐らく先月の王家との食事会で給仕をしていたはずですから」

「ああ」と言つてシゼル様は僅かに目を細めた。

「貴族の娘だとかい？」

「そうです。彼女には実は恋人がいまして」

「それなら知つていい。イヴアンだろ？？」

「え？……あ、すみません、名前までは知りませんでした。シゼル様はその方とお知り合いなのですか？」

「ああ。仕事上連絡はよく取つてている」

その言葉に、私は少なからず驚いた。

「シゼル様、真面目に仕事してらしたのですね

「していないと思つたか」

「真面目に仕事をしている人は、この時間悠々とまつつき歩いたりはしないと思つていたので」

「まあ、あなたの認識は間違つてはいない」

彼は自嘲氣味に笑つた。

そういえばこの人危ない研究者な可能性があるんだつけ。

そうは言つても、一度解いてしまつた警戒心をもう一度立て直すというのは、なかなか難しいものがある。

「その恋人がとんでもないモテ男なのだそうですよ」

「ふうん」

「あれ、知り合ってるんじゃなかつたんですか？」

もしかしてさつきの発言妄想ですか。

「連絡を取つてゐる、といつのは書類でのことだ。実物を見たこと
はない」

「成る程」と私は納得した。

「それで、そのモテ男がアリシアとくつついてしまつたわけなので、
嫉妬に狂つた女達がアリシアを虐め出したわけですね。ハブに
したり、自分達の仕事を押し付けたり、部屋を荒らしたり」

「ふむ」と言つて、シゼル様は手近なところにあつた秋桜の群生
に手を伸ばす。それを手探りで一本選び取り、手折つた。

「昔のミルキアのような話だ」

私は畠を見張つた。

「知つてゐるのですか」

「ああ。随分と痛快な話だつたからよく覚えている。五階から水、
四階から卵、三階からバナナ、一階から下着、だつたか」

「下着！？何それ、初めて聞きましたよ」

ミルキアさんめ、そこだけわざと伏せやがつたな。

「ねえねえ、それ誰の下着ですか？ミルキアさんの？落とした本人

の？」

「知らん。阿保か」

心底軽蔑した顔をされた。

「こいつのシゼル様の顔は結構怖い。」

「それで？ あなたはその友人を想つて沈んでいるのか」

「あーいや、私そこまで善人でもないので。ただ、ハブられてる彼女を放置して食べるご飯は不味いので、ここ最近よく一緒にいたんですね。そしたら見事私もハブられてしまいまして」

自分で言つていちよつと悲しくなつてしまつた。

人が苦手だろうと、どんなに強がりを言おつと、こいつのこつて普通に寂しくなる。

「ほお。愉快ではないが、興味深い話ではあるな」

「……どちらにせよ面白がつてることに変わりはありませんよね」

「まあそうとも言つ。私が興味深いと思つたのは、あなたが人並みの感情を持つていることがわかつたからだ」

「はあ？」

「あなたが沈んだ声を出す理由が、そんなありふれた原因だつた。これはとても興味深い」

「それってつまり、私人間と思われていなかつたつてことですか？」

「そこまでは言わないが、異常性は高いと踏んでいる

「果てしなくこつちの台詞なんんですけどー。」

皆まで言つてしまつてから、はつと口を噤んだ。

しまつた、勢いに任せてついぶつちやけてしまつた。

恐る恐るシゼル様を窺い見ると、彼ははつきりそれとわかる程に、清々しい笑みを湛えていた。

そつとして手に持つた真白い秋桜の茎を撫でる。

「私は異常だと思うか？」

「あ、いや、えっと……。すみません、大変失礼なことを申し上げました」

「別に謝る必要も取り繕つ必要もない。私は異常だと思つか？」

「えー、まあ、はい。異常だと思います」

「私もそう思う。……」

彼の口の動きを見る限り、その後も何か言おうとしたらしいのだが、最終的にはそれで終わってしまった。

一先ずこの話題が終了したようなので、私はひつじょおに気になつていたことを聞いてみることにした。

ミルキアさんの虜め歴を知つているとこによれば、シゼル様とミルキアさんの間に交流がある可能性が高い。であればこの情報も聞き出すことができるかもしれない。

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さん知つてます？」

「ああ」

「どんな人ですか？」

「どんな？」

「ミルキアさんってどんな人選んだのかなつて思つて。彼女が既婚者だつてこと、つこわつと知つたのですよ。イケメンですか？」

「イケメン……」

シゼル様は難しそうな顔をした。

「あ、ごめんなさい。外見だとわからないですよね、じゃあ性格で」「いや。見たことはある。随分昔の記憶ではあるが、器量はそこそこ良いのではなかろうか」

「性格のほうは？」

「悪くはないが良くもない」

何だか微妙だな、それ。

「気になるなら紹介して差し上げよう」

「え？ もしかして城勤めですか？」

「そうだ。左遷に左遷を重ねて随分奥まつたといふにいるがな。だが今日はもう遅いので帰れ」

「わかりました。約束ですよ」

シゼル様は鷹揚に頷いた。

私は「では失礼します」と告げて、歩き出す。
門のところでもう一度振り返ると、彼の透明な視線が私のそれと
かち合つた気がした。

「絶対絶対約束ですからねー」

帰路につく私の足取りは、行きのときよりほんの少しだけ弾んで
いた。

やられた。

扉に鍵を差し込んで回したとき、私はそう確信した。

夕食をとった後だったので、一先ず自室で少し休んでからシャワーに行こう。

そう思つて部屋に戻つて来た。

しかし鍵を開けたと思ったのに、ドアが開かなかつたのだ。つまり、当初鍵はかかつていなかつたということである。

私はすぐさまアリシア虐め隊の犯行を予想した。アリシアのときと同じく、西館ハウスキーパーの協力の元私の部屋を荒らし、鍵をかけ忘れて帰つたのではないかと。

再び鍵を回し、今度こそ扉をそろそろと開ける。頼む、勘弁してくれ、と念じつつ。

その願いが通じたのか、さつと見たかんじ私の部屋に異常はなかつた。

しかし安堵したのも束の間。

私の視界の中に、とても不吉なものを捉えた気がする。

恐る恐る照準をベッド脇の小さな丸机に合わせる。その上にあるのは、今朝アリシアからお礼としていただいたズイーガル亭の菓子折りである。

それはいいとして、ねえ、開いてない？あの箱開いてない？嘘でしょ？私一個も食べてないんですけど。

半ば体を引きずるようにして机に近付き、そつと箱の中身を確認してみる。

空でした。

その夜西館303号室から上がった断末魔の如き叫びは、ツェーヴラーグ城全体を震撼させた。

私の叫びを聞きつけて数人が部屋を窺いに来たが、叫びの主が私であることを確認すると、すぐに引っ込んだようである。

背後では「くすくす」と嗤う声が遠ざかっていったので、彼等の中に犯人と思しき人物がいたものと思われる。

今すぐにでも襟元を掴み上げて問い合わせたい欲求を何とか押し込め、私は開け放したままの部屋にへたり込んでいた。

人の一番大切にしているものを的確に狙い、相手の感情を打ちのめす。何て悪質。酷い。鬼。悪魔。

しかしここで怒りを爆発させても無駄であろうし、私にかかる不利益のほうが圧倒的に多いだらうことは想像がつく。ミルキアさんのときと同じく敵は用意周到な可能性がある。仮に向こうに犯行を認めさせることができたとしても、そこで嫌がらせが止まる保証はどこにもない。

何より決着がどちらにつくかに関わらず、ここで不用意に動けばユーティス家の名にさら泥を塗りたくる結果になりかねない。

落ち着け私。落ち着くのだ。深く息を吸つてー。はい吐いてー。吸つてー。吐いてー。

何とか気を沈めた私は、どうすべきかを考えた。

アリシアに問題解決のために動く意思はない。私はアリシアを放棄する気はない。部外者は首を突つ込むべきではない。実害がなかつたので静観することにした。

というのが今までの考え方である。

しかし早速私にも実害が出てきた。つまり、私は部外者ではなく、被害者に昇格したのである。もしくは降格。であるならば、多少なりとも首を突つ込む余地はある。

私はむんと天井を睨んで立ち上がると、自室を後にした。

油断すれば易々と浮き出る憤りの感情を何度も何度も押し込めつつ、私は立ち入り禁止区域に向かう。

門が見える位置まで来ると、一度ミルキアさんがハイネの烟から出てくるところであった。

そういうえば、最初私を探しに来たときも彼女は堂々と侵入していつたが、ミルキアさんは立派な関係者なのであろうか。シゼル様とも交流があるようだし。

彼女曰く『手遅れ』な私であるので、特に拳動不審になる必要もないだろうと思い、私も堂々と歩を進めた。

ミルキアさんは門を出たところで私に気付き、「あ」と言つて小走りで寄つて來た。

「一度あなたのところに行ひ思つていたのです
「私に？」

こんな時間に何の用だらう。

そもそもミルキアさんがまだ自宅に帰つていないとこつのも不思

議である。

「あなたの安否確認をしに」

「ええ？この通り元気ですけど、私

「そのようですね。安心しましたわ。シゼル様があなたの悲鳴が聞
こえただなんて言うものだから、心配になつて」

「そ、そんなところまで響いてましたか、私の叫びは」

「わたくしや他の使用人達は誰も気付きませんでしたわ。シゼル様
の聴覚がズバ抜けて優れているのです。今日のアリシアの虐めに關
する話も気になつて、様子を見に行こうかと」

私はふつと自嘲の笑みを浮かべた。

「流石ミルキアさん。私が悲鳴を上げた原因は、まさしくあなたの
仰る通りでしたよ」

ミルキアさんの顔が僅かに強張る。

「何をされたのですか」

私は遠くを見やつて言った。

「ズイーガル亭のお菓子を全部食べられました」

「は？」

「ご存知ありませんか？ズイーガル亭。高級菓子折の殿堂ですよ、
あそこは」

「いえ、それは存じておりますけれど」

「楽しみにしてたのに……。私の大好きな桜のマカロンも入つてた
のに……。全部……全部食いやがりましたよあの野郎………」

はつ、いかんいかんと私は深呼吸を何度も繰り返す。少し気を抜くとめらめらと怒りが湧き出てくるから、制御するのに大変だ。この感情をエネルギーに変換できたら、結構な有効利用ができるものである。

ふと気付くとミルキアさんの頬に汗が流れていた。暑いのだろうか。彼女は場の空気を変えるようにこほん、と咳払いをひとつしてから言つ。

「それ以外の被害は今のところ特にないのですね？」
「ないですけど、私にとつてはこの被害で全て喪失したような気分ですよ。ああ……私のお菓子……。子を失った親の気持ちが手に取るようになります」
「ところであなたは何故こんなところに？」

人が我が子を失う気持ちを経験しているところ、ミルキアさんは全スルーである。

冷たいものだ。

「シゼル様にお会いしに行こうと思いまして。頼みたいことがあるのです」
「シゼル様に？」
「はい。駄目だったでしょうか」

今まで仕事だったり向こうに呼ばれたりとそれなりの理由があつたが、今回彼に会いに行くのは完全に自主的で独断的な行動である。

阻まれることは一応想定していたが、そうなつたらまた別の手を考えなくては。

しかしミルキアさんは首を横に振った。

「いいえ。そんなことはありません。あなたはもう立派に関係者ですから」

「ならば良かつたです」

「つかぬことをお聞きしますが、何がどうなつていつの間にそんなに仲良くなられましたの？」

「え。仲良くないですよ。まだ数えるくらいしか会ったことないですし」

「でも、シゼル様があなたを呼んだり、あなたがシゼル様に会いに行こうとしたりされているわけでしょう」

「シゼル様が私を呼んだのは暇潰しです、私が会いに行くのもそれなりの用があつてのことですから」

「シゼル様が暇潰しのために誰かをわざわざ呼び出したりすることなんて、私の知る限りありませんでしたわ。王家の方以外の城の人間が、シゼル様に用があつて自主的に会いに行くことも」

ミルキアさんは平然とした顔でシゼル様寂しい人間説を唱えた。
何て切ない。

「まあそれが事実ならば、私達はそれなりに親しい間柄なのかもしれませんね。でもあくまで比較的に、ですけれど。特別なことなんて何もありませんでしたよ」

「そうですか。それならば、この話はあなたにしても無駄でしょうね」

何だか含みのある言い方だったが、ミルキアさんの嫌味やら皮肉やらは日常茶飯事である。いちいち気にしていても仕方がない。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。お気遣いありがとうございます」

話に一区切りついたので、私は頭を下げて門をくぐった。
あまり遅くに押し掛けるのも迷惑だろうから、用事は早急に済ませねば。

月と星の明かりだけを頼りにハイネの煙を突き進んでいくと、後ろからもうひとつ足音が聞こえてきた。

私はぎょっとして振り返る。

一、二歩離れた後ろにミルキアさんが付いて来ていた。
暗くてわかりづらいが、薄明かりに反射する金髪を見る限り間違いないだろう。

「ミルキアさん？まだ何か用ですか？」

私がそう言つと、彼女は少し憮然としたようだった。

「わたくしが先程どこから姿を現したかお覚えてないのですか？」た
だ北東の館に戻るだけです」

「まだ仕事があるのですか」

「いいえ。ありませんわ。住居が北東の館にあるだけです」

私は瞠目した。

そして同時に閃く。

「ミルキアさんの旦那さんて、もしかしてシゼル様ですか？」

「違います」

凄まじい速度で即答された。

違うのか。

肩透かしを食いながら、少しだけ安心している自分に気付いた。あれ、私ってそんなにシゼル様のこと気に入つてたんだ。

「違うのですか。まあ確かにシゼル様は性格良いか悪いかでいったら悪いですね」

「何の話ですか」

「今日シゼル様に、ミルキアさんの旦那さんがどんな人か聞いたのです。器量はそこそこで、性格は良くも悪くもないそうです」

「……まあその意見については反論しませんが、わたくしのいないところで何ていう会話をしているのです」

「気になつたもので」

しかし北東の館に居があるといつのは驚きだ。

日に日にミルキアさんの得体の知れなさも、パーセンテージを増していく。

ミルキアさんは溜め息をひとつ吐いて歩き出したので、私もそれに倣う。

晴れた夜空の下、彼女の声がぽつりと響いた。

「後で紹介しますわ」

「本當ですか？……あ。でも、やつぱりいいです」

「何故ですか？」

「シゼル様が今度紹介してくれるつて仰つてましたので」

そう言つと、ミルキアさんは少し笑つたようだつた。

「誰が紹介しようと私の夫に変更はありませんがね。精々期待しな

「これと/or」

アーティアの声は、少し恥ずかしそうだった。

21・怖がり

今夜北東の館の門には、あのだるさつな騎士が立っていた。田によつて配置が違つのかもしれない。

ミルキアさんが先頭に立ち、館の重厚な水色の扉を押す。中は薄暗かつた。大きなシャンデリアには火が灯つておらず、壁に取り付けられたいくつかの燭台がエントランスホールをぼんやり色づけている。

僅かな生活音が奥からひそやかに聞こえてくるだけで、誰の姿も見当たらなかつた。

「シゼル様は一階の右側の廊下の、突き当たりの部屋です。それはわたくしはこれで」

そう言つて、一人私を置いてミルキアさんは左の廊下に消えようとする。

私は鳥肌を立てて彼女の制服を掴んだ。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待つてくださいー。」「何でしちゃうか」

ミルキアさんは無関心な田で私を見つめる。

「ひ、一人で行つてはまずいでしょー」「そんなことはありませんよ？」

「い、い、國家機密の研究施設なのでしょー？」

「あら。ご存知でしたね。まあこままできて知らないほうがおかしいでしょーけど。でもその点は心配ありません。國家機密の研究

ですから、あなたなどに易々見つけられるとこではやつてしませんわ」

「いえいえ、その、やつぱり念には念を入れて」

「随分国家想いですね。それはよろしいことですが、わたくし明日も早いんですね。お休みなさい」

それだけ言い置き、ミルキアさんは今度こそ廊下に消えた。

奥でぱたん、と音がしたので、恐らく皿室に帰つたのだろう。

私は改めて辺りを見回す。

だだつ広く、薄暗く、静かな場所で独りぼっち。

……正直に、一人で館を歩くのが怖いって言えば良かつた……。

私はがっくりと頃垂れた。

「そんなに怖いのなら、私が案内して差し上げようか

「ひいっ

ふいに頭上から静かな低音が落ちてきて、私はうつかり悲鳴を漏らした。

全身の毛という毛が全て逆立つたような気がする。

自分が乙女チックなキャラではないことは私自身がよく理解しているが、この性質ばかりは仕方がない。

怖いものは怖いのである。

私は冷静に今の事態を分析することにした。

まずとても怖いシチュエーションである。そしてとても怖い何かがいるらしい。それは怖い。本当に怖い。いつして怖い怖い連発するというのは、怖いという感情がどのようなものかを忘れるための私が編み出した技術である。ほんとう怖くなくなってきたぞ。さっきか

ら歯が噛み合わないのも気のせいだぞ。

「オルカ？」

あれは聞いてはいけない声である。そしてあの存在は見てはいけないものである。耳を貸して見てしまったが最後、食べられてしまうに違いない。

私にできるのは、この館から早急に逃げ出すことだ。

私は声の主を見ないよう俯きつつ、じりじりと扉に向かって後退した。

「おい」

じりじり。

「何を逃げようとしている。音でわかるぞ」

じりじりじり。

「二イ、捕獲しろ」

じりじりじりじり……ばふつ。

あと少しで扉に手が届く、というところで、後ろから何かに抱き

つかれた

「はいはーい、落ち着きましょうねー、オルカちゃんーーイお姉

「……生徒会へ寄り、なんとかなつておいた

本日二度目となる、断末魔の叫びだった。

私が落ち着きを取り戻したのは、シゼル様の采配で誰かが巨大シャンデリアに火を灯してくれてからだった。

このそこそこ広い天井にぶら下がる大きなシャンデリアに灯りを点けるのは、非常に面倒なことである。

まずレバーを操作して本体を手の届くところまで下ろし、幾十もの蠅燭を一本一本セットし、その蠅燭に火を灯し、再び本体を上に上げる。

そこまでの動作を全て見届けて、私はようやく自分の状態を確認する余裕を持てた。

現在私はエントランスホールの真ん中にへたり込んでいる。傍らには二イがいて、二階の手摺で頬杖をついているのはシゼル様である。

そして、数人の男女が騒ぎを聞きつけて集まって来ており、皆が皆私を観察している。恐らく自室で休んでいたのだろう、随分ラフな格好をしている人や、寝間着姿の人もいる。その中には呆れ顔のミルキアさんの顔もあった。

私は自分のしでかした失態を思い出し、全身の血を沸騰させた。

「えー。その。……お騒がせして申し訳ありません……」

私の言葉が頼りなさげにホールにこだます。

しかしそれについては誰も何も言わなかつた。ただただ物珍しそうな視線で、私とシゼル様をしきりに見比べている。

あの喧しい一イさえも、笑みを浮かべつつ事態を静観していた。こいつときは普通、ざわめきが生じるものである。誰も何も言わないといつのは非常に気まずく、そして奇妙であった。

やがてシゼル様が、

「全員部屋にもどれ。一イは応接間に茶を用意しろ」

といふと、それぞれ私を気にしつつ、無言で去つて行つた。

私は心中で彼等に再度謝罪する。

ホールには私とシゼル様の二人きりになつた。

シャンデリアの蠟燭は白い光の出るワーディロッジ産のものを使用しているらしく、廊下の先までかなり見渡せるくらいに明るい。

「何故逃げようとした? 私に用があつたのだろう?」

シゼル様が頭上から問いかけてくる。

「いえ……シゼル様だと氣付いていなくて……。見たら食べられると思い込んでいました……」

「あなたは言動に反して随分と臆病だな。阿保なのは言動通りだが」「うう。すみません……」

全くその通りなので、私は顔を赤くして謝るしかない。

シゼル様の表情は遠由に見ても愉快そうであった。怒つていなければましではある。

「来い。応接間に案内する」

「はい……すみません……」

私は力なく階段を上り始めた。

こんな醜態を複数の人間に晒してしまったというダメージは大きい。
少なくともミルキアさんとシゼル様には益々逆らえなくなりそうだ。

「イガ用意しておいてくれたのだろう、応接間の小さなシャンデリアには既に白い灯りが点いていた。

勧められるままに私は一人掛けのソファに腰掛け、シゼル様は机を挟んだ向かいに腰を下ろす。

薄紅と白の縦縞模様の壁紙には、王家の紋章がうつすらと刻印されている。広さも含めて、何だか可憐らしい部屋だな、と私は思った。

「リリに来る前にも、一度雄叫びを上げていたわ」

優雅に足を組んで座るシゼル様は、私のことを珍獸として楽しんでいるようである。

「雄叫びって……。まあ、今日はそのことでお邪魔したのですが」私がそう切り出すと、シゼル様の顔つきが複雑なものに変わった。驚きと苛立ちを足して二で割ったような表情だ。

「何かされたか。ミルキアも、虐めの件であなたを心配していたが」「ああ、はい。ミルキアさんには大層お気遣いいただいて、私のところまでわざわざ見に来ようとしてくれました。途中でばったり会つたのでその必要もなくなりましたが」「そうか。それで……」

シゼル様が言いかけたところで、応接間の黒檀の扉からノックの音と、続けて場違いに浮かれた女声が響く。

「みんなのアイドル・ニイですよー。お茶をお持ちしましたー」
「入れ」

ジゼル様は諦めているのか気にしないのか、彼女の妙な口ぶりは全て無視である。

「ニイは魔法瓶とカップとソーサーの載つた盆を持って入ってきた。相変わらず制服に派手なオプションを追加した格好で、今日は黄色と黒のボーダータイツを着用している。もしかして館の主人が気付けないからって好き勝手してるんじゃ、と私は訝しがる。」

彼女は手際良く紅茶を注ぎ、ひとつのかップを私の前に置き、もうひとつのかップはジゼル様に直接渡す。

「ありがとうございます。あの、先程はすみませんでした」

私は去りうとしたニイに頭を下げた。

抱きつかれたとき、あまりの恐怖に暴れまくり、勢いで彼女に暴行を加えてしまったのだ。そのせいでニイのお団子の髪型も、現在少し乱れています。

「ニイはこいつこり笑つた。

「気にしないでいいよお。面白いものが見れたから」

そう言い残して出て行く彼女の背中を見送り、私は肩を落とす。珍獸にまで珍獸扱いされた……。

「それで、何かされたのか」

シゼル様の静かな声で現実に引き戻される。私は勢い込んで話し始めた。

「はい！聞いてください、酷いんですよ。私の部屋に大事に取つておいたズイーガル亭のお菓子が消えたのです！」

「ほお」

シゼル様は咳いたきり、沈黙してしまった。やがて驚いたように口を開く。

「何だ？それだけか？」

どうやら続く言葉を待つていたらしい。私は憤慨した。

「それだけってことはないでしょう！あの菓子折りには大好きな桜のマカロンも入っていたのですよ！私はこの経験を通して我が子を失う母の気持ちがわかりました！！」

「菓子と子はあなたにとつて同意義なのだな。将来あなたの子になる人間が可哀そうなものだ」

そこまで言つて、シゼル様は何やら変な顔をした。非常に曖昧な説明であるが、私はこの表情を『変』と表現する以外の術を持たない。

何にせよミルキアさんといいシゼル様といい、私の悲痛な気持ちに同情してくれる気はさらさらないらしい。

まあシゼル様は、アリシアとミルキアさんの虜めに關しても「痛快」とか「興味深い」とか言つていたから、期待はしていなかつたが。

「それを報告するために来たのか」

「いやいや、違いますよ。ちょっとシゼル様にお願いしたいことがあります」

「お願い？」

シゼル様はふいを突かれたように小さく口を開けた。

「はい。あのですね、今まではアリシアの虜めも、私には実害がなかつたので放つておいたのですね。でも今回我が子を失うというとんでもない実害が生じました。よつて、行動を起こそうと思つのです」

「ふむ。復讐か？」

「そうしたいのはやまやまですが、リスクを考えますとビリしても平和的な解決が望ましいですね。それで、今まで当事者でありながら部外者面してきた人間に動いていただきたいと思っています」

「イヴァンか」

「流石シゼル様。頭の回転が速いですね」

イヴァンとはアリシアの恋人の名前だそうだ。

「それで、彼のお知り合いであるあなたの力を借りしたいのです」「具体的に言うと？」

「それとなくちくつちくつてやつてください」

シゼル様は紅茶を飲み干し、机に茶器を置いた。

そして腕を組んで考えるように瞼を伏せる。

しばらく経つてから、彼は虚ろな目を私のいる方向に向かた。

「私に頼み事をしてくる人間はそういうない

「奇遇ですね。私も頼み事できる人間そういうないですよ」

「寂しい奴だな」

「いえいえ。お互い様ですから」

私は真顔で言つたのだが、シゼル様は鼻で笑つたようだつた。

「まあ、だからこそ聞いてやるつとは思つ。聞いてやるつとは思つりが、私はこの方法はあまり頭の良いものとは思えない」

「それについては賛同します。でも私、部外者から被害者に昇格したはいいのですが、それでも当事者ではないわけで。こいつこいつ迂遠な方法以上にできることがないのですよ」

「可能ならばミルキアさんのように徹底的なシナリオを作つてやりたい。そのほうが面白そうだし。しかし被害者Aである私には、そんなおこがましい行動はできつゝないのである。」

「あなたがそう言つのならば、協力はしてやるつ」「わーい、ありがとひざります。シゼル様優しいですねー」

私が素直に喜ぶと、シゼル様は鮮やかに笑つた。

「世辞としても否定しておこひづ。オルカ、それは誤解だ」

「紹介しよう。ミルキアの夫だ」

「どーもー」

そう言わされたときの、舌を噛んで内臓の一部が鼻から飛び出てもおかしくないような私の驚きを想像していただきたい。

話も終わり、部屋まで戻る帰りの出来事である。

シゼル様の「途中まで送る」という言葉に遠慮なく甘え、私達は一人で館を出た。そしてすぐに、つまり館の門の前で上記のように言われたのである。

「ミルキアがいつもお世話をしまーつす、夫のシュルツ・ミルドローズでーつす」

だるそつとウザいが混ざつた口調というのは、聞いているものの神経を実に逆撫でするものだ。と、私はしみじみ思った。

「嘘です」

「何で嘘になるんだよ」

「ミルキアさんの旦那さんがこんなだるそつで眠そうで猫背な騎士なわけがありません」

「じゃあどんな奴なら納得できるんだ」

「だるそつでも眠そつでも猫背でもない人間だつたら納得して差し上げます」

「おまえは俺に人格と姿勢を矯正しろと言うのか……」

「つていうか『ミルドローズ』つていう家名、果てしなくあなたに似合わないですね、くすつ」

自称ミルキアさんの夫兼だるそつな騎士兼門番」とシュルツさんは、溜め息を吐いてシゼル様を見やつた。

「……旦那、このチビすげーむかつくんですけど」

シゼル様は感心したように頷く。

「息苦しそうにして居るのはわかつていたが、出そうと思えばどこまでも本性が出てきそうだな。シユルツ、おまえなかなか見所があるわ」

「え。それってこのチビの性格を引き出すのに長けてるってことですか？」

「むう。私はこんな猫背男に負けませんよ」

「あのセー、うちそういう厄介系女子間に会つてゐるから。まじで」

「シゼル様、ミルキアさんの旦那さんってほんとにこの人で会つてますか？」

「聞けよ」

シゼル様は真面目な顔で頷いた。

「嘘だと思うなら今度ミルキア本人に確認を取るがいい」

「うーん。そうします」

私は仕方なくこの件を保留することにする。

「おまえどうしても信じたくないのな……」

シユルツさんが呆れた声で言つてきたが、無視した。

そりやあ信じたくないに決まつてゐるわ、と心の中だけで突っ込んでおく。

「さあさあシゼル様行きましょ。私明日も寝坊しちゃつたからミルキアさんに殺されます」

「ああ」

「いい加減殺されればいいと思つぜ」

お疲れ気味の騎士を置いて、私達は石階段を降り出した。

階段となるとシゼル様の歩みも健常者並とまではいかなくなるので、私は後ろをのんびり付いて行くことにする。時々脇に咲いている竜胆じなんとうはすつかり闇と同化して、その形だけを静かに浮き上がらせていた。

「ちょっと残念でした」

ふと思いついた私は、ひんやりした大気に自分の声を放つた。

「何がだ」

シゼル様が問い合わせ返す。

当たり前の反応が、この人だと何故だか嬉しい。

「ミルキアさんの旦那さんイベントです」

「何だ。結局疑っているわけではないのか」

「シゼル様は嘘を吐かなそうです。本当のことを隠すのが上手だから、嘘を吐く必要がないのでしょうか」

シゼル様は肯定も否定もせず、ただ吐息を漏らすように小さく笑つた。

「それはそうと、私が残念がっているのは、別にミルキアさんの旦

那さんがあれだつたからじゃないのですよ

「そうか。では何故だ？」

「イベントの無駄遣いをしてしまいました。次は、ミルキアさんの旦那さんを紹介してもらつて、いづ名田で、来ようと思つてたのに

そう言つて私は、シゼル様の背中を見つめながら耳を澄ます。

すると彼は立ち止まってこちらを振り返つた。

彼の表情はただただ透明で、澄んだ無機質だつた。

「いざれあなたは今の言葉を悔いになるだらう

そんな意味不明な言葉だけ置き去りにして、シゼル様は再び歩き始める。

私は少し残念に思つた。

「いつでも来ていい」とか、「理由なんていらない」とか、そんな優しい言葉が返つてくれればいいなあ、なんて、勝手なことを頭の隅で考えていたから。

でもすぐに、「それもまたよし」と思い直していた。

私はシゼル様のことが何となく好きであるが、それはシゼル様がどこまでもシゼル様だから好きなわけである。

その考えに自分で非常に納得してしまつて、気付けば自然と口に出していた。

「それもまたよし」

ちらりと私を見やつたシゼル様の顔は、何だか優しげで、でも、それは私の勝手な解釈だつたかもしれない。

ショーヴラーグの上流階級の家庭において、双子は不吉の象徴とされている。

「卵性であるうと二卵生であるうとそれは変わらない。

理由は大きく分けて二つ。

長子の権利についての争いが起きやすいこと。そして、「双子は能力を二つに分けて生まれてきた子どもであるため、未完成な形態である」という昔からの言い伝えによる。

勿論後者の理由を本気にしている人間は、実際には多くないと思う。

しかし双子の人間は、何か劣っている点があつたり失敗したりすると、「これだから双子は」とすぐ槍玉に上げられる人種であることは間違いかつた。

特に私の場合、妹のカノンのほうが全体的に要領が良く成績も上だつたので、「オルカはカノンに良いところを全部吸い取られた」などと言われて育つてきた。

それで、母はよく私とカノンに「のよくなことを言い聞かせた。

「いいですか。世の中には詮無い人が実に多いのです。こと上流階級の者には詮無い人種の比率が非常に高い。人間権力を持つどんどん阿保になっていくのです。

この点についてはあなた達のお父様もどうしようもない阿保ですが、お父様は質の良い阿保です。わたくしが今言おうとしているのは、質の悪い阿保についてですわ。

質の悪い阿保は、あなた達のことをきっと疎むでしょう。あなた達に欠点を見出す度に、或いは何か間違いを犯す度に、『これだから双子は』と蔑むことでしょう。逆に言ひると、双子なのを理由にあなた達を蔑む輩は、質の悪い阿保です。

質の悪い阿保に会つたときは、良いですか。よく見るのでよ。……この顔です。この田つきで相手を見なさい。難しいですか？もう一度やりますよ。……口は『ああこの人は質の悪い阿保なんだな。氣の毒だな』という思いやりを込めて相手を見つめることです。世の中で生き抜くには思いやりの心が非常に大事ですわ』

よつて私とカノンは、質の悪い阿保に出会つ度に、この方法を実地に試みた。

しかし不思議なもので、この方法、私がやるとカノンがやるのとでは、効果が全く違つた。

カノンがこの表情をすると、質の悪い阿保はたちどころに眉尻を下げる、しきりに彼女に謝るのである。

これに勇気を得た私は、カノンに倣つて思いやりの表情を試してみた。しかし私の場合、どんなに思いやりを込めたとしても、相手は何故か憤慨してしまつのである。

人間というのは理不尽なものだな、と感慨深く思つたものだ。

訓練の効果はともあれ、私が今までさして双子であるといつてを気にしないで生きて来れたのは、主に母の諭しのお陰である。

* * * * *

私がジゼル様にお願いをしてから三日。

彼が頼み通りに動いてくれたからだと私は踏んでいるのだが、あれ以来私への嫌がらせはない。

皆が私を避けるのは変わらないが、実害がないのであればもうそれで良いとしよう。

そもそもそんな些細なことで離れていく友達など友達ではないのである。

寂しくなんかないやい。ぐすん。

ひとつ気になることがあるとすれば、今日一日全くアリシアの姿を見ていないことか。

彼女も私と同じく本館配属であるから、一度も会わないなんてことは滅多にない。

加えてここ最近、早番、遅番のときをを除き、食事は一緒にとっていたのに、彼女はそこにも姿を見せない。いつも窓際の席にいなし、一応探してみても見当たらなかつた。一度ならまだしも、これが朝、昼、晩と三回続くと流石に心配になつてくる。

私は夕食の後、アリシアの自室に赴いた。

しかしノックをしても返事はない。人の気配がなかつたから、恐らく留守なのだろう。

諦めて自室に帰ることにした。

使用者の館は、真ん中の突き抜けた四角形をしてい。

アリシアの部屋は同じ二階だが、私の部屋のある廊下から反対側の辺に位置する。

この時間帯はまだ全ての燭台に火が灯つていてるから明るい。ツーヴラーグ城は基本的に二十一時を過ぎると灯りが三つおきに減らされる。さらに二十四時を過ぎると全て消灯となるので、出歩く際

には角灯なり燭台なりを自身で持ち歩かねばならない。

食事会や三日前の夜の帰りなどは幸い二十四時前に戻れたので良かったが、それでも薄暗く静かな回廊を一人で歩くのは勘弁したいものである。

私は木の床をこつこつ踏み鳴らしながら、白いドアが整列する廊下を進んだ。

一番目の角を曲がったとき、私は足を止める。
せーっと血の気が退いていくのがわかつた。

私の部屋のドアが、開け放たれている。

慌てて、しかし音を立てぬよう、小走りで自室に駆け寄った。

まさかまた嫌がらせだらうか。

今回は特に食べ物を自室に置いておくことなどはしなかつたが、もし嫌がらせを目的とした侵入ならばただで済むとは思えない。

開けっ放しといつことは、もしかして犯人がまだ中にいるのかも。

不安半分、現行犯として捕まえられるといつ期待半分で、私は自室を覗いた。

結果としては、不安はそれなりに的中し、期待は霧散し、プラスアルファで疑問がによきによき湧き出できた。

私の部屋は大いに荒らされていた。

椅子は倒され、机の引き出しは全部逆でモノが散乱、毛布とシーツは床に広げられ足跡がつき、お気に入りのカップが割られている。

備品である鏡も割られていた。これってまさか私が弁償するの。

「」の状態だけを見たならば、私はひたすら怒りと悲しみに満たされただけであろう。

しかし幸か不幸か、それを許さぬ程の大きな疑問の原因が、シーツと毛布のはぎ取られたベッドの上に存在していた。

それはこの部屋に全く似合わない悠々とした姿で寝転がり、数枚の紙を手に持ち、熱心に読みふけっている。

「……ニイ？」

私がその疑問の原因の名を呼ぶと、灰色の三白眼がこちらを視界に捉えた。

「あ、オルカだ。やつほー」

言つてひらひらと片手を振る。

「やつほーじゃないわつ」

私は後ろ手にドアを閉めると肩を怒らせた。するとニイはすぐさま振った片手に力を込め、同時に首も横にぶんぶん振る。

「あ、違う違う。これやつたのあたしじゃないからつーあたしがここに来たときには既にこうなつてたからつ」

「はあ？ 何であなたがここに来るのよ。何の用よ」

「」はこつこつ笑つて、のんびりとベッドから起き上がつた。

「シゼル様に言われて様子を見に来たんだあつ。聞いた? アリシアは昨日づけで退職したんだよん」

私は息を呑んだ。

「知らない。何それ

「まあ手紙が来ることを見ると聞いてないと思つたけどねん。はいっ、アリシアからだよつ」

そう言つてニイは持つてゐる紙束から一枚抜き取り、私に差し出してきた。

何でニイが勝手に読んでるんだ、と思いつつも受け取つて読んでみる。手紙は確かにアリシアからのもので、退職することと私へのお礼が綴られていた。そしてその理由がケツコンとなつていた。

けつこん?

結婚!

「えええ何でいきなり結婚になるわけ!?

「きやははは! 行動が大胆だよねー、アリシアちゃん! あ、でも今日はアリシアちゃんだけの意思じゃないけどお

「ニイは経緯じきさつについて知つてるの?」

教えなさいよ、という威圧を込めて彼女を睨む。

「知つてるよん。シゼル様の命令で調べたからねつ

シゼル様は随分と偉い人種のようだ。

侍女に命令して調べさせると何か怖いんだけれども、気にしな

いことにしよう。

「どうか侍女は普通こんなプライベートなことを調べるために動いたり、門番をしたりはしない。

改めて思つが、ニイつて一体何者。

「あんねー、イヴァン君はさあ、イケメンでめっちゃモテて超優しいんだけど、腰抜けなんだなーっ」

「へえ？」

私は転がつていた椅子を立て直して、ニイと向かい合つて座つた。

「君がジゼル様経由で虚めのこととイヴァン坊にちくつたじやん？」

「ええ」

「それつて多分君的には、イヴァン坊に虚めしてる人達と話し合つてほしかつたつて意図でしょ」

「そうよ」

「あのねー、イヴァン坊はそんなことできない子なんだよお。こいつ、はつきりすぱつと言えないってゆーか？」

成る程、それは腰抜けである。

「あ、でもイヴァン坊のこと怒つちゃ駄目だよーっ。あれでもアリシアちゃんのことは本気で好きなんだからあ。そんでえ、波風立てずにアリシアちゃんを守る方法を考えた結果、手つ取り早くアリシアちゃんを退職させるつてことになつたんさーついでにプロポーズもしちゃえれば、フォローもばつちりーみたいな？」

「な、何という強引な手段……」

しかし」とアリシアに関して言えば隙のない手段もある。

あくまで恋人を支えることを主張していたアリシアであるが、結婚を理由に退職ということであれば、十分己の目的を果たしていることになる。

イヴァンとやらも腰抜けの割に悔れない性格をしていそうだ。

まあ私の予想していた方向ではなかつたものの、これにてアリシアの騒動は収集がつきそうなので良かつた。良かつたのだが、煮え切らないことがある。

「……アリシアが辞めたってこと、嫌がらせしてきた人達は知っているのかしら」

「もつちろん知ってるでしょ」

「じゃあ、何で私の部屋がこんな有り様なわけ？」

私は憤つた。

元から嫌がらせを受ける謂れなんてなかつたが、アリシアが消えた今、益々私が被害者になる理由がわからない。

「まあ虚めの理由なんて理由にもなんないものばっかだからねえつ「私何かしたかしら」

首を捻つて考えるものの、特に思い浮かばない。

仕事上の失敗などはよくするが、家族以外の対人関係はかなり慎重に扱つているつもりである。私的には。

「いやいや、そうじやなくてえ。アリシアちゃんが辞めたからこそ、彼女らの不満の捌け口がなくなっちゃつたわけよ。アリシアちゃんは退職して虚めとも無縁、おまけに婚約しちやつて超幸せ、イヴァン君は自分から話しあつたり誰かを傷つけたりすることなく物事が丸く治まつてめでたしめでたし。でもそれって結局、アリシアちゃん

んを慮めてた子にとってはなんも面白くないわけですよん…」

「まあ……確かに……」

「イヤがこんなまともな意見を吐いているのが何だか不思議である。

「それの捌け口が私ってわけ?」

「そゆことだねーつ。新たなターゲット見つけんのもめんどこいし、成り行きでもうオルカでいんじゃね?みたいな?ってかんじだろ? ねーつ」

私はぐでん、と瞼もたれに寄りかかった。口からは、はああと長い溜め息が漏れる。

「シゼル様、こつなることを予測していたのかしら」

「心配してあたしを寄越すつてことせ、そなだらうつねえ」

「……先に言え……」

「イヤは場に反してあははと明るく笑つた。

「シゼル様優しくないから」

「ああ……そうだつナ……」

ちくしょーほんとに優しくないなーあのやうー、と私は心の中で悪態を吐いた。

「とひりでわあ、そのアリシアからの手紙? 開けたのはあたしじゃないんだあ

「既に開いてたつてわけ?」

「せいかーい。床に散乱してたのを私が掃き集めましたあ。多分ドアのポストもチェックしたんだねー、執着愛だねーつ

「ううう、愛が重い」

「でねでね」

そこまで言いかけて、ニイは急に立ち上がった。そして椅子の背にもたれかかった私の顔を覗き込む。

「あたしがここに来たとき、散乱してた手紙はこれだけじゃあないんだよん」

言つて、持つていた残りの紙束をペシッと私の額に載せた。
この女子学生みたいなノリは何だろう、と思いながら、満更でもない私は大人しくそれを受け取る。
ニイは無邪気に微笑んだ。

「差出人、お父さん」

即座に背もたれから起き上がった。
だつて嫌な予感しかしない。

「親愛なる我が娘オルカ・コーディスへ

秋も深まる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。オルカのことだから、可愛げのなさや有り余る阿保パワーを利用して侍女職に専念していくことと思います。

私達夫婦は先日、我が息子クレスと我が娘カノン、そしてカノンの夫セラードと共に食事に行きました。オルカの好きなトナー・ジユ・ナイヤージュというレストランをちょっとびり貸し切っちゃいました。

アワビのソテーがとても美味しかったです。この手紙を読んでいるおまえの涎が目に浮かびます。

そこでの話題は勿論、愛する我が娘オルカの行く末についてです。妻のフリージスは元より、クレスやカノン、果てはセラードまでもがあまえの将来を心配していましたよ。「あいつぜつて一婚活する気ないだろ」というようなことを、皆が皆口を揃えて言つていました。

父はおまえのようにみんなに愛される娘を持てたことが幸せだし、思いやり深い家族を持つて幸せです。そして私も勿論おまえのことを見配しています。いい加減婚活しきや。そろそろ本気で週一見合いさせらるべいひ。

オルカのことを心配し過ぎて、少し筆が粗ぶってしまいました。
ごめんね。

しかし私が何と言おうと、今のところはまだおまえの心に届くこ

とはなさそうですね。

でも父はそれも時間の問題だと思つています。

オルカは中途半端に周りに気を遣う子なので、その内追い詰められて自滅していく様は容易に想像できます。しかし父はそれではいけないと思つています。オルカは中途半端に奔放な子なので、追い詰められて結婚などというルートを辿るなら、これもまたいざれ自滅するでしょう。おまえが家出してムワ・ドナの遊牧民と共に旅をする姿は容易に想像できます。

それはそれで楽しそうなのですが、父は侯爵様であり、みんなの模範になるべき立場にいるので、こう言ひます。

オルカ、恋をしなさい。

しかしおまえは恋をしろと言われて恋をする人間ではありませんね。そもそも恋をしろと言われて恋をする人間は、恋をしているとは言えないと思います。

でも、父親として、娘を恋路に導くくらいはできるかなあと思いました。

そこで、父が独自の情報網を使って綿密に調べ上げた、オルカの恋人候補リスト（城勤め平民版）を同封しておきます。厳選に厳選を重ねた父自慢の調査結果です。役職や収入、年齢は勿論のこと、顔写真やら性格やら評判やら、お得情報が盛り沢山です。

このリストに目を通す あら、この人何だか良さそうだわ 意識し出す 恋人同士に！という効果を期待しています。だから余すとこなく目を通しやがれ。

これから行儀見習いの期間、頑張つて恋人探しに専念してください。侍女の仕事とか、しなくてもいいから。父が許します。

それではお元氣で。

父・レイルズより

一枚目と一枚目を読み終えた私は、力の抜けた顔で「イのほうを振り返った。

「イ……」の手紙……あなたが来たときには既に開いてたのよね」

震える手が紙束を破つてしまわぬよう制御しつつ、恐る恐る開いた。震える手が紙束を破つてしまわぬよう制御しつつ、恐る恐る開いた。

「開いてたよー。さつきも言つたけど、床にばらばらに散らばつてたつ」

結局御せなくなつた私の両手は、紙束を真つ一つに引き裂いた。

「今頃君の恋愛事情が連綿と語り継がれてるんだろうなあ

」その夜、私は絶望の意味を知るのだった。

翌日、お昼休みを終えてすぐの時間帯、私は本館と南館を繋ぐ渡り廊下を黙々とモップがけしていた。

朝起きてから現在までの時間は、私が置かれた状況を把握するには十分なものであった。

一人とすれ違えば好奇の視線を向けられる。一人とすれ違えばひ

そひそ話が交わされる。二人以上と出くわせばそれに笑いが加わる。そして食堂に赴けば嘲笑、挑発、侮蔑の嵐である。

「オルカちゃん、恋人探しは順調かい？」

と、名も知らぬ騎士が言つ。

「そんなに困つていてるのなら、僕がイイ男紹介してあげようか？」ははつ

と、初対面の文官が言つ。

「あなた何しにここに来てるの？貴族つてやっぱ皆そういうことしか頭にないの？」

と、少し前まで可愛がつてくれていた先輩が言つ。

一言で今の感情を的確に表すとしたら、うんざりだつた。若しくは、疲れてしまつた。

手につくものを片つ端から碎いてやりたい怒りがある。実家の自室に籠つて泣き崩れたい悲しみと恥ずかしさがある。なりふり構わず己を傷つけたい情けなさがある。

そういうた気持ちが入れ替わり立ち替わり、時には一斉に襲いかつてきて、それらに応戦する力はもつ、残つていなかつた。よつて、私は戦いを放棄した。

無心で体を動かし、床が磨かれていくことにだけ、注意を集中する。

しかしそれでも思考をどこまでも抜くすることは私にはできなかつたので、できるだけ感情の混じらない事務的な態度で、これからどうすべきかを考えていた。

結論としては、行儀見習いを中退して実家に帰る、これしかなかつた。

仕事を終えたらミルキアさんに頼んで辞表をもう一、明日提出し

よつ。

繰り返し繰り返しその行動を脳に焼き付け、『じしゅ』と床を擦つた。

時折、乾拭かづぶきを交えつつ、半分程の位置に差し掛かつたとき、甘い香りが漂ってきた。

すぐに察しがついて廊下の左右に広がる南庭園を探す。やがて、ああやつぱり、と腑に落ちた。

右側の庭園の端のほうに、すんぐりとした深緑、その中に散る金粉のような小花。金木犀だ。

ふと気付けば、私は僅かに口角を上げていて、自分で吃驚した。人間って、こんなときにも笑えるんだなあ、と思つた。

しかしあ、考えてみれば私の追い詰められている理由も實に笑えるものだ。

父の阿保な手紙を虚めつ子に田撃されて、噂として広められる。だなんて、酷く幼稚な出来事である。私らしいと言えば私らしい。

そう思つて、もつと笑つてやろうと思つたのだけれど、私といつ人間は天の邪鬼で、笑おうとすれば不覚にも涙がぽろりと転がるのであった。

数滴の透明で小さな玉は、モップを掻んだ私の手の上で弾け飛ぶ。それを眺めていたら、力が抜けて、もつ止められなかつた。

ぱうぱうぱうぱう。

あんなに我慢していたのに、これで苦労も水の泡。あーあ。

無言で涙が止まるのを待つていると、後ろから私を呼ぶ声がした。

「オルカ」

生真面目な硬さを多分に含む明朗な女声。それが私の敵のものでないことはすぐにわかつたので、私は無防備に振り返った。

「はい、ミルキアさん」

思っていたよりも、言葉ははつきりと紡がれた。相変わらず涙は零れ続けていたが。

それを見たミルキアさんは顔を強張らせた。

「大丈夫ですか」

私は笑う。

「大丈夫じゃないです。泣けてきました」

ミルキアさんは表情はそのままで、しばらく無言で突つ立つていた。

多分、彼女はどうすれば良いのかがわからないのだと思う。

しかし、ミルキアさんのそうして戸惑い固まっている姿は、私は十分慰めになつた。だって、何だか可笑しいし可愛い。

私の笑いが自身に起因するのがわかつたのか、ミルキアさんは少し身じろぎして、憮然とした。

「それで、何が御用ですか？」

「城中に広まつた悪趣味な噂を聞いて。あなたは『存知ですか？』

「『』存知に決まっていますよ」

私はわざとおどけて肩を竦めてみせる。
涙も止まつてきたので良かつた。私は瞳に溜まつた水滴を手で拭う。

「『』まで尾びれ背びれが付いているのかわからないんですけど、残念ながらその噂、悪趣味な事実ですもの」

私が『』と書いたとき、ミルキアさんは怒るかな、と思つたのだが、見たところ彼女の表情に変化はなかつた。

普通に関心を示している、というような態度だ。

「では、あなたのお父上が恋人候補リストとやらを送り付けて来たのは本当ですか？」

「本当ですよ。私の父親、昔から結婚結婚と煩いのです」

「あなたが結婚相手を探しにこの城に来た、というのも本当なのでですか？」

「んーと。正確には、それは違います。父にはそういう意図があつて私を行儀見習いに出したわけですが、私にはてんでやる気がありませんでしたので」

すると何故かミルキアさんは、目に見えて落胆を露わにした。

私は今までの言動に彼女をがっかりさせる原因があつたろうかと思ひ返してみたが、どうしてこのタイミングで落胆するのか、結局わからなかつた。

「ああ、そうだ。ミルキアさん、後で辞表の用紙をいただきたいの

ですが

ミルキアさんの動きがまたしても止まつたので、私は驚いたのかと思つた。

「確かに公務員が辞表を出すときには、専用の紙がありましたよね。それとも、行儀見習いだと違うのでしょうか？」

「いえ……。そうですね、専用の書類がありますわ」

ミルキアさんは固まつたままで、口だけ小さく動かす。何だか彼女らしくない。滑稽である。

「あなた、行儀見習いをやめるのですか？」

「それは、まあ。私、この状況で続けられる程、屈強な精神を持つていませんので」

彼女はその後もしばらく固まつていたようだが、やがて呪縛が解けたかのように「わかりました」と言つて、悠々とその場を去つて行つた。

その後ミルキアさんは私の前に姿を見せなかつた。私は明日辞表を提出し、明後日にまもつ実家に帰るつもりでいたので、肩を落として自室に戻つた。

あの最悪の食堂も、三回続くと流石に慣れてきた。そして監もそれに気付いたのか、若しくは飽きてきたのか、心なしか夕食は比較的ちよっかいをかけられなかつた氣がする。飽くまで比較的であるが。

しかし昨夜のことを考へると、部屋に帰ることすら気が重い。一度あることは二度あるものだ。

本当の意味での貴重品などは持ち込んでいないし、財布だけは一応持ち歩いている。そうだとしても、これから荒らされた部屋を見るかもしれないといつのは、疲れ切つた私には重圧過ぎる。

どんより翳つた気持ちで階段を上つてると、二階だと思われるが、何やら騒がしい会話が聞こえてきた。

その内のひとつは聞き覚えのある、明るくしゃれやけりした歌うような声。

一イだ。

私は角からそつと奥の様子を窺つた。

一イと、二人の侍女、そして腰に鍵束を下げた、西館のハウスキーが私の部屋の前で揉めている。

一イの手にはハウスキーの腕がしつかと握られていた。

「離しなさいよ、気持ち悪い！私を誰だと思っているの！」

「ねえ、その台詞何回目？あたしだって何回も言つたでしょ？君が

誰かなんてあたしには何にも関係ないって」

「何様よ！何そのおかしな格好！あんたどこの配属…？」

「ひ・み・つ。君達に知る権利はないものつ」

「私達が何をしようと勝手でしようつ」

「ああ、うん、確かにそだねーつ。別にあたしの知らないところで君達が何しようがどうでもいいけどさ、偶然見ちゃつたし？それが偶然お友達に関わることだつたし？」

そんな問答を延々と続いている。

ハウスキーパーは何とかニイから逃げ出そつと試みているのだが、ニイは結構力が強いらしく、ずっと腕を握り締めたままである。

他の侍女二人は時折口を挟むものの、少し怖気づいているようだ。やや距離を取つて立つていた。

ついにはハウスキーパーは殴ろうとしたり蹴ろうとしたり、色々と暴挙に出るが、その全てをニイはひらひらとかわす。その間も片手は絶対に離さない。

暫く観察していた私だったが、自室があそこにある以上放つておくこともできないので、姿を現すことにしてた。

どう対処したものか、と考えながら。

いち早くそれを察知したのは一人の侍女であつた。彼女らは私を見ると顔を青ざめさせ、素晴らしい身のこなしで廊下の奥に駆けて行く。

「ちょっとーあんた達！」

侍女達と違い動きたくても動けないハウスキーパーは抗議の声を

上げるが、そんなものもおかまいなしに、一人は颯爽と消え去った。その鮮やかな退散っぷりはとても清々しく、私は呆気に取られつつも心の中で彼らに拍手を送った。

「あ、やつほー、オルカ」

昨夜会つたときと同じく、ニイは片手をひらひらと舞わせた。ハウスキーパーはぎょっとしてこちらを見つめる。

「御機嫌よう、オズウェイ。御機嫌よう、ニイ」

因みにオズウェイとは、大人の女性、特に貴婦人に使う、敬意を込めたツェーヴラーグ流の呼び方である。

私は足を交差させ、片手を胸に当て、華麗にお辞儀をした。

そうして、華麗に自室のドアを開け、華麗に中に身を滑り込ませ、

華麗に閉めた。

続いて華麗に鍵をかけようとしたのだが、その前にニイがドアを開けるのが早かつた。

「ちょっとちよっとオルカー、ビーウー」となのわつ

彼女はドアの隙間に何とか身を押し込め、自身をストップバー代わりにする。

口を尖らせるニイは、しかし楽しそうでもあった。

その雰囲気に、何故だか私は元氣づけられた。

不思議と自分も楽しくなつてくる。

だから私はニイの挟まつたドアを、力いっぱい押してやつた。

「むぐぐぐ

「イは唸ると、渾身の力を振り絞つたようであった。

ドアは勢い良く開き、私はすんでのところで後ずさる。

「何だよおっ。折角あたしが部屋を荒らしに来た人間を現行犯逮捕してあげたのに」

「私にそれをどうじろつて言つたのよ……」

正直なところ、今はもう犯人が誰かとか、制裁を加えることとか、そういったことに全く興味が持てなかつた。

どうせ私は数日したらここから居なくなる身であるし、犯人をどこかに突き出すにしても、その作業が面倒臭い。

そんな疲れた私の目を、イは無垢な瞳で見つめて來た。

「どうしてほしいの？」

「……どうでもいいわ」

心を込めてそう答えると、イは念点がいつたようだ。「そ」と頷くと、自然な動作でハウスキーパーの腕を離すのだった。

解放された彼女は、暫く己が自由の身であることに気付いていかつたが、やがて戸惑いながら去つて行つた。

私はそれを見送ると、ふらふらとした足取りで部屋の奥に進み、ベッドに倒れ込む。

それから顔だけ動かし、イを見上げた。

「今日もシゼル様に言われて來たの？」

「うん、そうつ。お昼前から部屋の前にいたよん」

「何でもない」とのよつて言われた彼女の言葉に、私は驚愕した。

「え……？」

起き上がり、ベッドに座り直す。

「お畳前からここにいた？」

ゆづくつ、彼女の台詞を辿るゆづて確認する。

「そう、お畳前から。そう言われたからねつ」

「……私の部屋を見張つてくれたの？」

「そだよー」

私は言葉を失つた。

素直に感動していたのだ。

目と鼻が熱くなつた。

「ニイ、ありがとつ」

私が大真面目な顔でそうゆづと、ニイは無邪氣に笑つた。

「どういたしまして。その言葉は、一倍にしてシゼル様にもかけてあげてね」

私は「そうするわ」と頷いて、顔を逸らした。

油断するとあつという間に泣いてしまつたから。

「そうそう、それでね、シゼル様からの伝言なんだけど、明日北東館に来てほしいらしいよ」

「明日? 何時頃に行けばいいのかしら」

「できれば早めに、だつて。でもまあ、大体いつでも大丈夫だと思

「うよー」

「一イは訳知り顔で言つたので、私もさして」だわらすこ「やつ」
と答えた。

確かに、時間に追われて生きるシゼル様は想像がつかない。

用事は終わしかと思つたが、一イは探し物でもあるよつて、私の
部屋をきょろきょろと見回している。

「どうかしたの？」

「あれは？ 恋人候補リストは？」

その言葉に一瞬で気分が萎えた。

全て、とまでは言わないが、ほぼ全ての元凶が阿保お父様の製作
したあのリストなのである。

「見たいの？」

「あたしは昨日見たからいいんだけど、シゼル様にあつたら持つて
来いつて言われててさつ」

私は脱力した。

どこまでいっても、彼は面白好きらしい。

こういうところがなければ、普通に良い人だと思うのだけれど。
いや、それはないか。ないわ。

私は引き出しの奥から、一応とつておいた真つ一いつのリストを取
り出して一イに渡した。

「わあい、ありがとつ。あたし的には、二番田のカイル君がイケメ
ンでお勧めなんだよねー」

「はあ？ どれよ？」

「見てないの？」

「見てないわ。興味なかつたし」

「面白いよお、これ。人権とかプライバシーとか、どこまでも無視してるよね、君のお父さん」

「あなたも悪趣味ねえ」

呆れつつもリストを覗き込んだ。

カイルさんとやらはまあ、確かにイケメンではあった。

それを一人で眺めている内に、私はいつの間にか心から笑えていふことに気付いて、ニイには内緒でちょっと泣いたのだった。

翌朝、私は珍しく自然に目が覚めた。

時計を見やると、針は五時五十分を指している。今日は早番ではないのでもう少し眠れるはずと、頭を毛布の中に押し込んだ。この時期のツェーヴラーグの朝は冷え込みが激しい。さつきまで外気に晒していた頬が冷たかった。

しかし時間が経てば時間が経つ程、意識がはつきりとしてきた。このまま毛布に包まってぬくぬくしているのも良いが、まどろみ始めたところでどうせ目覚まし時計が鳴るだろ。

私はのそりと起き上ると、白いゼンマイ式目覚まし時計に手を伸ばす。アラーム用の針をもう一周回し、ゼンマイも限界まで回しておいた。

ベッドから立ち上がり、大きく伸びをする。それに合わせて木床が少し軋む。早く目を覚ましはしても、昨日の疲れは残っているらしく何だかだるい。

生成り色のガウンを羽織り、カーテンを開ける。外には霧が立ち込めていた。

その霧を見つめていると、昨日あつたあれこれ思い出出してしまった。

朝から憂鬱な気分で私は身支度をし出した。

絶対に今日こそは辞表を貰わねば、と決意する。

顔を洗い、着替え、髪を整え、化粧を施し、洗濯の必要な衣服を持つて扉を開けた。

廊下に出ると、自室のドアの直ぐ横に見知らぬ侍女がいた。まだ少女と言つても差し支えない若さで、あどけない顔立ちをしている。

彼女は私に気付くと可愛らしく慌ててみせ、それから足を交差させ片手を左胸に当て、淑女流のお辞儀をした。

「御機嫌よう、オルカ・コーディス様」

勿論私もそれに応じ、「御機嫌ようオージス」と若い娘向きの挨拶を返すが、心中では首を捻っていた。

私とかつてのアリシア以外でこの城で働く貴族の侍女といつたら、後はもう王家の側近くらいいなものであろう。しかし彼等が私に近付いてくる理由は思い当たらない。

と思つていたら思い当たつた。父からの阿保な手紙の噂が、王家の人々にも届いていない保証はどこにもないのだ。むしろこれだけ広まっているのだから、届いてないほうがおかしい。

しかし今回ばかりは、責任の大半は父にある。どうにでもなれ、と私は腹を括つた。

「突然ですが、皇太子様がお呼びです。付いて来てくださいまし」

彼女はそう言つて、後ろの気配を確かめるようにゆっくりと歩き出した。

少し背伸びした感じはあるものの、王家の側近である」とへの誇りが窺い知れる。

当然私はその態度についてとやかく言つつもりはないので、大人しく彼女に従つた。

途中洗濯物を入れる籠に自分の衣服を放り込む。

その音で、彼女は私がきちんと付いて来ていることを知つて安心

したらしく、きびきび堂々と歩を進めた。

私はこのよくなませた子どもが嫌いであるが、若くして王城勤めといふ彼女の生活に敬意を表して、無言で歩く。

まだ食事の時間までは少しあるので、廊下に他の侍女の姿は見えない。皆起き出しているようで、それぞの部屋から生活音や気配は伝わってきた。

ひとつ気になつたのは、私を呼び出しが王様でも王妃様でもなく、皇太子様であるといつことであった。

* * * * *

皇太子様が暮らすのは南館の三階である。

王族の暮らす南館に実際に足を踏み入れるのは、これが初めてだつた。

天井の高さと回廊の広さに驚いた。政務を執り行つたり、様々な来賓を招く本館はともかくとして、ただの住居にここまでする必要があるのだろうか。

大きな柱達や床は全て大理石らしく、一列に並ぶシャンデリアの光がそれらをクリーム色に染め上げている。

回廊の真ん中には深紅の絨毯が伸びていた。

巨大な柱と柱の間に木製の古びた扉がひとつずつ鎮座している。その内のひとつを侍女の女の子が叩いた。

「スーです。オルカ・コーディス嬢をお連れいたしました」

すぐに中から返事がし、少女はドアを開けて私の中に招き入れる。どうやらここは応接間らしく、皇太子様がソファの前で立つていた。

彼は私と目を合わせると、あの困ったような笑みを浮かべる。

「『機嫌麗しゆう、オルカ嬢。朝早くにお呼び出しするなどといつ非礼をお許しください』

左胸に手を当て、丁寧な動作で礼をした。

私もそれに応じる。

少女は静かに扉を閉めると去つて行つたようだ。

通された部屋は応接間のようであつた。

北東館のそれより一倍程広い。白い壁に成された金の装飾が綺麗である。臘脂色の絨毯とソファにも金色の複雑な模様が描かれており、ああ王子様なのだなあ、と頭の悪いことを思った。

シャンデリアにぶら下がつた硝子細工が、炎を反射して輝くのに見惚れいたら、皇太子様にくすりと笑われた。

「オルカ嬢は本当に光り物がお好きなようだ」

一瞬嫌味かと思ったが、彼の劳わるような微笑みを見る限りそうではないらしい。

「ええ。安っぽい考え方ですけれども、光るものは綺麗なので好きですわ」

「それにしては夜会などで装飾品をあまり身に付けられませんね。きっとお似合いでしょ?」

「御冗談を。私、宝石などはケースにしまつて見ているだけで十分

ですの」

「謙遜なのですね」

皇太子様は関心したように頷いた。

こいつの会話は自分に不似合い過ぎて嫌いである。

鳥肌が立つていなか確認するために、ちらりと自分の腕を見やつた。

その後皇太子様に促され、ソファに腰掛ける。

皇太子様が向かいに座ったところで、先程の少女が再びやつて来た。彼女はお茶を淹れると、また直ぐに静かに姿を消す。

勧められるままに紅茶を飲み、私は素直に「美味しいです」と感嘆の声を上げた。

「それは良かつた」

「とても良い香りですね。今まで嗅いだことのないものですね。苺と薔薇でしょうか」

「そのように感じますよね。ティオンティアのノトリヤーヤという果物を混ぜたものらしいです。女性はこのようなものが好きかと思いまして、用意させました」

「初めて聞きましたわ。国内でも手に入るでしょうか」

「どうでしょ。これはティオンティア国王から贈られたものなので」

そんな当たり障りのない会話を暫く続ける。

しかし私はそれに段々飽きてきて、元より話が上手なわけでもないので、自然と言葉少なになつてきた。

早く本題になんないかなあ、とぼんやり思つてゐるところに、皇太子様はようやく切り出す。

「父上のところにあなたに関する下らぬ噂が舞い込んで来たのです。勿論私は信じてなどいのですが、父は本気にしていました」

レイルズお父様、ぴーんち、と他人事のようと思つた。

「どのような噂でしようか」

皇太子様はどつ言おつかと少し考へてゐるふうだったが、やがて訥々と語り出す。

「その、あなたが行儀見習いをしている本当の目的は、結婚相手を探すため、だとか、恋人候補リストなるものがある、とか、実際に侍女の仕事をさぼつて恋人と頻繁に会つてゐる、とか。恋人の個人名も何人か上がつています」

言つてゐる内に皇太子様の顔が赤くなつてきた。自分で言つて恥ずかしい内容だつたのだろうか。どこまでも爽やか野郎である。

「私の父上も、本氣にしているとは言つても、あなたをどうする気はないようなのでご安心ください。ただ、あのコーディス侯爵の娘なのだからあり得るかもしね、などと言つていて」

その言葉に私は自分で思うよりもむつとしていたらしく、「そうですか」と頷いた言葉はかなり低かつた。

皇太子様は私の内心に気付いてしまつたらしく、少し焦る。

「どうかお気を悪くなさらずに。ただ、父上も母上も少し心配しているだけなのです。あなたに、既に恋人がいたらどうしよう、と。それで名前の上がつてゐる者達にも厳重注意を呼び掛けっていて……」

そこまで述べて、皇太子様は口を噤んだ。あからさまに「しまつた」という顔をしている。

そこに駄目押しするかのように、私は皇太子様の言葉を繰り返した。

「心配？ 厳重注意？」

ちゃんと仕事しろ、などと注意されるのであればわかるが、王族の方々に私の恋愛事情を心配される意味はわからない。

そういえば食事会の席でも、私の言つ程ない恋のあれこれをやけに気にしていた。

一介の貴族の娘の恋路を気にするとか、どれだけゴシップ好きなんだ。心配とか大きなお世話であるし、厳重注意とか非常にお節介である。

皇太子様は顔を呆然とさせて、「すみません。今のは忘れてください」と言った。

忘れられるわけがないが、反抗できる身分でもないので、「そうですか」とふつわりぼうに返しておいた。

「今言つたことは、その内わかるかもしれませんので」「ではその噂について、訂正させていただいてもよろしこうか」

真実といつても阿保な真実であることに変わりはないが、この噂のままだと明らかに責任が私にあることになる。やじまきりんと誤解を解いておかないと。

「は、はい。お願いたします」

皇太子様はほっとしたような表情になつた。

「まず、私が結婚相手を探すためにこの城に来ている、とのことで
すが、それは間違いです。食事会でも申し上げましたが、恋人や想
い人なる者もおりません。私なりに眞面目に仕事をしているつもり
です。ですが、恋人候補リストなるものは、確かに存在します」

安堵しきつて私の話を聞いていた皇太子様の顔が、最後の言葉で
硬直した。

「それは一体……」

「そのリストは父が勝手に製作し、先日勝手に送り付けてきたもの
です。私はこの通り恋人も想い人もいませんので、父はそのことを
心配しているのです」

「成る程、そうだったのですか……」

「信じていただけますでしょうか」

「あなたがそう言つたのだから、私は信じますよ」

皇太子様はそう言つて二ヶコリと笑つた。これが俗に言つキラー
スマイルとやらではなかろうか。

父のことなどは本来伏せるべきところなのであらうが、奴にも少
しは反省してほしいと思い、私は正直に打ち明けたのだった。

「ですがそうなると、何が切つ掛けでこのよつた噂話が撒かれたの
でしょう。もしかして、郵便の仕分け業務をする者が中を見たので
しょうか」

「いえ、そうではなく……」

私は本当のことと言おつか迷つたが、私をこのよつた窮地に立た

せた相手への、報復も気遣いも、今となつては面倒なだけである。何も考えずに答えようと思つた。

「私の部屋に何者かが侵入しまして、そのとき父の手紙と、同封されたリストを見たらしいのです」

皇太子様の目が見開かれる。

「何とまあ……。ツェーヴラーグ王家の庭でそのよつな不祥事が行われたこと、重ねてお詫び申しあげます」

彼は律儀に頭を下げた。

その行為に関して私は無関心であつたし、彼が悪いなどとは毛程も思つていないので、私に隠れて私に影響する行動を取つているらしき王家への嫌味として私は意地悪を言つてやつた。

「いいえ、皇太子様は何も悪くはありませんので、お気になさらず。特に犯人にも関心はありませんので、水に流してくださいな。何せ私は明日明後日にも行儀見習いを中退させていただこうと思つているのですから」

「え」

皇太子様が、とても呆けた顔をした。

私的には気まずそうな顔を予想していただけに、純粹に驚いたような彼の顔には私も驚いた。

だつてこちとら一応貴族の娘である。働くねばといつ意志の元来ているわけではないのだから、居づらい状況になつたとき実家に日々と帰るのは当然な気がする。

「それはつまり、『実家に帰られる、とこりう』ことじょうか

「そうですね。私が」」のまま」」にいても、王家の方々に迷惑をかけるだけですしねえ」

「いえ、そんなことはありません。そんなことはありませんしどうですが…… そうですか」

皇太子様は深刻な顔で悩んでいたようだつた。

「一体彼等は何を隠しているのだらう、と改めて不思議に思つたが、やはりそのことまで明かす気はないらしい。」

煮え切らない顔で「わかりました」と言われ、その日の会談はお開きになつた。

帰り際、最後に皇太子様はこんなことを言つた。

「大変辛い状況に立たせてしまつてすみませんでした。このことについては、私のほうからも手を打ちますので、今少しお待ちください」

私はどうせここから居なくなる身であるし、今回のことを通して父には大いに反省してもらいたい。そんなことしなくてもいいのに、と独り「」ながら、私は曖昧な微笑みを返したのだった。

予想はしていたが、皇太子様と喋っていたら朝食を逃した。全くあのぼんぼんは、使用人の朝食の時間が決まっていることにも気付かなかつたのであろうか。

朝礼にはぎりぎり間に合つたので、解散するときにミルキアさんに北東館に行くことを伝える。

ついでに辞表の用紙はどうなりましたか、と聞くと、「ああ、そんなことも言つていましたわね。もう少しお待ちになつて」とかわされ、さつさと何処かに行つてしまつた。

ミルキアさんはいまいち本氣にしてくれていないような気がする。

空っぽのお腹と、それに反して思い煩いの詰まつた頭。そんな身ひとつで、私は立ち入り禁止区域にやつて來た。

ハイネの畠を歩いていると、珍しく向こうから一人の女性が歩いて來た。

背の低い赤毛の女で、恐らく私と身長が大差ない。俯きがちに歩いており、顔はよく見えなかつた。前髪も長いので、それが一層表情をわからなくしてゐる。

二つに纏めて胸まで垂らした長い髪は緩くウェーブしており、随分痛んでいるようだ。毛先がぱさぱさしていそうだと思った。

黒い柔らかそうな上着の下にモスグリーンのシャツ、そして黒い細身のパンツを履いている。その上に更に黒いエプロンを着け、腰に回したベルトには大小様々な鍔が刺さつていた。

格好からすると庭師であつた。ということは、彼女がハイネさん

なのかもしれない。

彼女はバケツを片手にぶら下げ、小さな歩幅でゆっくりと進んでいる。

すれ違つ間際になつて、彼女はようやく私に気付き、顔を上げた。薄い灰色の目と同じく色素の薄い唇が驚いたように開かれる。丸い目と低い鼻を持つ、幼い顔立ちをしていた。

「おはよう」やつまや

一応私のほうは挨拶したが、彼女のほうは再び下を向いて、やや体を硬くしながら去つて行つた。

北東館手前の門に着くと、一イイが番をしていた。

今日はエプロンドレスではなく、濃い赤を基調とした動きやすそうなパンツルックだ。よく見ると金のラインや王家の紋章が入つてゐるので、女性用の騎士の制服なのかもしれない。近衛兵に女性が何人かいるのは知っていたが、女性騎士がいるのは王家の親衛隊くらいである。滅多にお目にかかるものではない。

彼女は私を見ると大きく手を振つた。

「やつほー オルカつ。霧が晴れて来て良い朝だねえつ

一イイは霧があつたがかるうがテンションが高そつである。

「ニイ、その制服つてもしかして騎士の？」

「あ、この格好？これは騎士の制服だけど、あたしは騎士じゃないよー。動きやすい服が欲しいって言つたらシユルツが貰つて来てくれたんだ。かつこいいっしょー！」

「ええ、とでも

本当にその制服は格好良かつた。ただニイは出るとじるが出ている体系なので、少しきつそうではある。

「ニイは侍女もやるし、門番もやるの？」

「そだよ。あたしはオールマイティな役職なの。庭師をやることもあればコックをやることもあるよ。今日はシユルツがお休みの日だからあたしが門番

「ふうん。あなた不審者が来たときに鬪えるの？」

「まあそれなりにねー。あたしのことについては次があれば次に話すよん。とりあえずジゼル様んといこ、ゴーゴーだねえつ

『次があれば』。随分引つかかる言葉である。ということは次がない、つまりニイと会うのはこれが最後の可能性もあるのか。

今日ジゼル様に呼ばれたのは、てっきりいつもの気まぐれかと思つていたが、もしかしたらそんな軽い話ではないかもしれない。少し寂しくはあるが、それならそれでスマートである。私も今日彼には別れを告げようと思つていたから。

少しばかり物憂い気分で、私はニイのもとを去つた。

門の先の小さな広場では煉瓦の敷かれた円の中心で、噴水が優しげに水を流している。わざとあるのか自然に生えたのかはわからなが、一部を覆う緑と赤の薦が水に濡れて綺麗だった。

館の扉は開け放たれている。そつと中を窺つても誰もいないので、思いきつて足を踏み入れた。

夜來たときよりも生活音が雜多になつた氣はするが、それでもひつそりとしていることに変わりはない。

「すみません」

とりあえず中に向かつて呼びかけてみた。
すると一階の奥でドアの開ぐ音がして、直ぐにこの館の主が顔を出す。私はほつとして息を吐いた。

「遅かつたな」

第一声がこれかよ、と思うが、不思議と彼の傲慢な態度はさほど氣にならない。逆にいつそ清々しさとさえ感じてしまえるのだった。

「遅くなつてないですよ。朝礼の後直ぐ來たのですから。それに、私ここに來る前に皇太子様にまで呼び出されたのですよ」

皇太子様の単語を出すと、シゼル様は肩を上げる。

「皇太子が?……まあ、それならそれでいいが」

と、何やら複雑な顔で「よ」によ言つていた。その様子が少しおかしくて、私は顔に小さく笑みを浮かべた。

シゼル様はいつも、必要最低限の感情を表に出し、必要最低限の言葉を表出す、といったふうな印象が強い。

その彼が怒るとも惱むとも違つ妙な顔をして、独り言のような文章を並べるのが奇妙であった。

「応接間に行く」

そう言つて、彼は再び廊下の奥に消えた。
私もその後を追いかけた。

応接間には既にお茶の用意がしてあつた。

私の座つた席の前に、琥珀色のお茶の入つたティーカップがひとつ。シゼル様の前にも同じものがひとつ。机の端には盆と魔法瓶が置いてある。

「イガ門番についているから、お茶の世話をする人がいないのかもしれない。

別に構わないが、どこまで人手が少ないんだろう。

湯気が全く見えないとこからすると、もう冷めてしまつているらしく、シゼル様が「遅い」と言つた理由がわかつたような気がした。何となく申し訳なく思つ。

私がじつと紅茶を観察しているのがわかつたのか、シゼル様がこんなことを言つた。

「その茶は、私が良いと言つまで飲むなよ」
「どうしてですか？」

妙な要求をしてくる人だ。

彼は不敵に笑んだ。

「とある秘密がある。飲んだ後のお楽しみだ」
「もしかしてノトリヤーヤとかいう果物のお茶だつたり？」
「そんな変な名前の果物は知らん」
「今朝皇太子様が出してくれたお茶が、そういうものだつたのです」

シゼル様はさらに口角を上げた。

「そのよつなつまらない秘密ではない。いいから私がいいと呟つま
で飲むなよ」

「はあ」

胡散臭い人が胡散臭いことを言つている。正直飲んで良いと言わ
れても飲みたくない。

話が一区切りついたので、私は抗議を口にすることにした。

「それにしてもシゼル様、酷いです。イヴアンさんが腰抜けだつて
こと、教えてくれたらこんな目に合わずに済んだかもしれないのに」
「イヴアンが腰抜けだとは私も知らなかつた。書面でやり取りして
いるのは仕事の内容のみだ。性格などは量れない」

「えー。じゃあ何であの後一々を急に送り出してきたのですか
「事態がどんな風に進展していくのか、興味があつてな」

心配とかじやなかつたんかい、と私は心中で悪態を吐いた。
結局どうこう過程を辿るのであれ、行き着く結論は「シゼル様は
優しくない」とことになる。

「少なくともそう都合良いくとは思つていなかつた。その点はあ
なたにも忠告したはずだが」

「ああはー、そうでしたね、ええ、そうでしたとも……」

どんなに胡散臭かるうが、これからはシゼル様の話をきちんと受け止めるよ。私は肅々と反省する。

「随分と參つてこよつだな」

重い溜め息を吐いた私を気遣つてか、そんな言葉をかけてくれる。

「相当参りますとも」

「何故行儀見習いを辞める?」

「え、と私は息を呑んだ。ニイにゃえ、そのことはまだ言つていな
いはずなのだが。

「ミルキアに聞いた」

私の心を読んだかのように、シゼル様は答えた。

「ああ、そういうえばミルキアさんもシゼル様派でしたっけ

「それは違うがな」

「だつて私が辞めるつてこと、シゼル様にちくつてるじゃないです
か」

「彼女には彼女なりの考え方がある」

そう言つてシゼル様は少しつまらなさそうな顔をした。

シゼル様にまでこのよつたな顔をさせることができるだなんて、ミ
ルキアさんはやはり問題児キラーな気がする。

「まあそれは今はいい。何故あなたは行儀見習いを辞める?」

「何故つて……。それは先程申しました通りです。私は今の状況に
相当参つてているのです」

「つまり状況が一変すれば、あなたは辞めるつもりはない、と」

私は姿勢を正した。

「状況を変える方法をお持ちなのですか?」

自分が実家に帰れば済む話なので、今更状況を変えて欲しいとまでは思わなかつたが、私はシゼル様の考え方そのものに純粹な関心があつた。

じつことじとも、彼ならどのよつた行動を取るのだろうか。

「状況、といふか、環境を変えることなりできぬ」

「環境を変える一番手つ取り早い方法が、行儀見習いを辞める、といふことだと思つのですが」

シゼル様は目を瞑つてゆづくじと首を横に振る。

「いや。もつと手つ取り早い方法がある」

彼は私の方向に用い得る全意識を集中させつてゐるよつだつた。その顔から全ての感情が消え失せる。それは起き得る何もかもを覚悟したよつな、そんな潔い無表情だつた。

「オルカ。私の近侍にならないか

な。

空腹も、思い煩いのあれこれも全部吹つ飛んで、これ以上ない程の単純な驚きが私の全てを支配した。

全部吹つ飛んでしまつたため、当然何かを言つことなどできやしない。思考が纏まらないどころか、素直な感想すら浮いてこない。

何も言えずにシゼル様を見つめていると、沈黙の時間と比例して、彼の無表情に翳りが生まれてきているような気がした。それに理性が焦つたのか、ふつりふつりと取り留めのない思いが段々湧いてく

る。とりあえず何か口に出さねばと思つた私は、その感情を浮かぶがままに発した。

「シゼル様の近侍とか、大変そうですね」

「そうかもしれない」

「シゼル様優しくないですものね」

「否定できない」

「この館の人達みんな変人っぽいし」

「それは私のせいではないがな」

「でも、みんな根っからの性悪ではなさそうですね」

「どうかな」

「シゼル様は気まぐれに優しいときもあるし」

「気まぐれな優しさは、優しいと言えるのか」

「私、この城に来て尊やう慮めやらで性根鍛えられたので、大変な仕事でも頑張ります」

「それは心強いことだ」

無表情なシゼル様だが、発する空気が少し優しくなつた気がした。

「阿保だけど良いですか？」

私がしたその質問に、彼はやつと擦れた笑みを返してくれる。

「阿保だからいい」

私は彼の素直でない笑顔に何故だか見惚れてしまつて、いつの間にか嬉しいような悲しいような変な顔をしていた。

「あの、じゃあ、よろしくお願ひいたします」

そう言つて頭を下げる。シゼル様の笑みが深くなる。

これつてヨーディス家の法則でいくと悪い兆候なのだけれど……
あれ、大丈夫だよね、私。

「言質は確かに取つたからな」

「……今つて感動的な場面じやなかつたでしたつけ」

「そうなのか？私は別に感動を求めているわけではない」

「そりやそうでしようけど」

あつれー？と私は首を捻る。

さつきまでの自分よ、何故こんな男に見惚れだし。

「それで、先に言つておきたいことがある」

「えちよつと待つて先じやないでしょう言いたいことを言うには遅すぎるでしょう言質取られた後じやないですか不利じやないですか」

「つむさい黙れ」

「……」

シゼル様は目を細めて腕を組んだ。

ついさつきまで顔にさしていた翳りは氣のせいだったのだろうか。もしかして絶妙な演技だつたのだろうか。

私はひつそりと目の前の尊大な男を睨んだ。

見えていないので当たり前だが、そんな視線は物ともせずに、平坦な声で彼は言つた。

「実は私は、皇太子の兄だ」

「うたいしのあに？」

「交代、死の兄？」

「物騒な区切り方と発音をするな。つまり私は王族であるということだ」

「Oh! 賊!」

シゼル様の発するオーラが氷点下の温度になつてきたので、私は彼の述べた情報を混乱する頭の中で真面目に分析した。

まず皇太子の兄であるが、つまり皇太子様のお兄さんであるということなのだろう。そして王族であるということなのだから、王家の人のなのだろう。あれ、必死に分析した割には情報を噛み砕けてないよね。ていうかそのまんまでよね。そのまんまでわかるはずなんだよね。

シゼル様は、皇太子様の兄で、王族。

「シゼル様王子様説！？」

「説ではなく事実なんだが」

「斬新な妄想ですねー！」

シゼル様はふう、と短く溜め息を吐くと、また表情を一切消して、私のほうに全意識を向ける。

「オルカ」

射抜くような、包むような響き。その一言で、力が抜けてしまつ。彼の言葉が真実なのだと知らされた。

「王子様……王子様ですか。まあ確かに高貴な雰囲気は醸し出しますよね。でも雰囲気だけ高貴で実態は浮浪者ってかんじですね。高貴な浮浪者。うん、良いキャッチフレ……」

「何故あなたはそんなに現実逃避をしたがる」

「うう……だつて信じたくないですもん」

「私が王子だと不都合か」

「うーん……面倒そうではあります」

「そう、面倒そうではあるのだ。」

「王子様となつてくると、身分のことを色々考えて行動せねばならない。」

「そして王子様の近侍となると、仕事内容も単純ではなくなつてしまふ。」

「できるならこの事実は知らずにいたかった。得体の知れない偉そな研究者として接していたかった。」

「まあ……仕方ないのでいいでしょ、それは。あ、私今更シゼル様を王子様として扱うとかできないので」

「ああ。今まで通りに接してくれ。というか、確かに私は王の子ではあるが、王子のステータスは一切持つていない。本来存在していない人間なのであるから、人権すら危うい」

「……踏み込んで聞いてもよろしいでしょか?」

シゼル様は大袈裟に頷いた。

「教えて」

そう言つた彼の顔は、私を憐れむかのような笑みを浮かべていた。

長子の出産の際、双子が生まれたときには市井に出でねばならぬい。

王家にはこのよつよつしたたりがあるらしい。

理由はやはり、王権争いが熾烈化する可能性が高いから。そして、王が双子の片割れであるとイメージが悪くなるからだそうだ。

ディーダ様とシゼル様は一卵性双生児で、しかも長子であった。よつて生まれて直ぐ、ディーダ様より後に引き出されたシゼル様は、王家と交流の深いある商家に、養子として引き渡された。勿論内密に、である。

ディーダ様はシェーヴラーグのたつた一人の王子として、シゼル様は裕福な商家の息子として、お互いのことなど全く知らずに育つていつた。ある時までは。

それは十数年前に起こつたらしい。

ひどい雷雨の日だつたそつだ。

南館の近くに生えた一本の背の高い樅もみの木に、雷が落ちた。木は南館に向かつて倒れてきて、被害はさほど大きくなかったがある部屋の硝子を突き破つた。

それはディーダ様の私室であり、まさにそのとき彼は窓辺にいたらしい。

咄嗟に後退したので体は軽傷で済んだ。しかし飛び散った硝子の破片が両目に入り、結局ディーダ様は盲目になつてしまつたのである。

その時を境に、彼の今まで見ていたものが無になった。

とりわけディーダ様は油絵を描くのが好きだったそうで、美しいものも好きだった。

しかしあの日の一瞬があつたために、己の愛していたものが何の意味もなさないものに変わったのだ。

この経験は、ディーダ様の精神を大きく損なつてしまつたらしい。永遠の闇に閉じ込められた彼の心はどんどん不安定になり、やがて本人曰く歪んで、また狂つていつた。

盲目になつた上に精神を病んだ息子を見て、王様と王妃様は大層苦惱した。当時の彼を見る限り、とても民の上に立つて采配を振るうなどできそうにない。

散々悩んだ結果、王様は苦汁の決断をした。

ディーダ様とシゼル様を入れ替えることにしたのだ。

二人は、今でこそ似ても似つかないような人間ではあるが、幼き当時は瓜二つの容姿容貌だつたそうだ。

そういうえば一人とも銀髪に水色の目であるし、背格好も同じくらいであるし、顔のパーツは似てなくもないかも知れない。

境遇や体の鍛え方、性格が全く違うので、「高貴な浮浪者」と「野生の王子」という別々のタイプになつたのである。兎に角雰囲気が両極端なので、言われるまで気が付かなかつた。

ディーダ様は入れ替わるとき、一つの選択肢を「えられたらしい。ひとつは、今までシゼル様が暮らしていた商家で、今度はディーダ様が息子として暮らす、というもの。

そしてもうひとつは、王宮敷地内のある区域に生涯幽閉される、というものだつたそうだ。

ディーダ様は後者を選んだ。このときシゼル・ショーヴラーグといふ名の人間は死んだものとされ、表向きには世界に存在しないものになった、ということだった。

話を最後まで聞き終わり、私はふとした疑問を口にする。

「どうしてシゼル様は、幽閉されることを選んだのですか？」

どちらが自由かといつたら確實に商家の息子であろう。王家が懇意にしている家柄なのだから、生活も安定していくようなものだ。私だったら商家を選ぶし、それが普通な気がする。

シゼル様は曖昧な笑みを浮かべた。

「さあ、どうだつたかな。昔のことだから忘れた。狂つてもいたし」

反射的に嘘だ、と思つた。

この顔から察するに、絶対何か考えがありそうである。

まあ彼がこう言つている以上、突き止めたいとも思わなかつたが。

「じゃあこの立ち入り禁止区域は、シゼル様を隠すための区域だつたのですね。研究者とかいうのも嘘ですか？」

「それはまあ、嘘ではない。ただ、私が王子であるという事実を隠蔽するためのダミーの真実だから、虚構ではある。立ち入り禁止という時点で、この区域がそれなりの『訳有』であることは誰でも勘付くだろう。その真実を隠すには、やはりそれなりの『訳有』が必要だ。よつて国家機密の研究という、真実を隠すための真実が作られた。これは私に仕事を与えるためでもある」

「成る程。ミルキアさんや一イも、そのことを知つていいのですか？」

「ああ。基本的にこの屋敷に居を持つ者、それから王家との腹心のみが全事実を知っている。アリシアやイヴアンなど、どうしても私と接触せねばならないような者や、偶然私を目撃した者などには、半分の真実、つまり研究者で通している。勿論これも口外してはいけないことになっている」

流石国家クラスの秘密。用意周到である。

「でも、そうすると私などに王子であることを教えてしまってよろしいのでしょうか。私は行儀見習いで来ているわけであって、ここに居を持っているわけではないのですが」

シゼル様は薄く笑つた。

「ああ。だからあなたに話したことも、真実ではあるが、真実の全てではない」

謎はさらさらあるのか、と私はやや呆れた。

「シゼル様が今明かそうと思つた真実は、以上でしょうか」「そうだな、今のところは」

「そうすると私は、何故あなたを見てしまったときに、ミルキアさんの様子が極端におかしくなったのか、とか、何故王家の方々が私のことを気にするのか、とか、何故新米侍女のアリシアが、國家機密の食事会で給仕に駆り出されたのか、とか、そういうことは聞かないほうがよろしいのでしょうか」「……そうかもしれない」「ひとつ、お聞きしても良いですか?」

「何だ」

「シゼル様ご自身は、私の味方でしょうか。それとも敵でしょうか」

シゼル様の目は僅かに見開かれた。それから、愉快そうな顔をする。

「どうだらう。状況にもよる。私としてはあなたのこととは気に入っている。しかし、最終的に自分があなた、どちらを有利にするかということになれば、私は恐らく自分を選ぶだらう。」

「そうですか？」

余りにもシゼル様らしい答えたが、彼は最後にこう付け加えた。

「ただ、私を敵とするか味方とするかは、恐らくあなた次第であろうな。」

そう言つた彼の虚ろな瞳に魅入られて、私は動けなくなつてしまつた。緊張で唾を飲み込む。

何が、と問われると上手く言えないが、もうそれで十分だった。

「他に何か質問は？」

彼が足を組み換えたところで、私は呪縛のよつた拘束から解かれれる。

自由になつたとき、私の胸には確かに強く温かいものが宿つていた。

それを自覚して、私は決意と覚悟を固める。

「いいえ。あとは何も」「

ゆるゆると首を横に振つた私は、笑つていたように思つた。

何故だか今は、どんな試練や挑戦にも立ち向かえるよつた気がしたのだ。

私の明るい声に応じてか、シゼル様も楽しそうな顔をしていた。

「では、その茶は飲むなよ」

予想外のことを言わされて、私の強かな心持ちは一寸白紙に戻った。
『では』って。どんな関連があるのか。

「どうしてですか?」

「その茶が、我が研究施設の努力の結果だからだ。まあこれに関しては、私はさして貢献していないが」

「……まさか毒ですか」

私は白い目でシゼル様を眺めた。

「近からず遠からず。毒とも言えるし、治療薬とも言える。ヘイヴィーボーンをご存知か」

その名前はおぼろげながら聞いたことがあった。
アリシアの植物話で覚えている数少ない記憶だ。どうして覚えているかというと、彼女の^{うんちく}蘊蓄にしては珍しく、何やら物騒な話だったからだ。

「ツェーヴラーグでは全面的に所持・育成が禁止されている毒薬の原料ですよね。確か二十年近く前に、国内のものは全て焼却処分された、とか」

シゼル様は僅かに驚いたようだつた。

「よく知っているな」

「花好きの友人……っていうかアリシアなのですが、彼女から聞きました。可愛い花を咲かせるのでしょうか?」

「まあそう言えるのだろう。うちではこの成分を利用して、全健忘誘発剤を作るのに成功した。その茶に入っているのがそうだ」

「ゼンケンボウユウハツザイ？」

「早く言えば忘れ薬だな」

「な」

私はしげしげとティーカップに入った琥珀色の液体を見つめた。言われてみると普通の紅茶より若干色が濁っているような気もするが、気のせいだ済ませることができる程度だ。

「……どういった場合に、私にこれを飲ませる気でいたのですか？」「そこまでは言えないな」

シゼル様の唇が歪む。

「因みにこれを教えたのは私の『気まぐれの優しさ』だ。あなたの言つところの、な。本来あなたはこれを知つてはならない」

「私にどうしようと？」

「さあ。この情報が本当にあなたの役に立つかどうかもわからない。私からの礼儀として受け取つておいてくれ」

「……わかりました」

果てしなく煮え切らない気持ちであるが、私は大人しく頷いた。覚悟したはいいが、やはり相手がシゼル様となると一筋縄ではいかないようである。

「それと、あなたの行儀見習いの期間は残り如何程か？」

「ええと、来年の七月までですね」

「では原則的に、それまであなたの活動可能区域は北東館と北東庭園のみになる。事情を知らぬ外の者とは、書簡などでの連絡もとれ

ない
え

嫌というわけではなかつたが、純粹に吃驚した。それではまるで
今まで幽閉されているみたいではないか。

いやしかし幽閉されているシゼル様の近侍なのだから、それが普
通なのだろうか。その論理でいくと、これから休日全くなし！？

「手紙も駄目ですか……」

「駄目だ」

「ていうか行儀見習いの期間が終わるまでつてなると、一年近くあ
りますよね。流石にその間何の音沙汰もないと、家族が心配すると
思つのですが。勿論私の家族にだつてシゼル様のことは教えられな
いでしよう？」

「そうだな。だから、これからあなたには一歩離れておらう」と
する

「はあ。どんな？」

「後で置き手紙なるものを書け。『虚めと婚活が果てしなく嫌です。
旅に出ますので探さないでください』みたいな」

「うわあ。私だったらやつりかねない」

「だらう？」

大層楽しそうな彼の姿を見ていたら、もう細かいことはどうでも
良くなつてきた。

私は息を吐くとむんと胸を張つた。

「わかりましたよやりますよ。仰ることは何でも」

「ほう。感心な心構えだが、そう安請け合ひして良いのか？」

「拒否できるのですか？」

「できないが

やつぱりシゼル様は意地悪だ。
自分で聞いておこしてこれかい。

「もう良いのです。私は覚悟を決めましたから。とつあえずどんなに胡散臭からうが従つて差し上げます」

「覚悟？」

「そうです。あ。何の覚悟かは内緒です」

私はこいつと微笑んだ。

内緒、づくしのシゼル様に対するわれやかな反抗である。
まあ、そうでなくとも言えるよつなことじやないけれど。

「ふむ。ではおこおい探つてこくとじよつ」
「やれるもんならやつてみうです」

面田があるので強がつておぐが、彼が相手となると簡単に暴かれ
そつで怖い。といづか、既に暴かれている可能性は多分にある気が
する。

「では、一先ず話はこれで終わりだ。荷物を纏めたらまたここに来

い」

「すぐこ、ですか？」

「すぐこだ。勿論この件に關して危険はするなよ、できなことは思

うが

「了解です」

私としても、もつ食堂で注田されるのは懲り懲りだったので好都合ではある。

話に区切りがつき、シゼル様が立ち上がる。私もそれに倣つた。出口に歩いて行き扉に手をかけたところで、彼の動きが止まつた。

「そういえば、皇太子とは今朝どんな会話を?」

「皇太子様と?」

私はえーと、と考える。

今現在のイベント内容が濃過ぎて、皇太子様との会話など随分昔のように感じられた。

「ああそうそう、私に関する噂の真偽を聞かれたのでした」「それだけか?」

シゼル様の顔がこぢらに振り向く。

「主な話はそれだけですけど。あ、世間話とか社交辞令とかはありましたけどね」

「へえ」と呴いて彼はドアノブを回した。

「それがどうかしました?」

扉を開けて待つてくれるシゼル様に、私は疑問を投げかけた。

「我が弟ながら意氣地のないことだと思つて」「意氣地のない?」

「ああ」

小さくお礼を言つて、廊下に出る。

まあ少し頼りなさそうだとは思つが、今朝の会話で意氣地がないとは感じなかつた。

首を傾げたとき、シゼル様の静かな声が飛んで來た。

「オルカ」

「はい」

彼は応接間の扉を完全に閉めると、突然片手を私の顔に伸ばして來た。

私は咄嗟に小さく仰け反るが、いきなりのことだったのでそれ以上は動けない。

彼の指先が、とん、と瞑つた瞼の上に乗つた。そこから伝つようとにして五指は上方に滑つていき、やや強く頭を掴まれる。

「あなたは売約済みだからな」

「勿論」

反射的にそう反応していく、私は自分で驚いた。考える間もなく、ぐぐぐく普通に、私は領いていたのだ。

流石に恥ずかしかつたので、悟られぬように口だけを動かしてシゼル様を見る。

彼が満足そうに笑つてゐるのがせめてもの救いだつた。

またシゼル様が庭園の門まで送つてくれると誓つので、我々は一人で館を出た。

どうせ後ですぐに会つのだから、と丁重に断つうとしたら、彼はこんなことを言つた。

「庭園の門でミルキアが待つてゐる手筈だ。彼女があなたを見てどんな反応をするのか見ておきたい」

「物好きですね」

「違う、これは調査だ。ミルキアは敵にすると一番厄介かもしけん。意味は教えないがな」

そうですか、と唇を尖らせながら、彼の言葉には大いに共感せざるを得ない。

そんなわけでシゼル様を前にして石階段を降りていたのだが、彼が急に立ち止まつたので私はその背中に鼻先をぶつけた。デジヤ・ヴ。

「これはこれは。皇太子殿ではありますんか」

慇懃無礼バージョンにシフトしたシゼル様の台詞を聞いて、私は少し驚く。

彼の背中から顔を出すと、石階段を降りた先に確かに皇太子様が立つていた。彼はひょっこり姿を現した私を見ると、少し啞然とする。まあ、勤務時間内にこんなところにいるのは確かにおかしいだろ？。

シゼル様は階段を降りることはせず、その場にとどまっている。彼が段の中央にいるため、私も頭を覗かせるのが精一杯だ。

これってかなり失礼な態度だよね。シゼル様の過去話を聞いた後だから、彼の王族への応対の仕方に納得はしているけれど。

皇太子様は私とシゼル様を見比べ、やや眉をひそめた。

「シゼル。何故彼女がここに？」

意外にも皇太子様はシゼル様を呼び捨てにした。仲が良いのか、或いはその逆か。

「何故そんなことをお聞きになりたいのですか？」

無機質な聲音でシゼル様が言つと、皇太子様は眉を吊り上げる。こんな顔ができたのか、と少し驚いた。

いつもの困り笑いよりかはよっぽど男前である。

「シゼルおまえ、自分の行動に責任を持て！」

私は息を呑む。

皇太子様からは、今にも階段を駆け上りシゼル様に掴みかかりそうな獰猛さが感じられる。

普段の彼からは想像もつかないような空氣を出していた。

反してシゼル様の空氣は、冷ややかなものになつた。

「勿論私は責任を持つて行動しておりますが、何か」「なつ……」

どうやら仲は悪いようである。

皇太子様は一瞬絶句し、その直後先程よりも更に大きな声で叫んだ。

「彼女はモノではない！一人の人間だ！その運命を、おまえは易々と……」

「その言葉、そつくりそのままあなたにお返ししましょうか。私はモノではない。一人の人間だ。その運命をあなたは易々と……何でしたか？」

皇太子様が無言で唇を噛む。

「出過ぎたことを申し上げたようで。お詫びいたします。何、私は恨んでいるわけではありませんよ。望んでここに居るわけですから。あなたには恩義すら感じています。しかし皇太子殿下は大層お優しい方でいらっしゃいますので、私がこう言えれば何も口出しできないのでしきうね。それを踏まえての発言ですから、気に病まないようお願い申し上げます。さて、あなたはこのような場所にどのような御用でしきうか」

「オルカ嬢を……探していた」

その声は、先の激怒が嘘のように弱々しかった。

シゼル様はシゼル様で、さらに冷えた空気を発する。

「ミルキアか」

私には何のことと言っているのかわからなかつたが、皇太子様は無言だったので肯定したようだ。

ふいにシゼル様が私のほうに振り返った。私に向けたその顔は不機嫌そうではあるものの、冷ややかではなかつたので少し安心する。

「オルカ。皇太子殿があなたに話があるそうだ
「はあ」

今朝も話したのだから、そのとき纏めて言つてくれれば良せうなものだが。言い忘れたことでもあつたのだろうか。

シゼル様が道を空けたので、私は隣に並んで彼を見上げた。その気配に気付いたのか、彼は小さく頷いて私の背中をそつと押す。

「送れなくて悪いな」
「いえ。どうせまた直ぐ来ますし」

小さく言葉を交わすと、シゼル様は薄く笑う。私はそれを見届けて階段を降りて行つた。

「改めまして、御機嫌よう、皇太子様」

皇太子様は顔を上げた私と目が合つと、現実に引き戻されたかのような顔をした。

「あ、ええ。今日一度目ですけれども、ご機嫌麗しゅう、オルカ嬢」

礼をして、あの締まりのない笑みを浮かべる。

「少し、話をしてもよろしいですか?」
「ええ、勿論」

すつと私の前に、節くれ立つた手が差し出された。

私は少し躊躇つたが、シゼル様が盲目であることを思い出し、手を重ねた。断ることなんてできないし。

皇太子様は、さうもなく私の手を包むと、ゆっくり歩き出した。

庭園の門にミルキアさんの姿は見当たらなかつた。
いる手筈だとシゼル様が言つていたが、予定が変わつたのだろうか。

代わりというわけでは勿論ないだろうが、ハイネの畑にはまだあの庭師の女がいた。しゃがみ込み、草を切つてバケツに入れている。私達に気付いてちらりとこちらに目を向けたが、見てはいけないものを見てしまつたかのようにすぐに逸らした。しかしその場を去る気はないらしく、再び作業に戻る。

皇太子様は畑の中程まで来ると、歩みを止め、そつと私の手を離した。

ここは前後の門番も見えない位置だ。

彼は庭師のほうを向いて、呼びかけた。

「ハイネ」

やはり彼女がハイネさんだつたようだ。

彼女は今まさに鍔を入れようとしていたところで動きをぴたりと止め、振り向きもせずに掠れた声を発した。

「何

皇太子様相手に一介の庭師がこんな態度で良いのだろうか。先程彼の意外な一面を見てしまったこともあります、私は肝を冷やした。しかし当の皇太子様は特に気にしていないようだ。

「ここでこのお嬢さんと話がしたいのです。少しの間、二人きりにしてくれませんか」

ハイネさんは無言で、ちょきん、と鍔を動かし、切った草をバケツに放り込む。そしておもむろに立ち上がり、挨拶は愚かこちらに見向きもせずに去つて行った。

皇太子様は彼女が見えなくなるまで見送ると、苦笑を浮かべて私を見る。

「礼儀のなつていらない女性ですが、許してやってください。彼女は私のことが好きではないのです」

「気にしていませんわ。彼女がこの畠の主なのですね。名前が畠の呼び方に使われていることを考えますと、大層腕の良い庭師様なのでしょうね」

「ええ、まあ」

曖昧な態度で皇太子様は頷いた。

「それで、話というのは……」

「ああ、そうなのです。すみません、一日に渡つて一度も呼び出し

てしまい

全くだ、と私は独りごちる。

この男、決して嫌いではないが、兎に角疲れるのである。

「あの、まず聞いておきたいのですが、もしかして先程シゼルに、何事かを頼まれましたか？」

頼み事、といつたら勿論のことだろう。

「ええ。近侍にならないかと持ちかけられましたわ」

皇太子様の顔が強張った。

「それで、あなたは何と？」

「引き受けさせていただきました」

彼の肩ががくっと下がる。その顔には落胆が濃く表れていた。
私がシゼル様の近侍をやると、皇太子様にとつては不都合なのだろうか。

「あんな噂が流れてしましましたので、このお話をお受けするのは、私は私にとっても有益でした。仕事では彼のことを主に相手にしていれば良いですから、世間の話を気にしなくて済むでしょう？」「であれば……私を信じて待っていてほしかったのです」

彼は悲しそうな目で私のことを見つめてきた。

う。これは反則である。やめてそんな目で見ないで。

私は皇太子様からやや目を逸らしつつ、彼の言葉の意味を問うた。

「……と申しますのは？」

「忘れてしまいましたでしょうか。今朝あなたと別れる際、言いましたよね。あなたの辛い境遇については、私のほうからも手を打つ」と

そういうえばそんなことを仰っていたような気もする。はつきり言って全く期待していなかつたので忘れていた。

「それで先程、父上に話をつけってきたところだつたのです。早速あなたに報告しようと思つたらミルキアがやつて来て、あなたはシゼルに呼ばれて北東館に向かつた、と。あなたの話を聞けば彼の近侍になるのを」承してしまつていたようで、その、少しがつかりしました

「は、はあ

そこまで言つて、彼は再びその水色の瞳に力を込めた。彼の目はシゼル様のそれとは違ひ純粋に澄んでおり、滑らかに輝く。

「ですが、ここで引き下がつては男が廢つてしまつますので、一番煎じになりますが言わせてください。オルカ嬢、どうか、私の近侍になつてくれませんか」

私は彼の意氣込みに氣圧され、若干後ずさつた。

「シゼルの近侍になるよりも、条件は良いはずです。行動も制限しませんし、あなたと接する可能性のある者には噂が間違いであることを説得しておきます。南館に良い部屋も用意しましょ。食事もそこでとれるように手配します。同僚も貴族の者ばかりですから、あなたのことつてきつと良き理解者となるでしょう」

少し焦るような早口でそこまで言つて、彼はすつと息を吸い込んだ。その頬が、少し赤く染まつてゐるよう見える。

「私の近侍に、なりませんか」

何だかまるでプロポーズのよつた雰囲気だな。

ほんやつとしう思つたとき、私の中である考えが閃く。それを裏付けるよつて、食事会の夜、シゼル様に言われた言葉も。

『皇太子はあなたのことが好きだつた。今もその気持ちが変わっていないかどうかはわからないが、少なくとも眞にはかけていな』

……もしかしてこの爽やか王子、今も私のことを？

いやいや自惚れはよせ、と自戒するが、どうしてもその考えは拭いきれない。

少なくとも私は彼のことを「爽やかだけど疲れる困つた君」としか認識していないし、この気持ちは将来も変わることないと思つ。『うぐう小さな可能性だつたとしても、いつこう跡は早急に摘んでおかねば。

とすると、まず行つべきは、はつきり断ることだ。

よつて私は眉尻を下げる微笑みを浮かべ、言い放つた。

「いめんなさい。私は既に売約済みですし、心変わりはありませんの。皇太子様がこんな小娘のことを気遣つてくださり感謝はしておりますが、私は是非シゼル様の近侍になりたいと思つておりますの

よ

皇太子様は力を抜くようにせや俯いた。

「そうですか。それは……残念です」

「どうかお気を悪くなさらいでくださいね。私は皇太子様の近侍をしたくないわけではなく、シゼル様の近侍をしたかっただけです。皇太子様には、きっと私なんかよりもふさわしい近侍の方がいらっしゃいますでしょう?」

言葉は柔らかく、しかしあんたに望みはないからね、ということを念のため全面に出しておく。

だつて、彼の捨てられた仔犬のような目を見る限り、私の予想はあながち間違つてはいない気がするのだもの。

しかし何だろ?、このプロポーズを断つたような空気は。

だが、私が折角これだけ念を入れておいたというのに、再び顔を上げた彼の顔は、意外にもそこまで弱々しくはなかつた。

「わかりました。あなたがそう仰るのであれば、私は引き下がります。ですが、言っておきますが、シゼルはなかなかに気難しい人間です。何か起きたときには遠慮なく私を頼つてください」

うーん、良い男である。

その言葉はこんな脳内花畠が枯れた女には似合わないよ。うむ。

「わかりましたわ。そのときにはよろしくお願ひしますね」

結局何もかもが中途半端な私は、彼の気持ちを徹底的に打ちのめすようなこともできないのであつた。

ハイネの煙を出ると、門のところにミルキアさんが待機したいた。皇太子様のことを考慮してここで待っていたのかもしれない。

「待たせてすみません、ミルキア」

「いいえ、お気になさらず。もうよろしいの？」

「ええ」

そんな会話を交わしてから、皇太子様は私のほうに改めて向き直つた。

「それでは、私はこれにて失礼いたします。お時間を取らせてしま
い、申し訳ありませんでした」

「いいえ、とんでもござりません。お気遣いありがとうございました」

た

彼は微笑むと、背を向けて歩き出す。

その姿が見えなくなるのを見届けると、ミルキアさんは窺つよつ
な目で私を見た。

「あなたは皇太子様に付くことになりましたの？」

「はあ？」

思わず不機嫌な声を出してしまい、慌てて笑つて誤魔化す。
ミルキアさんはその間、口を開けて絶句していた。

「私があんな爽やか王子の近侍に耐えられるわけないじゃないですか

近くには門番もいるので、小声で不平をこぼす。

「断つたのですか？」

「勿論」

「ではあなたは、シゼル様の近侍に？」

「ええ」

ミルキアさんは相互の事情に精通しているらしい。
もしかして、と思って私は聞いてみた。

「ミルキアさんは、皇太子様の味方だったのですか？」

「どうじうことです？」

「シゼル様があなたのことを、敵に回すと厄介とか仰っていました
ので」

「ああ」

納得したようにぼやくと、ミルキアさんは視線を上にあげて息
を吐いた。

「別に皇太子様の味方というわけではありません。シゼル様の味方
というわけでもありません。強いて言つならば、わたくしはあなたの
味方です」

「え」

何気なく放たれたその言葉に、私は瞠目してしまった。
真意を量ろうと彼女を見つめてみるが、嘘を言つているふつでも
ない。

ミルキアさんが、私のことを純粋に考えてくれていた？

そう思つと、ぐすぐつたこよつた騒ぎ出したこよつた感情が胸の内に燃り出す。

ここの気持ちには覚えがある。

例えば、立場田当てで近付いて来た男どもをやんわりと追い払つてくれた。

例えば、ご令嬢方からいただいた貢物の菓子を分けてくれた。そう、それは兄に関する記憶である。

そのことを思いついて得心した。

ミルキアさんは、お姉さんだ。私は、彼女の言葉が嬉しかつたんだ。

私の視線に気付いたミルキアさんは、眉をひそめた。

「何ですかその田は。あなたに上げるモノは何もありませんよ」「いえこれは物欲しげな視線というわけではなくつて。えへへ。私もつきのミルキアさんの言葉に惚れました」

てれてれ笑う私に反比例するよつて、ミルキアさんは露骨に嫌そつな顔をする。

「やめてください。わたくしがあなたに味方するのは、常識的な見地から見てあなたに同情したのと、切つ掛けを作つてしまつたのが自分だからですわ」

「えへへー、それでも良いのです。これから同じ館に住むわけなので、よろしくお願ひしますね」

ミルキアさんは髪をいじりながら溜め息を吐いた。

「まあ、あなたらしいと言える選択でしたわね」

そうして彼女は身を翻す。

「さあ、荷物を纏めて行きますわよ。わたくしはあなたの監視役です。逃げ出したり、秘め事を口外したりしないための、ね。今内外界の空気でも吸つておきなさい」

私が頷いて勢い良く深呼吸すると、何故かミルキアさんは肩を震わせるのであった。

* * * * *

私の母の名はフリージス・コーディスと言つ。

旧姓はモワクルツで、公爵家の末子である。

彼女は掘りの深い華やかな顔をした美女であり、聰明で気だての良い貴婦人。つまり若き頃は、自他共に認めるモテ女であった。

この遺伝子は長子である兄に使い果たしてしまつたらしく、私とカノンは兄を恨んでいる。ちょっとは妹のことを考えて生まれてきてほしい。

しかし先にも述べたように、カノンは要領が良かつたので、多くの異性に愛されたわけではなかつたけれど、意中の男は必ず落としていた。

彼女は私の見地からしてみると、努力の人間だった。勉強も趣味も恋も、およそ彼女が「良い」と考えるものに関してはひた向きてあり一途であり。要するに真面目な人間だったのである。

彼女の生き方を眺めていた私は、つぐづぐ、このような人間こそ幸せになるべきであろうなあ、とぼんやり思つていた。

さて、自分のことを棚に置いてこんな感想を客観的に述べている私こそ、母にとつてはしじきがいのある子どもであった。よつて母は事あるごとに私に講釈を垂れたものである。カノンの倍以上は説教を聞かされていた気がする。それも主に男女の駆け引きについてのものだ。

私はその多くを右から左に聞き流していたのだが、流石に何回も繰り返されれば覚えているものも幾つかある。

そしてその中でも最も鮮明な教訓は、私の心の中心に近いところに、確かに根を下ろしていた。

それを聞かされたのは私が振られた例の夜会の、帰り道のことだ。

城で夜会が催されるときはいつも、領地の本邸ではなく、王都にある別邸に何日か滞在することにしている。

その年も我ら一族は王都に滞在しており、夜会の次の日に発つことになつていた。

生き帰りの交通手段は馬車である。

いつもは両親のペアと子ども達のグループで別れて馬車に乗り込むのであるが、そのとき母は私と一人きりで乗りたいと言い出した。

お説教が飛んでくることは容易に想像できたが、そのときの私は疲れ果てていた。抵抗する力もなかつたので大人しく母と差し向かいで座る。

やがて馬車が動き出したが、しばらく無言の時間が過ぎる。私は放心状態だったため、窓に額を押し付け、無駄に大きく揺れていた。

その日は夕暮れ前まで雨が降っていた。路面はまだ濡れており、街明かりを反射してらうらと石畳が輝いている。もう深夜に近い時間帯であったので、店は軒並み閉まつており、家の灯りもまばらであつた。

馬車の中では母の付けた香水の香りがうつすらと漂つている。勿論私も香水は付けているので、母にとつては私の香りのほりが強く感じるかもしれない。

次第に人通りの少ない街並みを見るに飽きてきた。視線を正面に戻すと、濃い緑色の別珍張りの座席に座る母と田が合つた。

「オルカ」

と高い甘い声で呼びかけられ、私はどつでも良さげな気持ちで、母の言葉に耳を傾ける。

「今日のあなたの行動は、正しいとは言えなくとも、わたくしの好みでしたわよ」

「はあ」

「これは母なりの慰めなのだろうか。だとしても今の言葉は何の気休めにもならないが、と冷めた頭で考える。

「あの王妃昔からいけ好かないのですわ。ヤウエン公爵家の一人娘なのですけれどもね。あの家とモワクルツは仲が悪くって、何かと因縁を付けてくるのですわ。ヒルダ王妃も前はわたくしの恋愛遍歴にうるさくって。あれは絶対嫉妬だと思いますのよ。その王妃の可愛い可愛い息子のダンスをあなたが断つたでしょう。わたくしづつと王妃を觀察していたのですけれども、啞然としていましたわよ。良い気味です」と

慰めじやなくて私怨の話かい、と私は心中で突っ込みを入れた。本当にうちの家族は、色々常識を外れている。私も人のこと言えないけれど。

「それでもオルカ、あなたは大層お父様に似ていらしてよ」

その言葉に私はさほど大きく揺れたわけでもないのに、窓に頭を打ちつけた。鈍い音と衝撃、何よりも母の台詞に顔をしかめる。

「お母様、それ、何にも嬉しくありません」

「あら、だつてわたくし褒めたわけではありませんもの。ただあなたの性格について事実を述べただけですわ」

事実として述べられたのであれば、尙更こちらとしては不満である。

「一体私のどこがお父様に似ていると仰るのです」

「そうですね。我がままで奔放なところでしょうか

「……まあ、迷惑をおかけしていることは存じております」

「そういうことではありませんわ。わたくしがしているのはあなたの本質の話。お父様と違うところは、あなたは自分の本性を無駄な気遣いで隠しているところでしょうがね」

母の言つたことには肯定もできなかつたが否定もできなかつた。
だから多分、合つてゐたのだろうと想つ。

「あなたのお父様はね、わたくしに對して本当にひつへ言つて寄つてきて。

わたくし最初はずつとやんわり断つていました。平民出のコ
ーディス家はあまり評判がよくありませんし、レイルズ自身はちや
めちゃな策略家で好き嫌いが大きく別れる殿方でした。わたくしは
嫌いでしたわ。でもじくらやんわりそれとなく断つたとしても、彼
はめげませんでしたのね。

いい加減むかついてきたので、一人きりになつたときにはつくり
言つてやつたのですわ。『もうわたくしの周辺をうろつくのはやめ
てくださいまし』つて。このわたくしにそんなことを言わせるまで
に、彼はしつこかったのですわ。

そのときまでに、しつこい殿方は確かに数人いらつしゃいまして、
わたくしキレたときには最終的にはつくり言つてやつたのですわ。
そうすると反応は二つに分かれます。ひとつは本気で反省して、
その後何の接触もなくなる方。^{たち}性質が悪いのはもうひとつの反応を
する方々で、逆ギレするのですわ。暴力を振られそうになつたこと
もありましたし、嫌な噂を立てられたこともあります。ですが、
二つに共通することとして、結局彼等はその時点でわたくしのこと
を諦めるのですわ。

それが、あなたのお父様は違いました。わたくしがはつきり自
分の思いをぶつけても、彼は飄々とした顔でこう言つたのですわ。
『だつて仕方がないじゃないか。私がこれぞと思う女性があなただ
つたのだから、忠節と愛を頼くすのは当然だ。それをあなたがしつ
こと感じるのは仕様のないことだが、だとしてもそれはあなたの
気持ちであり私の気持ちではない。私の気持ちはあなたの言葉では
変わらない』。

どうしようもなく自己中心的な屁理屈で、ストーカー正当化発言ですわよね。でもわたくし吃驚して、純粋に感心しましたの。恋人に不自由しなかつたわたくしにとっては、愛なんて移ろいゆく安っぽいものだと思つておりましたのよ。その考えを真っ向から否定する発言、そして行動にわたくしは興味を持つたのですわ。

それで彼のことを観察していく内に、ああこの人は阿保だけれど質の良い阿保なのだな、仕方ないから一緒に居て差し上げてもよろしくつてよ、と思い始めたわけですの」

私は神妙な顔を取り繕つて、母の話を聞いていた。
えーと、これって要するに惚氣話だよね、お母様。

「オルカ。あなたも阿保だけれど、質の良い阿保ですわ。お父様によく似ています」

「へえ」

力なく答えるのが精一杯だ。

「だからね、お父様がわたくしを見つけ出すまでに時間がかかったように、あなたも生涯の伴侶を見つけ出すまでに時間がかかるかもしません。何せあなたは奔放で我まま、そして阿保です。そのあなたの全てを受け入れられる器を持つ人間なんて、なかなかないな」と思うのです。だからね、オルカ。もしあなたがお父様のように

『これぞ』と思う方を見つけたのなら

「しつこくねちねちとめげずにストーカーをしろ」と。

私は口を尖らせ、気の抜けた視線で母を見つめる。

母はゆつくりと首を横に振った。

「そこまでは言いません。ですが」

彼女はそこでふいに語氣を弱め、静かな静かな、吐息のような声で「…」と言つたのだった。

「生涯愛と忠節を吹くべからずの、決意と覚悟は固めなさいな

「親愛なるコーディス家の皆様へ

次第に寒さも増してくる今日この頃、如何お過ごしでしょうか。お父様は冷たいお酒を沢山飲んでお腹を壊しておりませんか？お母様はそんなお父様に毎晩付き合つてお腹を壊しておりませんか？お兄様は寒さも我慢しご令嬢との逢引に出かけて、お腹を壊しておりませんか？カノンはくだらないことでお腹を壊すような人間ではありませんか？カノンはくだらないことでお腹を壊すのも一興ですよ。

因みに私は元気でやつておりますとでも書くと思つたら大間違いです。

それもこれもお父様のせいです。覚えがないとは言わせませんよ。お父様は情報通ですし、流石に私に関する噂も聞き及んでいると思いますが、念には念を入れてご説明しますね。

お父様は先日私に手紙を書いてくださいましたね。非常にお節介なリストと共に。あれが同僚にしつかりばつちり目撃されました。実はそうでなくとも私は最近俗に言つ『虚め』を受けていたのです。その一環として虚めつ子達は私の部屋に侵入し、荒らし回つて遊んでいたらしいのですが、そんなときあなたのお手紙が届いていたわけですよ。父親からの手紙だなんて、これ以上ない程ネタになりました。かくして虚めつ子達はあなたからの阿保な手紙と無駄に詳細なリストを読み、早速城中に噂を撒いたのです。そして私は皆に馬鹿にされる日々を送つております。

どうしてくれるので、とはもつ言わないことにします。

あなた達に期待するのが愚かな選択であることを、私は今までの経験で思い知らされております。また、きっと皆様は、コーディス

家の一員であればそのくらい自分で乗り切ってみせよと仰ることでしちゃうね。

そう、私はすっかり失念しておりました。

結局己の道を切り開くのは己なのです。きっとお父様は、そのことを私自身に気付かせたくて、だから渋る私を無理矢理行儀見習いに送り出したのですね。自覚するのが大変遅く、恥ずかしい限りです。

ですので、皆様の無言の叱咤激励を感じた私はこの事態を開拓すべく、新たな自分探しに出かけたいと思います。

そういえばお父様は手紙でムワ・ドナの遊牧民のところがお勧めだ、と仰ってくださいましたね。あの文面も、きっとおまえは旅に出るべきだよ、というさりげない説得が含まれていたのでしょうか。かと言つて助言通りムワ・ドナに行くのでは自分の意志とは言えませんので、また別のところに行こうかと思っておりますが。行き先は秘密です。

そういうわけで見つけられると自分探しの意味がなくなりますので、私のことは探さないでくださいね。

お父様、今までくだらぬお節介を焼いてくださいり、ありがとうございました。これで十分です。

お母様、色恋沙汰に関する様々な教訓をありがとうございました。愛と忠節、忘れません。

お兄様、貢物の横流し、大変感謝しております。あなたは私とズィーガル亭の縁を取り持つてくださった恩人でござります。カノン、私の阿保な行為に真っ当な反応を返してくださり、ありがとうございました。あなたの怒声は活力でした。

使用者の方々にもよろしくお伝えください。

オルカ・コーディスより

追伸・我が愛しき片割れ・カノンへ

最後になりますので、懺悔させてください。
あなたに謝るべきことはあり過ぎて全部思い出せないので、まあ
時効でいいかと思つていたの『ござりますが、心残りがひとつだけ
ありますので告白いたします。

カノンは聰い子なので気付いているやもしれませんが、あなたの
婚約指輪を壊したの、あれ、わざとでした。『ごめんなさい。まじで
ごめんなさい。

理由は、あなたのことだからこれもわかるとは思いますが、わから
ないのであれば今更言つのも何なので伏せておきます。
少なくとも姉は本氣で反省しております。大変恥ずかしく思つて
おります。

許してとは言いませんが、慈悲の心があるならば、正直やつぱり
許してほしかつたりします。旦那様にも『大変申し訳ございません
でした』とお伝えください。

お一人の幸福を、遠き空の下から願つております

* * * * *

北東館で働くことになつてから四日が過ぎた。
以下はその記録である。

一日目。

荷物を移動させ荷解きした後、遅めの昼食をとらせてもらひ。

その後二日に館の内部や庭園も含めた敷地の案内をしてもらひ、住人の紹介もしてもらつた。

そしてシゼル様と共に夕食をとり、私室に戻る。

一日目。

起床後シゼル様を叩き起こし、寝起きで不機嫌な彼と共に朝食をとる。

その後洗濯物やゴミを出す等朝の用事を済ませる。彼はデスクワークなので、私は飲み物の世話をしたり、掃除したりして過ごす。そして一人で昼食。

午後もシゼル様はデスクワークである。私のテリトリーは居間と寝室、書斎を繋げたシゼル様の全私室と、向かいの私の部屋である。当然一日かけて掃除するような範囲ではなく、午前中で全て終わってしまった。元々綺麗だし、よつて時々飲み物の世話をするくらいしかやることがない。

十五時半になると休憩時間なので、お茶やお菓子の用意をする。勧められるままに私もご一緒する。お菓子はおいしい。

三十分後シゼル様は再び机に向かう。やることのない私。ストレスをし出したら「田障りだ」と睨められる。

そして夕食となり、二人で食べる。

その後シゼル様は「散歩がしたい」と言い出したので、お供する。北東庭園をぶらぶら歩いた後、自室に帰った。

二日目。

起床後シゼル様を叩き起こし、寝起きで不機嫌な彼と共に朝食をとる。

その後洗濯物やゴミを出す等朝の用事を済ませる。飲み物の世話をしたり、掃除したりして過ごす。

一人で昼食をとる。

飲み物の世話をしたり、図書室に頼まれた本を探しに行ったりする。やることがないのでシゼル様の部屋を「ごぞごそ」と探索していたが、彼は気付いていないわけがないにも関わらず全くの無視である。やましいものは何もないってのかよ、ちつ。つまらないので途中でやめた。

休憩時間、お茶やお菓子の用意をする。勧められるままに私も一緒にする。お菓子はおいしい。

再び机に向かうシゼル様。やることのない私。開き直つて居間のソファで寝てもスルーだった。

そして夕食となり、二人で食べる。

その後シゼル様とお散歩をし、自室に帰った。

昼間寝てしまつたためなかなか寝付けなかつた。

四日目。

シゼル様に叩き起こされる。寝坊したらしい。「乙女の部屋に無断で入るなんて！」と憤ると、「ミルキアもいる」と親指で後方を指す。確かにいたがそういう問題ではない気もする。

寝起きで不機嫌なまま彼と朝食をとる。

以下、昨日と同じ。

五日目。

退屈過ぎてキレた。

「暇なんですけど！！」

その日シゼル様は朝からひたすらに書きものの作業をしていた。イヴアンさんに送る研究結果をまとめているらしい。

目が見えなくても文字は書くことができるそうだ。線に凹凸のついた特殊な紙を使い、それなりにバランス良く書くことができている。

それはいいとして、私にとつて問題なのは、いつになく仕事がないということである。まとめた資料は私が読み上げてチェックすることになっているが、それは全てが終わつた後だ。退屈で退屈で仕方がない。

「そりがじやないです！暇で死んでしまいます！」

「そうか」

「シゼル様は私が死んでも良いのですか！」

「暇が死因の人間を私は知らないからな」

「じゃあ私が第一人者になつて差し上げます」

「そうか」

私はうつ、と唸つた。

全く相手にしてくれない。しかし諦めてはいけない。これは重大な問題である。

私は尚も食い下がつた。

「ていうか普通近侍つてこいつらのじゃないと思うのですよ」

「何がだ」

「例えば『主人様と一緒に』飯食べるとか、有り得ないと思します
『嫌なのか』

「嫌いやないですけど」

「どうせ私と活動する時間と場所が同じなのだから、効率が良くて
いいだろ？」「

「要するに暇を持て余すくらいなら、一しき使って欲しいのです。も
つと近侍っぽいことがしたいです」

「近侍っぽいことは何だ」

「お仕事で出かけて、その付き添いとか」

「無茶言うな」

「シゼル様が引き籠りのようになんに全く動かないから、私も全く仕事が
ないのですよ」

「事実引き籠りだから仕方がない」

「大体何ですかあの寝起きの悪さは。とつとと起きてくべきことつ
とと」

「そういうあなただつて昨日今日と寝坊して不機嫌だつたろ？」

「そうそれ！もうちょっと優しく起こしてくださいよ！」

「私がされたことを再現して差し上げただけだ」

「だつてシゼル様ああでもしないと起きないと起きないのだもの。私だつて最
初は普通に優しく起こしたはずです。なのにあなたが全く起きない
から実力行使に出たまでです」

「私だつて最初は呼びかけて起いそうと試みた。ミルキアの手前で
もあるしな。しかしあなたはしきりに『カノン』『メンマジド』『メン
』などという呪詛を涎と共に吐き……」

「ち、ちよつと待つてください！だ、騙されませんよ！私は涎など
吐いておりません！何せシゼル様見えないでしょ、私の涎とか」「
『搖さぶつて起こそう』としたら偶然あなたの口元に手が当たつ……
『ぎやああああすいません私が悪かったです』お願いだからそれ以
上言わないでください」というか絶対絶対口外しないでください」

シゼル様は背を向けたまま、勝ち誇ったかのよつて鼻を鳴らした。そうして黙々とペンを動かし続ける。

対する私は深く頃垂れた。乙女に向かつて寝言やら涎やら指摘するだとか、何でデリカシーのない……！いやしかし、むしろデリカシーがないのは私のほうか？だつて寝てる間のことは操作できないし、ねえ。仕方ないよ。

つて、こんなところでめげている場合ではない！

「シゼル様、お願ひがあります」

私は姿勢を正して宣言した。

シゼル様は疲れたように溜め息を吐くと、立ち上がる。椅子の向きを私の方向へ向け、再び腕と足を組んで座った。

「何だ」

その顔は無機質で透明であるが、私は己を鼓舞して言葉を響かせた。

「暇なときは、他の使用人の仕事を手伝いたいです
「却下する」

動きも表情も全く変えずに、シゼル様は即答した。

「何ですかー、いいじゃないですかー。小まめに様子見に戻つてきますからー」

「駄目だ」

「だつて私ここにいてもあんまり意味ないですよ
「そんなことはない」

淡々とやう言われて、私は「へ？」と固まつた。

「いるだけで意味があるのですか」

「ある」

「どんな？」

シゼル様は思案するよつに天井を見つめた。

そして「何と言えば良いのか……」と言葉を発し、続ける。

「あなたの気配は精神安定剤の効果がある」

大真面目な顔でそう言われたものだから、私はつい嘆き出してしまつた。

「何故笑う」

「いえ、シゼル様の言い方回りくびくて可笑しくって、だつてそれつてつまり……」

私がいると安心するつてことじょう？

そう言葉を紡ごうとして、私は息を喉に詰まらせた。己がどんなことを口走らうとしていたのかをもう一度思い返し、全身が熱くなつていくのを感じる。左胸がどこぞにとやけにうるさい。

……私は、めっちゃ恥ずかしい台詞を吐こうとしていた！ていうかこの男、めっちゃ恥ずかしい台詞を平然と吐いた！

シゼル様は相変わらず無表情で、しかし私の気配を探り私の一動に耳を澄ましていることは確かである。

この動搖はばれただろ？か。それともわからなかつたろ？か。そんなことばかりが気になる。

「つまり？」

「……何でもござこません」

「変な奴だな」

変な奴はあんただよ！あんな臭い台詞を迂遠にアレンジして！
そう思つたとき、ある予感が私の脳裏を掠める。
もしかして私、シゼル様の評価結構高い？

かくして私の頭の中で一派が激突した。一方は自惚れんなよ調子乗るなよと自分を諫める派閥。他方は、私を名指しで近侍に置くくらいだから実は気に入られてるんじゃない？と私を離し立てる派閥。相互の意見をよくよく吟味するが、結局のところこれは他人の気持ちであるわけだから、私が一人で考えていても正しい結論が出来るものではない。

しかし、卑怯だが使ってみる価値はあるかもしれない。果たしてこのように使うもののかはわからないが、即ち、最終兵器を。

私はぼそりと呟いた。

「お願い聞いてくださいらないなら、私は皇太子様の近侍になります」

言い切つて、シゼル様の反応を窺う。

すると彼は眉をひそめ、露骨に剣呑な顔をした。普段表情変化が薄い彼が、感情をわかりやすく表すことは珍しい。それだけに今の顔は魔王降臨のような空気を持っていた。

私は思わず半歩後ずさり、何を言われたわけでもないのに言い訳をしてしまう。

「いや、だつて、皇太子様仰つてましたもの。皇太子様の近侍だつたら自由を制限されないつて。それに、何かあつたら遠慮なく頼つて良いとも言つてましたし?ま、まあ、シゼル様が他の手伝いしても良いつて仰るのであれば、別に良いんですがね」

シゼル様は「そうか」と言つて表情を消した。消したといつより、無表情によりそれまでの剣呑な空氣を覆い隠した、と言つほつが正確かもしない。

そして、飽くまで淡々とした静かな声で私に言つた。

「そう仰るのであれば、私にはあなたに特に言つこともない。去りたければ去れ」

私はしばし沈黙した。
この男、可愛くない。

「うー。何でそうなるのですかー」

肩を落とし、力の抜けた声で抗議する。

「普通引き止めるでしじうに……」

するとシゼル様の張り詰めた空気が和らいだ。同時に、彼は虚を突かれたかのような顔をする。

「引き止めて欲しかつたのか」
「そうですよ。それくらい察してくださつよ」
「ならば初めからそう言え」
「言えるかい?」

顔が熱い。多分上気しているのだろう。何だか私一人で勝手に空回っているようで恥ずかしい。

シゼル様は手を顎に当て、思案するよつに頭を伏せた。そうして数十秒経過すると、ふいに「良かるひ」と呟いた。

「気が変わった。あなたの好きにすること」

「えー……それはつまり、やつぱり出て行きたいなら出て行けと?」「違う。時間に余裕があるときには他を手伝つても良い」

「本当ですか!?」

私は左右の拳を握り締める。

シゼル様は小さく頷いた。

「ただし優先すべくはこちらだ。他の部署に当たつているときも一時間ごとに来ること。それと、食事と休憩時間は絶対に外すな」

私は満面の笑みで、何度も何度も頷いた。

「了解ですっ」

私の願いが叶つたことはもとより、彼が私を尊重してくれたことが何よりも嬉しかったのだ。

時刻は十三時を少し過ぎたところであるから、まだ使用者食堂に人がいる時間帯である。

手伝える人を探すため、私は一先ずそこを訪れることにした。

使用者食堂といつても西館のそれとは比べ物にならない程に小さなものである。そもそも北東館で働く者が少ないので、それも当然だ。

因みに私は未だにシゼル様以外の研究者とやらを見たことがない。彼は忘れ薬の開発にはさして関わっていないようなことを言つていたから、彼以外に研究者がいてもおかしくはないのだが。

食堂には十人掛けの黒い大きなテーブルがひとつ置かれているきりである。椅子は余ったものを色々と持つて来ているらしく、全部形が違う。中には細工の細かい高級そうなものもあった。共通するのは、皆等しく使い込まれて古びたもの、ということである。

制服を着ていらない者もいるので定かではないが、シユルツも含めて騎士が六人、テーブルを囲んで食事をとつていた。

入口から見て左の壁には小窓がついており、隣の厨房と繋がっている。ここから料理を受け渡しする仕組みである。昼の仕事は大体終わつたらしく、料理人のフェイさんとその弟である見習いのリウが、食器を洗つているのが見えた。因みに彼等はニイも含めると三兄妹であるらしい。上からフェイさん、ニイ、リウとなる。

私に気付いた私服の男が手を上げた。

「オルカちゃんじやねーか。どしたよ?・シゼル様と喧嘩でもしたかあ?」

途端に私は一斉に注目を浴びる。
私は手をひらひらと振った。

「違いますよ。暇だったので、何か手伝えることはないかと思つて
「暇つておまえ、旦那の近侍なのにこんなところに来てたら駄目だ
る」

シユルツが真面目に心配そうな顔をした。

「それが大丈夫なのです。ちゃんとシゼル様に了承取りましたし

私がそう言つと、何故か皆感心したような雰囲気を出した。「へ
え」とか「ほお」とか呟いている。

しかしシユルツだけは相変わらず心配げで、片手で額を抑えた。

「自分の主人に口答えしたのかよ……」

「口答えではありません。お願いです。若しくは説得
「にしたつて近侍が持ち場を離れるとか、一番やつたらいけないこ
とだ」

納得してくれそうにないので、とりあえず堅物は放つておこう。
そう思い、私は皆を見まわした。

「それで、何か手伝つことはあります?・皆様」

騎士達は首を傾げてお互いの顔を見つめ合つ。

「俺達の仕事はあんたみたいなか弱い嬢ちゃんがやるもんじゃねー
しな」

「厨房に聞いてみたらどうだ?」

私は頷いて壁の小窓のほうに歩いて行つた。
軽く叩くと、フヨイさんが直ぐに開けてくれる。彼は細い目を更
に細めて笑んだ。

「王子様が小腹減つたつて?」

「オルカじゃん!めっちゃ久しぶり!」

後ろからリウも顔を出す。

私はリウに適当に手を振つてから、首を横に振つた。

「違います。何か手伝つことないかなつて思つて」

「ん?誰が手伝ってくれんの?」

「私が」

フヨイさんは首を僅かに傾けた。

「じゃあ俺を手伝え!遊ぶぜオルカ!」

彼は割つて入ろうとするリウを眼力で黙らせると、再び一いちを
向く。

「近侍でしょ?君

「そうですけれど、暇過ぎるので他を手伝つことにしました。あ、
ちゃんと許可は取つてありますので、『安心してください』

「ふーん。お気遣いは嬉しいけど、うちはしばらく仕事はないかな。
昼のが大体終わつたところだから。これ洗い終わつたら一日お昼休

み

「あー。 そうですかー」

「今の時間帯ならハイネのところとかいいんじゃないの?」

「了解です。じゃあ行つて来ます」

彼に会釈して立ち去つたが、その前にリウに呼び止められた。

「オルカ!俺も行く!」

「嫌だ」

私は即答した。

「何でだよ、いいだろ!」

「あなたはこここの仕事があるでしょうに」

「だからもう終わるんだつて! なあフェイ、いいだろ? 別に」

フェイはここにこと笑いつつ、「うん別にいいよ。夕飯の支度前に戻つてくれば」と言った。

ほれ見ろと言わんばかりにリウは胸を張る。

「でも嫌

「何故だし!」

「足手まといになりそうだし、あなたがいるとハイネさんが嫌がり

「そ

「んなことねー!」とリウは憤つたが、同時にフェイさんが「それはあるかもね」と微笑む。

今度は私がほれ見ろと言わんばかりにリウを見返してやつた。

しかしフェイが横からフォローを入れてきた。

「まあ、連れてつてやつてよオルカちゃん。変なことじでかしたらケツ叩いていいし」

「……俺を何歳だと思つてんだよ……」

「リウのおケツなんて叩きたくありません」

「まあまあ。こいつの相手してくれるんだつたら、それがむしろ俺に」とつての手助けだし

私はうーんと唸る。彼にそいつ言われてしまつと、断る術もなくなつてくる。

「仕方がないですね……。ベビー・シッターつてことで」

フロイははつん、とこつこつ頷き、リウは「つをこ」と眉を吊り上げた。

* * * * *

リウは私より大分背の高い少年である。多分シゼル様よりも身長は高そうだ。

顔立ちはニイによく似ていて、彼も灰色の三白眼を持つ。それなりにしつかりとした体格をしているようであり、特に重いものを持つ仕事だからであろうか、肩幅が広い。髪は乳白色で、襟足だけ伸びていた。

私はリウに続いて石階段を降りて行った。

何故か彼は食堂を出てから一言も話さない。

「どうしたの？急に大人しくなっちゃって」

「べ、別に」

リウは前を向いたまま「ふつせん」にそれだけ言った。その態度が、私の悪戯心に火を点けた。

「あ、わかった。急に一人きりになつて緊張してるのでしょ？」「ちつづけーよ！」

「……」
言つて振り向いたリウの顔は真つ赤である。「うわ何このやからかいがいがある。

「はいはい初々しいお坊ちゃんまで『じゃこますね』

「違うつづつーのー。子ども扱いしやがつてー！」

「だつて子どもでしょ？？」

「はあ？おまえとおして変わらなこと思つぜー。」

あ、ちょっと嫌な予感がする。

「…………そつ…………おこづかのかじりー。」

「十四」

一瞬で心が凍りつく。

何も言わない私を不思議に思つたリウがこちりを振り返ると、何故かぎよつとされた。

「えーと、うん。もしかして、大分年上？」

「勿論ですことよ？」

「あの。うん。……」めん

そう言つて彼は階段を降りる足を早め出した。

「」の所謂「幼児体型」は、カノンと私の長年の悩みである。背が低いことは元より、手足が細く、それぞれのサイズも小さい。そして、どちらかといふと胴体のほうがほつちやりめなのである。目が大きいのは兎も角として、瞳の割合もかなり大きいことや、おでこが広いこと、それから口が小さいことも、兄に言わせれば「口り顔」らしい。

因みに胸は普通にある。嘘ではない。

しかし十四に同じ年と間違われるとか、相当ショックが大きいものである。

ひょっとして私はかなり大勢の人々に十四歳くらいだと認識されているのだろうか。いやしかし皇太子様はシゼル様が言つた「女性」と見てくれたようだし……。

そう思つたところで、ふと私は嫌な考えに行き着いてしまつた。

もしかして私、シゼル様にも子ども扱いされてたり……？
で、でも彼は目が見えないし。うん。私の本質を見てくれてるよね、きっと。

流石に声まで口り声というわけではないし、女性の中では少し低めの声質だと思っている。

しかし、今朝の涎がどうのとかいう遠慮のない言動だつたり、私が部屋で何をしようかと大体スルーという容赦だつたりを考えてみると、近侍というよりペット扱いされていない自信が無くなつてくる。

シゼル様が私を傍に置いたのつて、もしや珍獸を飼いたかつたか

らなんじゅあ。

俄かに穏やかでなくなつた空気を感じ取つたのか、リウは暫くの間何も言わず、私も無言で彼の後を追つた。

「おー、ハイネ発見！」

もう直ぐ階段を降り切るといつところで、リウが声を上げた。前方を見ると、確かに庭園にハイネさんの姿が見えた。彼女はこれから割と近い杉の樹の上で、枝に跨り剪定の作業をしている。

たちまちリウは駆け足でその大きな杉に寄つて行った。駆け足になるくらいはりきつているのかもしれないが、駆け足になるくらい、機嫌を損ねた私から一先ず逃げたかったのかもしれない。後者だと思つてゐる私は捻くれてゐるだろうか。

私は意味もないのに走る程若くはないので、そのままの足取りでリウの後を追つた。

リウの姿に気付いたハイネさんが顔を青くしたのが、遠目からでもわかつた。そんなに彼が嫌なのかと思つたら、次の瞬間その理由がわかる。

彼は杉の樹に立てかけてあつた梯子を「ていつ」と取つたのである。

「どーだ、アクジョめ、參つたか！」

と、彼は何故かふんぞり返つてゐる。

それにしても世間の十四歳とはいつも精神年齢が低かつただらうか。やはり貴族とは違うのだらうとは思つけれど、彼の性格は彼自身に問題があるような氣もある。

だつてあれ、「イの弟だからね。フヨイさんが普通なのが不思議なくらいだわ。

私はでかい団体と太いだみ声の割に幼稚な、目前の少年に声をかけた。

「やめなさい、リウ」

リウは嬉しそうに振り返る。

「だつてあの女、アクジョなんだぜ」

そう言つて彼はハイネさんを指差すので、私は無理矢理彼の手を下ろさせた。

『アクジョ』ことハイネさんは無表情を取り繕つてはいるが、降下手段を失つたことに関しては取り乱しているようで、不安げな目をしている。

「人を指差すのは失礼なことだわ。因みにレディの年齢を大幅に間違えるのも失礼なことよ」

「そ、そんなに根に持つてんのかよ。若く見えたんだから良いじゃねーか」

「限度があるわ限度が。兎に角梯子を彼女に返しなさい」

するとリウはにたあつと顔を裂くよつに大きな口を歪ませる。

「それが、あいつのアクジョつぶりを聞いたら、オルカもんなこと言つてられなくなるぜ」

「悪女とか言わないの」

一応奢めはするが、困ったものだ。

妹がいるとはいえ双子だから同じ年だし、弟がいたことは勿論ない。周囲にいた年下の男の子達は、それなりに貴族としての自覚を持つている者ばかりだった。このようなはつちやけた年下をどう扱えば良いのかがよくわからない。

加えて、彼は得意げに「こんなことを言い放ったのである。

「だつてハイネは、シゼルのことが好きなんだ！」

私は思わず「え？」と開いた口から素直に声を漏らしてしまった。この「え？」というのは、何故それが悪女だということに繋がるのか、という」と、ハイネさんと色恋沙汰が全く結び付かなかつたこと故の「え？」である。

しかしリウは益々得意げな顔をする。
あーもーーーの餓鬼どつしたらいいんだ。

とりあえず私はハイネさんの顔色を窺つた。
彼女は撫然としている。

私は自分の頭を押さえつつ、もう一度リウと皿を合わせた。

「えーと、それで？」

「何だよ、『それで？』じゃないだろーーおまえ危機一髪だろーーがーー
「ちよつと待つてよ何でそうなるのよ」

「おまえもシゼルのこと好きなんだろーー三角関係

え？何でこんな餓鬼が私の気持ちを語り切るわけ？

何せリウと会つてまともに話しているのは、自己紹介のときと今

日くらいなものである。その一日でわかる程に恋心をだだ漏れにした覚えはない。そもそも彼とシゼル様の話をした覚えがない。

私の危機的状況予測レーダーが甲高く警報を発令し始めた。

「誰がそんなこと言つてたの？」

努めて笑顔で。努めて笑顔で。

「ねーちゃん」

私は肩を落とした。

えー、ニイカよ。

彼女となると、怒りをぶつけることができない。何せ、怒りをぶつけたところでひょいひょいかわされるのがオチだろう。シユルツとかだつたら遠慮なくストレス発散できるのに。ああでもあんまりやり過ぎるとミルキアさんが怒るかな。

しかし彼女にそんな纖細なところを見分ける能力があつたとは驚きである。まあ一歩間違えれば常に危うい女だとは思つていたが、今日の話を聞いて益々悔れなくなつてきた。

「もしかしてニイはその話、館の壁に言いふらしてたりした？」

「いんや？俺が『オルカって可愛いな！』ってゆー話をしてたら、オルカはシゼルのもんだから駄目だつて言われた。……うを、何故撫でるしやめる俺は子どもじやねー！」

「いいじやない。今あなたの株が大分上がつたわよ

「うわー安いオンナだなあ

「ビニで覚えてくるのよ、そういう言葉……」

私は撫でたついでにつんとドアを押してやつた。彼は「ぬお」と言つて大袈裟に反り返る。

しかしこんな行為をするにも私は手を一杯に伸ばさねばならない。この十四歳むかつく。

「でもじゃあ、認めるんだな？ シゼルが好きだつてこと」

「「つるさい」。あなたに知る権利はないわ。大体、」主人様のこと呼び捨てにするのやめなさい」

「話逸らすなよー。全くどうでもいいつも物好きだよなー。あれのどこがいいんだか」

「兎に角今はその梯子を返しなさい」

「いいのか？ 恋敵だぜ？」

ハイネさんはひたすら冷めた目でリウを睨んでいる。どうやら結構怒りが高まつてきているようである。

「仮に恋敵だとして、どうして梯子を返さないのよ」

「え？ だつてこれ返さなかつたら、あいつは一生をこの樹の上で過ぐすんだぜ？ 晴れて恋敵がいなくなつて安心じゃねーか」

こわつ。何かこの無垢な瞳が凄く怖い。

理由のない悪戯かと思つたら、決してまともではないが理由はあつたらしい。こういうことをさらつと言える辺り、ニイと雰囲気が似ている気がする。

猿に説得は無駄と判断した私は、無理矢理梯子を奪い返し、元あつたところに戻した。

リウが「あーあー」とぼやいているが、私的にはリウの頭が「あーあー」なかんじである。

ハイネさんはリウのことをまだ警戒しているらしく、恐る恐るといつた足取りで梯子を降りて來た。

そうして彼女はさも当然のようすに梯子を持って私達の横を通り過ぎようとしたので、私は慌てて彼女を呼び止めた。

ハイネさんは嫌悪の眼差しでこちらを見た。

えー、私はむしろ助けてあげたのですけれどー。

「何

「あの、私達実はあなたを手伝いに来たのです
「はあ？」

眉を顰めるハイネさん。
心中お察ししますとも。

「明らか邪魔しに来たように見えたけれど

実は私はこのときのハイネさんの言葉に少し感動した。私が初めて聞く彼女の長めな台詞が、これだったのである。

「えー。はい、まあ、リウを連れて來たがためにこんなことになってしましましたけれども」

言つてじろりとリウを睨むと、彼は「何だよお」と不満そうに声を上げ、何処かに走り去つて行つてしまつた。野生に帰つたのだと思う。

「そもそもあなたはご主人様の近侍なはず。職務怠慢も良いところ」

元來の性質が、私への嫌悪が原因かはわからないが、随分と毒舌である。

私は段々目の前の女に怖気づいてきた。

加えてタイムリミットのことも気になつてきた。食堂に行つてか

「うう」に来たのだから、もう随分時間が立っている気がする。

一時間は結構何もできない。今回は不可抗力もあったが。

「えと、余りにも暇だったので、他の部署を手伝うこととを許されて
いるのですね」

「ご主人様に命令されたの」

「いえ、私がお願ひしたのです」

「絶対駄目。あなたは近侍。早く帰るべき」

彼女の態度は断固としていた。その表情はそこいらにいる騎士なんかよりもよっぽど武士然としており、シユルンなんて田じやない。これ以上言つても無駄である「し、帰らなければ行けない時間も恐らく迫っているので、私は「そうですか」と言つて引き下がることにした。

最後に私はふかふかと頭を下げる。

「あの、お邪魔してしまい、申し訳ありませんでした」

「本当」とハイネが言い、私は背中に嫌な汗をかいだ。
取つつき難い人だなあと思つたのだが、彼女はその直後こんなことと言つた。

「でもあんたが謝る必要はない。悪いのはリウ。……貴族の女が簡
単に腰を低くしては駄目」

そんなことを言われるとは思つていなかつたので、私は少し驚く。
少なくともハイネさんは、ただの意地悪な人というわけではないよ
うだ。

「恐れ入ります。ただ、私はここにいる以上一介の侍女と変わりありませんので」

「どうしても……駄目」

不思議に思った私は、しばしの間ハイネさんと見つめ合つ。彼女の薄い灰色の瞳はどこまでも真摯だったので、私は知らず知らずの内に頷いていた。

「……心得でおきま……」

そう答えようとしたとき、「ぐをつ」という奇声が後ろで上がつたかと思つと、頭に衝撃が走り、背後で何かが倒れる音がした。

37・怒りんぼ

状況を理解すべく、私は五感をフル活用した。

まず、私の足元から、「あー……」という呻き声が聞こえる。加えて、ぽた、ぽた、と何かが地を脆弱に打つ音もある。

それからとても寒い。全身が冷たくて鳥肌が立つ。衝撃を受けた後頭部はまだ鈍く余韻が残つており、ぐおんぐおんと血流が漲つているような気がする。

そして、服が肌に纏わり付く嫌な感触がある。無色透明の水の味、水の匂い。

つまり私は全身ずぶ濡れであった。

目の前のハイネさんも、私のように余すところなく水浸しではないものの、所々服に水が染みていたり、滴つていたりしている。彼女は何が起きているのかわからないうらしく、目を剥いて呆然と立ち尽くしていた。

足元を見ると、猿もといリウが奇声を発しながら転がっている。そして、私の周りに大きな銀の如雨露^{じよいり}が三つ、散乱していた。

「リウ」

「御免なさい」

「謝りなさい」

「御免なさいって言つてるじゃん……」

「許さない」

「な、何て理不尽な……」

それは「ちやうの口説である。

私が何をしたというのでこんな全身を刺すような冷たさに耐えねばならぬのか。

「どんぐり」

掠れた声で呟くように言つたのはハイネさんである。

兎に角混乱しているらしく、目だけがあつちへ行つたりこつちへ行つたりを忙しなく繰り返している。この人は雰囲気に反して変事に弱いようだ。

ハイネさんの問い合わせの独り言なのかよくわからない咳きに、リウは起き上がりながら答えた。

「いや、悪気はなかつたんだよ。何かさつき俺が責められてるぽか
つたからさ、一人の機嫌直そうと思つて。真面目に手伝つてやるつ
もりで、如雨露に水汲んで来たんだよ。花の水やりでもしちつて
ことで」

如雨露に水汲んだだけと云ふが、なまのよ

「如雨露を三つ積み上げて持つてきたんだけど、そこで躊躇つて、その反動で中に入つた水諸共ぶちまけちまつた。三段目の如雨露はオルカに直撃してたぜ」

「『直撃してたぜ』じゃないわよー・いつも寒いわー・風邪ひくー・ち
つきから歯が噛み合わないし頭も痛いしー・タンゴブになってるわよー・
これー」

「いやー オルカの背がもつと高けりや、頭に直撃は避けられたと思
うんだけどよ」

「うるさいわよ！ 大体何で如雨露を三つも持つてくるのよー」「一人の分も持つて来てやつたんだよ」

私が尚も言い募ろうとしたところで、肩を誰かに掴まれた。振り向くと、ハイネさんが寒さに震えながらも、私の顔を見据えている。

「早く帰つて着替えてあつたかくする。近侍が風邪をひいては駄目」

そう言つと彼女は私の手首を乱暴に掴み、北東館のほうへ歩いて行く。

突然のことだったので、私はつんのめつて膝を打つてしまつた。さつとハイネさんは顔を青ざめさせる。

消え入りそうな顔で「申し訳ない」と呟いた。

私は大丈夫、と答え、スカートを捲つて打ちどころを確認した。頭と同じように鈍い痛みが両膝に広がる。しかし間にスカートを挟んでいたのでタイツは擦り向けていなかつた。痣にはなつていそうだが、出血等はないだろう。

背後で鐘がなるような音が聞こえたので振り向くと、リウが肩を落として如雨露を片付けていた。

再び目を前に戻せば、私の汚れたエプロンドレスを見つめたハイネさんが、同じく肩を落としている。

反省モードな二人に挟まれて、私の怒りもすっかりどこかに霧散してしまつた。

一人がこの雰囲気で来るとなると、この場を仕切らねばならぬのは私の役目のようだ。

私は普段仕切られるほうなので、このような役回りは好きではないのだが、ずっとこうして三人で立ち尽くしているわけにもいかない。

嫌な悪寒がさつきから全身を駆け巡つており、いい加減本当に風邪をひいてしまいそうだったのだ。

「ほら、屋敷へ帰るのでしょうか」

私はハイネさんの手を取つた。そのときの私の心持ちとしては、実に慈愛と慰めに満ちていたような気がする。その一瞬だけは。何故一瞬しか続かなかつたかと云うと、彼女の顔がびくりと引き攣り、瞬時に自分の手を取り上げてしまつたからだ。そして険悪な目つきで私を睨んだ。

「触らないで」

私は脱力した。

何なのこの子。シンデレラの。デレシンの。はつきりしないウはリウで、いつの間にか勝手に立ち直つて、るらしく、鼻歌交じりに「わつと行くわざー」などとのたまつてゐる。

えーと。何だらう、この気持ち。何だらうこのやり場のない気持ち。コノヤリバノナイイカリ。

「もう知らない！」

両手を握り締めて言い放つと、私は唇を噛んで北東館のほうへ歩き出した。

背後で聞こえる、「何が『知らない』なんだ?」「知らない」といつやり取りが、余計に私の心中をかき乱す。

私は蹴るようにして、北東館へ続く階段を上った。

一人の言葉を何度も何度も呼び起こしては、怒りを募らせていく。

「何が『知らない』なんだ？」
「知らない」

ですってよ！

何なの！全く！ふざけんな！何が知らないって……！知らないって。知らないって……。

私の歩みは自然と止まっていた。

そうして今しがたの自分の行動を思い返し耳まで赤くなるのと同時に、絶望的な気分になつた。

呆然とした私は、暫くの間階段の中腹に立ち尽くしていた。

館の敷居を跨いだ途端、早速不機嫌な声は上から降つて来た。

「遅い」

私は敢えて声の主を見ようとはしなかつた。
その静かでぶつきらぼうな響きは、決して本気で怒つているふうではなかつたが、今は彼のことが怖かつた。

彼の透明な視線は、何も見えていないようで心の中も何も見えているかのような錯覚を覚えさせる。こういう落ち着かない感情を抱いているときにその瞳に射抜かれるというのは、酷く億劫なものがある。

「申し訳ありません。不可抗力がありまして」

よつて俯いて言った私だつたが、その心配は杞憂だつた。

「何をそんなに戸惑つている」

結局ひとたび口を開けば、私の心中など彼にとつては明け透けであるらしい。

「ですから、不可抗力がありまして」

私は混乱する気持ちを努めて抑え、事務的な口調を装つた。
そして己の靴を見つめて階段を上つていく。

階上からは足音が聞こえる。シゼル様が私のほうへ移動してきているようだ。

「震えているようだが、怯えているのか？……いや、水の匂いがするな。濡れたのか。寒いだろ？」

私は口を小心翼ひ開けて答へようとして、答えられなかつたので閉じた。

彼の言葉は全て正解だつた。

私は震えている。濡れている。寒い。そして、怯えている。しかし、少なくともこの怯えを露呈してしまつと厄介なことになる。

だから他の答えを言おうとしたのだが、恐らく私が次に何を言おうと、彼はその一言で全てを見抜くようになつた。

「オルカ？」

氣遣づけな、探るような声にて、私の心はぐるぐると搔き回され続ける。

感情で、或いは本能で動けば、私はその声に寄りかかつて行くことだらう。でもそれでは駄目だ、身を任せたら駄目だ、と理性が警告を発する。悔しかと、寂しさと、不安が飛来する。

それは確かに、彼に対する、彼等に対する、明確な恐怖であつた。

ふと気がつくと、田の前に黒い足と革靴がある。いつの間にかシゼル様が田の前まで来ていた。

今彼の虚ろな目は、私の何もかもを見定めようと睥睨してゐるだと思つた。

彼は私の一段上まで降りて来て身を近付ける。

酷く温かい手が髪を伝つて頬に添えられた。無意識の内に肩が上がつた。

私が凍えているせいか、彼のことを意識し出したせいかはわからぬが、その温もりは最初感じた死人のような、人間ではない何かのような感覚ではない。息をしている、一人の男の人の手であった。

「冷たい」

彼が囁くように笑つた。

何がおかしいのだろう。

対する私は泣きたくなつた。酷く惨めな気分だつた。

「一先ず湯を沸かそう。風呂の準備が整つまで、あなたは自室で待機している」

シゼル様はそう言い残して、私の横を通り過ぎて階下に降りて行つた。

彼の気配が消えたのを確認して、私は長い息を吐く。その吐息には、知らず知らずの内に呻きが混じついていた。

ふとした瞬間、胸の痛みと居た堪れなさを伴つて心の中に飛来する記憶がある。

後悔するようなことはそれなりにしてきたし、後悔せずともある

自分は馬鹿だなあと思うような行動は山ほどしてきた。

しかしその中でもこの出来事は群を抜いて私を痛めつけるものであり、私は飽きる程にこの光景を脳裏に刻みつけていた。自戒と自責の念を込めて。

それは我が双子の妹、カノン・コーディスに関する」と三年と少し前に遡る。

カノンは私とそっくりの容姿容貌を持つ。

違うのは髪の長さと目の色くらいなものである。一人とも髪の色は藍色で癖つ毛なのだが、私はいつも肩辺りで切っているのに対し、カノンは下ろせば腰くらいまでの長さがある。彼女はお洒落好きなので、いつも色々な纏め方や編み方を楽しんでいた。目は私が赤紫で、カノンは青紫色をしていた。

前述の通り我々の性格は全く違つたのであるが、それでも自嘲などでなくとも私は自信を持つてはつきりこう言えた。

彼女は私の片割れである、と。

カノンは共に生まれ共に育ち共に時を過ごしてきた、かけがえのない妹であった。

私としては、家族という特別な間柄の中でもさらに特別な位置に、彼女を置いていたのだろうと思う。

まして私はその時期、学生生活に終止符を打つた後だった。

私にとって一部の学友は、家族に次いで心を許せる人種であったのだが、その希少な仲間とも滅多に会うことはできなくなつた。

そうすると私の甘え対象は自然と身内の者に限られてくるわけであり、私はどうやらいつになくカノンにも依存していたらしいので

ある。

そんな時期のある夜、我が愛しき片割れは、やけに高揚した顔でデートから帰つて来た。

そして、食卓につくや否や、外出中の兄を除くコーディス家の面々にこう宣言したのである。

「今日、彼から正式に結婚を申し込まれましたの。わたくしついに、ウルグ家にお嫁に行くことになりましたわ」

そう言つてカノンは頬を染めて微笑んだ。

父と母は特に驚くこともなく、「それはめでたいことだ」「良かつたですわねえ」などと祝福の言葉をさらりと述べていたので、元々知つていたのだと思う。基本的に貴族同士の結婚は、第一に親の承諾が重要になってくるので、父のほうに先に申し込みが来ていたことは想像するに難くない。

兄にも事情が行き渡つていたのかどうかは不明だが、少なくとも現時点では私のみ、完全な置いてけぼりを食らつていた。

勿論カノンが私にも視線を寄越してきたときには、笑顔で「おめでとう」と言つておいた。きちんと笑顔で言えていたと思う。

しかし内心は穏やかではなく、かといって大いに混乱を来しているわけでもなかつた。数滴の雨粒が水面に波紋を描くかのようなざめきが、心の底辺にて起きているよつたな感覚だつた。

いづれこうなることは容易に予測できだし、理解もできていた。生まれ持つた家族だからこそ、それをそのままの形で維持していくことは難しい。それに、維持していくことは自然の理に反する。父と母は対になつたので一人という括りが帰結先であるが、私と

兄と妹の帰結先は恐らく異なる。異なることが普通だし、異なることを両親も望んでいる。

だから私も、いつかは皆別々の道を辿るのであるつと、未練たらたらではあるもののそれなりの覚悟は決めておいたつもりだった。

しかし当のカノンが己の道を決した日といつのは、あまりにも突然に、そして呆気なく来てしまった。つまり肩透かしを食らつたような、そんな気分だつたのだ。

だからこそ私は、笑顔で彼女を祝福できたのである。

そのときの私は些か拍子抜けしていた。いざその日が来てしまえば何だこんなものなのか、とも思つた。

けれども心の底で起きているざやめきは止まらなかつたし、家族との談笑から自分はどこか距離を置いてこるようであつたし、何か他のことを考へることもできなかつた。

空虚であった。

つまりそのときの私の状態は、単に事態を未だ飲み込めていないに過ぎなかつたようだ。

そのことがわかつたのは、カノンが婚約してから数日経つたときのことである。

凍えた心もお湯で溶かせたらいいのに。

そう願つて、私は鼻先までも水面下に沈めた。

その中でふくふくと氣泡を吐き切ると、騒ぐ頭と胸が少しほ落ち着く気がした。

今私がいるのは、自室に備え付けられた小さなバスルームである。傾いた秋の日差しが、クリーム色の壁や浴槽、水色のタイルの彩度を上げている。普段陽の出ている内に湯浴みをする習慣のない私は、酷く奇妙な気分になった。

バスタブに浸かっている分には体の震えも収まるが、それと反比例するように、今度は頭がぼーっとしてくる。これは本当に風邪を引いたのかもしれない。

しかしそれならそれで好都合だと、私は霞みがかった意識に身を委ねようとした。そうすると今度は決まって考えたくないことを考えてしまつ。

先程湯の準備が整つたとニイに告げられたとき、ついでにこんなことを言われた。

「大事にされてるねえ、オルカ！きひひ！」

そのとき否定しようとして否定できなかつたことが、私の心に薄い影を落としていた。

何のことかとか、そんなことは勿論聞けなかつた。私とて、ここまで来て彼女の言葉の意味を悟れぬ程唯我独尊ではない。

私は近侍にあるまじき多くの自由を許されている。近侍にあるまじき言動を容赦されている。彼と一緒に食事をし、一緒にお茶を楽しんでいる。反抗しても失敗しても本気で怒られたことはないし、無茶な我が儘も聞いてくれた。バスルーム付きの客間を使わせてもらっているというのは、主人の部屋からの距離を考えると説明がつくにしても、近侍一人のために毎晩から湯を沸かすだなんて、聞いたこともない。

明らかに私は大事にされていた。

そして私は無意識の内に、彼の厚意に、思う存分甘えていたのだ。

先程私はリウとハイネさんに、「もつ知らない！」と勝手に怒り、勝手に背を向けた。実に幼稚な行動ではなかろうか。自分にとつて何が不快だったのか相手に知らせることもなく、ただ自分の感情を伝えるだけ伝えて、あとはあんたらが察しなさい気遣いなさいと言わんばかりに立ち去つたのである。

こんな態度ができたのは、私が無意識の内に彼等の器の広さに期待をかけていたからで、つまり私はそこに付け込んだのだ。これは明確な甘えの表明である。

それに気付いたとき、芋づる式に自分のシゼル様に対する大いなる甘えも自覚させられた。

私は彼のことが好きである。彼が許す限りは傍にいたいと思つている。

しかし私の彼に対する姿勢は、あくまで私が『える側であるべきであり、間違つても私が彼に依存してしまつようでは駄目なのだ。』でなければ私は、彼の容赦を得られなくなつたとき、またあの苦痛を味わうことになつてしまつし、彼のことを傷つけてしまつかもしない。それだけは何としてでも避けたかった。

飛来するのは、あの記憶だ。

* * * * *

その日私はケラスマスの市営図書館に出向いており、帰ってきたのは四時過ぎくらいだったようだ。

屋敷の扉を潜ると直ぐに一人の侍女がやって来て、「カノンお嬢様が自室にてお待ちですよ」と言われた。

不思議に思いつつ妹の部屋を訪れると、彼女はお茶の準備をして待っていた。

テーブルに載るのは彼女愛用のベージュ色の茶器と、スコーンや色とりどりのケーキ、そしてマカロンだ。

「お帰りなさいオルカ。見て、ズイーガル亭のお菓子よ。あなた好きだったでしょ?」

「本当…どうしたの? 買つて来たの?」

「彼が贈つてくれたの」

そう言われたとき、私の心の底で、再びあの小さなさざめきが生まれた。だけれどもその波紋は、彼女の次の言葉で一先ず治まる。

「多分彼、わたくしがしたあなたの話を覚えてくれたのね」

「……どんな話をしたっていうのよ」

「あなたが、家にあつたズイーガル亭のお菓子を全部食べたつていふ話よ」

「変なこと言わないでよ」

「それを願つのであれば、変な言動をしないことね」

口達者な彼女に溜め息を吐きつつ、内心で私は少し嬉しかった。彼女が彼女の大切な人に包み隠さず私の話をしている、ということが私の心を和ませた。

そうして私達は一入きりのお茶会を始めた。

しかしカノンの口に上る話題といつたら、まあ仕方のないことだとは思うけれど、惚氣話ばかりである。もしかしてこれを聞かせたいがためにお茶の準備をしたのでは、と思わなくもない。けれどそこは妹想いの姉を演じつつ、私は穏やかに聞いていたのであるが、流石に延々と「彼がね」「彼がね」と連呼されると、私もいい加減うんざりしてきた。折角先程治まつたさざめきが、また再び舞い戻る。それは大人しく彼女の話を聞いていればいる程、段々大きくなる気がして、私は自分の胸の内の黒い感情に少し恐怖した。それで何とか気を紛らわせようと、私は彼女の言葉を遮つて、思いつく言葉を口にしたのである。

「このケーキ、綺麗ね。上に載つた木苺が宝石のようだわ」「ふふ。オルカは本当に光り物が好きよね。ああそうだ、わたくしがいただいた婚約指輪もとても素敵なのよ」

氣を紛らわせるどころか、深い墓穴を掘つてしまつたようである。しかしここでまた違う話を持つてくるのは不自然過ぎる気がして、私は仕方なく彼女の話に乗つてやることにした。

「本当? ねえ、少し見せてくれない?」

そう言つてやると、カノンは嬉しそうに破顔した。

「よひしへよ」

彼女は立ち上るとドレッサーの引き出しを開け、そこから白地に金の装飾がなされた小箱を取り出してきた。

大事そうにそれを両手で持つて来て、私に差し出す。私もつられて両手で受け取った。

開けると、群青色の別珍の中に、白金の指輪が埋まっている。大粒の青紫色の宝石をいただいており、その周りにはレースのように纖細な細工が施されている。

私は素直に感嘆した。

「綺麗」

「でしょ?」

「この石、あなたの瞳の色のよ'うね」

カノンは頬を染めて喜んだ。

「そうなの。それを意識して選んでくれたのですって。ムワ・ドナで採れるサファイアらしいわ。付けてみてもいいわよ」

「それは流石にできないわ」と苦笑しつつ、私は彼女の言葉に甘えて、ハンカチで包むようにして、指輪を丁寧に箱から取り出してみた。

その煌めく石と、微笑む彼女の瞳を見比べて、参ったなあ、と独りごちる。

今までずっと私は残される自分のことばかりに目を向けて、当のカノンとそのお相手の関係についてはあまり考えてこなかった。しかし、そうであつても、彼女が幸せであること、大切にされていること

とは嫌でもわかるし、彼女のお相手が温厚で紳士的な人である」と
は知っているのだ。

その上こんな、今までずっと傍にいた私でさえ初めて見るような、
熱に浮かされたような微笑みを溢されてしまつと、私とて心から祝
福してやりたいと、そんな気分になつてしまつものなのであつた。
だから私も、もう認めてあげようと思つて、気持ち良く彼女を送
り出してあげようと思つて、己のその意思を鼓舞するための最後の
問い合わせを彼女に投げた。

「お嫁に行つても、こゝして時々、私とお茶してくれる?」

そう聞くと、何故か彼女は口を開けて呆気にとられた顔をした。
それは数秒のことだつたのだが、その後今度は目を逸らして困惑し
ているようだつた。

私、何か変なこと言つたかしら。

心配になり出した矢先に、カノンは顔に苦笑を浮かべた。
そして何気ないふうに言葉を発した。

「どうして?」

そう言われたとき、体から力が抜け落ちるような感覚に襲われた。
当然のようすに肯定されると思つていた。そうでなくとも、照れ臭
そにはぐらかすのかと思つていた。それがどちらでもなく、ただ、
私の問い合わせを逆に問われた。

『どうして?』つて。つまりカノンにとつて私は、これから先、
何となく時々お茶をする程度の存在にも及ばなかつたつてこと?

カラーン、という小さくて澄んだ音が足元から響いてきた。床を見

やるど、カノンの婚約指輪が申し訳なさそうに転がっていた。

そのときの行為の言い訳としては、「魔が差した」などという陳腐なものくらいしか思いつかない。

私は咄嗟にそれを踏みつけたのだ。硬い感触が靴底から伝わってきたが、痛みも気にせず圧力を加える。指輪は碎けはしなかつたものの、形を大きく歪ませ、当然宝石には傷が入った。

それから私は慌てた振りをしてみせた。

「「」「」めんなさい！私ったらあなたの大好きなもの、を、」

そう言いかけて、カノンのほうを見たとき、私の言葉は途切れた。彼女の視線は、転がり変形した指輪には注がれていなかつた。ただ真っ白な顔に澄んだ表情を湛えて、ひたすらに私を見つめていたのだ。そのときの情景は、今でも鮮明に思い出せる。

しばし息を詰めて見つめ合つと、ふいにカノンは顔をくしゃりと歪めた。そして乱暴な仕草で立ち上がると、テーブルを回り込んで私の傍に駆け寄り。

私の首に抱きついて、泣いたのだ。

完全に虚を突かれた私は彼女のその行動に対してもうすることもなく、ただ手を垂らして彼女の息遣いに耳を澄ましていた。どのくらいの時間そうしていたのかわからないが、私にとつては酷く長かつたように感じる。

暫くの間、カノンの嗚咽だけが静かな部屋に響いていた。

やがてそれも収まつてくると、彼女は私に向けて謝罪の言葉を囁くのだった。

「「めんなさい。」めんなさい、オルカ」

私は困惑して、同時に苦い罪悪感が胸一杯に広がる。

「どうして……謝るのは私のほうだわ……」

「違うわ」と慌てて、カノンは私の肩に顔を埋めた。

「わたくし、実を言つと、努めて考へないようにしてきたの。置き去りにするあなたのこと。でも、結局考へたとしてもどうしようもなかつたのかもしれないけれど。酷いことをしたわ、わたくし」

それから彼女はこう付け加えた。

「あなたつたら馬鹿みたいに、寂しがり屋で我が儘で甘えん坊でしょう？」

彼女が真っ赤な目で私を正面から見据えると、私のほうもぱろぱろと涙が零れてくるのであった。

そうして私は、自分の幼稚な思考と言動に、激しく後悔する。恥ずかしくて情けなくてどうしようもなく惨めで。こんなにも純粹で真っ直ぐな、青紫の瞳と見つめ合ひ、とこうことが苦しかった。しかし目を逸らせばそれこそ失礼なことだと思つて、私はぼやけた視界であつても、努めて顔を背けることはしなかつた。

そして初めて、自然と、無意識に、全ての正直な気持ちの内に、この言葉を転がせた。

「カノン、おめでとう。幸せになつてね

涙でぐしゃぐしゃで汚い顔だったとは思ひけれど、私はそのとき心から笑えたのだと思う。

そうするとカノンは反対に眉をきゅっと寄せて、潤んだ眼を三角にして、震える声で応じた。

「ありがと……。オルカも、どうか、幸せに」

そんなことを言われてしまつと、折角今になつて心から笑えたと、いつのに、私はまたしても唇を引き結ぶことになつてしまつ。必死に嗚咽を堪えた。

私は耐え切れず、今度は自分のほうからカノンを抱き締めた。彼女のほうも私の背に手を回し、私達はぎりぎりとひとつになる。気のせいかもしれないけれど、そのときはお互いの心音までが重なつたような、そんな錯覚を覚えた。

そうして愛しい片割れを抱き締めていると、強烈な寂しさに襲われて、いよいよ離れがたくなつてきてしまつ。先程の黒い感情が再び顔を覗かせた気がして、怖くなつた私はひと思いに彼女の体を引き剥がしたのだった。

そうして、カノンはコーディス家を去つて行つた。

瞼を開けると、白い天井が目に映る。ぼやけた視界を正そうとして目を擦ると同時に、室内にぱたん、と物音が響いた。

そちらに目を向けると、シゼル様が恐らく点字で書かれたであろう書物を脇に置いて、ソファから立ち上がるのが見えた。

「起きたか」と無愛想に咳きつつ、杖を片手にこちらに近付いて来る。彼は自室だと杖がなくても行動できるのだが、流石に私の部屋となると把握しておらず、それを必要とするらしかった。

「気分はどうだ」

「きふん?」

オウムのように問い合わせ返した。きふん、きふん、と頭の中で繰り返し、彼の言葉の意味を呑み込む。

「悪くはないです」

シゼル様は額ぐと勉強机の木椅子を私の横たわるベッド脇まで引いて来て、そこに腰かけた。そしておもむろに手を伸ばしてきて、私の顔面を撫でていき、最終的に前髪を搔き分け、額で止まった。

「まだ少し熱がある」

「そうですか」

そう言われてやつと私は昨日のことを思い出した。

リウに水をかけられ、湯浴みをしたのだが震えが止まらず、頭がぼーっとしてきて、次第にぎんぎんとこめかみ辺りが軋み始めたのだ。つまり私は風邪をひいたらしく。

しかしジゼル様や北東館の皆に甘えるのはもうやめようとした後だったので、私は勤務に戻ろうとした。すると主人に「命令だ。さつやと着替えて寝ろ」などと職権を乱用され、今に至る、と。

しかし疑問が残る。

「何故ジゼル様がここに？」
「あなたがここにいるから」
「いつも一緒にいるわけではないでしょ？」
「今は勤務時間内だ」
「え？」

私は跳ね起きながら問うた。

「今何時ですか」

ジゼル様は腕時計の文字盤に触れる。

「九時半だ」
「ひいいすいません今から準備しますので出てってください」
「構わん。まだ本調子でないだろ？ 寝ていろ」
「そういうわけには……」と私が渋つていると、彼ははやや憮然とした。

「命令だ。寝ろ」

そんなふうに言われてしまつと、私には成す術がない。私はジゼル様を密かに睨みつつ、再びベッドの中に潜り込んだ。

「昨日からやけに職務に忠実だな」

無機質なその声に、私はぎくつと身を強張らせる。

「そんなことないです。元からいひです」

「館の者に注意でもされたか」

「そういうわけでは……ああ、注意は確かにされましたけれども……それとこれとは関係のないことです」

「といひことは、やはり何か心境の変化でも？」

私は黙り込む。

「何があつた？」

「何のことですか」

「昨日のことだ」

「リウに水をかけられました」

「それは聞いた。何故かいきなり怒り出したそうではないか」

私は心中で舌打ちをした。どちらだかは知らないが、何でもかんでも洗こぎらこ吐きやがつて。

「頭から水をかけられたのだから、怒るのも仕方のないことです」「そのときのことではない。帰る時になつて、『もう知らない』などと書いて憤つたそうではないか。それから一人でさつと帰つて来たのだろう」

私は恥ずかしさともどかしさに耐えられなくなつて、寝返りを打ちシゼル様に背を向けた。

「シゼル様、嫌い」

歯まで言い終わつてから、直後しまつたと戦慄する。またしても彼への甘えを露呈してしまつた。

私はもうどうすれば良いのかわからなくなつて、ぎゅっと目を閉じ、ベッドの中で身を丸めた。

シゼル様の微かな笑いが漏れ聞こえた。

それから、髪を搔き分けて彼の指が頭を撫でる。私が僅かに体を強張らせ、その後気を許して力を抜いた直後。

「いだだだだだ」

「後頭部に見事な瘤ができている」

彼はあろうことか如雨露の襲撃による患部をぐじぐじと押しつつ、感慨深げに呟いた。

「何興味深そつに言つてゐるのですかやめて押さないで痛いから

私が訴えると、やつと彼は暴虐の手を止めた。再び頭を撫でてくれるが、もう絶対氣を許すものか。

「それで、何があつた」

「もう良いのです、そのことは、言つ程面白くことはありません」

「言え」

私は悔しくて、枕に顔を埋めた。

「……命令なさるのですか」

頭を撫でるシゼル様の手が止まつた。

返事が来ないので、私は目だけ動かして彼の顔を窺う。シゼル様は僅かに首を捻っているようだつた。

「あなたは何か勘違いしているようだが、私は王族の権限や権力を持たない。私が仕事以外のことに関する命令したとして、どこまで従つかはあなたの判断による。何から何まで従属する義務をあなたは持たない」

「じゃああなたの問いにはお答えいたしません」

私はふいっとそっぽを向いた。

「よろしい。では私の問いに答えられない場合、この瘤を押し続ける」

私はすぐさま起き上がりシゼル様の手を払おうとしたのだが、彼の長い五指はがつちりと私の頭を押さえ付けているのでそれができない。

私は叫んだ。

「脅迫ではないですか！」

彼は唇の片端を吊り上げる。

「脅迫罪で訴えるなら好きにしろ。ただ、仮にこの後あなたが訴えた場合それが果たして有効になるかどうか、それらも考えた上で判断しろ。因みに私は王族の権限や権力を持たないが、あなたよりは王家の寵愛を受けているだろうな。何せ息子だ」

「えちよつとそれでは結論は『逆らえない』つていうことになるではないですか。さつきの勘違い発言は何の意味があるのでですか」「ヒントだ。よく考へるとこうことだ」

一瞬、シゼル様の笑みが硬くなつたが、すぐまた元に戻つた。

「ああどうする? 十秒以内に答えろ!」

「つづつわかりましたつてば。答えます」

「嘘を吐いた場合にも瘤は押す」

「……嘘だつてどう見分けるのですか」

「勘だ」

恐らく嘘が通じないことを悟つた私は、観念して自分の心情を吐露することにした。間違つてもこれが嘘だと判断されぬことを願いつつ。

知らず知らずの内にシゼル様や北東館の皆に甘えていた、と氣付かされたこと。カノンとの間で昔起きたこと。それを繰り返すのが怖くて、心的な意味で一定間の距離を保とうとした、ということ。

話し始めるとシゼル様の手が頭から離れた。私の話は真実と受け止められたようで何よりだ。

彼は腕と足を組んで、何事か考えているふつであった。

私は自分の隅から隅までを暴露したような気分になつて、酷い羞恥心を味わう。何せこんな黒歴史を他人に明かしたのは初めてである。これで笑い飛ばしでもしたら殴つてやる。いやしかし、寧ろ笑い飛ばしてくれたほうが気楽かもしけぬ。

そんなことを悶々と考えている最中、シゼル様の小さな咳きが室内に響いた。

「成る程な」

彼の発する空氣は柔らかく、馬鹿にするわけでも責めるわけでも

ないようだったので、私は少し安心した。彼は私の言葉を、静かに静かに受け止めてくれているような気がしたのだ。

「あなたは筋金入りの臆病者だ」

そう言って彼は薄く笑った。その時の彼の虚ろな瞳が、煌々と輝いた気がした。

私は彼の優しさを湛えた顔にぼんやりと見惚れた。

「まあ確かに夫婦でもない限り、遅かれ早かれ別れは来るな」「でしょう? どうして皆それを知りながら、あんなに器用に人付き合いができるのでしょうか。別れの痛みを感じないのでしょうか」「あなた程敏感ではないのだろう。それと、あなた程依存しない」

『依存』といつ言葉に、私の顔が熱くなつた。彼は見えない目で、よく見ている。

「シゼル様は? 人に気を許すということ、怖くはないですか」

彼は瞼を下ろして「どうだかな」と言つた。

「私の持つそういう感情を恐怖と呼ぶのならば、『怖い』といった表現もあながち間違つてはいないのかもしれない。しかし私のこれはもつと醜く性質が悪いと思う。例えばあなたが『皆』と呼ぶところの大多数の人間は、あなた程臆病でないためにあなたより交友の範囲を広げられる。その上に臆病なあなたがいて、彼等より小さな交友の輪を広げているとするならば、その上にいるのが私だ」

私は不思議に思つてシゼル様を見つめた。

「シゼル様は私よりもっと臆病つてことですか？」

「可愛い言葉で表現するのならそう言えるかもしない。私はあなたよりもさらに小さな交友しか持たず、交友の広さに反比例して執着の強さが増すのであれば、私はあなたの上を行く、ということだ」

もしかして彼は、私に何とか共感しようと頑張ってくれているのだろうか。

そう思つて私は嬉しくなりかけたのだが、次に口を開けたときの彼は、そんな優しい顔をしてはいなかつた。

そのときの彼の顔には、凄絶な無表情があつた。

「あなたは、そうやって離れて行く者達を、心を痛めて見送るのだろう？それしかできないのだろう？私はそれとは違う。多分あらゆる手をつくして引き止める。どんな汚い手段だったとしても、確実に逃げ道を塞いで手元に置く」

彼はそう言つて、ふと表情を和らげた。

「この欲求と感情を『恐怖』だとか『臆病』だとか言ひのあれば、あなたの気持ちも理解できなくはない」

私はしばらく絶句して、思わず聞き返した。

「それはシゼル様の、本当の気持ち？」

「恐いから」と言つて彼は頷く。

信じ難い話であった。何せシゼル様と執着心が結び付かない。そういう強くて複雑な感情とは無縁に生きているのかと思っていた。しかしだからこそ一点執着型になるのかと考えれば、納得できな

くもない。

「一体どんなときにその感情を見せるのだろうと思つて、私は少し切ない気持ちになつてしまつた。

彼の執着の先に、私がいれば良いのに。

「今までに、そうした気持ちを抱いて、引き止めたことがあるのですか？」

「ある。一度だけな」

強い表情で断言した彼は、弱く笑つて付け足した。

「どうかあなたは、これからどうならないうつ願つていってくれ」

私はどう感じれば良いのかわからず、彼の言葉に沈黙を返した。室内に静寂が訪れる。

シゼル様は自分のことを話したつもりだらうけれど、こちらは全く意味が理解できていない。私のほうはばかり醜態を晒して、フンアじやない。

煮え切らない気持ちで私は瞼を閉じた。

しばらくしてから、シゼル様の小さな声が響いた。

「オルカ？」

拗ねた私は返事をしなかつた。

「寝たのか」

無視する。

彼は息を漏らすように笑つた。

多分彼は、私の寝た振りに気付いているのだつと思つた。それを踏まえた上で発された言葉だと踏んだ私は、次の声にも応じなかつた。

「氣休めにもならないかもしけんが。オルカ、あなたから離れない限り、私はあなたを離れはしないし、離しはしない。私はここに居続けるから、甘えたいなら甘えれば良い」

その優しい響きを心の底辺に落とせば、どんな波紋も静まる気がした。

ああ、何て、虚しい。

過去において私は絶えずそう思つていた。

王子と云う立場、定められた将来、望めば『えられる物質、淡々と確実に過ぎていく毎日。

悲嘆したりはしなかつた。憤りもしなかつた。平安があつたわけでもなく、愉快でもなかつた。
ただただ空虚だと思つた。

そして日々心の穴が開くのを防ぐために私がしたこと、それは、世界に関して眺める以上のこと求めないといつものであつた。

当時私の目には、あらゆる景色が美しく見えたものである。

朝靄、厨房の喧騒、静謐の回廊、白い空、鴉、一輪のガーベラ、食卓の海老、硝子戸を拭く侍女、薦、天井の模様、紅茶の琥珀、夕暮れ、影になる鐘、銀の月、踊る男女、暗がりの燭台、窓外の星。それらは、内容、本質、意味を見出そつとしない限り、とても美しいものであつた。

よつて私は物事の内側に興味を持たなかつた。それらに価値を見出すことに関し、早急に諦めをつけていた。

意識せずとも、中を見てしまつたがために失望に至るといつことは、何度も経験している。その経験が、私の心の穴を広げている。
そう考えた私は、世界に関して、視界に收め、キャンバスに收める以上のこと求めないことにしたのだ。

しかし父の生活を見るにつけ私は、そんなわざやかな処世術さえ、いずれ通用しなくなることを悟つた。

理由は単純明快である。そのよつた安寧の時間は、Hといつ職業柄滅多に許されなくなるのだ。

理解した私は悲しむわけでもなく、ただ再び、ああやはり虚しいものだ、と妙に腑に落ちた。

それで、せめてもの慰めとして、己が時間と制約に雁字搦めにされる前にひとつ、自分が最高位に美しいと思つ、自分にしか描けないようなものを一枚に収めたいと思つた。忙しさと虚しさに圧倒されて心の穴がどうしようもなく大きくなつてしまつたとき、それを見れば少しばかりを和ませることができるよつた、そんなものが描ければ良いと思つた。

そうして私は、残された時間を出来得る限りキャンバスに向かうために使用した。

簡潔に言つのならば、私の目的は達成された。
しかし同時におよそ全てを失つた私が思つことは、やはりただひとつであった。

ああ、何て、虚しい。

* * * * *

北東館で働き出してからひと疋ほど経つたある日の午後、私は庭園に下る石段を歩いていた。

今日は空が良く晴れていて、見上げると小さな綿雲がぽかんと置いてけぼりにされているだけだった。

階段脇に生えた木々が、私の視界を時々暗ぐするものの、爽やかな天気であった。

Hプロンドレスだけでは肌寒いので、薄茶色のカーディガンを羽織つて外に出た。風は吹いておらず、日差しは少し強いものの、空気そのものがぴんと冷えている。

私は寒さに弱く、秋という季節はあまり好きではない。冬はまつと好きではない。

確実に終わりに近付いて行く生命の喰みを見ると、何だかやたら寂しくなつてしまつのである。

つい家族のことに向いてしまつ意識をつやむせにするため、私は夏の童謡を口ずさむ。

紫陽花を包む甘い雨のことや、水面に映る入道雲のこと、そして蜩の喚き声と共に夏が終わること。

そんなことを口ずさんでいたら逆に憂鬱になつてしまつた。

ああ、終わつちやつたよ夏が。あああ。

郷愁と共に鈍い溜め息を吐き出すと、背後から掠れた女声がかかつた。

「何で夏の歌なの。何で溜め息なの」

肩を上げて振り向くと、ハイネさんがつまらなさそうな顔をして立っていた。

自分の上手くもない歌を聞かれたことに、私は顔を熱ぐする。

「え、御機嫌ようハイネさん。……こつから後ろに？」

「ちょっと前。用具を取りに一旦帰つて戻つて来たら、暢気にふらついてるあんたが見えた。くそ遅いから意識せずとも追い付いた」

傷つくも呆れるも通り越して感心するくらいには、私も彼女の毒舌ぶりに耐性が付いてきた。どうやらこの毒舌こそがハイネさんのスタンダードらしく、その発揮先は何も私だけに限つたことではない。唯一シゼル様には敬語なのだといつかリウが言つていたが、私は彼女がシゼル様と話しているのを見たことはなかつた。

「今は秋」

大真面目な顔で断言する彼女の台詞は、一瞬意味がわからなかつたが、前後関係を考えてすぐに理解した。

「秋、好きではないのです」
「どうして？私は好き。秋は実りの季節。南天とか、紫式部とか、柿とか。可愛くて好き」

そう言つ彼女を、私は思わずぎょっとして見つめてしまった。
何この人可愛いんですけど。
まさか彼女にこんな一面があるとは思わなかつた。

「何、その顔。私変なこと言つた？」

灰色の瞳を眇めるハイネさんに、私は慌てて首を横に振つた。

「いえ、違うのです。ハイネさん、可愛いこと言つのだなつて思つて」

「馬鹿にしてるの」

「め、滅相もございません」

前言撤回。先の可愛い言葉を補つて余りある程ハイネさんの態度は可愛くない。

「確かに実りの秋という点では、美味しいものが食べられるので万々歳ですね。でも、私は秋になると何だか寂しくなってしまうのですよ」

「そういう人、偶にいる。だから最近シゼル様にべつたりなの」

私は一瞬息を詰まらせた。

「き、近侍ですし……」

「前は良く他の部署手伝つてた。近侍の癖に。それが最近無い」

注意深くハイネさんの様子を窺う。リウが言つてゐるに依ると、彼女はシゼル様のことが好きらしいのだ。

しかし今見た分には、特に嫉妬するとか怒るとかいつた雰囲気は見受けられなかつた。というかこの人は、あの時否定こそしなかつたものの、シゼル様に関しての恋愛感情を垣間見せたことは一度もない。そもそもやはり彼女に恋という感覚が結び付かない。

結論が見えて来ないことに余り耐えることができない私は、思いきつてちよつとした挑発をしてみた。

「まあ、はい。あなたの仰る通りの現状でござります。シゼル様と一緒にいるのが、一番寂しさを紛らわせるので」

どんな言葉が返つてくるのだろう、とほんの少しひくつきながら待つていたのだが、ハイネさんの返答は酷くあっさりしていた。

「そう。それは良い傾向

私は心中で首を捻る。

そういうえば彼女はシュルツと同じく、私が他の部署を手伝うのは反対していたのだけ。想い人の近侍が恋敵なんてことになったら、一時でも引き離したいと思つものじやなかろうか。

それともハイネさんは、私の登場によりシゼル様のことをきつぱり諦めたのだろうか。だとしたら決して後味が良いものではないが、かと書いて引き下がる気も毛頭ない。むしろ性格の悪い私のやり方としては、これぞチャンスと釘を刺すくらいが丁度良い。

そう思った私は上目遣いに眉尻を下げる。

「あの、私はかりシゼル様と一緒にいてしまってごめんなさいね。でも、私もあなたに負けるわけにはいかないのです」

そしてむんと胸を張る。ハイネさんの身長は私と余り変わらないので、劣等感を抱かずこの体勢が取れることが少し嬉しかった。

するとハイネさんは瞠目した。

「……リウの言葉本気にしてるの」

「あれ。やはり彼の話は勘違い発言でしたか」

そつは言つたものの、内心では随分と安堵する。ハイネさんは眉を顰めた。

「私は」主人様を敬愛して「いる」

「ということは、」

「ただそれだけ。恋愛感情は抱いていない」

ハイネさんは私を真つ直ぐに見つめた。嘘は吐いていないと、そ

の無機質な表情ですぐにわかる。

「私は彼の存在そのものが好きだから、彼が幸せであれば良いと思う。彼の幸福に必要なものの中で、私の存在は特に大きな割合を占めない。だから彼の生活に特に干渉したいとも私は思わない」

はっきりと言い放った彼女に対し、それはある意味で究極の愛なのでは、と私は思った。彼女がどこまで本気なのはわからないが、真実なのであれば、その気持ちはどこまでも利他的なものである。

そうか。彼女は、純粋で綺麗で、狂っている。

妙に納得してしまった私は、逆にハイネさんに対し警戒心を強めた。だって私はそんなストレートな愛情を抱くことができない。私はできるなら彼の隣に身を置くことを願うし、できるなら彼の一番が私であって欲しいと願ってしまう。そんな私にとって彼女はある意味で最も強敵に感ぜられた。

そんな醜い思考を巡らせる私とは対照的に、ハイネさんはこんなことをぽつりと呟く。

「でもあなたは必要」

「え？」

「あなたはシゼル様の幸福に必要。その割合はとても大きい」

「な、何ですか。そんな煽ても何も出ないですよ。でも今度ズイーガル亭のお菓子が手に入つたらお茶会に呼んで差し上げるですようふふ」

「煽ててない。眞面目な話。でも私安心した。あなたにとつても、ご主人様が必要みたいだから」

私は黙り込む。

まさかこの女と恋バナをすることになるとは夢にも思わなかつたし、リウの勘違い発言が無ければ彼女に自分の気持ちをばらすこともなかつた。相手がハイネさんとなると、何故か恥ずかしいとは感じないのだが、この情報が他に漏れるのは流石の私も恥ずかしい。そこまで考えが行き着いたところで、自分が結構な爆弾発言をしていたことによく気付いた。

「あの……今の私の発言は忘れてください」

「何を今更。それに発言せずとも、あなたの気持ちは大概ばればれ「う、うそん……。シゼル様にも？」

ハイネさんは首を傾げた。

「ああ。私シゼル様とあまり会わない」

「そういえばそうでしたっけ……。シゼル様基本的に引き籠りですものね。と、兎に角今の話は他言無用ですよ」

「保証はできない。私の主人はシゼル様で、私が幸福を願うのもシゼル様。あんたじやない」

溜め息を吐くと同時に、何がここまで彼女をシゼル様第一に動かすのだろう、と不思議に思った。彼に恩もあるのだろうか。

「それで、寂しがつてべつたりだつたあんたが、何で今日は此処にいるの」

「……確かにさつきは便宜上肯定しましたけれども、その表現激しく私の自尊心を傷つけることになりそうなので、やめていただけませんか」

「事実」

身も蓋もない。シゼル様への思いやりを、ちょっとは私に分けてくれ。

私は少しむくれつつ答えた。

「今日はシゼル様にファウエイムを探つて来るよう仰せつかつたのです。どこにあるかご存知ですか」

「あれは烟。私が探つて来る」

そう言つてハイネさんは私の横を通り過ぎて石段を降りて行つたので、私もその後を追いかけた。

彼女に関して、変わった人だなあとつくづく思ったが、その変人ぶりは私にとって少し心地良かつた。

鼻の奥を再び、つんと郷愁の念が刺激した。

北東庭園は趣味が良い。

南庭園や西庭園のような壯麗さはないものの、やたらとメルヘンチックで乙女心をくすぐる仕上がりなのだ。それはパステルカラーのベンチだつたり、真ん丸に刈り込まれた木の形だつたり、植えられた花のセレクトだつたり、随所に表れている。

この庭はきっと、前を行くハイネさんの夢のお城なのだろうと、今ならわかつた。

しかし畠に入る門を潜ろうとしたところで、その可愛らしい感性とは裏腹に、全く可愛げのない顔で彼女は私を睨んできた。

「どこまで付いて来る気？」

私は少したじろぐ。ずっと後ろを追いかけていたのが鬱陶しかつたのだろうか。

「ジゼル様に命令されたのが私である以上、ハイネさんだけに任せておくのも何だか申し訳なくて。付いて行つても特に役に立たないことは自覚しておりますが、場所さえわかれれば、これから私も一人で採りに行けるかもしれないし、」

「違う」

ハイネさんは目を閉じて眉間に皺を寄せた。

「あなたの行動可能範囲は、北東庭園まで」
「え？」

多分今の私はかなり無防備な顔を晒していると思つ。それ程に思
いがけないことを言われた。

しかし考えてみれば、確かにシゼル様はハイネさんと同じことを
言つていた。

立ち入り禁止区域はハイネの畠から始まるので、同じように私も
そこまでなら行き来できるものと思つていた。

それ[。]

「シゼル様は良いのに私は駄目なのですか」

過ぎつた疑問をそのまま口に出す。

そう。初めて会つたあの日、確かに彼は畠を歩いていた。

「[。]主人様もあんたも駄目」

そう答えた彼女は訝しげな表情を浮かべる。

「はあ。まあそれならそれで別に良いのですが、多分ハイネさん勘
違いしてますよ。だって、シゼル様前畠を歩いていらっしゃいまし
たもの」

すると彼女の相貌から血の気が退いた。

「それ、本当?」

「本当です。何せ私とシゼル様が初めて出会つたのがこの先の畠で
のことでしたから、忘れるはずもありません」

はつきりそう答えると、ハイネさんはさつと私から視線をはずらし
た。その先にいるのは、本日[。]の門番であるニイだ。

「聞いてたね」

「聞いてたよ」

ハイネさんの硬い声と、一イのおどけたような声が交差する。

「一イの」ことは、くれぐれも内密に」

その鋭い眼力は物ともせずに、一イはへらつと笑つて肩を竦めてみせた。

「んー、どうだろつ。君のその言葉は、一先ず記憶にはとどめておいてあげるよ」

しばらく一イを睨んでいたハイネさんであったが、やがて諦めたように力を抜いた。そして再び視線を私に戻す。

「あんたも。ご主人様が畠にいたことは、誰にも言つちゃ駄目」

よくはわからないが、一イの反応を見るに、ハイネさんの勘違いというわけではなかつたらしい。それどころか、これは何だか只ならぬ雰囲気を感じる。

「つまり私がジゼル様と出会つたとき、彼は禁忌を犯していた、と？」

ハイネさんは小さく頷いたが、私が「どうして？」と尋ねると今度は首を横に振つた。

「知らない。けれど、このことが知れ渡つてしまつた場合、ご主人様が不利になるかもしけない。だから言つては駄目」

そう言つた彼女の顔は、少し翳りが差しており、見ようによつては沈痛そつにも感じられる。この事実は、相当の変事だつたのかもしれない。

「わかりました」と答えた私の声が震えて、風のない空氣の中に消えた。

ファウエイムは直径十cm程の真紅の花である。真つ直ぐな黄緑色の茎と、細長い花びらが中心をやんわりと包むように配置されているのが特徴だ。

これはツェーヴラーグ原産の花として有名らしく、ポルテツフェル領にはファウエイムのみを一面に植えた国立公園もある。

ハイネさんからこの花を十輪程受け取り、私はシゼル様の部屋に帰つて來た。

嗅覚はシゼル様の得意分野なので、彼は香りの研究に協力している。飲み易い薬や、王族や貴族のつける香水の開発などに多分に貢献しているらしい。

香りの材料となるものの採集に赴くことはよくあることなのだが、普段はいつも一人で散歩がてら出かけていた。彼の仕事にはかなり自主的な面があるから、そう切羽詰まって忙しいものではないのだ。しかし今日の仕事に限つて締切が付いたらしく、シゼル様は悪態を吐きながら眞面目に勤労していた。

そういうわけで私一人、材料収集に駆り出されたわけである。

彼の仕事部屋には書き仕事用の勉強机と、背の低い大きな大理石のテーブルがあるのだが、私が部屋に戻ったときにはどちらも書類と器材で埋まっていた。散らかっているのは机の上だけで床は驚く程に綺麗、といつところから、シゼル様の几帳面さが窺える。

私は、桃色の液体の入った試験管を揺らす彼の背中に向けて、声を放つた。

「ファウエイム、お持ちしました」
「そこに置け」

一切振り向かず、即座に指示が下る。その声に苛立ちが含まれていることに気付いた私は、無言で言われた通りにテーブルに花を置いた。こういうときのシゼル様には、出来る限り物申さぬが吉である。

務めを果たし終えた私は、部屋の隅で慎ましく佇み、孤軍奮闘するシゼル様を眺めていた。

シゼル様は暫くの間、試験管をくゆらせながら書類にペンを走らせていたのだが、ふいに奇襲攻撃に気付いたときのような鋭さでこちらを振り返った。しかしその顔はあらぬ方に向いている。彼の透明な視線の先を追つたが、特に変わったものは何もない。

室内に静かな、上擦つた声が響いた。

「オルカ？」
「はい」

私が答えると、シゼル様は直ぐに正確にこちらを向いた。心なし

かその顔が泣きわななものに見える。

彼は震える声で尋ねた。

「どこに行つていた」

「は？」

思わず問い返した。

これは謎かけ？挑発？意地悪？

様々な推論が脳内を巡るが、答えは得られない。

「今、どこに行つていたのか聞いた」

言い直したシゼル様は眉を顰めた。その声に、微々たるものだが怒りが混じったような気がして、私は少し身を硬くした。

「あなたに頼まれてファウェイムを探りに行つっていましたが……」

つい非難がましい目でシゼル様を睨んでしまう。ミルキアさんは及ばないものの、シゼル様も怒るとかなり怖い存在だ。しかし私のちっぽけな虚勢が、せめてもの抵抗を強要するのである。無論見えていないことを承知しての行動なので、ちっぽけにも程がある。

しかし逆にシゼル様に睨み返された。光のない目は、常人とは違つた意味で迫力があり、お腹の底が冷たくなった。

「違う。その後だ」

「その後？ずっと此処におりましたけれども」「本当か？」

シゼル様の顔が驚きに歪む。本気で私が居なくなつたものと思つたらしい。

私は念を押すように、はつきりと述べた。

「本当です。テーブルに花を置いて、あなたの邪魔にならぬよう健気にも沈黙して此処に佇んでおりました」

「そう……か」

私の言葉を真実と受け止めてくれたのだろう。彼の声音から負の感情が消えた。同時に顔からも全ての感情が抜け落ち、純粹な無表情が残る。

その顔のままで靴音を鳴らしてこちらに近付いて来たものだから、私は咄嗟に後ずさつた。そしてそもそも後ずさるだけの余裕が背後にはないことに気付き、再び肝を冷やした。

彼は私との間に頭ひとつ分距離を置いて立ち止まると、ゆっくりと手を伸ばしてきた。彼の手は最初私の横を過ぎて壁に当たつたが、そこを這いつのようにして伝い、私の頭に辿り着き、するりと頬に添えられる。柔らかな温かさがくすぐつたくて身をよじると、結果的に彼の手を頬と肩の間で挟むことになつてしまつた。すると彼の表情に穏やかさが灯つたので、私は安堵した。

いつの間にか彼のもう一方の手も伸びて來たようで、それは私の片手に触れた。その形を確かめるかのように指を絡められ、最後にはそのまま握られる。

近い。恥ずかしい。火が出そう。

私は何とか氣を散らして、この場をやり過ごそうとした。

「シゼル様、集中のし過ぎで疲れているのではないですか？今まで

「私の気配に気付かないなんてこと、一度もなかつたでしょ？」
「そうだな。そうかもしけない」

シゼル様は弱く笑つたので、私はいよいよ本氣で心配になつてき
た。

「少し休まれては如何ですか？」

—ああ、今休んでいる

でなく、横にならねたほんがよししかど

ナニチナ

「そんなんは、田の仕事はせや話ぢで、こゝのでやうが」

彼は曖昧な答えを返すばかりだったので、私は諦めて話題を変えた。

「シゼル様。お聞きしたいことがあるのですが」

何だ

「私とあなたの活動範囲はこの館と庭園のみだそんで」

二〇〇〇年九月

「初めてお会いしたとき、あなたは何故畠にいたのですか?」

怖々尋ねると、彼の顔に影が差した。そして、緩く首を横に振る。

「あなたは知る必要のないことだ。今は」

私は彼の濁つた瞳を強く見つめた。

「今は？」

暫くシゼル様の顔を目前で観察していたのであるが、彼は全く表情筋を動かさなかった。

少し拗ねて、わざと溜め息を吐いてやる。

「じゃあ、許して差し上げます」

「何様のつもりだ」

シゼル様が穏やかに囁いた。

相変わらず頬が熱いのだけれど、彼のその声と長い睫毛に見惚れていたら、段々心も落ち着いてきたようだ。少なくとも、この時間がずっと續けばいいなあ、なんて柄にもないことを考えられる程度には。

私は暫くの間無言で、彼の微かな息の音を聞いていた。

以前王家の晩餐が行われた食堂にて、私達は毎日食事をとつていた。

シゼル様が鬱陶しがるらしく、使用人が頻繁に給仕に来る」とはない。

前菜からデザートまで予め卓上に準備されており、それを一人きりで食べる、ということを繰り返していた。

今夜も同じくして、私達は静かな夕餉を楽しむ。

「この食堂、ピアノがありますけれど、誰か弾けるのですか?」

ふと、部屋の隅に置かれたそれが気になつて、私は尋ねた。シゼル様はシチューを口に運びながら、「はて」と呟く。

「そんなものがあつたことすら忘れていた

「使っていないのですか?」

「少なくとも私はその音を聞いたことがない」

「何のためにあるのでしよう?」

彼は自嘲気味に笑つた。

「両親は私に弾かせたかったようだ」

そう言われて、私は鍵盤の前に座つて細長い指を流れるように動かすシゼル様の姿を思い浮かべた。

「うわあ、すつ」に似合つ

思わず素直な感想を漏らしてしまつ。

「まあ結局、一度も触つてなどいないが」

「どうして？教養として習つていたのですか？」

王族がどうかは知らないが、貴族の間ではよくあることである。我が家でも時々母が弾いていたものだ。

「違う。両親は私が視力を失つたために、それを覚えさせたがつた」

私は息を詰めた。しかし彼は何てことないよつに食事を続けてい。その空気が不機嫌そうでないことを確認して、私は会話を続けることにした。

「それはまたどうして」

「私が昔絵を描いていたことは話したな？」

私は「ええ」と頷く。確かにシゼル様が王族であることを暴露したとき、そんなことを聞いたような気がする。

「昔の私の生活において、それは大きな位置を占めていた。正確には絵を描くことではなく、美しいものを視界に収めることであつたが、どちらにせよ同じだ。盲目になつたとき、私は心の拠り所を失つたも同然だつた」

「その時、精神が不安定になつたのでしたつけ」

一呼吸置いて、シゼル様は頷いた。

「それで、両親は音楽が絵画の埋め合わせをしてくれれば、と踏んだらしい」

「成る程。でもシゼル様は興味を示さなかつたのですね」

「ああ。芸術に関しては一度痛い目を見ているからな。そこに平安を見出すのは、私にとつては酷く虚しいことに思えた」

「彼が自分の心の内を晒すとこつのはよくあることではない。私は食事に手も付けず、一心に彼との対話に集中する。」

「ではあなたは、それからどうやって精神の安定を得たのですか?」

「するとシゼル様は虚を突かれたような顔をした。不思議に思いつつも、私は続ける。」

「私が見た限りでは、シゼル様はとても不安定な人間には思えないのですが。だとすれば、あなたを変えた要因が何かあるのでしょうか?」

「それを是非知りたいと思つた。そこに彼の核心がきつとある。ハイネさんとか言いやがつたらどう自分の墓穴を処理しよう、と思わないでもないけれど。」

シゼル様は目を細めて私を見つめた。そしてほつりと、愉快そうに咳く。

「あなたがそれを聞くか」

「へ?」

「私は以前言つたはずだが。あなたには精神安定剤の効果がある、と」

ぱぱぱぱぱーん、と私の後頭部で勝利のファンファーレが鳴り響いた。

口元がにやにやと歪んでしまつたのを抑えられない。今私の顔を見る者がこの場にいなくて良かった、と心の底から思った。恐らく私は今、みつともないにも程のある表情をしている。

しかし嬉しいことに違はないのだが、恥ずかしいことにも違いないので、迷つた挙句口を突いて出たのはこんな言葉だつた。

「シゼル様つて、女の人口説くの上手やつ」

言つてしまつてから後悔したが、彼は笑みを深くした。

「それはそれで本望だ」

「なつ！魔性発言ですか！」

「あなたがこれで落ちるのならば本望だ、といつ意味だ」

余りにもさうりと言われたので、私は固まつてしまつた。

えーと、これってそういうこと？私今浮かれていいの？

まじまじとシゼル様を見つめるが、その顔は面白そうに笑みを湛えているだけである。

普通こういう類の言葉を発するときつて緊張したりするものではなかろうか。少なくとも私は大いに緊張した。ええ緊張しましたとも。今考えればポルさん相手によくあんななけなしの勇気絞り取れたなつてくらいに。

しかし眼前の彼は余裕ありまくりであり、それだけに疑惑が湧いてくる。

結論。この件は保留。

「やつぱりシゼル様は魔性です」

私が口を尖らせて呟くと、シゼル様は静かな声で笑つた。その響きと彼の笑みが一瞬翳つたような気がしたが、次に彼は眞面目な顔に戻つたので、そんなことはすぐに忘れてしまつた。

「話が変わるが、私は明日夜明け前に出掛ける」

「深夜のお散歩ですか？」

「いや。南館に行く」

私はあらん限りに目を見開いた。即座に声を潜める。

「だ、脱走ですか？」

シゼル様は鼻を鳴らした。

「違う。父親に呼び出されたので南館に行つて来る」

「えええ。い、良いのですか？ それで」

「国王がそう言うのだから良いのだろう

「そういうことって度々あるのですか」

「いや。今回が初めてだ」

「どうしてまた……。王様がこちらに来たほうが色々と都合が良いでしょ？」

シゼル様は開けた口を一度閉じてから、「そうだな」と言つた。そしてまた口を開じる。

彼は何やら事情を知つてはいる。そして、事情を私に話す気はなさそうである。

私は心中で溜め息を吐いた。

「正確には何時出発ですか?」

「三時に南館に、とのことだつたから、十五分前には出る」

「三時!起きるのが大変そうです」

「一番人に見つからなさそうな時間を選んだのだろう。同じ理由で、帰りも明後日の同じ時間になる」

「同じ敷地内だつてのに、日帰り旅行みたい」

「そうだな。だから明日一日あなたに休暇をやるわ。好きなことをするといふ」

ん?

私は数秒絶句する。

「ちょっと待つてください。勿論私も一緒にいくのですよね?近侍ですものね?」

懇願するよひに念を押したのだが、彼はあつさり首を横に振った。

「いや。あなたは留守番だ」

「なあつ。し、シゼル様お一人で赴くのですか?」

「私にはミルキアが同行する」

「酷い!近侍の私を差し置いてどうして……一はつ、まさか浮氣ですか!私とシユルツは除け者ですか!」

シゼル様が聞こえるように溜め息を吐いたので、私は口を噤んだ。私のほうはさつき溜め息を心中だけにとどめておいたのに、この男つてばわざとやつやがつたな。

「理由は言えない。今は

「またそれですか」

唇を噛んでシゼル様を睨んでいると、彼はふいに優しげに表情を緩めた。

「あなたにこの館の留守を預ける。できるな？」

「さつき休暇だつて言ってたじゃないですか」

「基本的には。しかし私が居ない間の主はあなたとしておくれ。変事が起きたときの対応は任せせる」

私は無言で、冷めた料理を口に入れる作業を始めた。冷めているとはいっても、エイの作る食事は美味しい。はずなのに、今は味がしなかつた。

「返事をしろ。オルカ」

ついにはそう言われて、私はやつと不機嫌な声で「はい」と答えた。

シゼル様は小さく笑った。

「信じていろからな。オルカ」

「私も信じてますから。シゼル様」

すると彼は一瞬動きを止めて、大きく頷いた。

「ああ。約束は守る

つい私も、スプーンを口に運ぶ動きを止めてしまった。

何だ。ちゃんと覚えててくれたんだ。私の心を静める、あの約束。

『あなたから離れない限り、私はあなたを離れはしないし、離しはしない』

どんな甘言よりもその一言が確かにもののように思えて、私は仕

方なく彼を許してやることにした。

次に味わったスープの味は、冷たいのに温かかった。

暗闇と静寂の中、私は自室の扉を背にして立っていた。手にした燭台の灯が室内を照らし、巨人のような私の影が壁にかかる。

虫の音もいつの間にか絶え、冷えた空氣に耳が痺れた。

ふいに廊下から扉の軋む音が聞こえてきて、私も慌てて扉を開けた。

同じく燭台を手にしたシゼル様と鉢合図を交わせる。彼は呆れたように目を細めた。

「田覚ましの音が聞こえたからもじやとは思ったが。寝ていていいと言わなかつたか」

「見送りです。庭園までなら、良いでしょ?」

「構わないが、それならそれで身支度の世話をしてくれればいいものを」

「そうしようとは思つたのですが、簡単には起きられなかつたのです。何とか起きて、つこさつこ自分の身支度を済ませたばかりです。あなたに近侍は向かんな」とシゼル様はぼやき、廊下を歩き出した。そんなことは百も承知の私も、後を付いて行く。

館の門のところで、ミルキアさんが待つていた。

彼女は私とシゼル様の姿を見て、口元に小さな笑みを浮かべる。それを見ても私は微笑み返すことができない。小さな妬みもあるのかもしれない。しかしそれ以前に、実家の面々やシゼル様の笑顔

に良い思い出のない私は、最近笑顔恐怖症のよつなものにかかってきている。色々末期だ。

「見送りですか。オルカ」
「そうです」

つい素つ氣無い考え方になってしまった。

ミルキアさんはそんな私を見て、何故か逆に笑みを深めた。その表情は私の不安を煽る。

「ミルキアさん、シゼル様のこと絶対絶対帰してくださいね。でないと私、シュルツと駆け落ちするので」

そう言つと、ミルキアさんは肩を竦めるのであった。

「それじゃあこれを機に乗り換えようかしら」

「なつ。み、ミルキアさん、その気持ちは大いにわかりますけれどもね、」

「冗談ですか」

笑えない。全く笑えない。

「普段言わないくせに、一いつときだけ冗談かますとかよしてください」

「じめん遊ばせ。あなたが意外にも素直なものだから、つい

首を傾げる私を流し見、「ではわたくしは畠の手前にて待つてあります」と残すと、ミルキアさんは優雅な早足で去つて行った。気を効かせてくれたのかもしない。

彼女の気配が消えると、シゼル様はおもむろに手を差し伸べてきました。王家の晩餐でのこともあり私は一瞬迷つたが、結局己の手を重ねた。幸いなことに今回は手を取り上げられることはなかつた。

彼は私の手を長い五指で包むと、歩き出す。

一ヶ月程前、皇太子様ともこつして歩いたのだっけ、と私は思い出した。しかしその時よりもずっと安心した心地を感じる。この盲目の男に、全てを委ねても良いように思える。

暗くてよく見えないが、石階段を一歩進むことに足裏に柔らかな落ち葉の感触がある。

独りで歩く闇の中は得体が知れなくて怖いものだが、一人で歩く闇の中には平穏を感じた。

あれ。そういえば私、帰りは独りか。

嫌な思考が頭をかすめてしまつたので、それを振り払つよひに、私は言葉を夜に投げた。

「私もいつかジゼル様と、外出できるのでしょうか」

一呼吸置いて、彼の背中から応答がある。

「したいのか？」

私は首を捻つた。そう言わると、そういうわけでもない気がする。

「あなたはどうなのです？」

「私はどちらでもいい。どこにいようと、私の視界は変わらない」

力が込められた気がする。 酷くつまらなさそうな声が静かに響いた。 しかし包まれた手には

「 であれば、私にどうでもどうでも良い」とかもしれません。私はあなたを離れません」

ジゼル様は鼻で笑つたようだ。
そして小さな声で囁いた。

「良い心がけだ」

そのとき私は違和感を感じた。

彼の言動のどこがおかしいのかと言われれば、それは明確ではないのだが、自覚してしまうとこんな違和感は前にもあったような気がする。

何となく、もやもやした。彼の気持ちと私の気持ちに矛盾やすれ違ひのようなものが生じている気がする。

唯一幸いだったのは、複雑な心境に意識を傾け過ぎていたせいで、
独りの帰り道が全く怖くなかった、ということであろうか。

六六六六六六

「シユルツつて、ミルキアさんのどに惚れたの？」
「いきなりやって来て第一声がそれかよ、お前」

明るい空の正午過ぎ、私は玄関前の噴水の縁に腰掛けて、シユル

ツで暇を潰そうと試みていた。

朝と晩は随分と冷え込むものの、晴れた日のこの時間帯は日陰でなければ外でも十分過ごしやすい。背後で響く流水音も、未だ寒々しいとまでは思わなかつた。

やや不本意ではあるものの、折角の休暇といつことで、私はとりあえずお昼前まで睡眠を心行くまで楽しんだ。起きた後は使用人達と共に朝食兼昼食をとる。

さあこれから本でも読んで過ごそうかな、などと考えたのであるが、久々の”独り”というのがどうも落ち着かない。要は寂しくなつたのである。

そういうわけで、私の姿は館の前の広場にあつた。

門番のシユルツは職務に忠実で、私が話しかけても前方に気を配ることは怠らない。しかし私の発言には答えてくれるようだ。何だかんだで面倒見の良い人物であると、私は彼のことを認識している。暇潰しには絶好のターゲットである。

「まあまあ。ミニミニケーションは人間関係の潤滑油なわけよ」

「それでもつてどうしてそんなそらの女子学生がするような話題が出てくるんだよ」

「ガールズトークと言つたら恋バナでしょう。私はこの前したわよ、ハイネさんと」

「俺は男だつつの」

「それで? どんなところに惚れたわけ?」

「えー、そうだなあ。しつかりしてそうで変事が起ると途端にボロが出たりするギャップに萌えた」

シユルツは「そうだなあ」とか考えるような台詞を吐いた癖して、

すらすらとミルキアさんの萌えどじろひつじ語った。常田頃から考へているに違いない。

「マニアック過ぎて参考にならないわ」

「何の参考にするんだよ」

「好きな人を射止めるための」

至極真面目に答えたにも関わらず、彼の背中越しに噴き出す声が聞こえた。

「おま、そりゃあ俺の意見じゃ参考にならねーよ。何もかもタイプが違い過ぎるだろ」

「ちょっと何それ。あなた私の好きな人知ってるって言いつの？」

私は撫然とする。

「は？隠してたのか？」

「つていうか基本私はばらしていないのだけれど」

「ばればれだぜ？」

私がシユルツに聞こえるように舌打ちすると、彼はげんなりとした様子で「腐つても貴族の令嬢だろうがよ」とぼやいた。

相手がシユルツと「うどうでもいい男なので別段恥ずかしくもないが、本心を見透かされているというのが面白くなかった。

「まあ無理して射止めようとしなくともいいんじゃねーの？むしろその心意気さえあれば、大丈夫だと思うな、俺は」

「シユルツの癖に生意氣だわ」

「明らか俺のほうが年上だろ……。ああわかった、おまえ拗ねてんのか。旦那がうちの嫁さんと出掛けで行つたから」

彼如きに図星を突かれてしまったのが悔しくて、私は鼻を鳴らした。

「べ、別にミルキアさんに嫉妬してるわけじゃないわよ。そりゃあ羨ましくはあるけれど。でもシゼル様つて秘密だらけで、どうして私が駄目でミルキアさんが大丈夫なのか、とか、教えてくれないから釈然としないのよね」

「ああ、そういうこと」

「シユルツは知つてそうね、色々

「それなりに知つてるけど、教えないぜ？教えないのがあなたのためだからな」

「何よそれ、優しさ？」

彼は肩を竦めてみせた。

「その通り

いらっしゃったので、傍に落ちていた手頃な小石をその背中に投げ付けてやつた。シユルツは大袈裟に身をよじる。大変愉快。

「いつて。……おまえさあ、最近特に遠慮がなくなつてきてるよな。來たばっかりのときはまだ理性的に動いてたのによ

「あらあら、よく」覧になつていらつしやるのね。そんなに私のことが気になる？」

すると今日初めて、シユルツが私の顔を見た。それは一瞬のことであつたが、その短い時間でも彼の目つきが真剣なものであることはわかった。

再び前方に視線を戻したところで、彼はぽつりと呟いた。

「気になるぞ。あなたは旦那の……近侍だ」

私は彼の後姿を見つめた。陽光を受けてその茶色の髪が黄金に輝く。その逞しい背中は何故だか悲しげに見えて、優しい獅子のよう在我の目に映つた。

「シユルツって、多分この館で一番シゼル様に愛情持つてるわよね」「おじおじよしてくれよ。俺の一一番は奥方だぜ」「うるさい。あなたの一番が誰かとか、そういう話じゃないのよ。何ていうか、シゼル様のことを一番気遣つてるのはあなたなんじやないの?って話」

少しの間沈黙があり、彼は逆に聞き返してきた。

「あなたはどうなんだよ」「私は抜きよ。私入れたらぶつちきりで一位だわ」「あんだけ我が伝通しといてよく言つわ。……まあそつとな。俺は昔親衛隊の一人だったから、この館に来る前から旦那に仕えてたし。それに俺達は旦那に恩があるから」

シユルツはいつになくしんみりとした口調で言つた。
私は彼の背中に向けて尋ねる。

「私が聞いてもいい話?」「んー……ま、いいかな。これくらいなら」

そうして彼は、ぼとりぼとりと渴いた大気に言葉を落とし始めた。

ミルキアさんは歳の離れた弟がいるらしい。

シュルツ曰く外見こそそぞろ似ていれど、中身は正反対だそうで、ミルキアさんが静だとすれば、弟さんは動のことだ。直情的で単純で熱血。成る程確かにミルキアさんは真逆である。

彼も王富勤めで、王家親衛隊の一人だつた。シュルツとはかつて同僚だつたことになる。

ミルキアさんとの出会いには彼が関係しており、その後の恋の発展にも弟さんは多大なる貢献をしたらしい。シュルツはこのくだりを詳しく話したそうであつたが、長くなると踏んで私は彼の期待には敢えて答えなかつた。

要はこの弟さんは、シュルツとも懇意の仲であつたということだ。

しかし弟さんの、そのある意味愛すべき性分が災いして、彼等の将来は本来の道を大きく逸れていくこととなる。

それはシュルツとミルキアさんが結婚して後、二年程経つた頃のことである。

当時キース派と呼ばれる反政府組織が存在していた。

この組織のことは私の記憶にも残つてゐる。

元は他国からの難民となつた者の子孫達が中心に結成した集まりで、現政府に不満を持つた他の者達も加わり、次第に大きくなつていつたグループだ。

王家にとつて脅威とまではいかないものの、大小様々な抗議行動は、ツェーヴラーグ内において随分と物議を醸していた、というの

が私の認識だ。王宮の周囲をデモ行進したり、至るとこりで演説を繰り広げたりは勿論のこと、劇場を占拠して王家を糾弾するシニカルな劇を上演したり、果てはユーディス家が経営する王家御用達の呉服屋本店に爆竹を仕掛けられた、なんてこともあった。

そういうわけで、私もこの組織のことを覚えていたのである。

一見阿保な集まりであり、私もそう思っていたのであるが、シュルツ曰くこのキース派、核となる部分はかなりの過激派だつたらしい。

実行前に強制解体となつたものの、皇太子暗殺、なんてことも曰論んでいたそうだ。現在の皇太子様は野生の王子ティーダ様だからまだ生き残れそうではあるものの、当時の皇太子シゼル様なんて、あつと言う間もないくらいにあつさり殺されていそうだ。彼は自分を生かす術を持ち合わせていないよう見える。未遂に終わつて本当に良かつた。

キース派という不穏因子は王宮内にも入り込んでおり、ミルキアさんの弟さんもそれに影響された者の一人であつた。

彼はその頃シゼル様の直属になつたばかりで、それは余りにもタイミングの悪過ぎる異動だつた。

当時シゼル様は、教育や政務の手伝いなどの成すべき務めは必要最低限にとどめ、他の殆どの時間を絵を描くことに費やしていたらしい。

弟さんの異動前にシゼル様に仕えていたシュルツの証言によれば、少し前まではシゼル様は勉強も政務も至極真面目に果たしていた。彼に何があつてそのような生活になつたのかはわからないが、つまりはこの時の彼の生活態度は、普段の彼ではなく、異常なことであつた。

しかし弟さんは、眞面目なシゼル様を見ることができなかつた。

「彼がシゼル様のことを、「快樂の追求に忙しい不眞面目な皇太子」との感想を抱いたのも無理からぬことであつた。

時を同じくして弟さんは、これまたタイミングの悪いことに、キース派の同僚から「皇太子暗殺に一枚噛んでくれないか」と持ちかけられた。流石に弟さんもそこまでぶつ飛んだことは考えられなかつたようで、その件は断つたらしい。しかし協力こそ遠慮したものこの同僚の相談を深く聞いてしまつた弟さんは、現王家の体制に疑問を持つくらいには影響を受けてしまつた。

そんな前提があつた上で、シゼル様の視力を奪つた、あの嵐の日がやって来る。

弟さんともう一人の騎士はこの時シゼル様の部屋の警護に当たつており、轟音を聞きつけて部屋の中に飛び込んだ。

硝子破片の被害を受け顔面血だらけのシゼル様を見て、彼はこう思つたそうだ。

「この人は死ぬかもしない、それはこの国にとつて良いことかもしれない、と。

そうして、人を呼ぼうと駆け出す同僚を呼び止めたのだ。その同僚を説き伏せ仲間につけた弟さんは、彼と協力して騒ぎを聞きつけて来た人達を何とか足止めし、時間稼ぎをし出した。早く言えば、その間にシゼル様が息絶えれば、そうでなくとも重傷を負えれば良い、と願つたわけである。

結果から言つと、50%は彼の思惑通りで、50%は予想外の事態となり、彼自身からしてみれば100%上手くいかなかつた。

まず思惑通りの50%。それが弟さんが駆け付ける人々を足止めしたことによるかどうかは定かではないが、シゼル様は確かに重傷を負った。そして最終的には精神を病み、王として立つことはできないと判断された。

予想外の50%、これは本物のシゼル様、つまり現デイーダ様の存在である。シゼル様が王になることはなくなつたものの、無傷のデイーダ様が彼と入れ替わり、王家は恙無く存続することとなつた。そして弟さんは皇太子が入れ替わった事実を知らない。表向きには皇太子の負傷は幸い完治し、何事もなく生活していることになっているのである。つまり彼にとつては全ての苦労は水の泡だつたことになる。

弟さんは熱血馬鹿ではあつたもののそれなりに真っ当な人間ではあつたから、咄嗟に己がしでかしたことに関しショックを受け、そして全て正直に自白した。

獄中ではミルキアさんにじつぴぢく怒られ、本氣で反省しているふうでもあつた。

しかし、弟さんの犯した罪は大きい。

シゼル様は死んだわけではなかつた。弟さん自ら傷つけたわけでもなかつた。彼の行動だけを見るのならば、ただ見捨てようとしただけであつた。

しかしその相手は王族であり、皇太子である。政府は償つて許される罪ではないと判断し、彼は終身刑を言い渡された。

そのときシゼル様が、彼の身を救つてくれようとしたのだという。精神を病み幽閉されようとしていたとき、シゼル様は北東館で働く者として弟さんを指名したのである。本来館の労働者は王や廷臣によつてある程度決められていたのだが、シゼル様には一人だけ自分で選ぶ権利を与えていたのだそうだ。条件は相手の承諾であ

り、そのたつた一人に、シゼル様は弟さんを選んだ。

しかしシゼル様の選択は受け入れられなかつた。弟さんに、ではない。弟さんは彼が自分を働き手として指名したことなど全く知らない。それ以前に、王様や廷臣に反対されたのである。

まあ普通に考えてみれば当然の反応である。皇太子を見捨てようとした人物が皇太子の下で働くなどということを、容認できるはずもない。一般的に考えて、そのような人間が主に忠実であるわけがないし、逆に主の身が危険である。

よつて、シゼル様の申し出は却下となつた。

折角の彼の恩情も無意味になつてしまつたわけであるが、そこに目を付けた人物もいた。

ミルキアさんである。

彼女は彼女なりに弟想いな姉であり、猛省する弟さんに、どうにか更生するチャンスを与えるたいと思っていた。そしてかつての同僚であつたシユルツも彼女と同じ願いを抱いており、特にミルキアさんの苦惱を目にして、彼女の願いを叶えてやりたいと思つた。

そこで、弟さんを助ける素振りを見せたシゼル様に、二人を代表してシユルツがこう頼み込んだそうだ。

「旦那、お願いがあるんだ。ネフィスの処分を国外追放してくれよう、上に掛け合つてもらいたい。もしそうしてくれるのであれば、俺と妻のミルキアは旦那に忠誠を誓う。ネフィスの代わりに、俺達が北東館で仕えるよ」

そしてシゼル様はその条件を呑み、弟さんは国外追放、シユルツとミルキアさんは北東館にてシゼル様に仕えることとなつたらしい。

シユルツの背から発される言葉達を、私は貪るようにして受け止めていた。シゼル様の過去に関わることであるから一言も聞き漏らさんとして注意を傾けていたのであるが、それにしても最初に出てきた言葉は陳腐な感想にしかならなかつた。

「そんな複雑な、経緯があつたの」

私が発する掠れた声に、彼は苦笑を漏らした。

「リの館に住んでる奴等は皆複雑だぜ。旦那と共に生涯をリで過ごすことを承諾した人間達だからな」

「え、そうなの？ 皆も幽閉されてるわけ？」

「旦那のことばらされるわけにやいかねーだろ。俺等は基本王宮内であれば自由が許されてるけど、まあそれも王家の手の届く範囲で監視されてるつてことだな」

「じゃあ私とシゼル様以外の人は畠の外にも出られるんだ」

「つつても滅多に出ないけどよ。出る必要もそんなにないし。俺は俺で謹慎処分で左遷中だし」

言つてシユルツは肩を竦めた。

そういえばシゼル様も左遷がどうのいつの言つていた。

「何それ」

「あんたのせいだよあんたの。ほら、初めてあんたがリに来たとき、ミルキアの名前出されて畠を通しちまつたる？」

「ええ」

「あれは俺が門番やり出してから最大の失敗だつた。んでそれを咎

められて現在左遷中なんだよ。最近俺が仕事してるとあせりにじ
かいないだろ?」

「ああ、そういうこと。表の仕事はさせてもうりえないのね」

「そ」

「やだ、私のせいにしないでよ。あなたが勝手にミルキアさんの名
前に怯えたんじゃない」

「あーもーほんとに馬鹿だつた。しかしこへり騎士つたつて奥方は
やつぱこえーんだよ……」

尚もめぞめぞと嘆くシュルツは無視して、私は気になつたことを
口にする。

「でもミルキアさんつて北東館でシゼル様のために働いてるわけじ
やないわよね。本館侍女長だし、何か特殊な立場なの?」

「ミルキアはここに来る前から侍女長に就いてたからな。田立つ立
場だし、異動なんてことが大々的に知れ渡つたら、余計北東館にス
ポットライトが当たつちまう。加えて結果的にだけど、ミルキアは
王家と北東館を繋ぐ一番デカい連絡パイプになつてる」

「ああ、そうなの」

「それだけに監視の目も強いし、探りも多いし、多分相当のストレ
ス背負つてやつてるよ、あいつ」

「言つて、シュルツは我がことのよつて苦惱の溜め息を漏らした。

今まで一番大切にしていたものに裏切られた私は、ではこれから何のために生きるかという難題に直面した。

そして酷く単純ではあるものの、これまで己のために生きてきたのであるから、これからはせめて他人のために生きようと結論づけた。

早く言えばそれも自分のためであることは承知していた。私は人と繋がりを求めるこことによって、自分を保とうとしたのである。

手始めに私が人生を狂わせてしまった男、ミルキアの弟を、出来得る限りで救済しようとした。最初の試みこそ失敗したものの、結果的には彼の罰を国外追放に下げてやれた。

しかしその代償として、ミルキアとシュルツは私と共に幽閉された。これはいわば人質のようなものである。弟本人には、今後ツェーヴラーグに近付こうものなら、姉とその伴侶の身の安全は保障できないと伝えてあるそうだ。

彼等から申し出たことはいえ、私は結局一人の人生をも狂わせてしまった。

そこでやめておけば良いものを、この頃の私はそれでも諦めなかつた。

見えぬ体でも、束縛された状態でも、できることがあると信じた。

だが、その意気込みは無駄であった。

私がすべきことを探しに行けば、誰かの仕事が増える。誰かを手伝おうとすれば、身分の壁²が邪魔をする。コミュニケーションに關

心がなかつたため、氣の効いた言葉のひとつも出でてこない。

そもそも前提として、私は既に多くの人間の人生を狂わせている。北東館で働く者なんて、皆犠牲者の一人である。

ある日庭師にこう言われた。

「私達にあんたがしてやれることなんて、あんたが息をする、ただそれだけ。そうすれば私達の生活は自然と回る」

そのとき私は悟った。

周囲の人間が、存在する以外のことで私に何かを求めたり、頼るなんてことはないのだと。繋がりによって自分を保つことなど、私にひとつではおこがましい願いなのだと。

私は、接觸した人間の生涯を破壊する能力があるらしい。であるならば、私にできることはひとつだった。

他と関わりないようにして生きる」と。ただそれだけだ。

「親愛なるオルカ・ゴーテイス様

次第に緑も青々と茂り、来る夏に地中の虫も胸踊らす今日この頃、如何お過ごしでしょうか。

なんてね。よく回りくどい手紙のやり取りで攻防を繰り広げるあなたとお父様の手法を真似てみました。なかなか詩的な書き始めでしょ？

それはさておき、ひとつひとつこの日がやつて参りました。

私は今日、コーディス家を出てウルグ家に嫁入りします。大いに寂しがつてくださつて構いません。オルカのこれから感じるであろう孤独を持つても、今まであなたが私にしでかしてきました数々の仕打ちには敵いませんから。

極め付けはあの婚約指輪の破壊ですからね。うつかりにも程があります。

彼とその家族に何て説明しようか、本当に迷つたわ。迷つた挙句、結局正直に姉の仕業だと打ち明けましたけれども。あなたの阿保ぶりは尾ひれ背びれがついて有名だから、皆納得してくれました。私初めて阿保でも役に立つことがあるのだなつて、感心したわ。まあそもそもあなたが阿保でなければ、指輪を壊したりはしなかつたんでしょうけれど。

何だかんだ色々あつたけれども、コーディス家で過ごした年月は退屈しませんでした。

むしろたまには退屈と呼べるゆとりが欲しかつたくらいだわ。まあそういうゆとりはこれから沢山あるのだろうと期待してます。ウルグ家は基本的に皆おつとりしていて親切な方ばかりだから。おつとりが過ぎて天然馬鹿な珍事件が度々起きたりしてるらしいけど。コーディス家の策略馬鹿な事件よりは平和的でしょう。

勿論これからも頻繁に帰つて来るつもりだから、その時のためにお菓子はストックしておくよ。つい。

それじゃあ今後ともよろしくね。

カノン・コーディスより「

少し褪せた色の便箋を、燭台の炎がゆらゆらと照らした。

時刻は午前一時半を回ったところである。

無理に起きているつもりはなかつたのだが、シゼル様の居ない一日は私には長過ぎたのだろう。

彼がここに戻つて来ること。そして、本当に戻つて来るのはどうか、という小さな疑念。それだけでそわそわしてしまつて、眠るに眠れなかつた。

起きて待つことを決めた私だが、不安と寂しさでどうにも落ち着かない。

それで、行儀見習いに来るときに家から持ち出して来ていた何通かの手紙を読むことにした。

行儀見習いの期間は一年と最初から決まっており、その間私がホームシックにかかるであろうことは予測していた。

氣休めとして荷物の中に手紙を入れた、当時の私を褒めてやりたい。しかしそれは叶ないので、私は今現在の私を褒めることにする。オルカ、あなたつたら本当に賢い子。

既に二通読んだ後で、この手紙に行き着いた。

カノンの結婚式から家に帰つて来たとき、自室の机に置いてあつたものだ。恐らく侍女に頼んでいたのだと思つ。

カノンは眞面目な人間であり、けじめを大切にしていた。

だからこそ私が婚約指輪を壊したとき、彼女が私の気持ちを見て見ぬふりをしてきたことに関して謝罪をしてきたのだと思う。そしてだからこそ、私の破壊行動に関しても、後々こつびどく怒られた。この手紙も、カノンなりのけじめの表明なのだと私は思う。あのときは怒ったものの、もう怒ってはいない、罪は許した。そういう気持ちを、最後の最後に、彼女はこの手紙に託したのだろう。

今頃、どうしているのだろう。

そう独りごちるが、答えなど考えなくとも出る。彼女は彼女の居場所を見つけて、幸せにやつていてるに違いない。

そのときふつと思い浮かんだのは、双子の妹ではなく、シゼル様の姿であった。

どうか私の帰結先が彼の隣でありますように。

私は静かに願つた。

ふいに、自室の扉が控えめに一度叩かれた。

私は自分でも驚く程に素早く燭台を取り上げ、扉に向かう。この一連の動作は、多分本能で行つてているのに近い。

私が手を掛けるまでもなく、扉は勝手に開いた。

その先にいたのは、銀髪に痩身の男。私の好きな人。

「お帰りなさい！シゼルさ、」

今まで言つことはできなかつた。

シゼル様の両手がおもむろに伸ばされた。私は燭台と手紙を避難

させるために咄嗟に腕を上げる。彼の手は上げた腕の下から背中に回され、私は乱暴に引き寄せられた。その細い指が脇腹の少し後ろに食い込み、じくじくと痛んだ。

ぱさりと、首筋に柔らかい感触。くすぐつたい。シゼル様は私の肩越しに頃垂れ、そのきめ細かな銀髪が私の肌に触れているようだつた。

「ど、どうしたのですか、いきなり。そんなに私が恋しかったですか」

彼は苦し紛れに発した私の言葉には答えなかつた。
代わりに、酷く力のない声で囁く。

「オルカ……すまない」

私は眉を顰めた。

恐らくこの言葉は、私を一日独りにしたことへの謝罪ではない。
それにしては声が悲痛過ぎる。

では、これ程までにシゼル様を追い詰め、私に「すまない」などと言わせる彼の罪とは？

そう思つと、決して良い予感などしない。

両手の塞がつた私は、身じろぎでシゼル様に抗議を伝えた。彼は抱き寄せる力を少し緩めたので、私はそれに乘じて拳ひとつ分くらいの距離を取る。

「どうして謝るのですか？」

シゼル様を見つめる眼差しに力が入り過ぎて、気付いたら睨んでいた。彼もそれに勘付いたのだろう。宥めるかのように、私の頭に

手を置いた。

その表情は憔悴しており、霸気が感じられない。

「い、」

「私絶対絶対あなたの傍を離れませんから。あなたが私を離れようものなら、ムワ・ドナの果てだらうとルーグル山の向こうだらうと、何處までも付き纏つて追いかけて行きますから」

私は一息に捲し立て、シゼル様の口を無理矢理塞いだ。

性急に酸素を補給し、再び言葉を連射しようとしたところで、頭をぼすぼすと優しく叩かれる。口を噤んだ私が彼を見ると、その無表情には少しだけ力が戻っていた。

「約束は守ると、念まで押したではないか。その点はあなたが心配するまでもない」
「ではどうして」

即座に詰め寄ると、シゼル様は自嘲気味に笑んだ。

「問題ない。今のところは」

「質問の答えになつていませんし、理解不能です」

「あなたが私の傍を望むのである限り、謝罪に意味はない。忘れろ」

私は唇を尖らせた。

「シゼル様は本当に隠し事がお好きなようで」

彼は「止むを得ん」と言つて、私の腕に指を滑らせた。それを掌まで辿つて行き、恐らく手を握ろうとしたのだと思うが、必然的に私が持つていた紙切れに気付く。

「これは？」

言ひや否や、シゼル様は私の左手から手紙を抜き取り、その感触を確かめ出した。

「ああ。カノンからの手紙です。勿論昔貰つたものでされど」

「双子の妹か？」

「そうそう」

「何故それを城にまで持ち込んでいるのか」

心なしかシゼル様の表情が冷たくなつた気がした。しかしその理由がわからない。相手が男なら兎も角として、まさか妹に嫉妬しているわけでもあるまいし。

「行儀見習いを始めるとなつたら、一年は碌に家族に会えないつてわかつていましたから。少しでも寂しさを紛らわすことができれば、と思って」

そのとき虚ろなシゼル様の瞳に、強い意志が宿つたかのような錯覚を覚えた。しかし直ぐに彼は目を伏せたので、その色は長い銀糸で読めなくなつてしまつ。

薄い唇が、珍しくはつきりとした弧を描いた。但し、不気味に。

「へえ」と呟いた低い渴いた声に何か異様なものを感じ取つた私は、一先ず彼から手紙を奪い返そうと左腕を差し伸べた。

しかし彼はすんでのところで私の手をかわす。

その代わりに彼は、私の右手を探り当てるとそれ掴んで、手紙を差し出した。

右手に持つた燭台の、炎の中に。

翌朝使用人の食堂に姿を現した私は、皆の訝しげな注視を浴びた。ミルキアさんは片眉を上げ、シュルツとハイネさんは不審げに、二イや騎士達は好奇に満ちて、フェイとリウは不思議そうに。皆が皆、それぞれの感情を込めて私を見つめた。

周囲が抱く疑問は、私にも簡単に予想がつく。

”何故オルカがここに？”

そう思つてゐるに違ひない。

何せ”大事にされている”私は、基本的にこの食堂で食事をとらない。朝晩とも、もうひとつ食堂で彼と一緒にとるのが通常である。

昨日は兎も角として、今日はシゼル様も館に帰つて來ている。彼が不在だった昨日、あれだけ寂しそうにしていた私を皆も見ているわけである。

彼を差し置いてここで食事をとる私に、疑問を抱かないほうがおかしい。

しかし私は私で、そんな彼等の思考は見当がついてゐるにも関わらず、この件について自分から話そつとはしなかつた。要するに、機嫌が悪かつたのである。

突き刺さる視線を無視してヨルダを齧る私に先ず話しかけたのは、空気を読まない女こと二イであった。いや、この場にいる全員の疑

問を代弁したのだから、ある意味空氣を読んでいるのかもしない。彼女はわざわざ席を私の向かいに移動して、身を乗り出さんばかりに捲し立ててきた。

「ねえねえ、どしたのどしたのー? 何でオルカがここで飯食べてるのー?」

「食べないとお腹が空くからよ」

「違うよおー! どおしてシゼル様どじやなくて、ここに食べてるのー? あつ、もしかしてシゼル様と喧嘩したんだー?」

「その通りよ」

自分では淡々と言葉を発したつもりだったのに、随分と仄暗さを宿した声音になってしまった。今絶対ニイ以外の全員が唾を呑み込んだな。

「何それえー超ウケるフーー」

ニイはけらけらと笑つて私の毛を逆立てた。ウケない。何にも可笑しくない。

「何でえつ? 何が原因!ー?」

「手紙を燃やされたの」

皆、虚を突かれたような顔をする。

「まさか昔の男から貰つたラヴレター、とか?」

リウが「ラヴ」の部分をやけに強調して言った。

「違うわ。昔の男とか呼べる人間がそもそもいないし」

「やつぱり」とかいう誰かさんの感想が更に私を不愉快にさせた。
もつちよつヒデリカシーのある奴はないのか。

「ただの妹からの手紙よ。でも、凄く大切なものだったのに」

私が溜め息を吐くと、シユルツが焦ったように言った。

「旦那にも何か理由があるんじゃねえの？」

「そりゃあ、あるでしょうけれども。昨夜は何の説明もなかつたわ
よ。さつさと自室にお帰りになられました」

「だったらあなたはこんなところにいるべきではないわ。シゼル様
と話して、不和を解消しなさい」

ミルキアさんは至極真つ当なことを言つ。

私は内心で溜め息を吐いた。

みんなしてシゼル様の味方なのね。

主はシゼル様であり、私のしていることは職務放棄とも言えるの
だから、一概に私が正しいとは言えないことは理解していた。それ
でも、今傷付いているのは私なのだ。にも関わらず誰も同情してくれ
ないことに、私はやや拗ねていた。

「そんなことはわかつてます。ですが、これは私の感情の問題な
です。今は未だ彼とは話したくありません。ほつといてください」

つんと澄ました顔でそう言つと、それ以上口を挟む者ももういな
かつた。

食事を終えても、シゼル様のもとに戻る気にはなれなかつた。

シゼル様だつて、私を捜しには来なかつた。
彼は彼で私の何らかに對して怒つているかもしれない。昨夜の
あの言動ははつきりと異常であつたから。

でも、人の手紙を燃やすだなんて、人道に反していることは誰の
目にも明らかである。彼の行動には彼なりの理由があるのであろう
が、それにしたつて、昨夜の行為自体は悪かつたと思つてくれなけ
れば困る。

向こうから謝つてこない限り、許してあげないんだから。

私はひつそりと決意を固めた。

そんなわけで現在私は仕事を絶賛サボり中である。
誰かに見咎められるのは厄介なので、屋敷の裏にて身を潜めてい
る。図書室で適当に拝借してきた本を読んで、ここで暇を潰そうと
の魂胆である。

屋敷裏に来るのは初めてであつた。

外は寒いかとも思ったが、幸いまだここも陽が当たつてゐるので、
これなら何とかやり過ごせそうだ。

直ぐ後ろは森で、館に沿つてゼラニウムや^{ハヤナベヅル}兎草の鉢植えが並べら
れていた。ハイネさんが育ててているのだろう。
裏口は二か所。厨房の裏の扉と、それから壁面が四角く窪んでい

るところにもうひとつ扉がある。何処と繋がるのかはよくわからぬ
いが、隠れるには絶好の場所だ。

私は古びた扉の前に腰を下ろすと、早速本を広げた。

そして早速邪魔が入つた。

目の前の扉が、何の躊躇いもなく開いたのである。
裏口のあるこの達みは、決して広いものではない。当然前に陣取
つていた私は、開いた扉を回避することができなかつた。

がつ、と、スカートに包まれた膝小僧にドアの端がぶつかる。小
さく呻いた私に顔を青くしたのは、ハイネさんであった。

「ちょっと、大丈夫」

「ああ、はい……大丈夫だと思いますけど……」

「何であんたが私の部屋の裏で張つてるの」

「あ、この扉はハイネさんの部屋に繋がつていましたか……」

ハイネさんは小さく頷き、しかし追求の目を崩さない。

私は膝小僧がじんじん痛むのに涙目になりつつ、どんな言い訳を
しようか考えた。思考を巡らせていく内にも、ハイネさんの視線は
私の腿の上に広げられた本に落ちる。

ああ。何にも良い理由が思い浮かばない。

私は肩を落として、正直に今の自分の状況を白状した。
当然私が話を進めるにつれ、ハイネさんの顔は冷めたものになつ
ていく。

「そんな馬鹿なことしてる暇があつたら、せつせつと話しかけてくれ

ば

私は恨めしげに彼女を睨んでやつた。一倍にして返されやうなの
で、直ぐに田を逸らしたが。

「皆シゼル様の味方ばっかりするのですから、参つてしまひます」
「当然。私達の主人はあんたじやない」
「それはそうですが。でも、手紙を燃やすなんて行為田体は、彼
のまゝに非があると思ひません?」

そう言つとハイネさんは「まあ」と肩を竦めた。その仕草に、私は
は少々気分が良くなる。

「だから、向こうが謝つてこない限り私は許してあげないことにし
たのです。別に絶交したとかじやありませんから。さつきも言いま
したけれど、ほつといてください」

ハイネさんは「そ」と呴いて小さく息を吐いた。
この件に関してはもう彼女は何も言つてこなさやうだつたので、
私は視線を再び本に戻した。

しかしハイネさんはそこを動かない。不思議に思つて見上げると、
彼女も一緒になつて私の本を覗き込んでいた。

その目が余りにも真剣、といふか、少年のような煌めきを宿して
いたため、私は座つたままでたじろぐ。

「あの?」

そつと声をかけると、ハイネさんは我に返つて私を見つめた。

「「」の本は？」

質問の意味がよくわからなかつたのだが、とりあえず私は本を閉じて表紙を彼女に見せた。『煌石百科』とそこには金文字で書かれている。

「好きなの？」

「ええと……詳しいわけではありますんが、光り物は好きです。綺麗なので」

「綺麗なものが、好き」

確認するような彼女の言葉に、「ええ、はい……」と私は戸惑いがちに頷く。どうやら彼女の何らかのスイッチを知らぬ間に押してしまつたらしい。

ハイネさんはおもむろに私の片手を掴むと、引っ張つて無理矢理立たせた。その際、膝からずり落ちそうになつた分厚い本を保護するのも忘れていない。

同じ目線になつた彼女は「はい」と本を私に渡すと、真剣な瞳でこちらを見据えた。

「どのくら」、好き？」

今までハイネさんが「冗談を言つたりふざけたりしている」というなどは見たことがないが、そうだとしてもこれ程真面目な顔をした彼女を私は初めて見た。

そしてその顔は、情熱を宿したものでもあつた。シゼル様への敬愛を語るときなどとは比べ物にならないくらい、彼女は今熱に浮かされたような顔をしている。

この会話の相手が、例えばカノンだつたりかつての学友だつたりするならば、私の返答は「超好きー」などという適当なもので良いのだろう。しかしこの人の熱意を前にしてそんな回答は、余りにも失礼な気がした。

それで私自身、結構真面目に答えてあげた。

「実家には私専用の宝石ケースと原石ケースが幾つかあります。お気に入りの宝石に関しては、彼等を私が身に付けるなどというのは禁忌です。それは僭越な行為であり、彼等の品位を貶めることになるからです。私はそれらを部屋に飾り、週に一度は必ず磨いてあげます。名前もそれぞれ付けてます。今でもソラで言えますし、ケースに並んだ石達を見なくても順番に思い出せます。それくらい好きです」

言い終えるや否やハイネさんは、私の右手をぎゅっと自分の両手で握り締めて、宣言した。

「仲間！」

やけにテンションの高いハイネさんに手を引かれて、私は裏口の向こうに連れて来られた。つまり彼女の私室である。何やら私に見せたいものがあるそうだ。

ハイネさんの部屋に足を踏み入れたとき、私は文字通り開いた口が塞がらなかつた。そこはまさに彼女の宝の山であつた。

裏口から見て手前の壁には、古ぼけた絵画やアンティークと思しき纖細なレース、アクセサリー、ドライフラワーの花束が所狭しと飾られており、奥の棚にはグラス・アイの人形や猫や兔のぬいぐるみ、装飾の綺麗な銀食器が並んでいる。元々そんなに広い部屋ではないのに、向こう側の壁には彼女のコレクション用の棚が三つも並んでいるので、さらに圧迫感を感じる。左手の奥に扉があり、右手には簡素なベッドと格子窓がひとつあつた。ベッドの手前には部屋の端から端まで竿がひとつかけられており、そこに数着の服がかけられている。見たかんじクローゼットが存在しないので、もしかしたらこれが彼女の手持ちの服の全てなのかもしれない。

ひとしきり部屋を観察した私は、戦々恐々彼女に尋ねた。

「あのう。ハイネさんがさつき言つてた『仲間』って、もしかして私とハイネさんが綺麗なもの愛好家として仲間だつてことですか？」

「勿論」

とても晴れやかに頷いたハイネさんの言葉に、私は戦慄いた。

明らかレベルが違うんですけどー

彼女の可愛らじいものを詰め込み過ぎて氣狂いの部屋になりつつあるこの空間を前にしたら、私の宝石コレクションなんてちんけなものである。

私は土下座したくなつた。あんなちっぽけな宝石への愛のみで、「好き」などという言葉を使つてしまつた己を恥じた。

私の集めたものなど、所詮貴族の道楽である。経済的に余裕があるからできだに過ぎず、何の犠牲も必要とはしなかつた。

しかしこれを見る限りハイネさんは、彼女の「好き」を集めるためならば、己の衣服や居住空間をないがしろにすることに向う躊躇いを感じていないうのである。彼女は「好き」なもののために、身を削つているようであつた。

すげえ。何だこの純粹な愛。狂つてる。

そしてそんな彼女と同類に括られるなどとこいつことは恐れ多く、同時に何か嫌だつた。

「え、ええと……スマスマサン、私少し驕つていたようです。私のコレクションなんて宝石に限定されていますし、ハイネさんと仲間として並ぶだなんてどんなにもなことです

「そんなことない！」

ハイネさんは興奮した顔で私の片手を両手で握り締めた。

「私感動した！宝石に名前付けて呼ぶだなんて狂つてる！私でさえそんな発想はなかつた！」

氣狂いに氣狂いと呼ばれ、私は軽く打ちのめされた。

そうですか。愛しい宝石達を名前で呼ぶのも狂つてますか。

ふいにハイネさんは私の手を離し、少し距離を置いた。

今更ながら自分のテンショントップがりつぱりに恥じらいを感じたのか、目が泳ぎ、頬が少し赤い。

それから、「だから……」と続けた。

「私少し泣いていたのだけれど、あんたになら渡してもいいかなって思えた」

そう言つてハイネさんは背を向け、ベッドの下の引き出しを開けてその中を漁り出した。

何をしようとしているのかよくわからないが、此處でお蹠をせてもらひうわけにもいかなそうだ。

手持無沙汰になつた私は、ハイネさんのコレクションをのんびりと眺める。

「これ、全部ハイネさんが集めたのですよ」

「そう。私の今までの人生」

「よく、北東館で働くことを了承しましたね」

何とはなしにそう言つが、暫く返事はなかつた。不思議に思った私がハイネさんのほうを振り返ると、彼女は彼女で不思議そうに私を見ている。

「どうして?」

「だって、こんな束縛された状態では、綺麗なものを集めるのだって難しいでしょ?」

ハイネさんは「まさか」と言つて肩を竦めた。

「お城に宝物が眠つてゐるのは昔からの定石。給料が入つたら、いつものが欲しつて、いつのを上の人に伝えてもらつ。お城は古くて綺麗なものが沢山あるから、あとはもう選り取り見取り。普通はできないことなんだろうけど、此処で働いてると同情でそういう取引もできる」

「な、成る程……」

私は唸つた。

今度私もそのやり方を教えてもらひおつかしら。最近愛しの宝石達に接してないから、心の潤いが足りない気がするのみね。

「もしかしてハイネさん、それ目的でここに勤めになつたのですか？」

「違う。働く前は、そんなことができるって思わなかつたし。でも、それがなくとも、私にとって此処は理想の環境。樂園。あんなに広い庭を、私の好きに管理できる。それに……」

言いかけて、一度ハイネさんは口を噤んだ。そして、窺うような視線を投げてくる。

「あなたは、北東館の研究内容、知つてるんだつけ」

「ええと、シゼル様の香りの研究のほうですか？それとも、ヘイヴイーボーン？」

「何だ、知つてたの」と安堵の表情を浮かべると、彼女は続けた。

「ヘイヴイーボーンのほう。あの花は、素晴らしい。とてもとても可愛い。一日中愛でていたい。花の中で、一番好きなのが

そう言つてハイネさんは恍惚の表情を浮かべた。ほう、と色っぽい吐息まで出している。

彼女の変人ぶりに、流石の私も冷や汗を流した。

「……つまり、ヘイヴィーボーンを好きだけ育てることが目的だった、と？」

「目的つていうか、必然的にそうなった結果が私の理想と合致してただけ。外にいたときも、我慢しきれなくて。私、ヘイヴィーボーンを秘密裏に栽培してたの」

そういう彼女は、さながら恋人との駆け落ちを告白するかのように顔を赤らめている。

私はそこで得心した。

ああ、この人、シゼル様のことなんて実は眼中にないんだわ。ヘイヴィーボーンに首つたけで、そこに向ける愛に比べれば彼に向ける愛は実に些細なものなのだ、きっと。

しかしこの前シゼル様への敬愛がどのようなものかを語った彼女の姿は、私の目には実に高尚なものに映つた。だというのに、今へイヴィーボーンへの愛を語る彼女がより輝いているということは、実はこの女、空より広く海より深い愛情キヤパシティの持ち主なのかもしけない。実に化け物である。

「それがばれて捕まつたのだけれど、私の栽培技術に着目されて、此処で働くないかって持ちかけられたわけ」

「へ、へえ」

シュルツの語つたデリケートで複雑な経緯とは随分違うな、と私は独りごちた。

やがてハイネさんは田当てのものを見つけたようだ。レースと布でコーティングされた、二つの分厚い箱を取り出す。彼女はそれを持つてベッドに腰掛けると、私に隣に座るよう促した。

「絵を見るのは好き?」

「ええ。人並みですけど」

ハイネさんは領き、片方の箱を私に差し出した。

「見てみて」

私はそれを受け取り、膝の上に置くと、そつと蓋を取り除けてみた。

息を呑む。

それは墨で緻密に描き込まれた、デッサンの束であった。ざつと見たかんじ、五十枚はくだらない。

花、空、城の風景、鳥、林檎、時計、そういうふた日常的に田にすらものが、頁を捲る度に生き生きと身を躍らせる。感情を抜きにした、それでいて美しい、澄んだ理知的な観察眼だと思つた。

「凄い」と溜め息混じりに言つとハイネさんは満足げな顔をして、もづひとつつの箱を渡してきた。

今度は、完成された一枚の油絵が現れた。

それは縦二十七cm程の小さな縦長のもので、真鍮の額縁に収まつていた。

半分まで葡萄酒の注がれたワイングラスに、マーガレットの花冠

が立てかけられている。窓際に置かれたものらしく、その背後には硝子越しに柔らかな青空と木々が見えた。

「誰が描いたか、わかる?」

そう言われて初めて、私は絵にサインが入っていないことに気付く。しかし彼女がここでそう尋ねるのだから、もう答えはひとつだと思った。

「シゼル様?」

「正解。もしかして、『ご主人様の絵、見たことあるの?』『いえ、そういうわけではないのですが』

するとハイネさんは少し残念そうに、『やつ』と溜め息混じりに言った。

「シゼル様はこれ以外にもお持ちなのですか?」

彼女は悲しそうに首を横に振った。

「多分、持つてない。『ご主人様は私の持つてる以外の、大量の絵を、焼いてしまった』

「え……」

私は息を詰めた。

「私が救えたのは、これだけ。彼が焼いているときに偶々居合わせて、慌てて未だ灰になつていないものを探して、持ち出したの。ご主人様にばれてるかどうかはわからないけれど、彼は何も言つてこない」

「……貴重なものなのね」

私は呟いて、もう一度膝上の絵を手に焼き付けるようじりじりくり眺める。それから、できるだけ丁寧な所作で蓋を閉めた。

そうして箱をハイネさんに返そうとしたが、彼女は受け取らなかつた。それどころか、大量のデッサンが収められた箱をも、私の膝にぽんと置く。

彼女は私の目を真っ直ぐに見据えた。

「これは、あんたが持つているべき」

「え……」

それはとても魅力的な申し出だつた。
しかしその感情のままに頷いてしまってはならないのを、私はすでにのどごりで堪える。

「受け取れません。ハイネさんは、これらの絵を必死で救つたので
しょう。だったら、あなたにこそ相応しいものです」

そう言って突き返そうとするが、彼女は頑なに受け取らなかつた。
代わりに、一昨日も聞いた言葉を繰り返す。

「私は、シゼル様を敬愛している
「であるならば尚更、」

「それは、彼の描いた絵が素晴らしいから。綺麗で、愛おしか
つたから。だから、この情景を生み出した彼には、幸せであつてほ
しい。これ以上何も生み出せなかつたとしても、恐らく彼の心の中
には、数々の美しい情景は残つてゐる筈。消えてほしくない。私が
彼を敬愛する理由なんて、ただそれだけ」

そのときハイネさんは、初めて私に薄い笑みを見せた。自嘲気味で、悲しげな笑み。

思えば初めて見たジゼル様の笑顔も、彼女のそれと同様だつた気がする。二人は少し似ているのかもしれない。きっとこれは、傷付きやすい人の表情だから。

「それだけだなんて……立派な理由じゃないですか」

少なくとも私は、彼への気持ちをそんなふうにはつきりと表現することすらできない。何故彼の傍に居たいのかなどと、そんなことを聞かれると困つてしまつに違ひない。

「そうじゃない。だつて私は、絵が無ければ彼のことなんてどうでも良かつた。他の人に関しても、みんなそう。私は人間自体嫌い。興味が無い。ご主人様に対しても、そういう態度を取つてた。あんたは息してるだけいいなんて。酷いこと言つた」

そう言つて彼女は俯いた。荒れた肌の小さな手を、握つたり開いたりしている。

「だからその絵は、私の罪悪感の象徴でもある。好きだけど、苦手だからあんまり見ない。心が痛むから」

ハイネさんは横目でちらりと私を見上げた。その顔は少し臆病で、視線は縋るように感じる。

「だから、その絵はあんたが持つて、頻繁に見てあげて。ご主人様の憧憬を共有してあげて。それは、ご主人様の傍を望んだあんたにこそ相応しいものだから」

「あなたは望まないの？」

「言つたでしよう？ 人間は嫌い」

ハイネさんは鼻を鳴らした。やつぱりこういう人を小馬鹿にした表情が、彼女には一番似合つていると思つ。

「だから受け取つて」と言われて領きたかったけれど、私はやっぱりその気持ちを押しとどめた。

「シゼル様はこれを、焼こうとしていたのですよね？」

「そう」

「であれば、私がこれを所持していても良いか、彼に聞いてみてもよろしいですか？」

ハイネさんは僅かに目を見開いて、それからほつきりと領いた。

「仲直りしなきゃいけない理由が、またひとつ増えた」

そう言つて小さな笑みを湛えた彼女の顔は、とても人間嫌いになど見えなかつた。

48・人間嫌い（後書き）

ではまた一か月後に――（・・）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7452w/>

日陰貴族

2012年1月1日21時03分発行